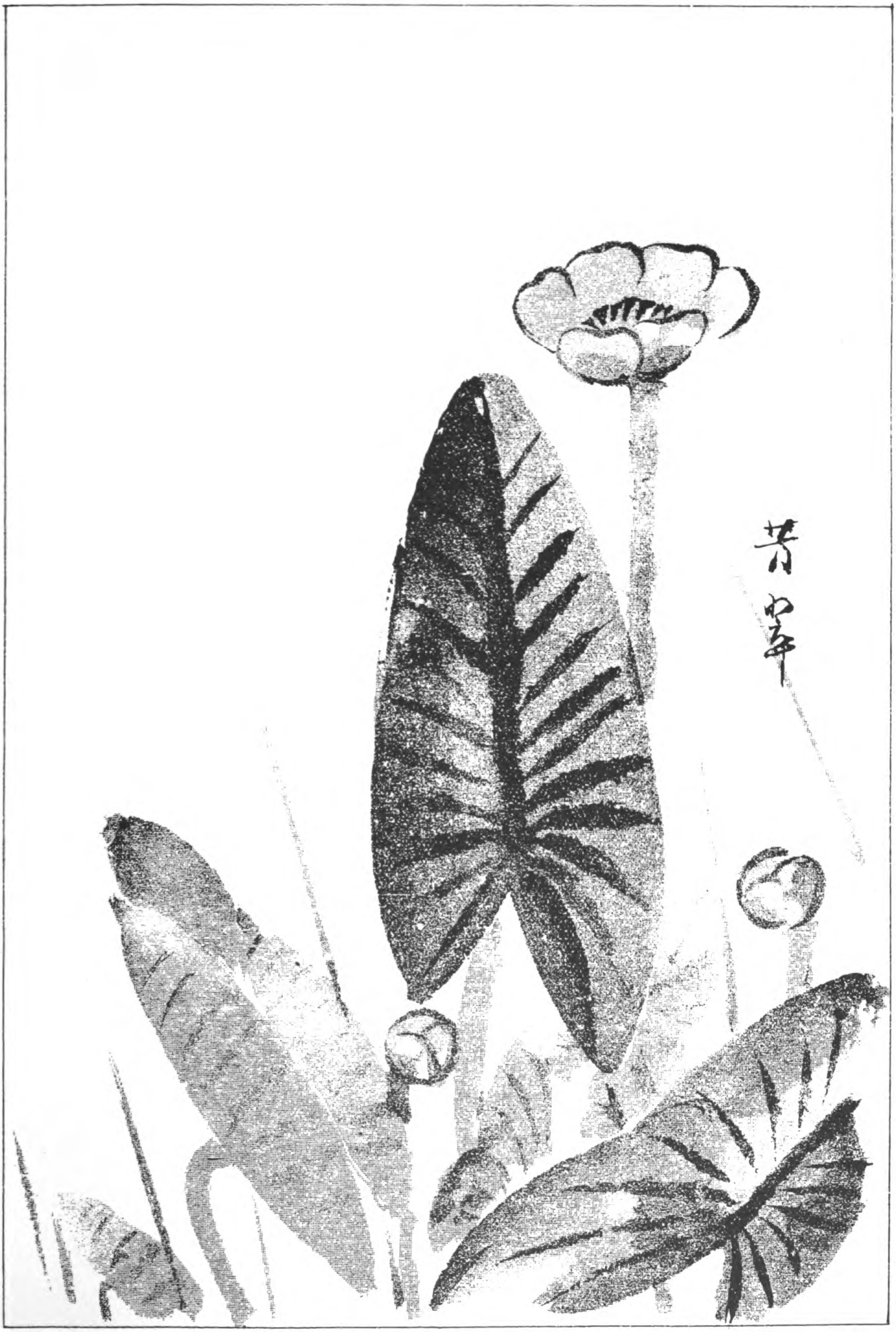
女子文壇

第二巻第拾號

明治卅九年八月一日發行（毎月一回一日）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



河骨



高野いはを女史筆

毎號 皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二巻第拾號目次

(甲の一)

▲八月十五日(定期)增判『をみなへし月』を發行いたします依例豐富

▲第九號は發行旬日を出でず
[illegible]

銷夏之好侶伴

『朝晴』批評一斑

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小説 美文 **朝晴**

▲最新刊

全一冊新式製本本綴
洋裝密畫入頗優雅
(正價四十五錢郵税四錢)
特別賣價四拾錢　郵税不要

▲「萬朝報」曰く　どれも是れも極めて温雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

▲「都新聞」曰く　いづれも短篇の小説ながら、著者が所謂寂寞の歴史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

▲「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小説で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したものです。

▲「わかぐさ」曰く　いづれも取り〴〵にやさしく、美はしく書きなされて、心地好き作のみなり。

▲「女子文藝」曰く　緣陰讀書の好資料として諸孃に勸めたきは、此書なり。收むる處の十四篇の小説、悉く艷麗、絢爛にして、溫情、穩健の趣あり。

▲「新古文林」曰く　長篇短篇とも、取り〴〵に面白く、おつとりとした上品な處が此著者の特質であらう、すら〳〵とした書きぶり、一息に終まで讀み了はらせて了う。

▲「ハガキ文學」曰く　若き作者の情熱は、溢れてこの絢爛艷麗の文字とはなりにけむ。緣陰の愛讀書としてこの可憐なる小册子を勸む。

▲「帝國文學」曰く　近來の小品文に付き纏ふ厭味の無いのは可い。

▲「婦人世界」曰く　いづれも美しき美文小説を集めたるものなり。

▲「女の友」曰く　なんとなく可憐な讀みもので、印刷も中々奇麗に、紙質も上等、何から何まで申分がない。

▲「繪畫研究叢誌」曰く　西の國の詩卷を見るらむ心地す。

▲「母の會雜誌」曰く　挿畫はお孃さん達が繪畫を學ぶのにも、よいお手本となります。

發兌元　東京京橋區大鋸町十一　**女子文壇社**　(郵便振替貯金口座番號は壹七貳九番)


おもしろい
少年之友
毎月一回
一日發行
美麗挿畫
澤山
一冊五錢 六冊二十四錢 郵税五厘 上等紙美麗印刷
△第壹號……九月一日發行
◎お伽話◎(挿畫入)◎小兒のをしへ◎少年史談(挿畫入)◎理科と衛生(挿畫入)◎遊戯(挿畫)◎新唱歌(樂譜附)◎よのなか◎少年園藝◎地理と旅行(寫眞銅版)◎少年文壇(懸賞募集)▲作文▲お笑ひ草▲考へ物新案▲繪さがし▲百事問答▲ともだち會◎壇友諸子自筆の書と畫◎小學生徒の模範等其他有益なる懸賞文滿載
第一號揭載懸賞募集
◎作文(「用紙は半紙 廿四字詰二十一行・三十行以内 文體隨意、和歌、俳句等にても差支なし)
◎お笑ひ草(廿四字詰五行以内)
◎ともだち會(壇友相互の通信機關)
◎百事問答(よのなかでわからないこと、知りたいことは何でも問ひ給へ)
◎筆蹟と繪(用紙は半紙若くは雁皮 縦横二寸一寸位のうちへ書くこと)
東京神田區旅籠町一
發兌 文光堂
◎賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂

水戸大洗の松林



小島工場石印　　三宅克己先生筆

大日本女學會

●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に戴き鍋島侯爵夫人會長として會務を統監す●小學卒業後進んで高等女學校に入學し難き事情ある女子達は本會の通信教授に依て家庭に居ながら必須の學科を修められよ●本會發行の講義錄は高等女學校の科目よりも一層多數の諸學科を網羅し第一流の名家を擇びて講義を囑托せるものなり●本會は高等簡易の兩科を設け女子素養の程度に應ぜしむ月謝は高等科四拾錢簡易科二十錢とす目下入會に都合よし會則は葉書か電話にて請求あれ

◉高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束修四拾錢

○論理（下田次郎）○禮法（佐方鎮子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事教育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌なてしこ

◉簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎮子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下入會の好時機

東京市麴町區下二番町三七

大日本女學會　電話番町一三三〇

河井醉茗君著　山中古洞君畫

詩と美文　玉蟲

（表紙意匠及アート紙原色密刷口繪入）

最新刊

全一册新式製本色クロース金箔、色箔入頗優雅

（正價金六拾錢、郵稅六錢）

特別賣價五拾錢

郵稅不要

『玉むし』評判記

▲『日本』曰く。　醉茗は新體詩人として名あれども亦其文章溫藉にして雋味あり和氣あり而して詩趣あり其妙多く其詩に遜らざるなり（中畧）明治女子の文章を作る參考書としては啻式ならずされぱとて浮薄衒飾の分子を含まず最も恰好なる文範たるに庶幾からん

▲『萬朝』曰く。　女子習文の爲にとて自作より女子又は家庭を材とせるものを採取せりといふ著者の小品文は其の新體詩と共に溫優掬すべきものあり

▲『國民新聞』曰く。　溫雅にして清麗なる筆致は卷中に溢れて謹厚なる著者其人を目前に見る如き心地する節も尠からず覺ゆるなり

▲『都新聞』曰く。　クラシックなるありロマンチックなるあり叙情あり叙事あり神秘的なるもの敎訓的なるもの神話童話寫生文日記文形はそれ〴〵異れども純潔溫雅なる氏の特色は何れの篇にも現はれて趣き洵に深し

▲『女學世界』曰く。　篇中朝餐晩餐の一節並に愛子の死などいふ處を讀んでは成程と思はず卷を措いて感服しました醉茗君は誠に眞情の人である眞情を流露して文をつくる何人か感ぜざるものあらんやで彼の形容澤山な文字や細工を專一とする文章家の迚も眞似る事は出來ない處である婦人や家庭の趣味を養ふには誠に此上もない好著作である

▲『明星』曰く。　醉茗氏の文は疎々として雛菊の香を嗅ぐ如く輕浮の氣なきを喜ぶ

▲『婦人世界』曰く。何れも婦人のために書いたものですから綺麗なものばかり體裁もなか〳〵凝つたものです

▲『婦女新聞』曰く。所々奇警なる觀察を寫してある自然界の何物をか解せんとする所眞に味深し

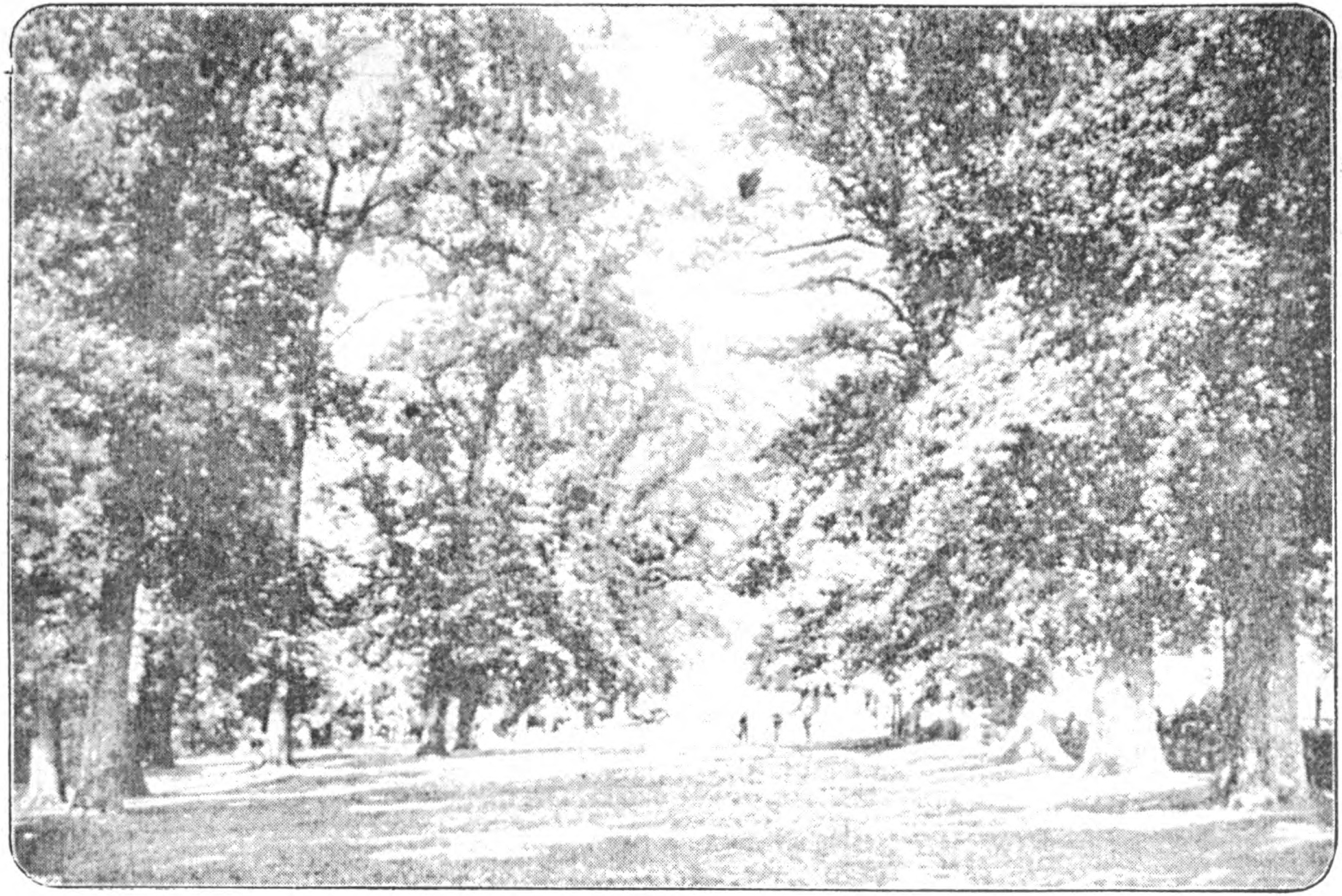
▲『新公論』曰く。　近時この種の出版多しと雖、本書の如く清新なるものは罕なり廢城、濱名湖物語の如きは鏡花の小說にありさうなる結構なるも鏡花の小說よりは遙かに詩的文字に富みたり予は今日より愛讀の書一册を加へたるを欣ぶ

▲『秀才文壇』曰く。　今の女學生諸君が危險なる戀愛小說などを排して斯かる趣味あり實益ある書物に親まれなば其資する所尠からざるべし

▲『文章世界』曰く。　女子座右の伴侶としてこれに過ぎたるものはあらざるべし

發兌元　東京市京橋區大鋸町士　女子文壇社　（郵便振替貯金口座番號）は壹七貳九番

(乙の三)



英國ノツチンガムハグリフトンの郊外

文部省中等教員検定試験委員

（明治三十九年度）



（音樂科）幸田延子君

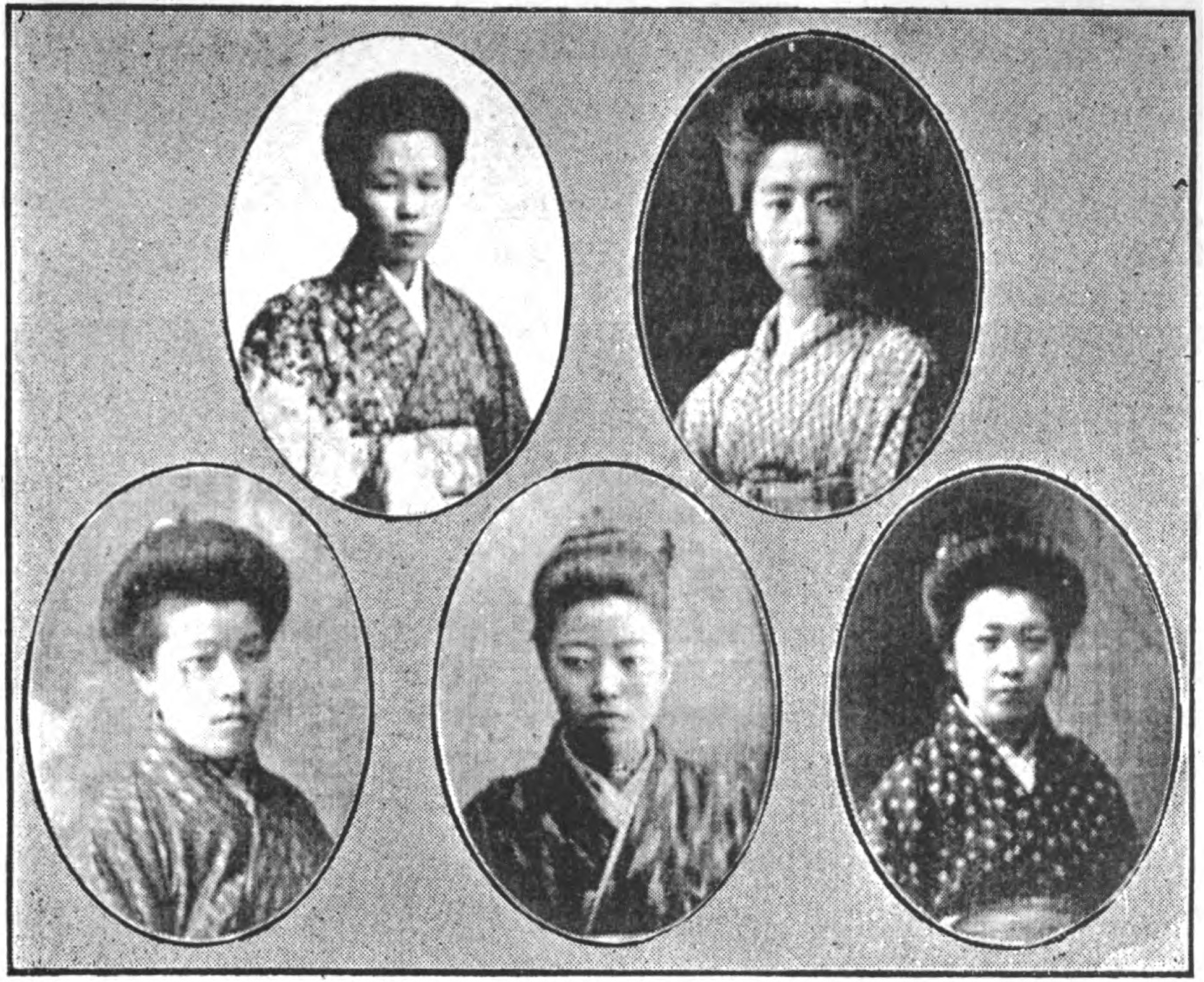


（裁縫科）神田順子君



（體操科）井口あくり君

東京音樂學校卒業式に於ける選拔演奏者



（明治三十九年七月七日卒業）

向つて（上の右）久野久子、（上の左）加藤文子
向つて（下右）鳥居津奈子、（仝中）河野秀子、（仝左）川久保美須々子

誌友おもかげ（其九）



（相摸）萬壽子君



（羽後）渡部みや子君



（備後）皿田はな子君
壽奈本戊子君



（北海道）伊東錦子君



（磐城）鈴木ちとせ君



（美濃）佐伯さだ子君



（北海道）伊東幸子君



（讃岐）東原菫子君



（美濃）晶子君



（北海道）石垣久子君、田中民子君



（讃岐）東原武子君



（相摸）遠藤吟子君

此書は遊學前に一讀慥に價あり

報知新聞記者　中村木公君著

▲最新刊…子女を持てる父兄並に女學生諸君必讀の一大要書

（此書を讀みたる人は着實に成功するを得べし）

實地精査

女子遊學便覽

▲製本發賣

本書目次《總ふり假名付》

第壹篇　女子と學問◎女子の本分○男女と本分○女子と家庭○女子敎育の目的◎女子の獨立○獨立の傾向○眞の獨立○不具の獨立◎女子の學問○學問の必要○學問の目的○不具の學問◎女子の職業○職業の種類○職業の必要○職業の撰擇

第貳篇　東京遊學案内◎女子高等敎育（四校）◎高等女學校程度（二十一校）◎音樂體操學校（五校）◎技藝學校（十校）◎女醫學校（三校）▲重なる學校長の最近肖像寫眞版入

第參篇　東京遊學の危險◎女學生と東京◎誘惑の有樣○恐るべき東京○暗殺の强迫狀○艶書の媒介は同窓會○秘密探偵的の文遣ひ○人力車でお迎ひ○同情に惑はさる○華美が隋落の種○境遇に附込む誘惑◎隋落の有樣○隋落の手始め○隋落生間の交際○隋落せる甲女學生の實歷談○隋落せる乙女學生○寫眞師の話○女髮結の話○男女混合の學校○姙婦預所◎學校の撰擇○學校營業○詐僞學校○學校の口錢○學校の隋落○東京の敎員○東京と地方との學校の優劣○女學校の濫設○惡女學校の内幕○東京の惡女學校と地方女學生◎高等敎育と技藝敎育○高等敎育の現狀○技藝敎育の現狀

第四篇　職業案内◎職業撰擇の心得◎學校敎師○小學敎師○中等敎員○音樂敎師○裁縫敎師○體操敎師○保姆◎專門的職業○女醫○看護婦○産婆○官衙事務員○銀行會社事務員○寫眞師○新聞記者○速記者○料理人○女學校出身者の俸給◎内職的職業○造花○裁縫○編物○刺繡等○附錄數項

全一冊洋裝　正價三拾錢　郵税四錢

發兌元　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話本局六〇七番　女子文壇社　郵便振替貯金（口座一七二九番）

市内特約賣捌所　○東京堂、北隆館、東海堂、前川文榮閣、上田屋、良明堂外書店

此書を讀まば著者が如何に苦心精査せしかを推知すべし

（丙の一）

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさへム子スカシ的舊式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ 輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價） 壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵劵代用貳割增し

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ 眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢 特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するとを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**なを羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**頒ける用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんとを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**
（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

▲家庭の進物として最適良



◎福田琴月君編◎

大判畫帖全一冊定價六拾錢郵税十錢

◎現代の畫伯、川端玉章、梶田半古、寺崎廣業、中村不折、尾竹國觀の諸氏を始めとし、十四大家の染筆になつたもので、美しいばかりでなく、面白い有益な教育的お伽畫帖です、家庭にありては子供も父母も共に樂しむべく、學校にありては教師も生徒も共に觀るべき珍籍です。

▲見て樂しく讀みて面白し

▶お伽旅行 世界めぐり 第四編◀

亞弗利加探險

福田琴月君編
美本全壹册
定價金十五錢
郵税金四錢

さあさ、太郎はペルシャ灣から阿弗利加內地へわけ入つて、獅子や鰐魚の案內によつて、コンゴー國やサワラの沙漠を横ぎる等の怪談奇説面白し

▲朝鮮と滿洲 全壹册
▲四百餘洲 全壹册
▲印度と西藏 全壹册
各册金十五錢郵税四錢宛

家庭雜誌界の女王

日本の家庭

《見本入用の方は郵券五錢封入あれば有合を送るべし》

毎月一回一日發行
定價金拾錢郵税一錢

第參卷第七號
八月一日發行

絶代の奇書
教育界の警鐘

第拾五版發賣

家庭寓話

我子の惡德

定價金六拾錢 郵税八錢

發兌 東京神田裏神保町 同文館 大賣捌 東京神田 東京堂 大阪備後町 吉岡寶文館
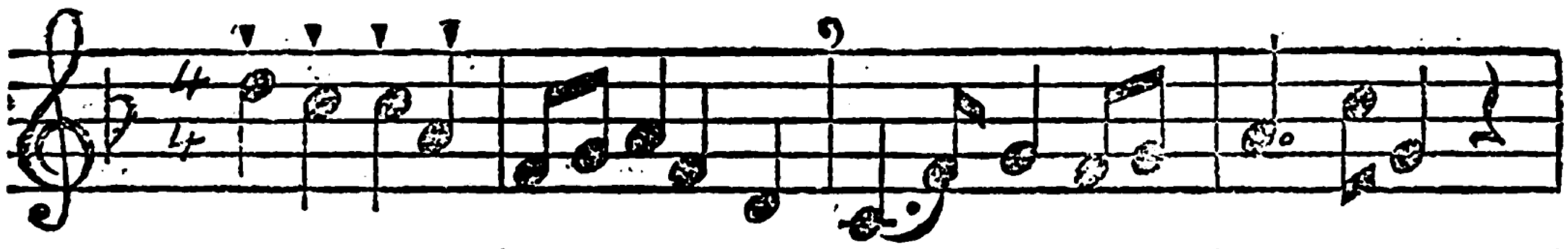




大切なる嫁入道具

箪笥、長持、挾箱、鏡臺、針箱、傘までも揃えた處で、なほ外に大切な嫁入道具が揃はないと、花嫁の價値はありません。言ふ迄もなく思想上の嫁入道具です、教育とか、人格とかは別問題として、琴花茶の湯などの昔風の嫁入支度は外にしても、なほ大切なものがあるのです。それは感情を練り、趣味を養ふて置く事で、文藝上の嗜好を謂ふのです、西洋では女子が繪を習ふ事は、今日我國で琴や生花を嫁入道具の必要條件として習ふが如く、一般に行はれて居ると云ふ事です、成程繪畫などは女子の嗜好として不自然な生花や、形式的な茶の湯などより遙に結構な事だと思ひます。けれども文藝の嗜好は更に是より一層博い意味を持つて居ります、今後の日本は何と云つても文藝上の智識は進歩するに相違ありません、諸孃が奥樣におなりの頃は、一寸新聞を讀むにも、人と話をするにも、文藝上の修養が無いと、人にひけを取るやうな場合が甚だ多からうと思ひます。現今、文藝の嗜好と云ふ事は青年男女を通じて、一般の大勢のやうですから、此現狀でおして行けば、婦人などは屹度文藝の事は少しても知つて居なければならないやうになるでせう。此意味に於て文藝は大切なる嫁入道具の一つです。

夏の旅
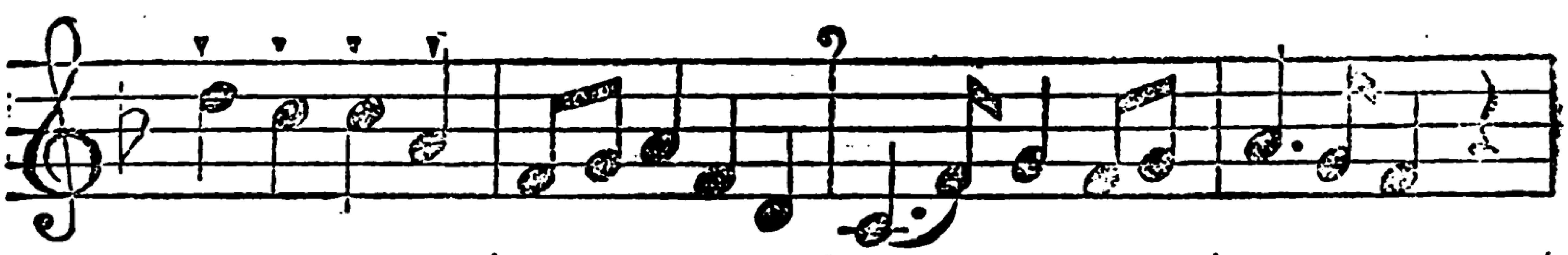
ヘ調 四分ノ四拍子

輕快に
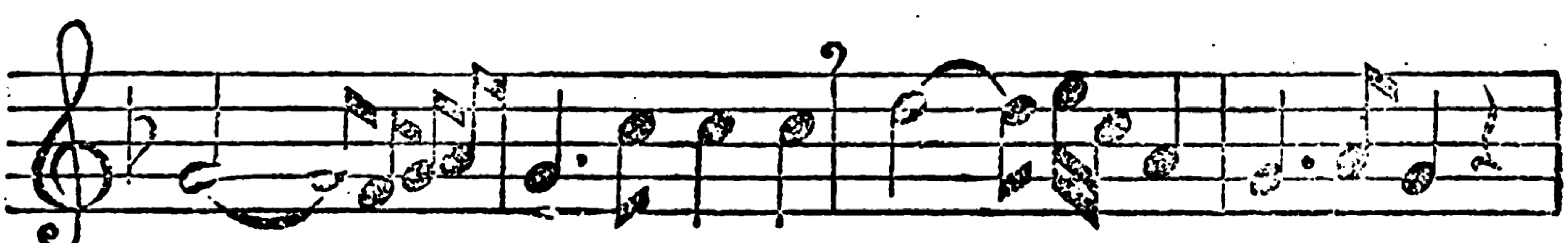


6 5 5 3 | 1 2 3 1 6 | 5 . 1 2 1 2 | 3 . 5 2 0 |

ミヤコヲ ハーナレテ ナーツノー タビヂ
まつふく はーまかぜ そーてにー かよひ
ノヲコエ サートコエ ツーカレー ハテテ
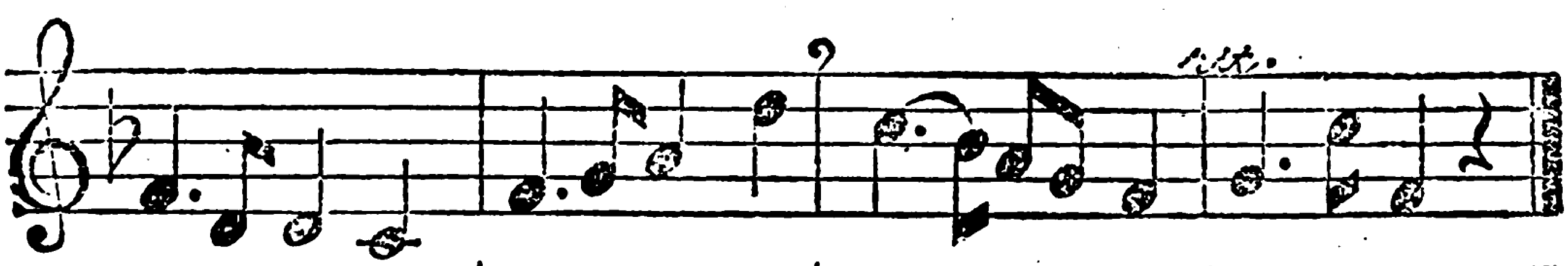


6 5 5 3 | 1 2 3 1 6 | 5 . 1 2 1 2 | 3 . 2 1 0 |

ナガメモ ヲーカシキ ヤーマニー カハヤ
みどりの しーまやま とーべろー かもめ
イコヘル マーツガネ ユフヒハー キエテ



2 — 2 1 2 3 | 2 . 5 5 5 | 6 — 6 7 5 3 | 2 . 3 2 0 |

セーミナク コカゲニ ターニーノ シミヅ
おーよぎの もろびと あーまーの いさり
ヤーマノハ チカクモ ヒーピーク カネニ



1 . 6 6 5 | 1 . 2 3 6 | 5 . 4 3 2 1 | 2 . 5 1 0 |

ムスベル ヲトメノ ユーカータ ミエテ
みやろも すゞしき こーこーの うみべ
ヌグサヘ ワレシヤ スーゲーノ チガサ

夏の旅

小森松風作歌
高井德造作曲

○第一章

みやこを離れて、夏の旅路、眺望もをかしき、山に川や、
蟬なく木蔭に、谷の清水掬べる少女の、浴衣見えて。

○第二章

松ふく濱風、袖に通ひ、綠の島やま、飛べるかもめ、
泳ぎの諸人、蜑の漁、見やるも涼しき、此處の海邊。

○第三章

野を越え里越え、疲れ果てゝ、憩へる松が根、夕日は消えて、
山の端近くも、ひゞく鐘に、脱ぐさへ嬉しや、菅の小笠。

「時報」

○花婿花嫁　花婿花嫁と謂ふ言葉は近頃の流行となりまして、十年前の花婿花嫁の寫眞が公にされるなど、面白い現象です、寫眞版の進歩は多くの人を頗な世の中に紹介するやうになりましたが、女と云へば藝妓の寫眞に限られたやうな時から見ますと、之も世の中の進歩でせう。

○歸省　男女學生の歸省の期が來ました、歸省は自ら旅行を意味して居ります、旅行中の追懐ほど後て愉快なものはありません、諸嬢も歸省中は何は措いても日記だけは認めなさい。

○證言　地方の人は我々が現在見るよりも一層甚しく東京は腐敗し、女學生は墮落して居ると思つて居るか知れません、我々の信ずる處に依ると決して女學生は墮落して居りませぬ、諸嬢も亦固く信じて居られるでせう、願はくは歸省して父兄の前に女學生の墮落して居ない事を證言して下さい。而して他の遊學者に東京を恐れしめないやうに力をつけて下さい、此事に就ては猶追々に申上ませう。

○休む勿れ　人間の身體も精神も活きて働いて居る間は、睡眠の外に無意味に休ませては、却つて害があります、暑中休暇と云ふと直ちに意味なく遊ぶ事のやうに思ふ人もありますが、然うてはありません。一の時間こそなけれ、平素心がけて居ない異つた事に、精神を働かせる時なんてす。

○銀貨と銅貨　貨幣は何人の手から渡つて來たか知れませんから、能く注意せぬと病毒が侵染するとは皆知つて居る事てすが、「婦人世界」の弦齋氏の談話中に西洋の醫者が、銀貨と銅貨に就いて細菌の有無を檢査した處が、銀貨には澤山附着して居て、銅貨は一つも無かつたさうてす云々とありました。

○早婚と晩婚　女子が學問する結果、自然に文明國ては晩婚が多いと言ひますが、日本ても東京に在る女は晩婚になり易く、田舍の女子は早婚になり易い。近頃結婚の年齡を論じた人の説に。早婚必ずしも有害と云ふ譯はないと言つて、男子は滿二十五歳、女子は滿二十歳を超へない間が、結婚の年齡に適して居ると斷定して居ります、因に云ふ我國て女子の成熟期は平均十四歳八個月ださうてす、氣候、境遇との關係て甚だ相違があるてせう。

○音樂趣味　音樂の趣味に就いても近頃は分らずなりに進んて來たやうです、實際西洋樂の趣味などを分つたふりに云ふ人は、分つてゐないので、分らないうちから分つたやうになるのが音樂の味ひだらふと思ひます。由來趣味などゝいふ事は多く經驗から來るのですもの、理窟て分る譯はありません、諸嬢が實際に幾度も聽き、幾度も練習して、はじめて分つて來るのです。

○氣候と心持　近頃「家庭講話」と云ふ書物の一項に氣候と心持の關係が出てありましたが、日本人の氣の附かぬ事てありました。其實誰ても口にする事て、今日は天氣が惡いから頭腦がいけないとか、雨のふる日はくさ／＼するとか云ふ人はいくらもあります。して見ると我々の心持と氣候とは大變關係の深い事て、是等も新らしい研究の一つてせうが、又文藝家の心得て置くべき事てす。

○男女學生問題　交際させよと云ふ人と、させてはいけないと初めから否定する人とありますが、いけないと云つても自然に男女學生は接近すべき運命を持つて居るやうてす。只々双方とも人格を重んじてあやまちのないやうになる迄には、多少の年月もかゝりませうし、犧牲となる者もあるてせう。

○分り易き事　漢文崩しの文體が言文一致になつたのを見ても、文章は分り易い方へ進んて行くと云ふ事が知れます、むつかしい文字や、むつかしい形容や、まはりくどい語句など今後の文壇から近々退けられるやうになるてせう。詩もさうてす、此頃ては皆が餘り分りにくゝして了うて、稍行なやみの傾が見えます、今にもつと率直な自然的な詩風が起つて來るてせう。

○新刊　例年七八月と云ふ大暑の候には新版の刊行が少い、天然の山水を新しい眼て讀むのは、片々たる名もなき册子を繙くより遙に得る處が多いのです。

○女子文壇(定期)増刊『をみなへし月』八月十五日に發行いたします

歌の四品

文學士　武島羽衣

歌を作るといふのと歌を批評するといふのは全く別のことでその間に關係はないのである。歌を作るのは感情と想像とのはたらきによるのであつて歌を批評するのは智識判斷の力によるのである。かやうなわけてあるから批評が出來なくても歌が作れぬといふ理由もなく歌が作れぬから批評の出來ないといふこともないのである。いな、むしろ歌の作れる者には批評家が少なく批評などする者には歌を作るものはほとんど無いといふてもよいくらゐであるのである。歌人と批評家とかねたものゝないのは全くこの理によるといはねばならぬ。

しかしながらこの作歌の力と批評のはたらきとはかく一見全く無關係なるが如くにして實はまた全く切りはなすことの出來ぬ關係をもつてをるかと思はれる。それは何であるかといふと、眞にうがつた歌の批評をなさんとする者はどうしても自分がその歌を十分味ふだけの力がなければならぬのであるが、この十分味ふ力をつけるには自分がまづ歌を作つてみるといふことが必要である。自ら苦心して見てはじめて他人の作の苦心したところがわかるのである。

　これと同時に眞によい歌を作らうと思ふものは必ず人の歌を審定するぐらゐの力、則この歌のどこがよいかどこがわるいかぐらゐの批評する力をもつてをらねばならぬ。もし、ある歌の美處缺點がわからぬぐらゐであつたならばどうして自分の歌を美ならしめ缺點のないようにすることが出來やうぞ。人のふり見てわがふり直せといふ諺は作歌の上にほどこしても十分の眞理をたもつてをるのである。

　しかしこの、歌を批評するといふことは口でこそ何

のことでもないやうにいふが、なか〳〵むづかしいことである。批評の學問は學殖を要し識見を要し才能を要し公平を要して容易に出來ることではない。であるから歌を作る人にだれにても批評のはたらきをそなへよといふことは無理な注文かも知らぬが、しかし、歌の優劣美醜を判ずるために歌の四品を鑑定するだけの力はあつてほしいと思ふのである。

歌の四品とは何であるかといふに、換言すれば歌の四階級といふことである。下品、中品、上品、上々品といふ四等差をいふのである。

さてしからば歌の下品則最下等の品位をば何といふかといふに、これを

拙●吟●

といふのである。拙吟といふのは拙劣なる吟詠といふことで、全く價値のない吟詠をいふのである。拙吟など作るくらゐならむしろ作らない方がよいので、これは絶對に排斥すべきものである。歌は感情のあらはれたものであるからして歌といふ以上は必ずや、ある感情があらはれてをるべきはずであるのに、たゞ理窟をこねるとかわけのわからぬ事をいふとかなどして何等の感情のこもらぬやうなものは皆拙吟の範圍を脱することは出來ぬ。よし感情はあらはれてをらずとも何か言葉づかひの上に趣向でも用ゐてあればとにかく、それもないといふやうなものも無論拙吟である。

夕ぐれにふれば夕立、よしさらば
ひるま降るのはひるだちにこそ。

かやうなのが拙吟の一例である。

次に歌の中品ともいふべきを

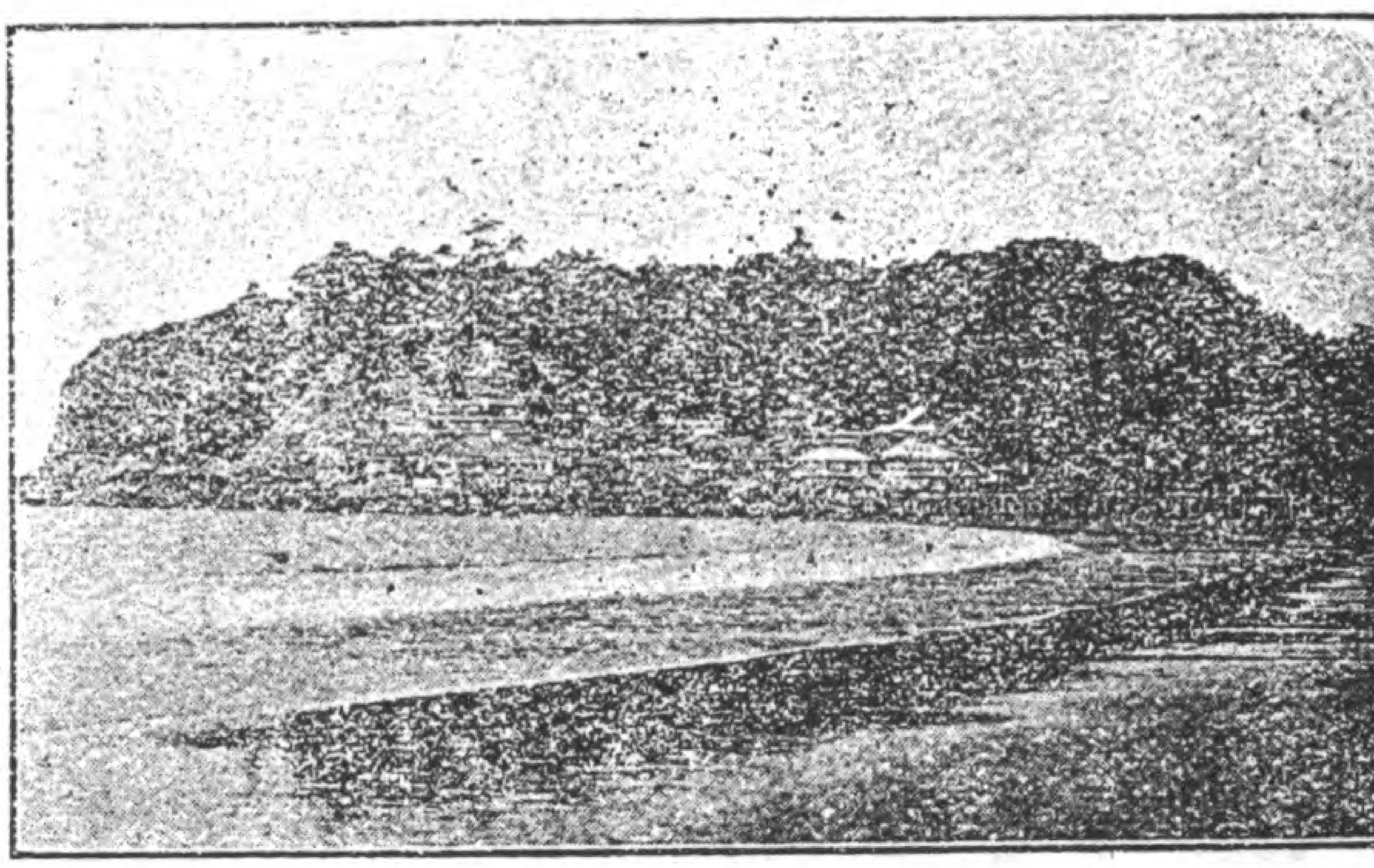
凡●吟●

といふのである。凡吟といふのは平凡の吟詠といふことである。拙劣とけなしさるまでのことはないけれども普通平凡であつて、だれでも作れるやうな、世間にざらにころがつてをるやうな吟詠をいふのである。これらの歌には無論多少の感情や趣向がはいつてをるも

のであるが、たゞその感情や趣向が世間ありきたりのもので別段作者の力を見るに足らぬやうな歌をいふのてある。たゞし凡吟といつてもこれは人によりて程度がちがつてくる、自分が凡吟と思つてゐる歌も人は凡吟と思はないかも知れないし、人の凡吟と思つてをるものも自分は凡吟と思はないかも知れない、この差異のあることは止むを得ざることである。たゞ各人が自分の力にひきくらべて見てこんな歌はおれでも詠めるといふやうに考へたならばそれを凡吟ときめるが一番おだやかな標準であるだらう。山上の憶良が歌に

秋の野に咲きたる花をおよび折りかきかぞふれば七草の花。
萩が花、をばな、葛花、なでしこの花、をみなへしまた藤ばかま、朝がほの花。

といつて秋の七草を詠じたもの丶如きは七草をうまくよみこめたところは技倆が見えて、おもしろいが、何の感情もなく、だれでもいへるやうな歌て凡吟といはねばならぬ。



江之島

秀吟

一段のぼつて歌の上品ともいふべきは、吾人はこれを秀吟と名づけるのである。秀吟といふのは秀逸なる吟詠をいふのである。群を抜いたざらにない歌をいふのである。まことにおもしろい感情が歌はれてあるとか、おもしろい趣向が用ゐられてあるとか、一寸人のおよびがたいふしのある歌であつたならば秀吟の部分にはいつてくるのである。これも人によつて見かたがちがうてあらう。自分がまことにうまい歌だと思ふものをも人はさう考へぬかも知れぬし、人がうまい歌と考へるものをもわれはさう思はぬかも知れ

ぬ。しかしこの區別の出來ぬのもいたしかたのないことて、自分々々で考へて、とても自分ではこんな思想はうかばないと思つた歌はまづ秀吟にかぞへてもさしつかへはあるまい。落合直文氏が近江八景をよんだ歌に

　近江の海夕ぎりふかしかりがねの
　　きこゆるかたや堅田なるらむ。

などあるはまことに秀吟といふべき歌である。

最後の階級を

　絶●吟●

といふのである。絶吟はあとにもさきにも類を絶つた吟詠をいふので、いはゆる古今無類、天下の一品ともいふべきを指すのである。であるから絶吟はめつたにない。またあるやうては絶吟ではないので。畢竟百年目、五百年目ぐらゐに出來るやうなものである。無論一日のうちに絶吟が二首出來ないともかぎられず、また千年たてば必ず出來るともいはれぬ。かやうに時間やまた歌の長さによつて絶吟はきまつてくるものではないのである。よく世間の批評家がインスピレーションの作だとか入神の作だとかいふのは則この絶吟にあたるのである。絶吟と拙吟、たゞ音に濁があるなしのちがひでまことに大變な相違があるではないか。

以上歌の四品のことはざつとわかつたが吾人は歌を作るにあたりて必ず絶吟を理想として必ず拙吟を避けるやうにしなければならぬ。まだ／＼凡吟は許してよい。人は、さう始めから秀吟が作られるものではないから、凡吟から秀吟、秀吟から絶吟とすゝんでゆく覺悟てをらなければならぬ。なほこの歌のことにつきて、いろ／＼こまかしき事はまたこの次に述べやう。

梅雨晴　　夜雨

きよ子生れし時、父なる友は雲遊き石見にありき

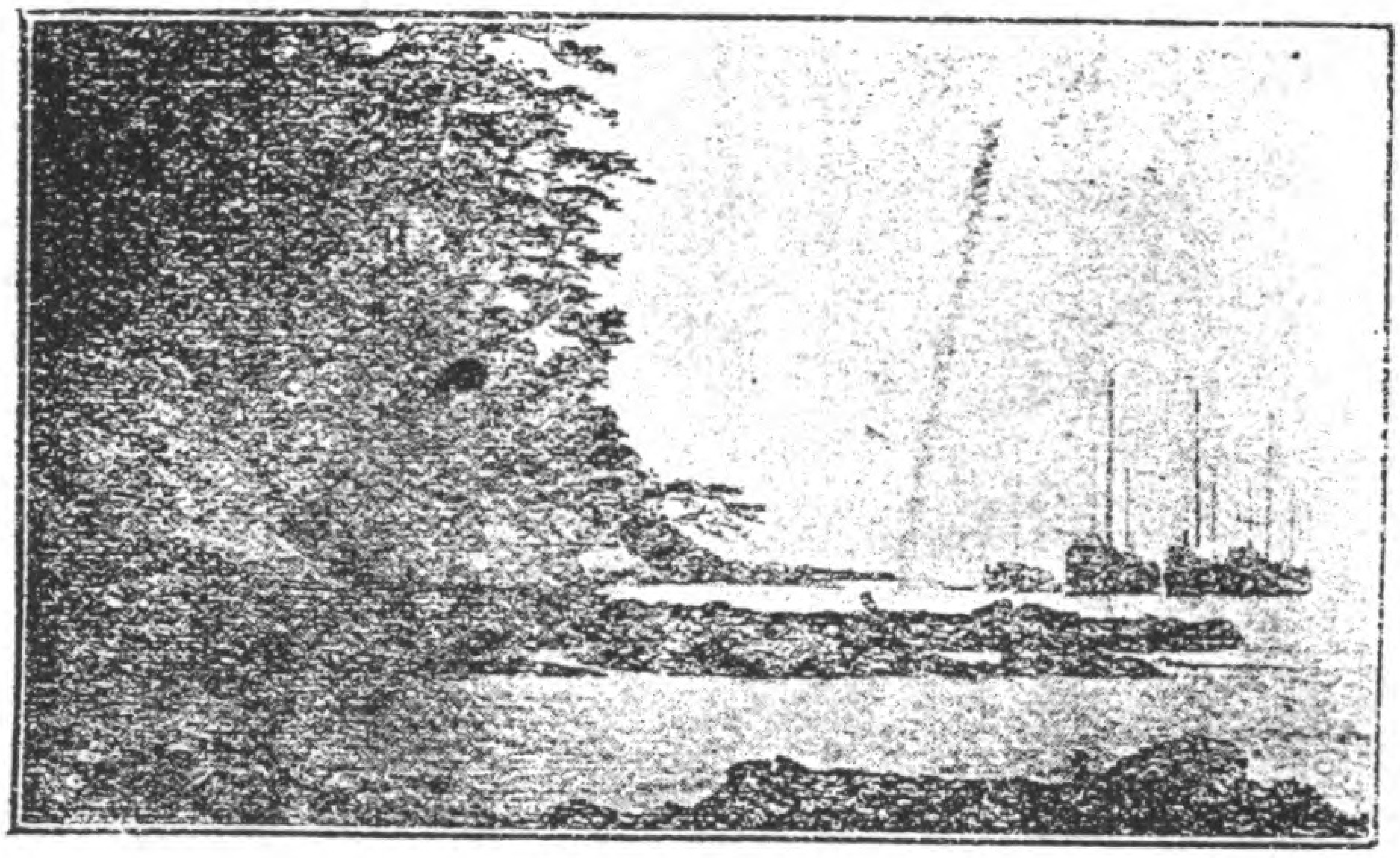
野に雲を見る梅雨晴の
光は空に滿ちしもの

君が擧げしてふ一の女の
清ときくこそ嬉しけれ
花かぐはしき夏なれば
露も白きに凝るか

有りやの眉のしなやかに
眼は涼しかれ新星の
剪らねば延びぬ産毛てふ
髪はやがても肩過ぎむ

旅なる人は石見野の
八日の月を見ざりしや
——寂しく歩む野の人の
われは思ひに疲れけり
一人は欲しき妹も
許されぬ世を怨めども——

君が聽くべき産聲は
東の草に獨れしのみ
草には見えよ夏花の
花にも似らむ吾子が面影



江之島西浦

畫家の細君（中）

かつみ

まー貴方中座を致して、これは失禮を致しました。唯今一寸幼いのが眼を覺したものですから、誠に御無禮を致しましたね。それて唯今までは結局り妾の理想を御話致したのて御座いますが、これからが實際に這入つての御話て御座います。

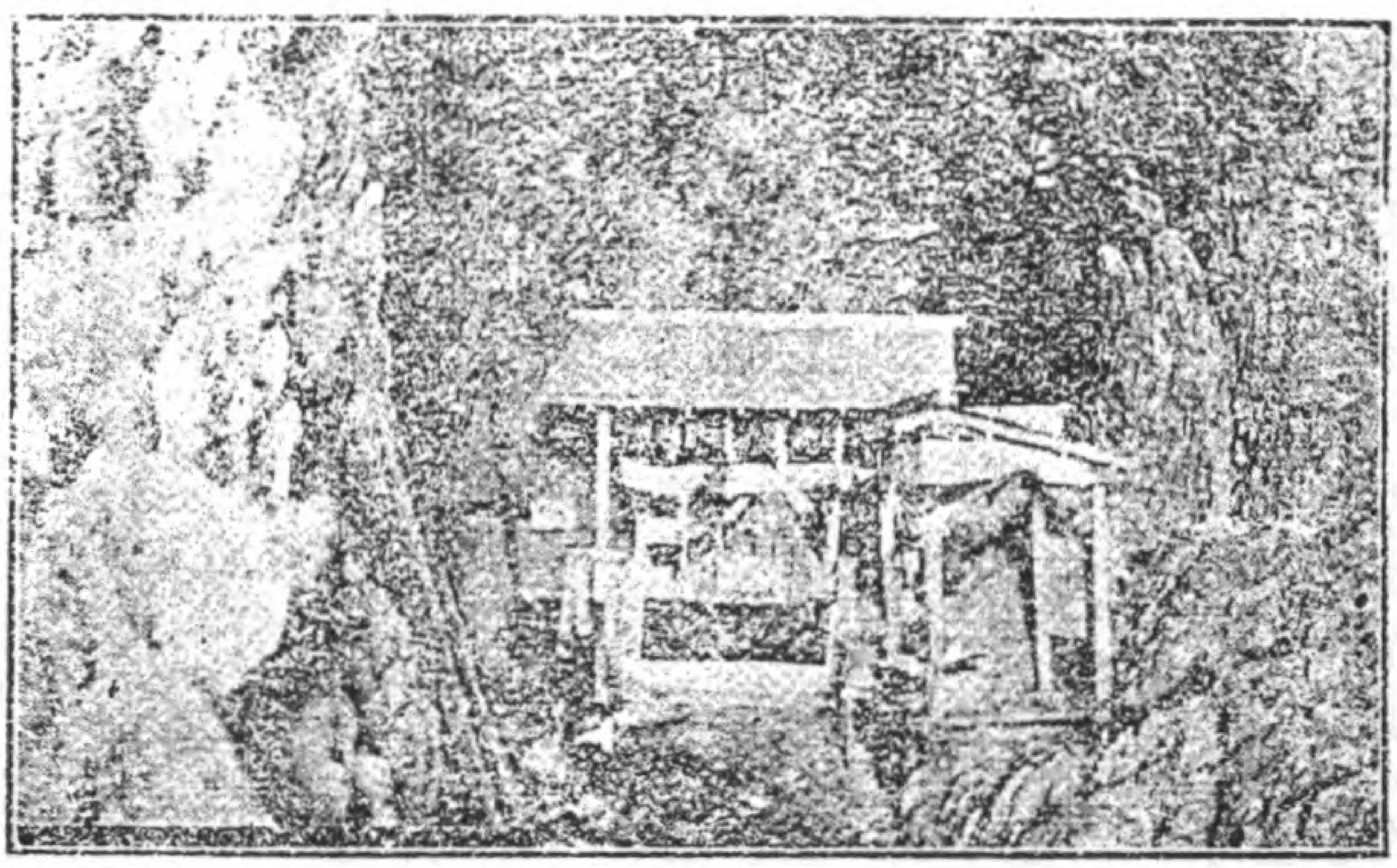
恰度妾の結婚致した時は良人も漸く師匠を離れて、何うぞ斯うぞ畫家と爲て一本立が出來るやうに成つた斗り、中々未だ安心爲て世渡が出來ると申す段には集つて居りませむてした。尤も夫れは最

初から妾も承知のこと、美術家の生涯は先づ其所が眞に味のある處であらうと考へて居りました。さうしてその苦しい生活と申すことに就ては重々兩親からも、亦親戚からも注意を受けましたが、妾は何時も申しますに、美術家が普通の人々のやうに暮向のことなど心配爲るやうでは、迚も豪い大家には成れないなど、、斯樣な理窟を列べまして、一も二も無くその樣なことは少しも念頭に置きませむでした。で妾の參つた時は良人は定まつた月々の收入と云ふものは少しも御座いませんて、たゞ時々不意に起つて來る注文の繪などを畫いて、夫れて漸く月々の暮を立てゝ居りました。妾は其時熟々とさう思ひました。假令自分等の暮が什麽に貧くつても、上役に頭を下げて機械の樣に働いて居る役人や、又利慾一方に夜の目も寢ずに算盤手に取る商人などに比べたならば、マー如何程幸であらうなど、、自分の今更理想的生涯に這入つたことを、獨りて悦むで居りました。妾は每日良人の畫きます繪の日增に出來上るのを見て、什麽に樂しみに思ふたて御座いませう。丁度この時は麻布の笄町に住むて居りましたが、家は僅に三間では御座いましたが、庭は割合に廣く中央に大きな栗の木があつて、夫れに一杯栗が生るので御座いました。參つた當座每朝早く起まして其栗を拾ふのを樂に爲て居りましたが、今でも秋に成り栗を見ますと、何時もその當時を思ひ出して懷敷御座います。

・

先づ斯樣な風て、一二ヶ月は夢の樣に暮して了ひました。その內に段々と年の暮になりまして、正月の仕度とか夫れても色々と世話敷なりました。その內に愈々暮も押詰り、彼方此方の仕拂も致さなくてはならぬ譯になりました。この時實に當惑爲て最う困りに困りぬいたのは、洋服屋への四十圓と云ふ拂ひです。他にも少しづゝの仕拂はありましたが、先づ夫れなどは何うか斯うか工夫を付けましたが、茲に纏つた四十圓の勘定書を出されて、是非拂つて吳れろと迫られた時には、本統に何う爲たら可からうかと、全く途方に暮れました、後で詳しく樣子を聞けば、それは結婚の當時

拵へた服で、疾に仕拂ふべきが萬事思ふに任せず今日迄遲滯たのであると云ふことです。剩へその洋服屋の因業と申しましたら、此方は何も惡意のある者でもありませむのに、その物言ひの挨拶振からが、實に憎い程横柄なので御座いました。良人は何事も辭を低ふして只管暫時猶豫をと頼むやうに斷つて居りましたが、中々承知致す模樣も無く、それなればせめて半金だけは是非入れて呉れろと、一日の內手代や小僧などが幾度と無く足を運ぶので御座いました。その內に十二月卅日にもなりまして、最う今年も明日一日と云ふ譯になり、何うしてもその半金を都合致さなければならないことに成りました。妾がその時の心配と當惑は、唯思ふ斗りで何の譯には立ちませんが、良人の心配は夫れは一通りでは無く、その金子の都合を付けるに先づ什麽に心

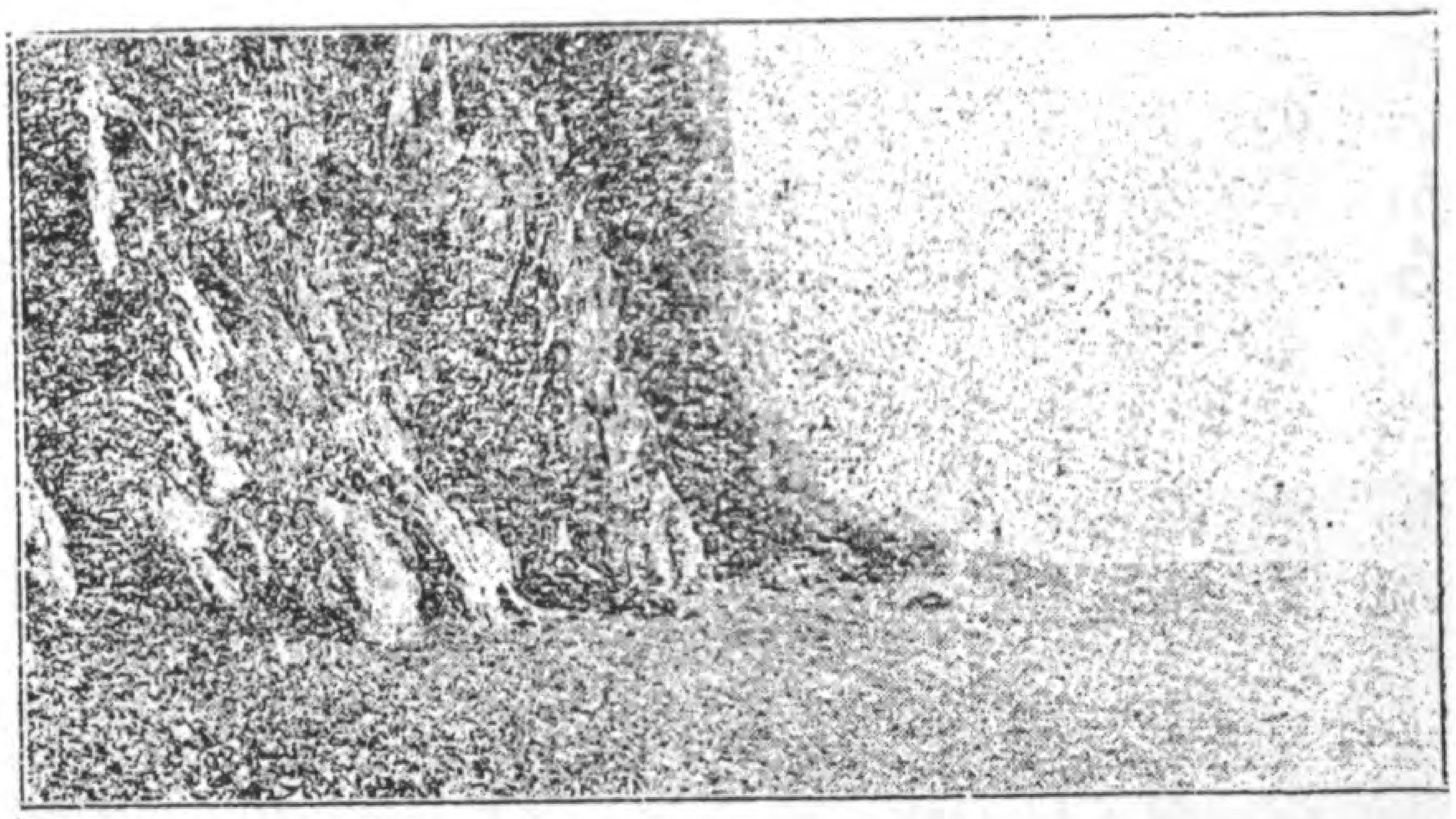


江之島辨財天

を痛めたことか、端から見て居りましても明に解りました。その良人は非常に思案に暮れて居りましたが、一計を案じたと申しまして他に出ました。暫く爲て歸つて來ましたが、少しも元氣の無い悄然と爲て座敷に座りました。妾も最早堪りませむから色々其譯を聞きますと、丁度その時引受けて居つた肖像畫があつたので、その肖像畫の禮金を幾分か前借に行つたのだと申しました。然し節季師走何所の家も多忙ので、終にそれを言ひ出す機會が無くて徒に歸つて來たのだと申しました。そこで斯樣に樣子が解つては、妾も呑氣に落着ても居られませむので、何とか一と工夫とは思ひましたが、未だ來た早々里の親等に相談に參る譯にも行かず、されば と申して服屋の手嚴しき催促を聞ては迚も辛棒は出來ず、嗚呼本統に

什麼爲たものかと、妾は朝夕の御飯も碌に咽に通らぬ程心配を致しました。卅一日の朝又服屋の手代は御話は奈何着きますと、挨拶も無く座敷に這入つて來ました、良人はその時最う頭を疊に附けて何卒特別を以て正月の中頃迄で待つては呉れまいかと事を分て賴みましたが、手代は中々承知爲る氣色も無く、益烈しく攻め立てるので御座いました。妾は最う次の間で悔しいやら殘念やら何とも堪りませむでしたが、然しその金子が無い以上は奈何しても致方は御座いませむ。如何に手代に言はれても返す詞は何も御座いませむでした。この時の妾の心の內、本統に今でも忘れは致しませむ。その時良人は又何と思ひましたか、それなれば半分だけは屹度夕方迄に拵へて置くと約束致してとうとう其憎い手代を歸しました。然し其實良人には何の目當も無かつたので御座います。妾も斯樣なつては中中に唯見ても居られませむから、出來ることなら何とかして自分の身寄で都合を附けたいものと、色々に考へました。然し此方へ來る前の言葉もあるので、里家の兩親には何うしても相談爲る譯には參りませむでした。すると不意に胸に浮むだのは、自分の伯母てした、此人の良人は最早三年前に歿ましたが、一人この伯母だけは妾が書家の家に嫁することを同意して呉れました。夫れには既に伯父は居りませむでしたが、幾何かの財產もあつて相應な暮を爲て居りましたのて、其所へ出懸けてこの一部始終を話して見たら、或はその金の一時の融通が付くかも知れぬと、早速その譯を良人に話し、試に出懸けて見ました。然しこの樣な事を話し又この樣な賴事は生れて其時が初めてのことゝて、平素親しい伯母ながらも什麼に話惡かつたか知れや致しませむでした。夫れても一生懸命の思ひて其由を伯母に話しましたら、伯母は一言も言はずに二十圓妾に默つて手渡して呉れました。妾はこの時何か身が急に浮上つたやうに思ひました。妾は伯母に碌碌挨拶する言葉も出ずに直に家に歸りました。良人は六疊の座敷の机に凭れて、頭痛でも爲るやうに頭を抱へて居りました。妾は飛込むやうに座敷に這入り、貴

方これをと妾は最う何の言葉も出ませむてした。良人は振返るやうに妾の方を見ましたが、其所に廿圓の金子があつたので、一息に妾の名を呼むて疊に兩手を突いた儘何の言葉も出ませむてした。その内に事の次第を良人にも詳しく話しまして、そこて、漸く此方も氣强く手代の來るのを待つて居りました。其夕刻は終に手代は來ませむてしたが、夜の九時頃てしやう少しく酒の氣味で大聲揚げて、戸外から呼ばつて這入つて來ました。そこて良人が約束の通り兎に角半金は渡すから、後の分は正月迄待つて呉れろと先づ前の金子を拂ひました。手代は少しく案外と云ふ風も見えましたが、流石は現金なもので歸る時は御世辭の一つ二つ殘して上機嫌て歸つて行きました。妾は生れてこのかた此日程心を痛めたことは御座いませんてした。然し又この日程眞實お金の難有味を知つたことも御座いませむてした。



越後親不知の海岸

文士の家庭

澤田撫松

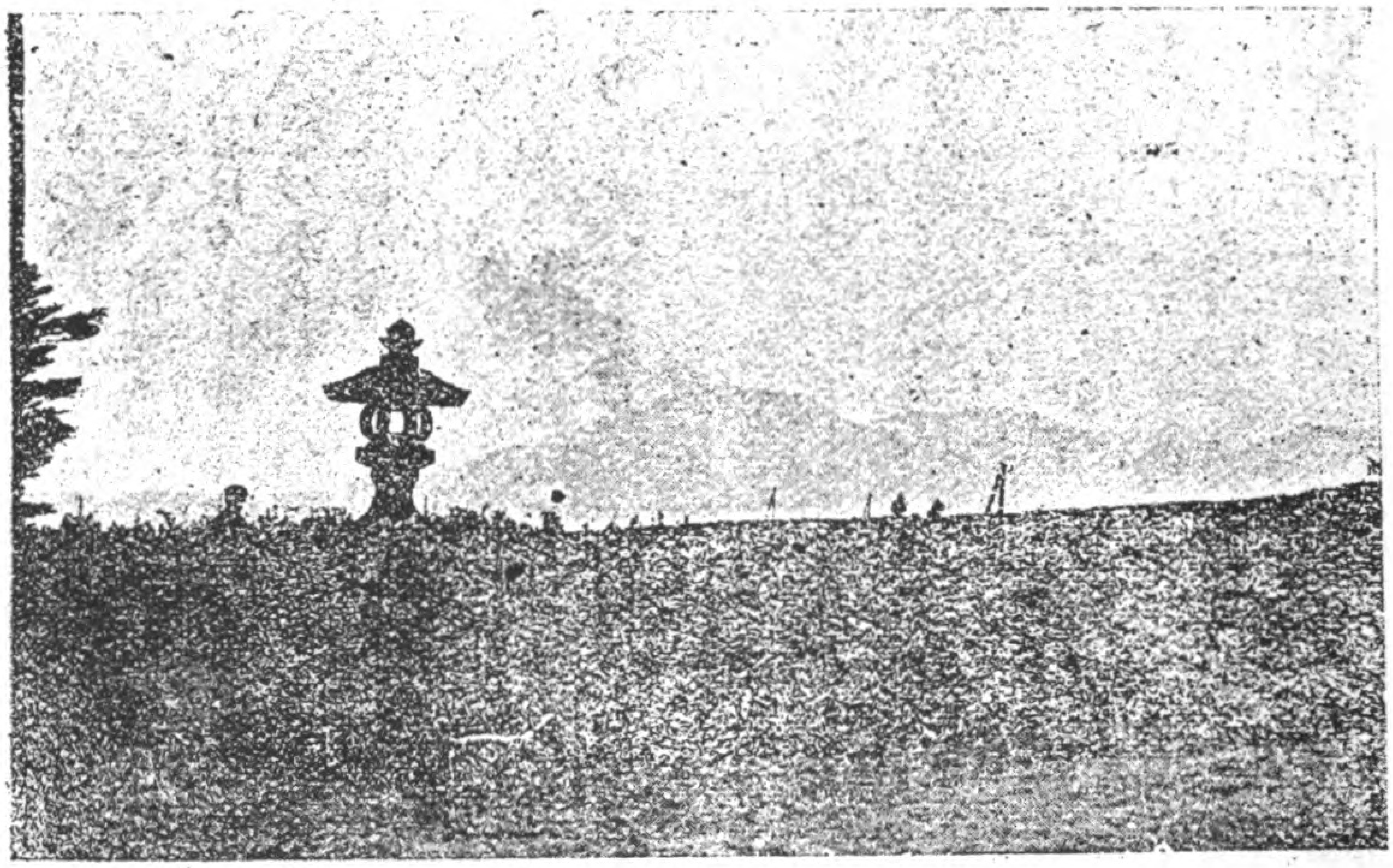
三 幸田露伴氏

記者曰く、文士の家庭は本號に幸田露伴氏を載せる筈でしたが、幸ひ氏の家庭に關するお話がありましたから、代へて載せる事にしました。

先づ第一に言ひたいのは家庭の進歩と言ふことてすな、世の中がだん〳〵と進歩して行くのてすから家庭も亦進歩せねばならぬことは言ふまでもないてすが、今日の家庭の有樣を見ると、なかなか進歩しさうにないてす、それは如何云ふ譯かと言ふとこれは如何しても亭主が惡いのてす、亭主が惡いと言ふのは、世間の多くの亭主は細君を叱咤ることだけは知つて居つてもこれを褒めることを知らない、凡そ物の進歩と言ふ

ことは、積極的に何にかしやうと思ふから起つてくるもので、何もしてはならぬと言ふ消極的から起るものでない、ところが此の亭主と言ふ奴は常に細君を叱咤りたがるもので、彼れをしたのがいかんとか、此れをしたのが好くないとか細君のすることなすこと叱咤つて居る者だから、細君だつて堪らない、彼すれば叱咤られる此すれば亦叱咤られると、常に叱咤られることを恐れて進むでものをしやうと言ふ氣にならない、だから家庭は進歩する譯がない、舊體依然無意味無趣味殆ど家庭の實が擧がらない、此の弊を改めるには如何しても亭主が注意をせねばならぬ、細君に惡いところがあれば叱咤のは惡とは言はぬが、然し惡いことを叱咤ると同時に、若し少しても細君によいことがあれば盛にこれを賞讃しなければならぬ、總て人の妻たる者は自分の夫に褒められる程嬉しいものはないから、少しても夫に褒められるとそれが嬉しさに、彼して又褒められやう、此して又褒められやうと、常に彼しやう、此しやうと、積極的に活動するから家庭に活氣がある、活氣のあるところは則ち進歩のあるところて、家庭が活氣を以て進歩するから玆に始めてホームの實が擧るのである、それからもう一つ亭主に忠告して置きたいは家政に對する知識の缺乏である、一例を擧げて見ると、其の食膳に向ふ度びに如何も菜が不味い斯んな肴では到底酒が飲めぬなど丶御託を列べ、自分の收入と暮し向きの費用の程度をも考へないて、唯だ細君を無能呼はりして、これては困まるから『食道樂』ても讀ましたら微少しは味いものを食はすだらうと、早速これを買ひ求めて讀むべく細君に嚴命すれど卓上更に美味が登らない、其のはずさ卓上に珍味佳肴の登らないのは細君の無能でなくて反つて亭主の無能を現はして居るのだ、何故て、考へて見たまへ、金さへ出せば何んな御馳走ても出來るが金も充分出さないて味まい物を食うと言ふのは隨分無理な話した、味い物が食ひ度ければドシ／＼金を儲けて細君に御馳走費用を充分は渡して置くがよい、それをしないて味い物を食はせと細君を攻めるのはそら無理だ、とばかりては細

君獨で好い氣になつて居るかも知れぬが、細君だつて少しは腦髓の働かし樣で不味ものも味く食はせないことは無い、三度の食物をこしらへるのでも下婢が主婦の命令に依つて無責任に働くのと違つて少しは考へてやらねばならぬ、ところが近頃の若い細君の中には、隨分無鐵砲なのがある、これは全くの實話であるが、或る所の細君に客が御當家で御使用になる醬油は何印ですかと問ふと、細君答へて曰く私の家では寄宿舍の舍の字の印の醬油を使用つて居りますがなか〳〵宜しい樣ですと頗る澄ましたものであつたに、自分が日々使用つて居る醬油の印が山上てあるか上サてあるかゞわからぬ樣て如何して一家の家政が執れるものですか。



草津より淺間山を望む

こんな細君の理想の家庭とは如何なものでしようか實に滑稽なものだらうと思ひます。家庭に就てはまだ話しもありますが、餘り長くなりますから又この次に話すことにしましよう。

『玉蟲』を讀みて

横瀬夜雨

私は河井君に敎はつて詩を作るやうになつたばかりで無く、散文もさうなのです、生來の鈍物で昨日敎へられたとは今日はもう忘れるし、醉茗君の名聲隆々たるに比ぶれば夏野の草の茂みがくれに埋もれて行く花のやうな私はたゞそれなのです。

『玉蟲』の中に夕暮日記といふ文があるてせう、二人きり知らぬとなれどあれが抑私を誘うて散文に手をつけしめたい

とぐちなのだ、「おれは都にゐるしお前は常陸に住んでゐるのだから、同じ日同じ夕に二人はどんなことをしてゐるか、手紙に書く積りで書いて見やう。いつも〳〵月波の山のうす霞とうなるのが能でもあるまい、散文もやつて見ろ」とそゝのかされて、初めて私は夕暮日記といふのを書いて見た。私のはちやうど手づから花を培うてゐたころなので花の記事が多く、けしの脆きをいたんでつたなきわが上を思うた詩もある。河井君はめぐり合せたやうにお祖母さんがお亡くなりなすつて、合作の日記どころでは無かつたらうにと、今では思ふばかり、然し涙のこぼるゝは君の日記です。『幸三郎、そこら暗〳〵がナ、火を點しておくれ、幸三郎〳〵と呼ぶ聲す、――夕風さら〳〵と軒の樋に音づれて、外は忍ぶ鎧の袖の上と童の聲にたそがれて行く。』父の亡せたるならば天に呼び地に喚ぶ哀傷の聲もあらむ、母ならばいかばかり深き悲みの溢れけん、河井君の御兩親は疾に和泉で亡くなつて、老いたる人は百三十里外の武藏野に歿したのです。

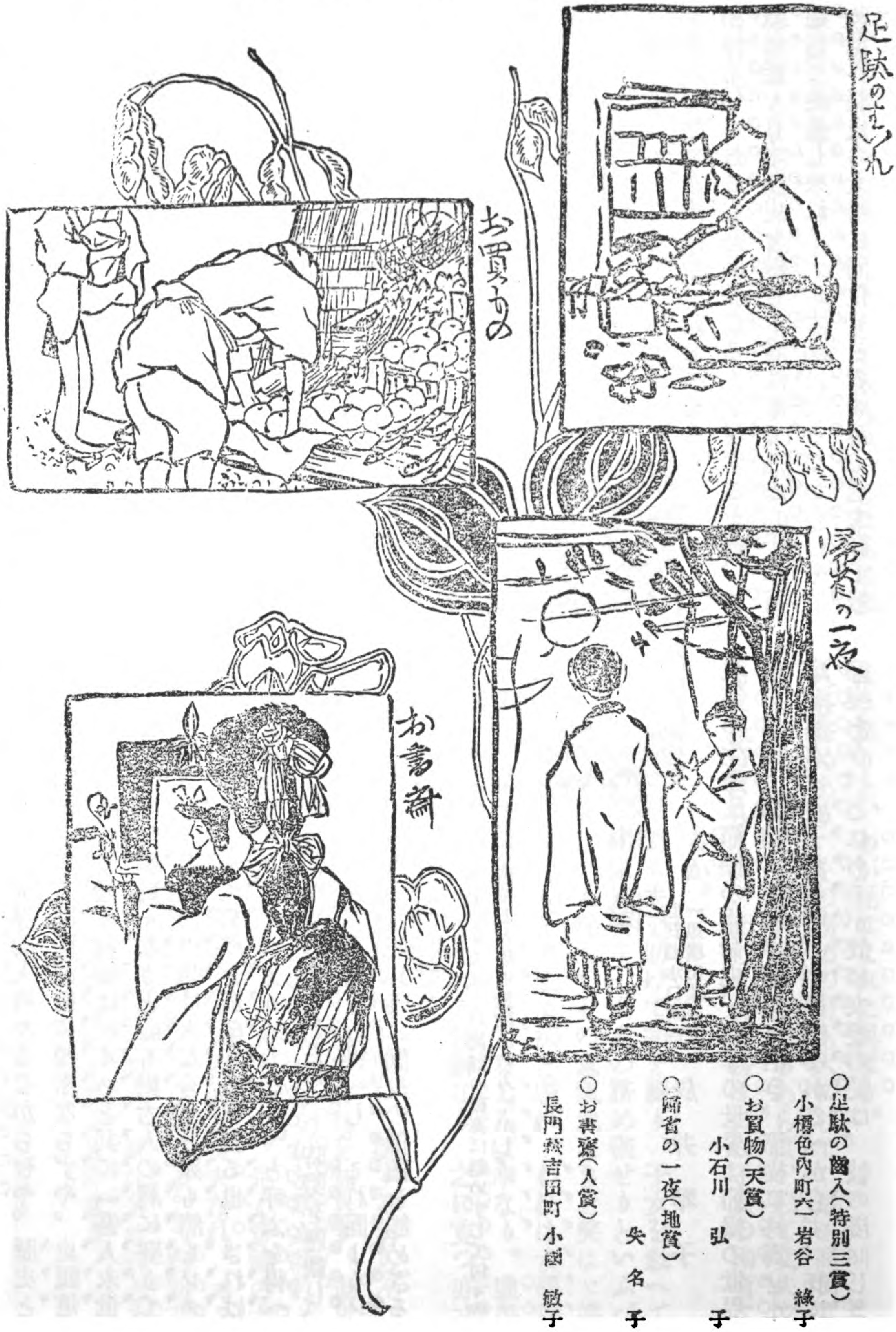
嗚呼、笙歌遙聽孤雲上、聖衆來迎落日前、人は死ねば一切の苦を忘れるのでせうか。私は今不如意の身を床上に横へて、電のやうに來りてはまた電のやうに去る人の命をおもうた。河井君のおばあさんはあたりが暗いと仰しやつた。私は入り方の月の影と油盞さんとする燈火とを見ると、なぜか涙がこぼれる、寂しいのでせうか。

夜になつた、頭がまた痛むので雨戸を一枚くり明け、ほんのり明るいけれど月も無く星も見えぬ空を仰ぎ見た、蛙の聲、南に西に斷續して、病める胸に響くと許り、人は寢たる家のうちに、ひとり眠られぬわが心よ。私は『玉蟲』を評する約束をした、けれど心もいたみ身も病みて、卷は手にすれど末まで讀みつゞける根氣が無い。許したまへ。七月四日、はれたり。

米國の女大學

米國に於ては女權の發達愈々大にして婦人の氣位のみ徒爾に高くなるの傾向あるより米國新聞は此程「娘の教育法」と題して左の十三條を列記せり鑑戒となる可きもの多ければ左に掲ぐ（一）女は食物を調理する事を學ぶべし（二）洗濯とボタンを縫ひ付くる事及び自己の衣服は自己にて洗ふべし（三）パンを燒く方法は是非之を學ぶべし（四）一弗は百仙なる事を知り結婚後は良人の收入と自己の出費とを計算すべし（五）借金を以て衣服を造るは恥辱なりと知れ（六）强て美人ならんとして肺病患者らしき姿とならんよりは「健全は美なり」との原則を忘るゝ勿れ（七）買物を爲す時は一仙二仙を爭ひながら無益に香料に費消する一弗二弗の大なるを知らさるは算術を知らざるの恥なりと知れ（八）一仙の財產なきも怠惰ならざる男子は百萬の富ありて一日を安樂椅子に暮す男子より貴きを學べ（九）音樂と畵と文學とは結構なれどもパンの方が大切なりと知れ（十）然と否とは正直に云へ女然は否なるか或は「眞の然」なるかを再考せしむべき不正直を去れ（十一）車行より歩行の利益なるを知れ（十二）結婚は金と體裁によりて選ぶべからず相手の眞假を知れ（十三）以上の事出來ぬ娘は結婚後男子を苦むる贅物なりと悟り人道の爲めに一生を獨身にて暮すべし

山中古洞先生選　懸賞圖畫　（其八）



○足跡の出入（特別三賞）　小樽色内町六一　岩谷　綠子

○お買物（天賞）　小石川　弘子

○歸省の一夜（地賞）　失名子

○お書齋（人賞）　長門萩吉田町　小國　敏子

論文

文學士　沼波瓊音先生選

天　○歷史について

石見　人の子

歷史を以て過去の記錄なりとせば、歷史は單に記憶力の對象となり、從て記憶力の最も豐富なる小學校の生徒は當然大歷史家たるに至るべし。世豈斯の如き滑稽のあるべしや。歷史は須く人類進步の記錄たるべきなり。更に一步を進めて之を論ずれば歷史は正に過去の我を敎ふる人類一日も不可缺の學なり。從て歷史によりて我等の生命が過去數千載に伸長せらるゝ事、宛ら宗敎が我等の生命を未來永劫に發展せしむるが如し、兩者相待て始て玆に完全圓滿なる人を現ずるを得、されば誠に能く日本歷史を解せる者は漸て過去二千六百年を通じて生長し來れる大日本國民たるなからむや。又眞に世界歷史の大勢に同化せる者は泝て過去數千載の發達を遂げたる世界的人格たるなからむや。歷史と人生との間に存する關係如何に親密ならずや。史眼這箇の理を看破して始て我等はルイスと共に『吾人末世に出てし者は躰軀矮小なりと雖も猶古人の肩に登りて觀るを得る也。吾人の思想は大ならずと雖も然もソクラテスの肩によりて哲學を觀望するを得る也。されば吾人の見解はソクラテスよりも大なり』と呼ぶを得べし、以て人生と歷史に貢獻するを得べく時勢を達觀し、一代を指導するの豫言者たるを得べし。これ固よりノートの訂正、事實の暗記以外に歷史の價値を認めざる學究子の與り知る所に非ず。

（評）世上の歷史家先生の多くはこの眞髓の發揮に勉めずして何々寺は何年何月何日に建ちしか等の詮議にのみ忙がし。

地　○節操

滋賀縣水口町西一里横田橋の辺　辰井琴子

我等の生命は節操の生命也、我等の世界は節操の世界也、我等は節操に生れ、節操に活き、節操に終焉せん事を冀ふ。女子ある所必ず節操なかるべからず、既に節操あり、これあるが故に夫妻の愛は、彼の淺間しき

浮華なる一時的の愛にあらずして永久也、これあるが故に家庭は神聖にして且つ光輝也。あゝ崇嚴なるよ節操。節操は實に我等の信仰也。既に信仰也、信仰ある者の心はきよくして平和也。

黄金の時計、金剛石の指輪、繻珍の帯乃至業平丹次郎バイロン等の美顔艶容も我等が信仰は動かすべからざる也。昔イーブが智慧の實を食ひて墮落したるは信仰なかりしによる。

近者囂々たる戀愛神聖論、譏々たる自由結婚論は、畢竟罪惡のみ僞善のみ。節操を外にして我等は言はず。行はず。我等は重ねて絶叫せん、我等の生命は節操也、我等の世界は節操也。

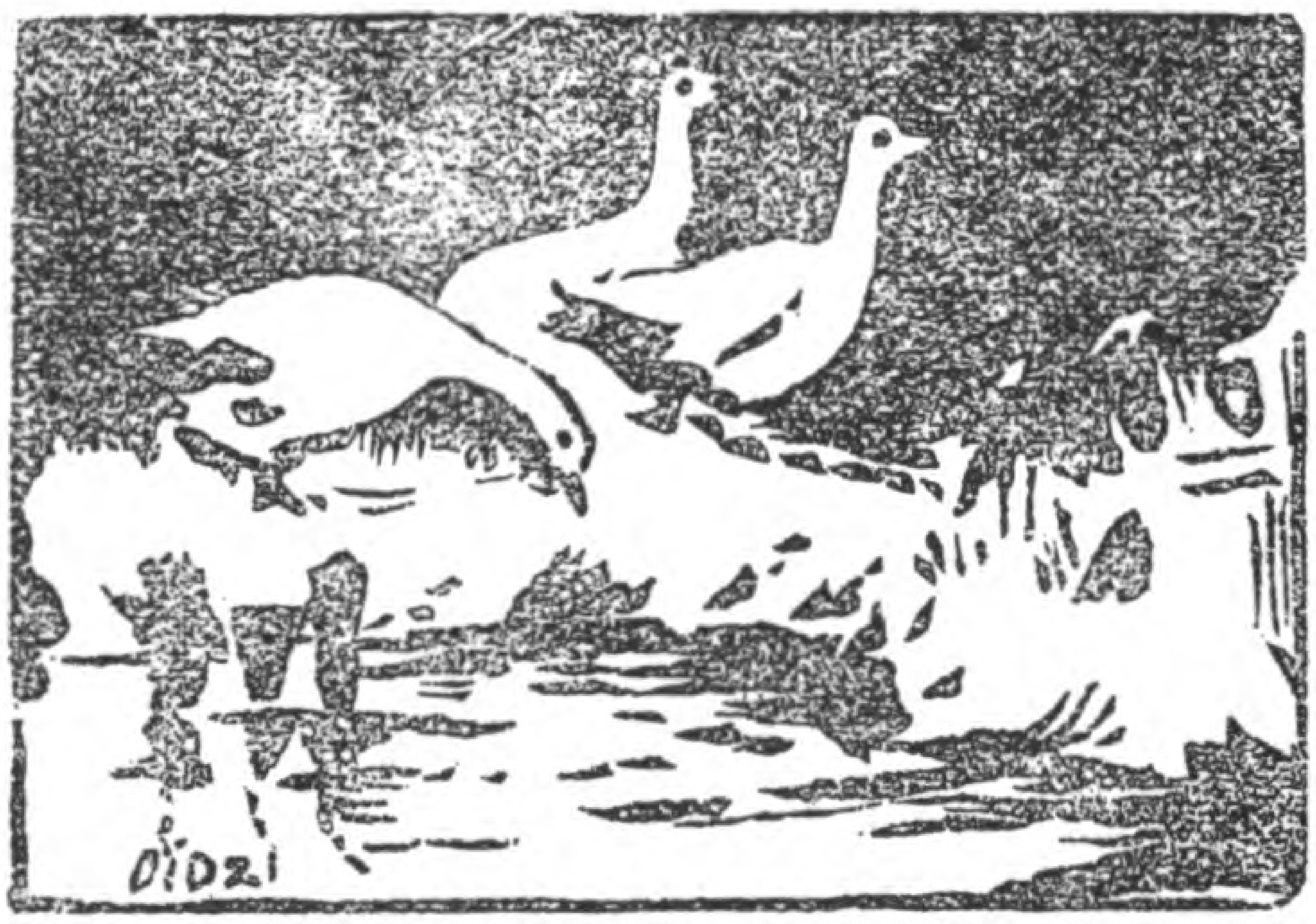
（評）陳腐なる節操の二字に新らしき生命を與へたる文。

（人）○女丈夫

兵庫縣揖保郡余部小學校　醉芳詩史

世に女丈夫といふ者あり、人はいふ奥村五百子女史の如き然りと、わが見はこれに異なり。

人各務めあり、その務めの最も大にして、最も高尚なるを務め、以て一家社會を益するあらば、以て丈夫たるに耻ぢざらんか。而して女の務は夫れ子女の撫育なるか。



初夏（賞外）　紀伊粉川町　生地きみ子

苟も夫を助けて家を圖り、子女を教へて國家に貢す、女人の務め盡せりといふべし。人呼んでその意氣地なきを笑はゞ笑へ、痴と思はゞ痴と毀れ。われは女學校卒業者の名を汚すなくんば幸なり。虚榮心は女子通有の性癖なり、之に克つ亦丈夫ならずや。

人或は異國の例を取つて擬するあらん、然れども異國の事我これを知らず。世界的女丈夫たるを欲せざるかと謂ふ勿れ。此土に食み、此土に存す。先ず帝國の女丈夫となりて後世界的女丈夫たれ。エリザベスやカザリンや、吾れこれを欲せざるなり、内助功多くして人に耻ずるなくんば可なり。畏れ多けれども我れはわが皇后陛下の御高德を慕ふものなり。

（評）論旨大によし、文相の言と一致す。

秀逸

○瞑想論

津市　松尾花子

妾は瞑想を好む。瞑想を好むと齊しく夕暮をも好む也。問ふを止めよ瞑想は沈着に靜粛に而して淋しき中に言ひ知れぬ快を覺ゆるものなれば時は夕暮を俟たざるべからざるは論を要せず。

遮莫、朝は勇壯也、活氣躍る也。花々しき也、爽かなる也。勇大に活氣漲り花々しく爽かに淸々しき丈又朝は瞑想に適せざる也。眠り漸く醒めむとする時よりは今より安らけく眠に落ちむとする時を俟たざるべからず。と思ひ至れば妾が瞑想の爲に夕暮を好む所以、兎宜なりとせざるべからざる也。

それ世には花に狂ひ蝶に戯むるゝの愚を知る人ありと雖も、瞑想の所謂快味を知る者幾何もあらむや。豈嘆かはしき極みならずや。

瞑想の快たるや家の後への小山の上に踞坐涼しき海濱沙上の佇立、あるは雜然として稠人の境たる街衢の一隅たる壺中小天地の閑室に尙此れを爲して神に近づくが如き感……興趣……を覺ふる也。しかれども妾先つ頃國木田獨歩氏著運命の「空知川の岸邊」の章中氏が亭々として雲をつく松柏の陰、而も冬寒き北海の國の時雨を靜かに聞きて味はひつゝ可憐なる空想に耽り給ひて得ならぬ興をおぼえられしと讀みて深くも妾は森を愛するの念起りぬ。起ると共に頃日常に家の後の森を訪ふを例となしぬ。森は周圍二町餘り、名を愛宕の森と云ひて妾が村社の祀られたる所なり。自然につきし小笹路を辿りて日陰のやゝ漏るゝ青葉影を潜けて池の畔りに立てば日は今や落ちむとして西の空うるはしく彼方の神代川、向ふの青葉が岡、向岸の青葉に溶くる夕日の色も鮮かに目にうつりて妾はこゝの石に踞して靜かに空想に耽るなりき。妾はかくて淋しき儚なき運命乍ら僅かに此に快を得て喜ぶ也。

善き人よ、あらぬ悶えに苦しむの時あらば直に寂寞たる森を訪へ、そこには青葉と「自由」と翼を延べて喜て諸姉を迎ふるならむ。

（評）余も亦獨歩氏より森の意味を敎へられし一人なり。

○活氣

下谷　西たね子

活氣は人に快感を與へ、不斷は不快の感情を、起さしむるものである、夫の一聲の號令の下に、スバスバと

行動するところの歩武堂々たる隊伍は、見るも心地よい、操り人形もそれである、一國の幸和の一刀兩斷果斷を以て天下を繩梅するの手際は、如何にも壯觀であるが、是等は中に活氣が横溢して居るからである、人の此世に生存するには活氣がなければならぬ、枯木冷灰には活氣がない、醉生夢死の徒にもそれがない、それでは宇宙一切は死物と擇ぶ所がない、社會は停滯する水の樣である、不倫敗德は踵を尋いで起て來る歷史の流れを一瞥するに、國家多事にして、敵國外患のある國民は、人心が活動して居るから、惡德の跋扈する遑がない、從て文物制度圓滿なる發達を遂げて、史上に永く燦然たる光彩を放つのである、之に反して平穩なる時代には人々の意氣が銷沈して居るので、さながら砂漠のやうに色も無く、味も無く、全く沒趣味である、淫靡はよく普及するが、志氣は日に日に消磨する。

陽春の曙千朶萬朶の山櫻の朝に輝く有樣は、眞個に我が大和民族の精華を發現したもので、吾々は一種神妙不可思議なる靈感に打たるゝが、之も活氣があるからである、美人でも又左樣である一笑以て五尺の男子を惱殺するに足る顏容を備ふとも、唯幽靈の如く無氣力にては、聊かも人に快感を與ふる事なく、決して優美とは申されませぬ、要するに活氣は人の生命である、淙々たる谿川の水、馥郁たる薔薇、皆活氣に充ちて居る、妾等若き學生は、宜しく机上に病的戀愛論を喋々するよりは活氣ある大國民を理想にすべきである、終りに活氣を亂暴と區別すべきは勿論であると云ひ添へておく。

(評) 世往々消極的の人を善人と誤解するあり不可なり。

テニス (賞外)



神戸二ノ宮町　德永　みれ子

○内と外

谷　小春子

外に在りては君子内に在りては惡魔なる人あり、夫れ眞意か。内にありては君子、外に在りては惡魔なる人あり、夫れ眞意か。否寧ろ偏執なり。兩面共夫れ偏執なりと雖も、吾人は寧ろ、外に在りて惡魔、内に在りて君子なる人に同情を寄す。妾は思ふ、理想の夫と雖も、此點を缺く人は面白からずと。

偏執は社會が餘儀なくせしめたるもの、解剖し來れば一面眞理あり。一面の主張あり。一の觀念あり。信仰あり。八方美人の如才なく立廻る社會には、一方面の偏執は屢々警告者として現るゝなり。一包の興奮劑として少からぬ刺擊を與ふるなり。若し、偏執なる主張と信仰

とを以て、時に大打撃を加ふるなくんば、社會は餘りに如才なく、餘りに利口にならんのみ。而して後者は前者よりも偉大に、强固に、且つ主張の多くを含めるなり。悲觀詩人と云ふべき、ダンテ一派を見よ、其社會に對する聲や、狂犬の如く、豺狼の如く、動もすれば、人を嚙まんとするものあると共に、其人となり甚だ溫乎として親しむべきものありき。前者は其意義、其思想、共に薄弱を免れず。內に在りて惡魔、外に在りて君子なりし偉人の名は。我れ未だ曾つて聞かざる所なり。

（評）眞理なり。
（又曰）文の呼應不十分なるが爲に意味の取れにくき所あるを惜む。

○梅を考ふ　麴町　柴崎富美子

雪間に笑ふ梅の花、古來人是れを君子と稱へ、怠たる者の誡しめとす、我は思ふ當然のみ、敢て其樹の功に非ず、梅若し嚴冬に咲くが故に尊しと成さば、陽春三月に開く櫻も、綠陰ほのかに亂るゝ藤花も、同じく尊しと成さゞる可らず、天性を發揮する上に於て、彼我何等の相違を認めず、認めざれ共何奈せむ、其現實に表はるゝかたちに於て、彼れは乃ち天下の花に魁けて咲く可き榮ある運命を有するが故に、普通衆人に尊ばるゝこと亦動かす可らざるなり。是に於て我は彼を君子として敬ふよりは、只天性幸福なる樹として對するの至當なるを感ず。

（評）一種の見方なり、面白し。

○女性の自殺　三重　山本富士子

近時都鄙の別なく頻々として自殺者を出す、內務省が調査にかゝる最近一ヶ年の全國に於ける婦女子のそれは、其數實に三千九百四人に上れりと、悼い哉。世人多くは彼等を目して、嘗に愚昧小心の女として一時の嘲笑に附し去るのみ、何ぞ夫れ冷酷なる。蓋し彼等は自己の特權と滿足により自己の生命を棄つ、元より咎むべき事なきに似たれ共、斯る悲慘の最後を遂げしめたる彼等の家庭は決して其責を脫る可らず。見よ其原因とする所は、概ね離緣を悲みて幼婚を忌みて親の訶責の爲夫の不行跡の爲、及び失戀の餘りに等也とす、世上もと是不如意不完全なりと雖も、人類の最も恐るべき死を强行する底の心事は能々のとなり。想ふに彼等は家に在つて無情なる仕打に堪兼ね一片の同情を求むるに由なく、悲痛懊惱の極死を決すると共に、滿腔の怨恨と希望を訴へんとする所在つて存す。吾鄕に熊田某と呼ぶ紳士あり、性淫酒を好めるが近來一層甚敷、妾を入れて日夜逸樂を事とせり。爲に家大に衰へて負債見る〳〵山の如し。妻女邦子泣いて屢々諫むれ

ども聽かず、反つて之を五月蠅しとして放逐しぬ。妻の實父は是全く汝が齊家の力なきが故なりとて家に入れず、邦子は身躰維谷まり此上は一死以て夫の願慮を需むるに如かずと思惟し、或夜窃に明神が池に投身せり。某は驚歎して、夢より覺めたる如く妻の死躰に抱付き『堪忍してくれ……』と計り男泣きに泣きぬ。其後彼は翻然改悛の心を顯はし、專ら職務に奮勵せり。

冷酷なる世人は如此動機と目的を以て自殺せし女性に對しても尚且つ輕侮に看過するや否や。吾人は斯る哀むべき風聞をきく毎に、一種敬虔の念を禁めざると同時に、一面社會の士女に向つて、大に家庭の道德てふ事を絶叫するなり。

（評）熱考すべき問題なり。

○實行

赤坂　齋藤紫桂子

九段坂上月おぼろに雲間をもれて花の梢を照せる春の宵、忠勇なる丈夫がみ魂まつるみ社の奥深うありとしもなき風にハラ／＼とちる櫻花君がいさをし語るがごとし人をしてかゝるかしこき、み魂の許におごそかなる感にうたれぬ者やある、熱心なる感謝をさゝげざる者やあるさるを今し鳥居の前を行く一むれあり「救世軍」と記せる旗かゝげて讃美歌うたふなり、人々は只おどろきの目見はりて狂人とさけぶなり、アハレ彼等が路邊に立ちて說く處げに淸き御神の道なり、世の人に「貧を救へ」と告ぐ然して彼等其言葉の如く自から行ふか否行ふあたはざるなり、只說きて社會の人に行へと云ふのみなり、御神果してかゝるみ心なるか、かゝる人のみつくらんとてイエスキリストは生れ給ひしか、ああ彼等は御神の代表者なるに勉學力盛んなる青年時代をなす事もなくて徒に社會の救をもとむるより世の人御神の道をさとらず彼等社會をすくはんとしてかへりてのぞかるゝなり、御神の御心と國の道德は元々一致せるものなり、いかに人を救はんとても力なくしてすくひ得べきや、よろしく才力の限り學問をし、國家につくして道德を出でざる限りの地位を得べし、道德を出でざる限り活動すべし、其收入たるや淸き物なり尊き物なり、かくて神の御言に從ひ之を以て廣く人を愛しすくふこそ誠の慈善ならめ、それよ、心なき繼母が、尊き聖人に說かれしよりも誠ある繼子の爲めにいかに感ぜしかよ、幾人の彼等が大聲に說くよりも一編の小話、乳姉妹の房枝が淑德によつていかに多くの人をすくひ、御神のみ心を感ぜしめしかよ、げに實行の力たるや大なる物なり。

（評）文壇に於てもいたづらに論者多くして作家少し。

河井醉茗先生選



天

○殘雪

赤坂區丹後町九十八　齋藤紫桂子

菫のかげにはかなくも　消えずさまよふ白雪や
其かみみ空の御神の　み衣に淸きはえの色
月宮殿の舞踏會　燈にかゞやくはえの色
エデンのそのゝ鳥のうた　きくによろしきはえの色
姬君めでゝかぎりなく　とはに匂はん白雪の
一度見たる塵の世の　虛榮のそのにゑむ梅の
くれなゐ深くよはされて　めぐみの神のみ手こぼれ
そむきし罪や春の雪　榮えもしばし夢の間に
戀し紅梅ちり行きて　むなしくのこる春の雪
天使さまさず塵の世の　すみれのかげにさまよへり

信仰の伴ふた作品は何處か氣高い處があります。菫のかげにさまよふ雪は確かに奇想、而かも詩語に於て少しも奇をてらはない、作者の雅致慕ふに餘りあります（醉茗）

地

○白繭

榮城三春町字馬場二二、佐藤方　富田蔚子

白銀の花、地に咲けり。　風ゆるやかに日に映えて、
繭の香こもる鄙の里、　地に白銀の花咲きぬ。
かくて里の女、嬉びに、　滿ちにし背に繭乘せて、
若駒の鈴、勇ましう、　麓の市にくだるなり。
市に賣られし白繭や、　やがては人の手によりて、
美くし糸に、綾衣と、　貴人の美、添ゆるらん。
地に花と咲くほそ繭に、　夕陽の名殘り、地にひきて、
照り添ふ色にかゞやけば、　其所に黄金の花咲けり。

繭の香こもる里の少女、やさしい、かひがひしい姿が詩の上にも浮いて居ます（醉茗）

人

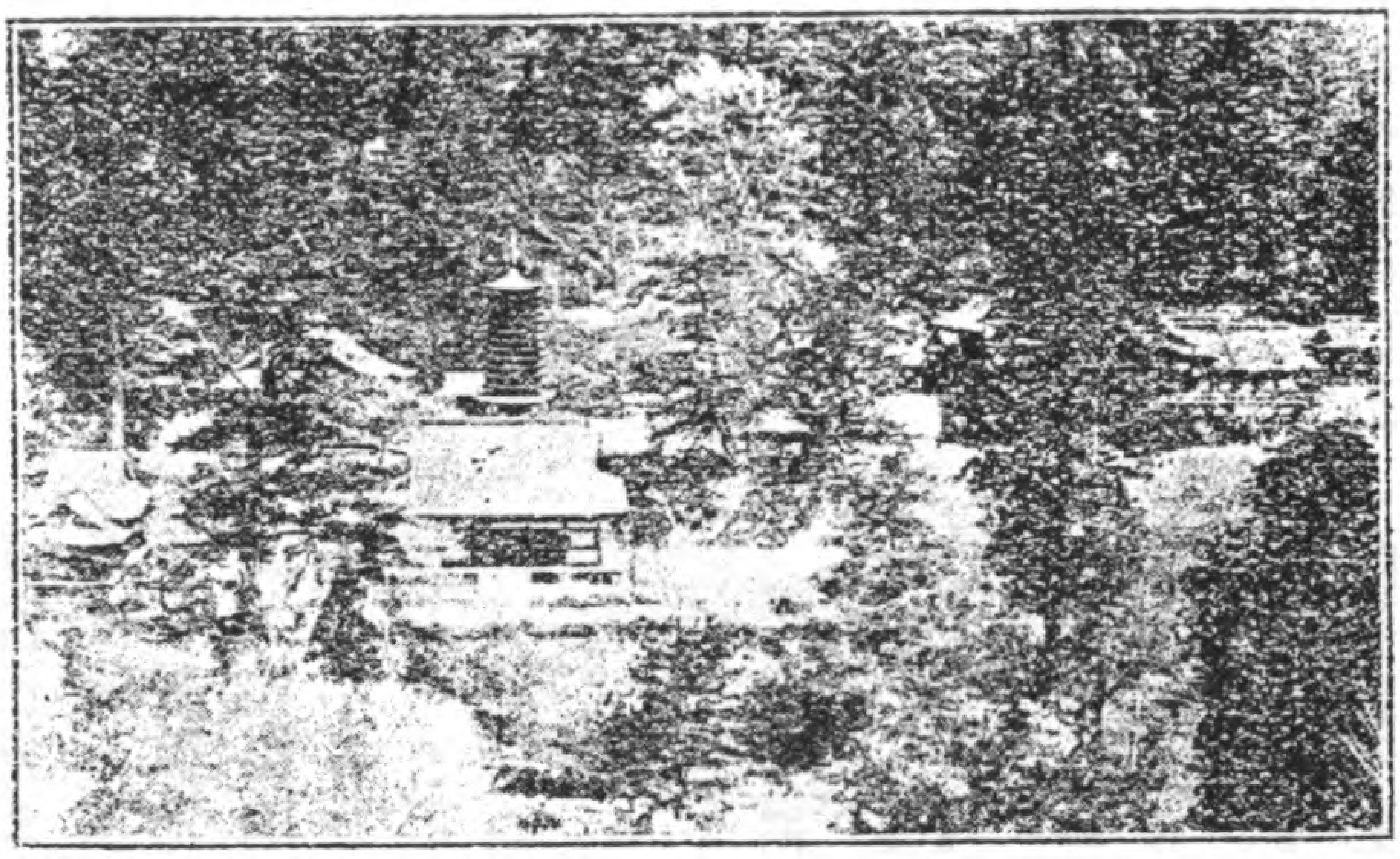
○森の人

下野小山町　新井琴子

人、野を行くに夏の日の、光に耐へて森の中、
つと走せ入りの玉ゆらを、彼はもろくもたほれたり。

「なやめる者よ甦れ」
神、慈悲の御聲と、
天鼓めきし優さ音して、
湧く銀の泉の上や、
聖き小百合が大覺の、
ひじりに似たる姿より、
そともらしたる靈の氣に、
若葉ぞ香るさ緑と。
寂寞に歸る草叢に、
天使眞白の諸羽あげ、
笑むと夢みて旅人は、
百合の雫の冷さに、
醒むれば足は水にあり、
幸ある身よと渇仰の、
涙捧げて杉が根に、
歌かいつけても歸る哉。

想像も豐かに。詩境を拓くことも自在に、獨創の力もあつて、是だけでは止まりますまい、あなたは未だ〳〵上手になるべき資格があるのです、努力なさい(醉者)



大和談山神社（其一）全景

秀逸

○眞清水

尾張　水野華子

噫、美しの眞清水よ
汝が一度あらがねの
地の下より湧かん時
其所には居ます美神あり
せゝらぐ音の潔ぎよく
神も歌はんたゝへつゝ。

噫、尊しの眞清水よ
汝は長へにつきざれな
世の煩ひに堪へぬ時
深山深く別け入りて
汝がたふとき其の面に
我が脣を觸れて見む。

噫、氣高かき眞清水よ
仙女は汝をしたひ來て
紅の裳を地に曳きて
花はこぼるゝみ袖より
玉の御手に受け給ふ
清水よ永久につきざれな。

山の清水の神秘的なるは宜しく大いに歌ふべきものでせう、清水と

接吻、仙女の出現、地下の美神、此篇着想は皆純潔高遠でしたが、少し詩語の按排にはおなれになりません（醉茗）

○露の白玉　　横濱　あづさ

一、朝がすみ　はれにしあとの
はなの上に　のこる白つゆ
いさゝけき　なれの姿や
清らなる　なれが姿や

二、これやこの　わがたちぬれし
松が枝の　雪げのしづく
みくまりの　神の御手もて
けふこゝに　おかれしものか

三、蝶も來て　春のあそびに
つかれたる　翼やすめよ
虹も來て　事わざしげき
世のさがを　しばし忘れよ

四、とことはに　我もむつれむ
時ひさに　われも愛てむと
日がさゝば　やがて消えむか
かくながら　失せずあらなむつゆの白玉

古意あり、新進氣鋭の人には或は、もどかしいやうにも見えませうが、之れ容易に至り難い境で、かみしめて見て味ひがあります（醉茗）

○此の世のむくろ　　小石川　田中住江

やみに永久の光をがねひ
行方はるかにあゆみはすれど
くらきおそれとうれひにみちし
吾が靈いつか夢路の如く
盲目か見えずひゞきも絶えて
今は絶えなむ望のつなの
さぐる手先につめたき腕
はてぬ夢路からつゝの今か
悶えくるしみ暴風の如く
刻々せまる呼吸のひゞき
行け汝が領陰府への道に
あゝ逝くやわれ此の世のむくろ
いづこへ〳〵那落の底に

小なる煩悶のかげ（醉茗）

○光明の花　　石見　人の子

遠きかなみ空と下界、　星の花靜かにかをり、
ほのかにも人を照らせど、　魔神僞り多く、
天地の通路たちて、　光明したふ人の心に、
咲き出でし優しき花を、　あな哀れ凋ましむるよ、
いくさ止みて魔神は去りぬ、　東に今茜さす、
永久の光の面影、　あゝ曙の色を仰げや、
紫の雲に包まれ、　美はしくみ空に匂ふ、
かの高き光明の花も、　人の世に咲きぞ亂れむ、

其花の雫を汲まば、
歡樂は盡くる時なく、
香をたかみ醉ひたる心地
とはの平和は人の心に。

光明は文明を指すか、活動を意味するか、何れにせよ我思想界の光明の花は此から咲くのです(醉茗)

○燕　之崎　坂梨初音

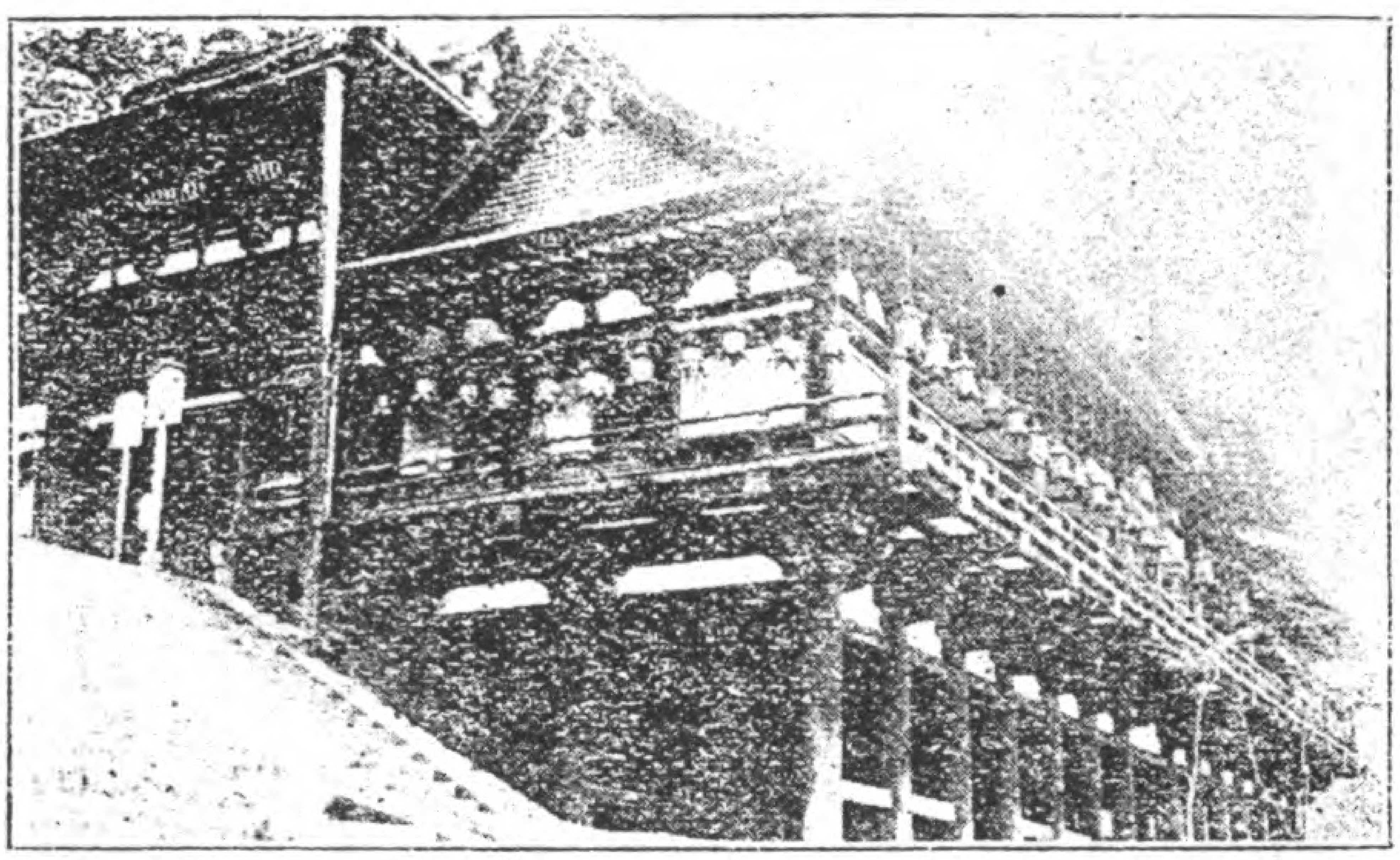
譬へば戀にあこがれて
忍ぶとすれど得堪へざる
若き血汐のそれのごと
紅の匂ひも春雨に
溶けなむ樣の汝はしも
世の奇し人に似たるかな。

古きみ寺の石柱
刻む飛龍に立まぢる
御法の聲も絶へし時
迦藍の屋根をはなれては
曇る國内を淨めむと
さゝやき走る燕。

燕、奇調に入る(醉茗)

○哀歌　能登　池野白百合

丈五寸ばかり、鉢にうへたる薔薇の莟をもちながら咲かでしぼみければ



大和談山神社（其二）本社拜殿千疊敷

榮よほまれ黃金よ、
聖き生命をにへにせし、
うなじをたるゝ其れの如、
あゝ冷やけき人の手に、
恨みはながき若人の、
線香ゆらぐ椽にして、
あらいたいけやはゑもなう、
薔薇よ咲かでしぼみけり、
よし葩はちさくとも、
よし紅はうすくとも、
自然のめぐみはこもらんに、
われからすねて身を殺し、
何とて萎む汝ならん、
とはいへ冷たうつし世は、
あゝみにくきは捨られて、
強者よ永久にさかへ行く、
げに眞紅なる芍藥の、
王者ぶりなる嬌艶を、
いたいけの眼にみてし時、
運命をかこち若き血の
ちひさき胸をいためては、
星の光や仰ぎけん。

○紅つゝじ　金澤　大地波子

夕とぼそにそとよりて、いづれはおなじ身なりとて、
われやそゞろに涙せば、ほのかにゆらぐ風情かな。

誰も思ひ着く處、之だけ歌へれば餘程堪能なのでせう(醉茗)

朝野、夕野の逍遥に
思ひしまゝを歌にして
集めてなりし小詩集、
もとより小さき才なれば
他人に見すべきものならず
さりとて筐の底深く
秘めむは惜しき此詩集、
我は思ひに得あまりて
或夜密かに野の石の
冷たき蔭に埋めたり。
かくて幾年春毎に
日は麗かに野を繞り
小鳥は歌ふ此頃を
もとこれ地に秘めたりし
我の情思は燃え出てゝ
花と咲きしか紅つゝじ。

題詞は韻致の乏しい花ですが、斯く見ると亦多少の風韻が添ひます
(醉茗)

○蛙蟲　小樽　岩谷綠子

細雨蕭々窓にかなし、
瓶中の梨花音なく散る、
默思に耽ける机ちかく、
静にきたる蛙むしは、
容貌みにくゝ色黑くて、
かの鶯の艶言葉も、
蝶の彩羽も具へざれど、
沈默を守る聖人のごと、
たゞ何となく慕しくて
梨の花瓣にかれをのせて
雨の窓よりいだしやれば
何とも云はで闇にうせぬ。

(註蛙蟲は春になれば濕氣のある所に生ずる少さき蟲にして形は蛙に似たり多く我地方に生ずるやうなり)
田舍人の對話を聞くやうで、素樸の底に味ひが深いのです(醉茗)

○薊草　滋賀　龍井ふみ子

妙香薫る天苑に、
紅よ白よと榮えしが、
神の御詔をかしこみて、
地界に下りける薊草。
花凋落の夏の野に、
神の御詔をたがはじと、
宿世の色をそのまゝに、
紅白共に咲き出でぬ。
穢れ多かる人の子は、
緋桃海棠花すみれ、
媚ある者を美しと、
めづるを知れど、淺間しや、
姿醜なる薊をば、
鬼薊よと名を呼びて、
さては手をな觸るなとて、
深かき啓示を知る者ぞなき。

初めから敎へてかゝらう、論じてかゝらうとするから、存外、詩語は自由でも詩は活きないのです、「淺間しや」とか「啓示を知る者ぞなき」とかは説明であつて、歌ではありません、あなたは、詩語の豐富な方と見ました、幸ひに大體の方向をあやまりなさいますな
(醉茗)

○夕べの沼　佐世保　きわ女

黑ずむ森に奇し鳥の
凄き羽ばたき絶え〴〵て
枯蘆しげる廣沼に
夕べの光うすれ行く
摑みて投げし綿の如
金泥の雲きれ〴〵て
落ち行く西の御岳より
吹き來る風よ弔の韻

魔のもの棲むと荒男だに
銹びし葉ずれの音高く

菱の實積みて若人の
棹さしかへる丸木舟
花藻漂ふ沼なれば
肉よき腕もなえたりな

五百重にこめし薄靄の
南の岸に闇をなし
闇濃き中に愛妻の
招く火影の淡ふして

湖でなく、池でなく、河でなく、全く沼らしい情景が出て居ます(解者)

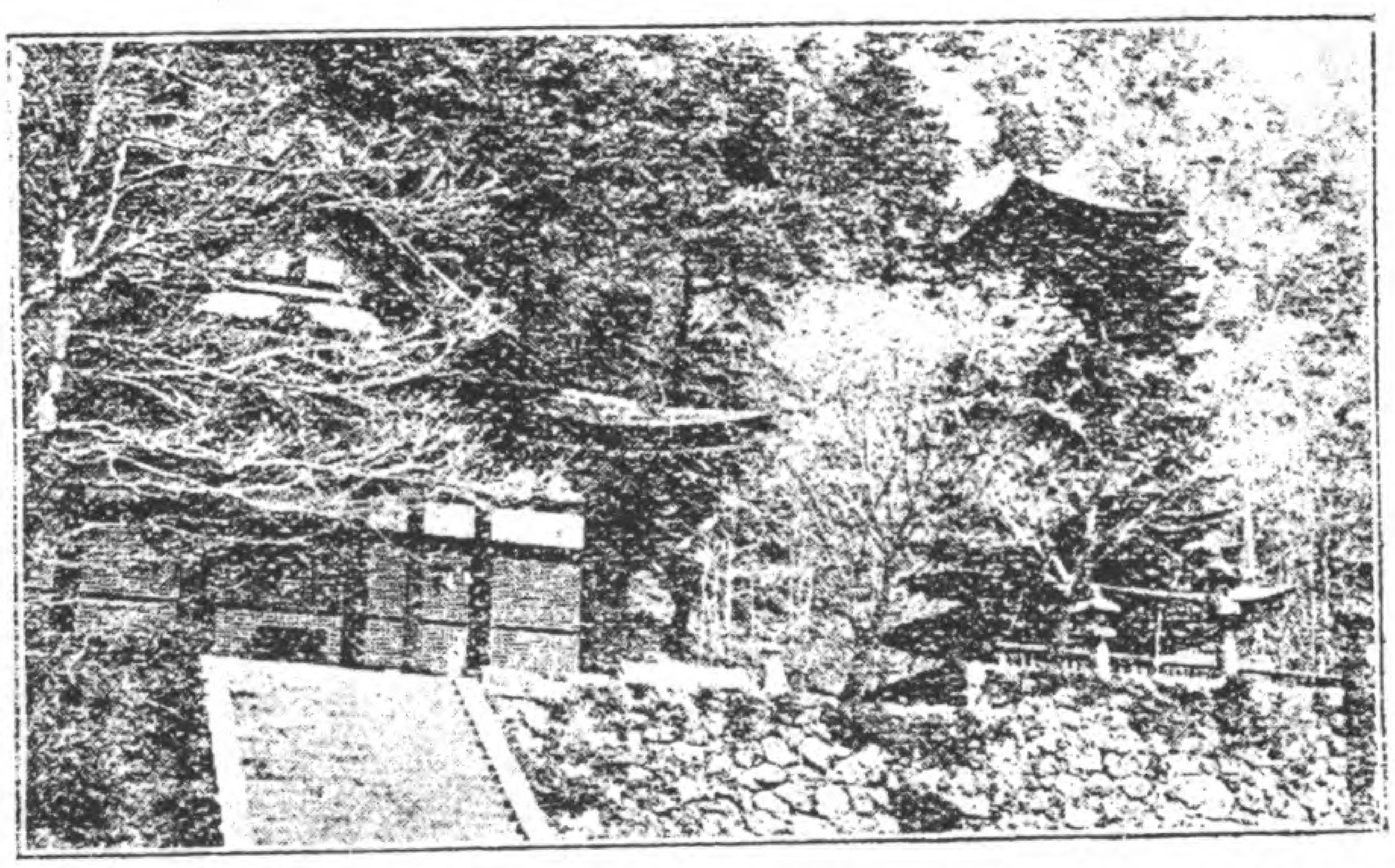
○富士が峯に立ちて

高尾　金子楓陰女

天飈颯々たるところ
奇しかる冷氣身にしみて、
心たちまち白雪の
吾が身は今ぞ立てるなり
さてもあたりに漂へる

恐れの額を垂れたるを
冷たき水の分れ來る

清うつもれる富士が峯に、
あゝ高いかな富士の山。
峯守るごとき白雲は、



大和談山神社　（其三）　若宮社

神心地とはなれりとも
萬づの神や集ひ居て

雲に對して新しい感じが動いて居ます(解者)

○星の夜の思ひ

四谷　しらぎく

こひのしらはの征矢うけし、
胸を抱きておばしまに、
月なき夜半の空見れば、
ゆめとながるゝ天の川。
またゝきあはきかず／＼の、
星のゑまひも美しや、
我はおもひぬこの時に、
いつはり多き人のよの。
人のこゝろになかんより、
うるはし星と身をかへて
はしきみそらのこひの香に、
ゑひなばいかにたのしきと。

多情の君なるかな(解者)

○農家に嫁ぐとて

佐賀　久原秋紅子

のぞみのぞみし二十歳の
青葉の今宵血に啼ける

神ならぬ身の分かねども、
そが乘りすてしならむ。

甘き理想を地にすてゝ
杜鵑と同じ身となりぬ

浮世のさだめつらしとや　破産の我家思ひなば
破れし農家に嫁入るも　あへて我身をなげかねど
昨日昔のともどちは　華族の人にとつぎぬと
隣りの人のうはさ聞く　我身は碎くる思ひするかな

或は之れ我情かも知れません（醉茗）

○夕の思ひ

兵庫　柳田白百合子

愛の女神の化身なる、　清き尊き御姿に
あやかれませと白百合の、　御名たまわりし詩人の
其の君今や何處にか、　高き理想にあこがれて
ちりの都に上ります、　其の行末や幸あれと
涙そゝぎて別れつる、　そも早や四とせなりぬれど
ふたゝびあはんよしもなき、　人を離れし山蔭の
百合の花さく孤家に、　君を忍びて悶えては
たゞ其のかみの思出に、　なく少女ありと君知るや
あゝ流轉の世の樣よ、　今夕闇のせまりくる
白百合のそのにイみて、　四とせ昔を忍ぶれば
忍ぶにあまる煩悶の、　夕淋しくひろごる鐘に
そと白百合のくづれては、　氣も狂ほしうなやましう
湧きくる恨みむねにみち、　悲愁の涙ほどばしる

熱烈なる情緒、白百合の白いのは却つて胸に悲愁を包んで居るからでせう（醉茗）

○戀の春

備中　佐藤郁子

和き女神の美しき　春の錦を織りなせる
長閑けき梭の歌拍子
三羽の蝶のあくがれや。　山路田甫路さすらひて
紫雲英の野邊に休らえば　赤き胡蝶のゆかしみに
赤と赤との戀ぞなる。
菜種盛りの川沿路、　迎ふや花のよき笑に
黃蝶胸のあたゝかう、　黃と黃との戀ぞなる。
そよ吹く風に白蝶は、　渡るや丘の梨林
こゝにも色のとけあひて、　白と白との戀ぞなる。
げに愛らしき子の戀は、　吾世にふさふ春の畫。
女神の歌は天と地　殘るくまなくひゞき行く。

想像のゆたかな、又奇拔なところは確かに詩骨を具へたもの（醉茗）

○筑紫潟

筑前　飄子

ほがら／＼と紫に　山よりあくる筑紫潟
朝は漁村に訪れぬ。
遠き／＼太虛には　曉星二つ五つ四つ
名殘惜しげに輝きつ。
榮美しき七色の、　さ霧の中に舟人は

朝の光をたゝえたり。
希望ある朝よ筑紫潟
熟眠の領を出でにけり。

悠揚として詩情は千波萬波の湧き來るやうです（醉茗）

○白ばら　越前　武田かほる子

君におくらむ賤がやの、
庭の面に咲き出でゝ、
匂ひも高くいと淸き、
露あたらしの白うばら、
よしや拙き手植ゑとも、
束ねし花は少くとも、
ふかき思ひはわだつみの、
そこひも知れずこもるなり
ゆかしき君が文机に、
かほらせたまへ萎むまで。

○一ッ葉の濱　宮崎縣　日高春子

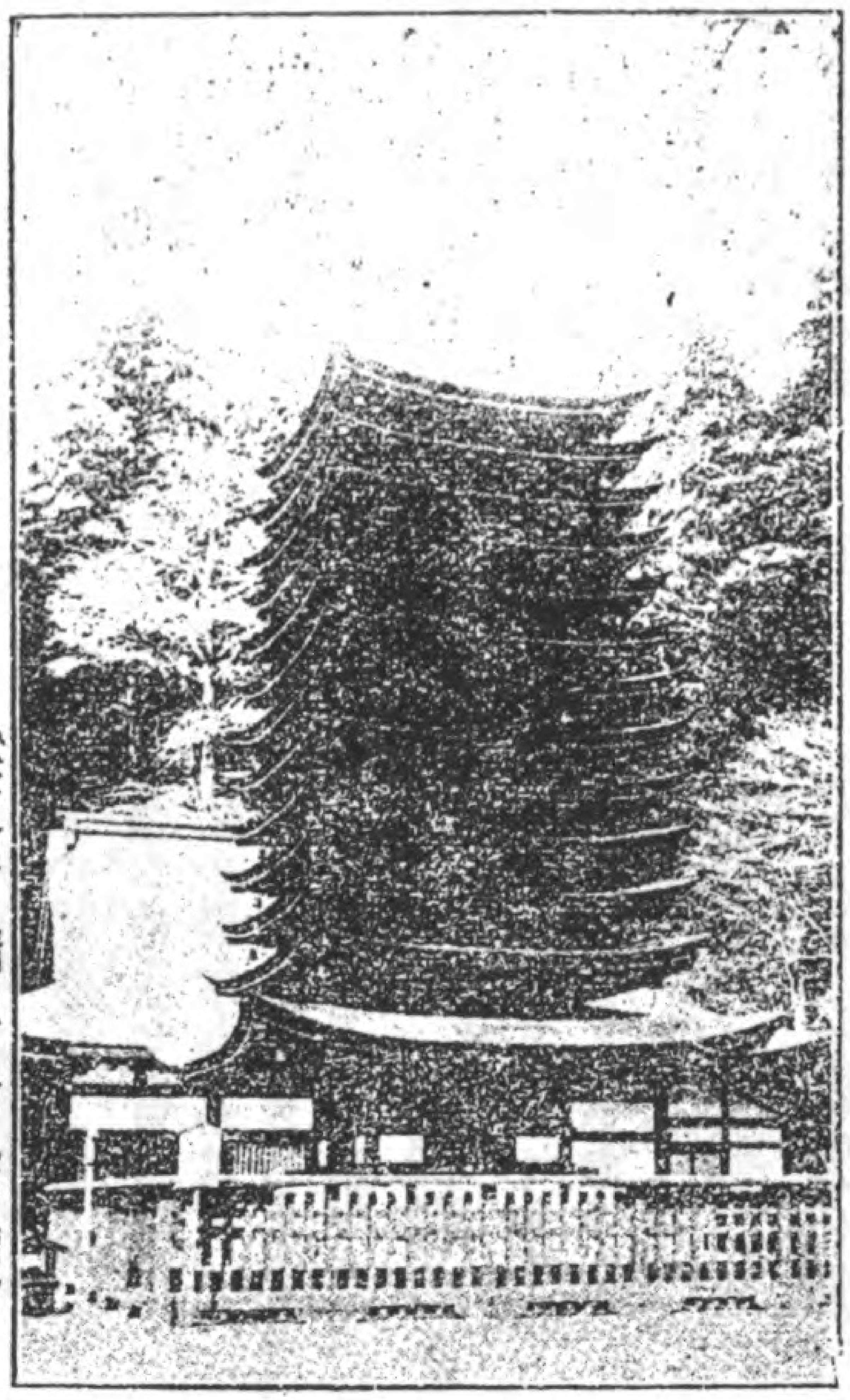
遠くかすめる太平洋、
眼下にさわぐ日向灘
大波小波打よせて、
こがれの光うつろひて
大波きては海の底に、
海の底をば我世とぞ、
何のものかはやす／＼と、

○川蟬

人よろこびにたのしみに

鈍色月の影搖れて、
黃金の征矢の數絶えし、
汝が行末の河隈は、

飛び行く汝の戀しくて、
細葉に寒き夕ざれの、



大和談山神社（其四）十三重塔
（奈良　清子君寄贈）

其まなざしに露やどす、

○楠公祭の日に

神の御手を、
うらぶれ少女、

遠き／＼、
忍ぶ產土の、

波はくだけてさけてちる
色はいてけり七色の
又くる波に浮き出でゞ
つかるゝ色なき舟子らの、
海の底ひをくゞり行く

岩代　伊藤よし子

遥に殘る細雲の、
森はすゞしにかき暮れて、
裾紫に暮れにけり。

彼方を指して徜徉へば、
水ぎはに戰ぐ音も哀れ。

端居に寄りて憧憬の、
想ひに袖を沾しける、
乙女心のしかすがに、
煩ひなやむ夕暮を、
闇の林に木魂して、
運命つれなの汝の果て。

○舞姬　深川　勝山千代子

銀燭はゆき五十疊、
玉の盃めぐりては、
唄もおもしろ舞姬が、
かざす扇も美しや。

胡蝶の如く舞ふ姬の、
しばし火影にそむく時、
とはしるべしや興に入る人。

神戶　しげ子

離れたる、
こゝにさすらふ。

塵のちまたに
夏の祭のその賑ひ。

希望に輝く顔や、あふげば姿潔きかな、
春の名殘や、葉櫻の、梢に、春姫の衣ながし、
涼しき風に衣ちれば、奇し香みだれて、今日くれぬ、
あした、男神の生命なる、濃みどり深きたゞ中に、
よべのかほりや地にしみし、靈、ある花の化粧しぬ。

○黒髪

伊勢　佐藤しづま

天の使人、伶人と稱讃へてやまぬ雲雀の
自然の歌のいみじさに文雲四を彩りて
神秘をもらす靈光や平和天地にみなぎりて。

長し我の懇願の今宵かなふと薔薇の頬に
無限の笑を宿しつゝ冷き鐵の扉によれば
紫紺流るゝ黒髪や乙女は落ちぬ罪の子と。

○緑陰

近江　小枝女

緑滴る袖をもて、惱む人の子庇ひつゝ、
憍りの浮華の色もなく、蒼空と契る老樫。
心憎しやその下に、永劫の眠りを安らけく、
貪るは誰ぞ、碑は、青苔むして文もなし。
あゝ世を厭ひ身を悶え、何をか憂しと嘆ちけん、
梢を仰ぎ幹を撫て、樹陰の風の涼しきに。

○曙海上

長野　飯塚ぎん子

銀波たゞよふ東の、水平線上紅一點、
彩なす霞につゝまれて、今旭光はもれそめぬ。
たゞ水青く天に接して、ながめ果てなき海の面、
空より投げし金の矢の、波間みだれて花とちる。
寄せては返し岸をうつ、怒濤ゆた〳〵夜はあけて、
靄たちこむる島かげも、刻一刻にあらはれぬ。
浮びていでぬ日の神の、光まばゆく眼射て、
紅血ながすそらのはて、きけ欸乃のきこゆるを。

○夏の花

京都　花翠女史

春興つきて、春姫さりぬ夏の男神は、離りましぬ、

○姉上の結婚

八王子　熊澤美代子

わが花むこは紅の、かほばせいとゞうるはしく、
眼は光り輝やきて、晨の星にまごうめり、
わが花嫁は白百合の、白き衣をうちまとひ、
その黒髪の露ふかく、黄菊の花をかざしたり、
誰かめでたき言の葉に、神の力は添ふとも、
契の酒をくみかはす、二人のさまを喩ふべき、
いかにいかなるたくみもて、畫ふてに色はうつすとも、
世もあせやすき彩をもて、二人のさまを畫くべき。

○君病めり

牛込　松野操子

君が病めりと聞くからに千々におもひはみだるれど
ともに思ひは君なるを消えんとしては又殘る
暗きともしびかゝげつゝ君が玉章取り出でゝ
思ひにあまる涙哉

○夏の風

陸中　白羊

若草茂る野の宮の朽木のかげに身をよせて
春の行方を眺むれば。
鋤返へしたる小田原の小畔のどかにかぎろひて
灰かにわたる風凉し。
白露のこる遥山のみどりは漸く霧ひきて

空の光ぞあらたなる。

花の香きえし畑つゞき　のびし麥生になにとめて、
春におくるゝ蝶一つ。

遠白雲に身をなせば　羽蟻むれとぶ椽の先
風そと絕えて日は永し。

○神の慰藉　羽前　董子

薔薇の花の紅も小さき胡蝶の瞳孔には、
翼の色も映つりしが露の香りは散りにけり。
曉の夢の名殘を雲に見てしより、
神は慰藉の平和を夕の露に敎へけむ。
美しき露の其陰に、
諸々の虫の命に幸のあるべく。

○燕　山形　渡部宮子

栞もかなるはるさめの　ふるやの軒のつばくらめ
しをれぬこぞのふる聲に、　さへずり交すれを聞けば
「泣きわぶる子の慰めに　花や見せてん鳥もやと
春をたづねてまよふなる、　心の闇もあるものを、
ひかりみちたる久方の、　のどけき空に打むれて
うき秋しらぬわが身ぞと、　世の人皆や思ふらむ。」

○蜀魂　大阪　赤松牽牛子

胸の血しほの、枯れはてゝ　焦れ死にしか、ほとゝぎす
啼かずになりし、昨日今日　いよゝ淋びしき、わが思ひ。
花散るころを、このいほに、　うらぶれの身を、よせてより
侘居(わびゐ)の日ごと、夜ごとをば、　泣いたる友の、不如歸(ほとゝぎす)。
泣くも甲斐なき、憂愁(うれひ)とや、　今か悟りて、音や秘めし
されど憂き胸、抱くからは、　淚は永久に、盡きざらん。

○夢　澁谷白衣生

晴間だに無き五月雨に　文の溫習も倦みはてゝ
堪えぬ思に沈みつゝ　座りし儘にいつしかに
つひ熟眠みぬ文の上に　折しも怪し亡き母の
昔の姿ありくと　妾が手をとりてやよ娘
學の業をいそしみて　殘り給ひし父(ちゝ)君の
み心安め給ひてよ　只それのみが吾思ひと
戒め給ふ御聲に　呼び起されて嬉さに
あゝ懷かしの母上よ　夢なら覺めな永久に
妾も勵まん之よりは　み心安くましませと
み袖にすがり母上と　叫びし聲に目覺れば
あゝ情なや夢なりし　只一瞬の夢なりし
呼べど叫べど母君は　消えてあとなく文の上に
殘るは己が淚のみ。

○行く春　長崎　神近以知子

すぎ行く春の淋しさを、何とおしまん身なる可き、
語はなくて空しくも、あゝ我が情緒みだるかな。
栞のゆめの消へ失せて、春や逝くらん藤波の、
盛りと見しもうたかたの、ゆくえも知らず散り失せぬ、
悲しからずやうら若き、少女の胸に崩え出てゝ、
胸に枯れにし思草、あはれとも見ん人もなし。

文學士 沼波瓊音先生選



特別第二賞

○晝寢番

名古屋市泥江町二ノ七　小山かく子

自分はがらり明放した二階の六疊の片隅に日本晴れの青空を斜に見て三布薄團を二つに折つて白い上曳きをかけた上に心地よく眠つてゐる嬰兒を見守つてゐた柔かな薄赤い髮が房の樣にばらッと垂れて小さい枕を飾つてゐる古い形容詞てはあるが紅葉の樣な手を、開きかけた蕨の樣に緩く握つたまゝ投げ出して……。南向きの窓から涼しい風が吹いて子供の頰に止つた蠅が逃げると無邪氣な寢顏がびくり動いて右の手を持ち擧げた、おや眼を醒すのだなと輕く背中を叩いてやるとにこり笑つて又すや〳〵と眠る鼻の上に霧を吹いた樣な汗をにじませて……何たる可愛い顏だらう?。折から無遠慮に馬を飛ばせて通る人があつたので起きはせぬかと氣遣へば口をもぐ〳〵させる、お乳を吞む夢でも見たのだらうか。どこの小僧か金切り聲で喇叭節を歌つて行く、床の掛物は風にゆられてがたり。眉をびく〳〵させて足を動かした蚤でもついたのだらうかと靜に裾の方をまくつて見ると糠の樣に小さい羽のある虫が一匹疊のへりをのそり〳〵這つてゐる、ちよいと觸つたら潰れたので飛んだ殺生をしたなと思ひ乍らハンケチてそつと鼻の汗を拭うてやる。じつと自分は顏をしかめ乍ら立つて梯子段の所まで行つてうつ向きになつて……『赤ちやんが起るから靜に!……』下の坐敷で弟が唱歌を歌ひ出した。蠅を追ひ乍ら今日來た雜誌を手に取つて自分も並んで足を伸して又つく〴〵と寢顏を眺めた『あゝも一度こんな天使の樣な顏になりたい……』と。頭の上の時計はちん〳〵と四つ……。忽ち小さい可愛い二つの眼がぱつちり……。

(評) よくこんなに細かく多趣味に書けたものです、末段の再び赤子になりたいといふ希望は古いものだがこの文ては活きて居ます。

特別第三賞

○埋れ井

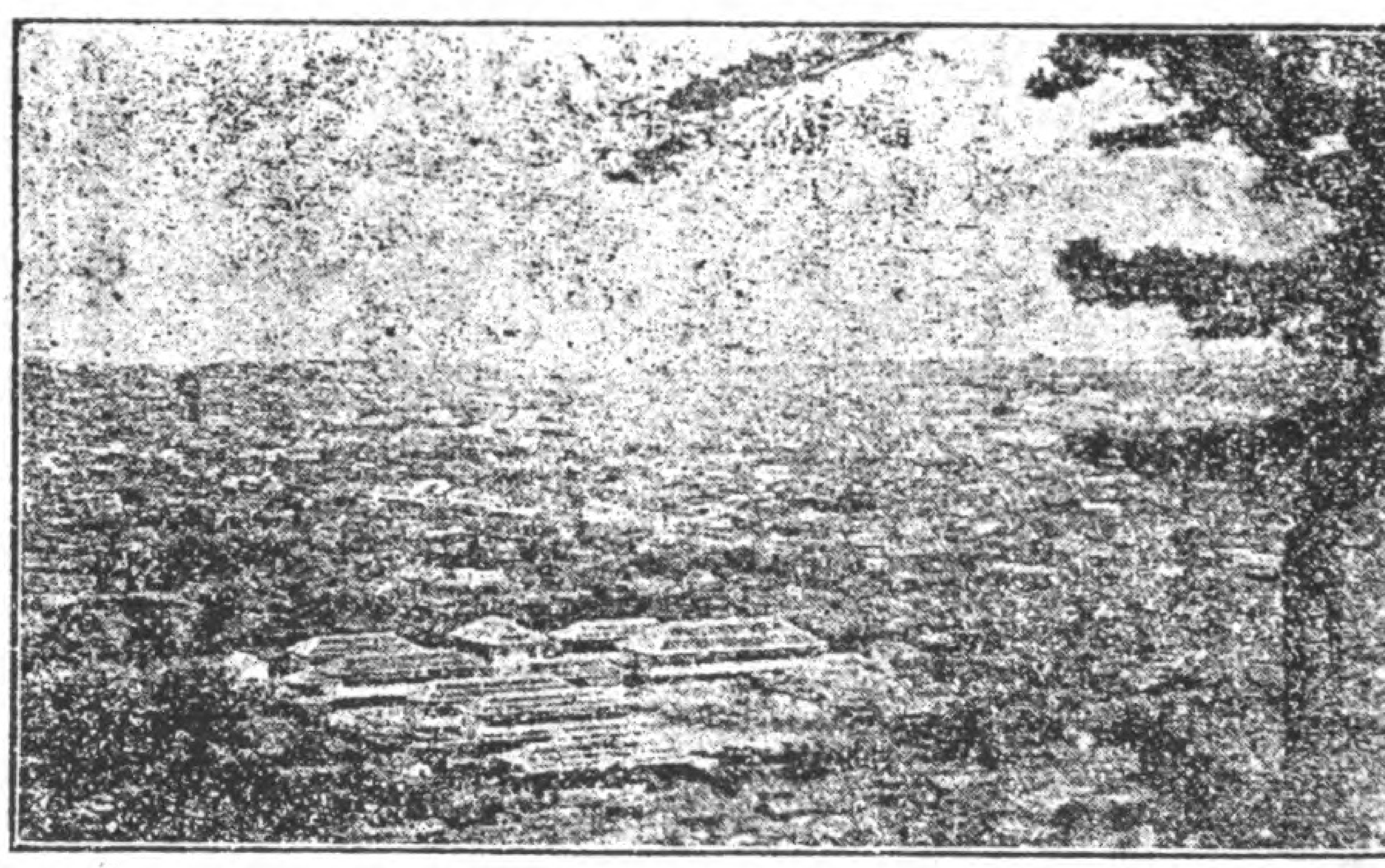
三河國豐橋町鍛冶町五五増吉方　房枝子

鎌倉在の、某尼寺の離座敷に臥して居ると心着いたのは、目覺めてやゝしばらくしてからの事てあつた。

枕元の有明はいつか消えて居るので、座敷の内は眞暗である。一躰、もう何時頃であらうか、時計は素より、鷄も鳴かないので、宵やら、夜半やら、曉やら更に分らない。じつと庭に面した方を見つめて居ると、漆のやうな暗も少し薄れて來る、雨戸の隙間が見え、障子の紙も其處のみほんのりと白い。早夜が明けるのかしら、それとも月が出たのか、或ひは星の光が軒端の卯花に映るのであらうか。

と思ふと、ぽつり、ぽつりと雨の洩るやうな音が聞えて來た、降り出したのかしら、夕方此寺へ着いた時は、雲も晴れて居り、西風で夕燒も燃ゆるばかり美しかつたのに……。

海には遠い處なので、波の音も枕に通はず、四邊は闃として殆ど太古の如くで、靜かな夜の風に、前庭の植込の若葉がさら／＼と戰ぐのまではつきりと聞えるが、雨の濺ぐ音はなく、霽れ際かと思へば、雫のこぼるゝ響もない。



壇之浦

併し波の音は猶止まず、何となく沈んで悲しさうで、其れが恰も幽かに洩らす泣聲か何ぞのやうに、妙に胸の底まで響くのであつた。

後は直ちに山であるから、清水でも湧いて落つるのかとも考へたが、何うも後の方ではない、筧でも渡してあるのかと思ふと、然うでもないらしい。たとひ此音が何であらうと、かまはないのであるから、早く眠らうと思つたが、目は不思議に冴えて、とても夢は結ばれないのである。

一躰何處から響くのか、と耳を澄して聞くと、何うやら横手の方らしい、と思ふと、急に肌寒くなつた。

はなれの横の庭續き、何を祀つたやら古祠のある傍に、幾百歳經たとも知れぬ高野杉幹が朽ちて大きな洞が出來て居る、其下に、埋れた古い井がある。青芝や蔓草に半を蔽はれた、石の井桁は、苔碧く寂び、落葉の朽ちたのが深く敷かれて、人の來た痕も見えず、折々逢魔が時の薄き光に、何とはなしに恐ろしく、且つ哀れに覺えたのであつた。

以前は此邊に、某の城があつたとやら、其家亡びて、此地邊に尼寺の有となつたといふ。されば、はなれに近い要なき井は、其殿の榮えし頃、用ゐて居たものであらう。

誰汲む人もないけれど、山を後に、樹の蔭深く、猶涸れ果てず、晝も星影映らむばかり、水は冷冽として、水晶を溶いたやうなものであらう。

此井に車の響きし頃よ、今妾が臥して居る邊の館には、大殿のおもひものか何ぞ、未だ二十にも足らぬ位ゐの、あてやかなのが、汲ましては化粧の水としたらう、其雪の顔に、心にもなき笑を作つては、殿の心を迷はし、愜ひがたき人を思ふては、漫ろに井の底の懷かしく、義理の絆に苦んだのであらう。

殿の寵ある中小姓、ゆかりの色の袖長く、前髮の美しきが、庭に咲く芍藥の花ならず、大奥の艶なる人を戀ひ、胸に炎を燃しては、此井桁に取縋り、映る姿を眤と見て、いつそ沈んで水となり、せめては其人の膚に觸れたい、と若き血潮を躍らしたのであらう。

互に戀ふる胸の中、嬉しくも通じたるに、忽ち現れて二人は……あゝ。

胸に、咽喉に、きら／＼と二振の太刀、紅き血、黒き血、冷く燃えて刄を傳うた、其れが乾かで滴るのか怨めしさうに、ぽつり、ぽつり、と雫の音。

何かは知らず、此時二つ絡んで、高野杉の梢に迷ふやうな氣はひがすると、蝙蝠であらう、ばつと飛んで、あとはごうと風の音。

妾は全身水を浴びた心地。

時に、遠くで一番鷄が鳴いた、妙に人懷かしくなつて、寂しさ、恐ろしさに目も合はず、ひたぶる夜の明けるのを待ち佗ぶるのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

朝餉の時に尼から聞いた、仔細は知らず、祟があるといふので、今も取壞さぬあの井をば、誰とはなしに不淨の井と呼ぶさうな。妾は次の夜からはなれには寢ぬ事にした。

（評）尼の答は單に「不淨」の二字のみにて、つひに想像の當否を確むる能はざるところ嬉し、首段の茫たる趣大に嬉し。

天

○湖畔の廢寺

神奈川縣鶴見五四一　芳子

道はうねり／＼てとある大きやかなる池のほとりにと出でぬ、立ちて來し方をかへり見すれば象なき魔の手に引かるゝがごと、怪しうも憧がれ出で來し我にも有るかな。吾住む里は彼方に遠く霞たなびく底に打煙

りて、木立あらはの産土神森、眠るかとばかり淡げなり、黄金玉しく菜の花畑、少し隔たりて鶴見川霞のうちに一すぢ白きが見ゆ、おいらかに美はしき稚子の夢を包めるに似たる春の空、にほやかの春の日や。

高しと云ふにあらず、さはれ山なり、山の中腹や〻展けたる所、斯て我イずめる所より、覺束なげの一筋道は、道の右左りより繁り生へる蔓草のそれのごと、細う長う蜒々と此山中の池をめぐれり、見よ千年の山の湖、太古の皺をた〻めるに似たる波の面にも濃緑なせる水の色にも、神秘の影のいかに深きことよ、劫初に得たる姿をこ〻に幾春秋、花は咲けど散れど人は逝けど、久遠に常久に千古の影を湛ふる山の湖。

こ〻ら落葉かく里人の影もなく、物音もなし、樹々の翠色水に落ちていとよし、靜かに池に添うて猶も行きぬ、一堂あり甍やれ軒朽ちて人住むとしもおぼえず、永劫開かれまじう閉されたる扉の奥にすだまや住めるおどろ〳〵繁りたる雜草椽に上りて、探らんに足踏み入れんやうもなし、弘誓寺と記されたる扁額虫ばみてすさまじき荒れやうや、惜しもそのかみ衆生濟度の梵唄湖を渡りては、里人が渇仰も淺からざりしと聞くを、末法の世名も絶えて住む人もなし、そも天の爲か人の爲か、知らず只湖畔に立ちて一人さびしらの思ひ深きのみ。

一鳥啼かず影動かず、何物か凄慘の氣身に迫りくるやう覺えて、そのゝく樣にたじろぎぬ、か〻る折に人ぞ懷かしき、しばし面影胸によばんと眼ふたぎぬ、さはれ人の遠きをいかにせむや、たゞ此寂びしさを破れ、得堪へじな我は。

（評）文辭を以てこの境を寫す幽趣人を魅するの力あり。

（地）

〇日記

靜岡　福井道子

五月二十日（晴天）朝は草刈り、晝は茶の木鋏む手傳ひをなす、今日は第三の日曜日、報德會の宿が宅に當つて居るので、午後三時には皆樣が入らつしやるで座敷を片付け、茶菓子に澤庵を出さねばならぬので氣をもんで仕度をする、皆々樣おいでになり薄暗くなつて閉會、お母樣と妾は夕飲の仕度にまた忙がし。

二十一日（曇天）御父樣と兄樣と妾と三人して田甫で、御父樣は畦を切る、妾は畦の草を刈る、跡から兄樣がうねきりをする、すると跡の兄樣が妙な聲で畦へ馳け出したので、何かと思うて見ると大きな鰻を兩手に掴

んで居たのです、暫くすると又大きな聲で驅け出したので、何かと見ると今度は强大い蟹め、兩の鋏を兩手で持つて出たのでした、御父樣が「うまくやつたなあ」と笑ふと三人一度に大笑ひ、互ひに顔をお平にした。

二十二日(半曇)大麥刈り、晩は草刈り、薄暗くなつて家に歸ると幼妹が矢鱈に喜んで居るので、何だらうと家に這入て見ると、御父樣は大きな鰹を料理してゐらつしやる、お母樣が今日の晩掛川へ買物に行き、あまり安かつたので買うて來ましたつて。

五月は西から汽車へ積んで來る鰹が掛川へ大分下るので田舍でもこんな事は度々あります。

（評）　形式も内容もいかにも素朴にて些の飾り氣なしよき田舍の日記文といふべし。

（又曰）　この孃は意をまげて文字を飾るの卑むべき虚僞なることをよく知れり。

（入）

○日記の一節

岐阜　露子女史

六日　水曜日

朝曇る、洋傘を用意して登校、午後細雨、樫社の山邊にて杜鵑の聲を聞く。

書齋に入ればえならぬ香鼻をつく、と見れば二鉢の薔薇机上にあり一鉢は白、一鉢は薄紅なるが露を含めるえもいはぬ姿、叔父樣の許より惠まると妹語る。

四日市の千代子さんより來翰、頃日旅行云々、の事にて上級生のストライキありしとかや。

夕飯は洋食、久しぶりにて味ひし。

夜英語の下讀みす、明日のリーデングはわが番にあたりさうなれば眠さを耐らへて十時迄。

七日　木曜日

夜ひと夜降り明かして今朝は霽れたる庭の景色えもいはず美しければ庭石に腰かけて一枚の寫生畫を作る、午前七時急ぎ足にて登校、前週の作文かへる、今度こそは甲！、甲なるは高野さんと妾と二人のみ。

歸途美園町に立ち寄る、姉上嬰兒を抱いて乳飲ませながら話し玉ふ、これがこの正月一所に歌骨牌とりて手をひつかき合ひしその人かと不思議に思ひぬ、兄上の鬚もよほど濃くなりたり。

夜は中學の兄樣に不審を質し妹の溫習を見てやる。

八日　金曜日

朝晴れたり、登校の途に春山さん（商業學校の弟の舊友）に過ふ前垂掛けの商人風なり、此頃は主人の信用を得て夜學にまで通ふことを許されたりとの事、人ごとながら嬉し。

午後空曇る、跣足にて庭を掃除す、躑躅の花びらの二三輪青芝の上に落ちたるはわざと其儘そつとして置く、母上は「なぜ掃かぬ」と咎め、祖母上は「骨をしみだ」といひ給ふ、父上は默つてほゝゑまる、父上はわが知己なり。

夜兄は友の宅へ、妹は風引きたりとて寢ぬ。

ひとり雜誌、女學世界、を讀む、懸賞文を募る、試に投書して見んとて「希望」の文を作る、書き終へたるは十時半。

九日　土曜日

晴、新聞おそし待つと二十分、遂に見ずして學校に行く、萩山先生の慶事を聞く、歸つて聞けば新聞配達の小僧自轉車と衝突して大怪我したりとの話、氣の毒なり。

父上めづらしく在宅、午飯を一所に食ふ、うれしくてうまし、お菜は鯛のフライ。

二時半頃文子さん來る、天氣よければともに散歩す、途にてK、H、の君にあひ三人つれだちて權現山に登る、見渡すかぎり綠の野邊、色褪せたる國旗の飜れるは鎭守の杜とぞ見えし、山を下りて歸途につけば遠寺の鐘、入相を告げわたる。

夜、書翰三通を認む、一通は四日市の千代子さんへ、一通は名古屋の齡子さんへ、又一通は葉書にて東都の龜山はな子さんへ。

（評）さらさらとしたる中に深き趣あり日記文はかくてあらまほし。



川中島

秀逸

○うしろ影　宮城　まつゑ

今しも十五夜のさやけき月は漸く山の端を離れた。明日の學課の下調べを終へた私は、此淸き月の夜に散歩せぬのも惜しい氣がしたので一人下宿の一室を出てぶらぶら歩みをはこんだ、田舍の事とて家と云ふとちらほらと此所に一軒彼所に二軒と云ふ有樣なので、表へ出るとしーんとして蛙の聲のみかしましい、下宿屋の裏手の方は天神社である、私は遂に其前まで來かゝつた、今やまるい

まるいお月樣がずーと高くのぼつた、私はつと立ちどまつてずつと月を見つめた、心もすみ渡ると故郷の事や自分の今の身の上、さては未來の事など思ひ浮べて又歩をうつすと、ピシャ〳〵と小さい拍手の音が響いた、私は思はず立ち止まつて、そつと耳をすました、すると又しても拍手、子供だ〳〵子供の手にちがひない、子供が夜、天神祉に參詣するとは何か大なる目的があるのか‥‥と思ふと、すぐ此處を立ち去りやらず、否足はかへつてお宮の内に入るのである『アッ私馬鹿な、如何に子供でも人の秘密をさぐらうとして』私は十歩ばかり元來た道へ返した。すると足は又自ら進む、又退く、又進んで此度はお宮の傍へ。中の聲は手にとる樣。『何卒神樣、何卒今年は及第します樣に、一生懸命勉强しますから、何卒お願ひ申します』及第々々何だらう‥‥『もし落第なんかしますと父樣も母樣も家には置かないから乞食にでもなれつて云つてますし。』待て〳〵たしか聞き覺えのある聲。『ですから何卒今年は落第しない樣に、一生懸命勉强しますから。大きくなつたらきつと御恩返しを致します、それから松竹梅と紙に書いたのを持つて來ましたから字も上手になつて男子さんの樣に先生にほめられます樣に』オ、其れよ、彼娘に違ひない、オ、我受持、尋常四年の女生徒に違ひない。『あまり永く居まして人に見つけられると大變ですから御暇申します、何卒々々之からは勉强しますから高等科に上られます樣に。それでは天神樣左樣なら』三四度拍手して出て來る樣子、私は音せぬ樣に大木の陰に隱れた。誰も聞く人なしと思ふ彼は敢へて月の光を眞面に受けても恥ぢぬ樣子、再三再四御辭儀してお鳥居をくゞると飛ぶ樣に走せた、後見送つて私はホッとばかり、ア、罪な事した、彼の先生なる私がよもや陰で秘密を聞いて居たとは夢にも思ふまいに、ア、恕して下さいね‥‥オ、可憐の子、彼は私の受持の尋常四年生で級でも最劣等生なのである、然し少女よ、決して心配するな今年はきつと落第しないであらう、第二學期の試驗ではとても駄目だと思うた、それで嚴かに云ひ聞かせた事がある、父母にも薄薄話した、ところが此頃は大變進んで來た、決して今の決心でやつて往けば落第はしない可愛さうに僅か十一歳の少女が夜一人神社に來て神に自白して勉强するから、及第させて下さいとは、ア、無邪氣な、オ、少女よ決して其心を忘るゝな、忘れずにずん〳〵勉强して行け、必ず進んで今の優等生にも劣らない樣になるであらう。

私は後ろ送つて口の中、後ろ影も見えずなつたので始

めて目を他にうつした時涙が一ぱいになつた。

（評）まことに人の涙は大事件よりは斯る所に注がるゝものなり。

○空屋

下總　菫々菜女史

近きあたりに主なき家あり、住みにし人はつかさ人にて、さる遠き縣へ下りたるなり、かはりて住むべき人もなければや、ありしまゝなる瓦斯燈のみ忘れたる樣にとりのこされて、空しうとぢられたる冠木門は、ふるびかたぶき、土くづれたる築地のあたりには落葉のみぞこぼれたる。ところ／＼破れたる塀の中よりは、いにしへ、そが主を慕ひて、筑紫のはてまでも飛び行けりてふ木の、これはさるまめやかなる心ばえもなくて、主なき宿のつれ／＼にえたへてか、さながら怠りがちの男の子の、力こぶはりいれつゝ、大あくびしたらむやうに、太き枝なが／＼とさしのべて、なよびやかなるかたへの柳の枝を、すげなく打ちたわめつ、折々は袖ひくさまに見えたるいとをかしや。まして夕暮のほど、あわき三日月のかげ物さびしき宿の軒端におとづるゝ頃となれば、ひさしのはざま、瓦のあひだより蝙蝠ぞとびいづる、あれ見よ、一つ二つまた一つ、おのが世と思ひたらむやうに、飛びありくよ。

（評）凶宅詩のおもかげあり。

○出鄕日記

松山　土居優子

四月七日、有明の月の影白みゆく城山の木立より流れて此川面を、綴ら立おほふなる、春の朝霞に、渡頭に立ち給へる戀しき母上の御姿、なつかしき友の御顔は、悲し、朧になりゆかむとす。「左樣なら」、強てつよう言ひ放ちし言葉の末は、うすれつ、ギー／＼と艪の音靜かに、淸き流を下りゆく川船の窓によれば、渡守の翁が小家、朝な夕な見なれし城山、はては町々の屋根の小さうなり行くに、今更見えぬ御姿のなつかしくて、そゞろに胸せまりぬ。目出度き鹿島立とて、我行先きを祝し給はりし昨宵、他は仰せられて、たゞ身を大切にとのみの御言葉、あゝ白髮の見ゆる御頭あふぎては堪がたう、眩しきランプの光影に人しれず面なげて、咽びしよ、悲しき思出に唇のふるふを咳にまぎらしつ、君はと見れば白きハンカチーフかみて、窓によりうつむき給ふ横顏の思なしにや淋しくて。

岸のところ／＼緋桃の花、美しく匂ひて、若鮎をどる淸き水底に香も浸むばかり、影うつすなる、さら／＼と淸き音たてゝ、舟底洗ひゆく水の音の中流に浮びて靜かになりつ、艪の音綴ら山一つめぐりて、あゝ、なつかしの家屋は見えずなりたり、數時間をせまき川船の中にゆられ／＼て、友も我々頭なやましう、夢心地

にて河口に着きし頃は、午後の春光の美しく眠れるかなたの海にとけ入りて、亂れし髪なぶる潮風こゝちよく、今までの愁は何處へか吹き拂ひつ、前途の希望は洋々として胸にみちぬ。

四月十五日、日曜、肱水のほとりなる樂しき家を離れてより、勝山城下の數日は夢とすぎぬ、さはれ待には遠き思なる夏の休よ、何時かは瀨戸內海の白濤を蹴つて、伊與の小富士の翠黛を、後にするの時あらむ、今朝床の內にて、昨宵見し夢の人々の面影を、未だうつつなの胸に畫く折しも、門口に勇ましき聲して「郵便ッ……」胸をどらせつゝまてば竹やの「御手紙が」と持來る、見れば親しき淑子樣よりの御たよりなりき、急ぎ床をはなれて手拭もち裏に出づれば、森松がよひの滊車、黑き煙を殘して過ぎゆく。

夕つ方、靜枝樣の御宅へエソップ物語借りにと門を出づ、小路の柳夕風にもつれて、彼方町はづれの屋根のひまより、夕映の雲、赤き空寒げに見ゆ、中之川の水さら／＼と春寒の音たてゝ流れゆく、袖かき合せて小走りに、一丁ほど濕りし土ふみならし石橋の上より、格子戸明きて「靜枝樣」とよび本を貸して頂きしばし夕雲美しき空に消えゆく島のかげよみつゝ、故郷の事など語りあふ、明朝昇校の途次お誘いして頂く御約束して辭し歸れば、薄暗き部屋のれんじ窓は早や黃昏ぬ。更ては淋しう、二人机の前に故郷への手紙書き居れば、遙に兵營の就寢ラッパの音の、勇ましくはた悲しくひびくなる、云ひしらぬ思の胸にわきて……筆の穗かめば……、友はランプにそむけし目に淚ぐみ給へり。

（評）情切にしてしかも流行の神經質に陷らず文に自然の韻あり。

○名無川

麻布　八重子

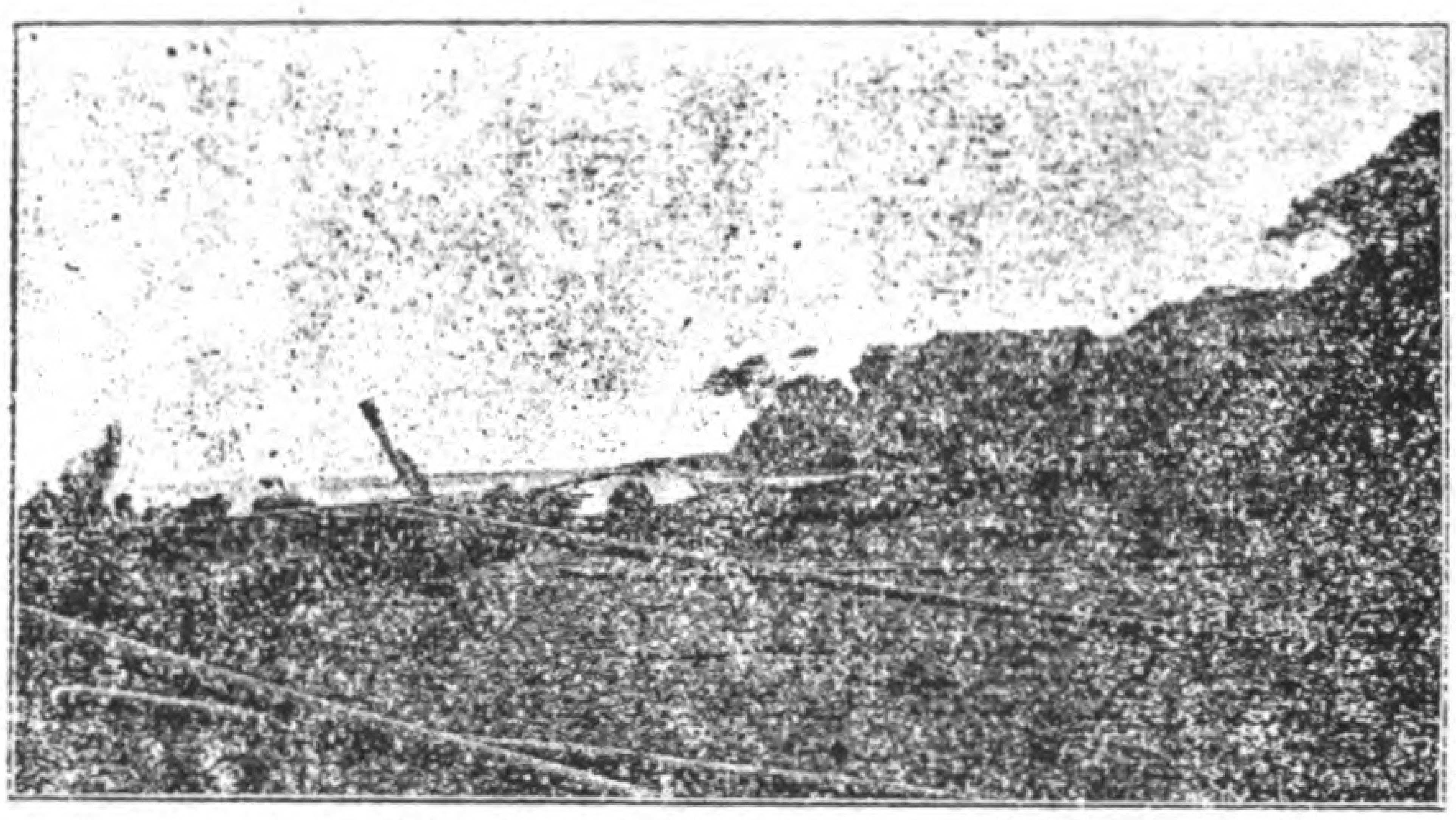
「ね芳ちやん、もう少しの間だから辛棒してお吳れ、姉樣だつて芳ちやんと同じ樣に此樣に働いてるんぢやないか、え芳ちやん、後生だからよ、芳ちやん」肩へ手を掛けつゝさしのぞけば、哀れや凉しき兩の眼の內には草葉における露の白玉の如、淚は滿てり。「否なの？」

「あゝ厭、もう彼んな家へ行くもんか、姉樣だつて必と厭だつて言ふよ、朝から晩迄まるで休みつこなしだもの、其れにお內儀さんは隨分ひどいんだもの、私が此間お皿を少し計り缺いたら大變怒つて私をぶつんだよ何程謝罪つたつて聞きやあしないんだもの、今歸つたらどんな眼に合はされるか知れやしない……厭だ！姉樣もうきつと今度は逃げて來ないから他へ奉公てお吳れよ、姉樣御願だから、よ」可憐の妹よ、と叱る可く忍び定めて連れ來し此の森陰に、流石ためらひて、音もなく流るゝ名無川の流を見つめぬ。兩人沈默の五分は過ぎつ、「每晩勉強して居るのかい先の樣に」亂れ

し髪をかいなて遣りつゝ「するもんか、だつて眠いんだもの、勉强する暇が有れば居眠りする方が餘程いゝや」なげ出せし樣なる口吻、少しの間に入ずれたる、大人めきたる言葉に、あきれしが、何とも得言はざりき。あゝ父上母上、何處にて此の哀れの姉妹を見給ひてや何故にみ救ひの綱投げ給はざるにや、其れとも、我等姉妹に後へつゞけとの御謎か？、あゝ死！如何に安らけきよ！死！あやしうも胸のをどりて、つと見下せし眼と見上げし眼の宙に遇ひて……「姉樣私あすこへ歸るんなら、死んぢやッた方がいゝや」ひしと計りかき抱きて「芳ちやん、死なう、死なう、どうせ死ななけりやならない命だもの、少さい芳ちやんに何時迄も苦勞をさせとくのは……私の心ぢやないけれど、亡母樣がよく仰有つたつけ、亡父樣の逝去られた後て、御枕の下に、精神一到何事不成、の御遺書があつたとか、私は其の心がけて是迄随分困難に打ち勝て來たけれど、あゝもうだめだ、芳ちやん、死んぢまはう、きつと父樣や母樣逢は待つて被在る、きつと、きつと待つて被在る、ね芳ちやん、兩人放れない樣に、さ、芳ちやん！」狂へるが如。そをあやしとも思はざる。「姉樣、嬉しいよ、お父樣やお母樣の許へ行くのかい？」「あゝ」やせし、頸を右手に抱きて、生憎と下るは涙の雨なりけり。

*　*　*　*

名無川の夕べの流、ゆるく長く流れしが、只一度、あやしき音をたてゝ、又靜かに、安らけく、流れ行きぬ。幾分か以前の悲慘なる或る事を知らざるが如。一年を經たる今日、岸に間近く、少さく、清く、美しき白百合は生ひ出でぬ。花は唯二ッ。白き蝶の番ひ、高く、低く。花を廻りて……。



越前三國宿の濵

（評）妹の淺く死を乞ひたると姉の深く死を望みたると忽ち相合つて投身するところ大に味ふべし。

○七夕流し　芝紅萩

まだきに起きて、曉の星や、凉しい朝風を浴びながら綠色の露をふみしだいて、妾は今し妹と弟とを伴うて靑だゝみのやうな麥の間を、手に〳〵七夕竹を提げて

霞が浦へといそぐのである。

やがて戀瀨川の堤へ來ると心地よい川風が青柳の髮を梳つてそのあまりが我等の頰をなでゝ行く。町の方を見ると、こゝかしこの煙出しから白い煙りがすーと立ち登つて、それが集つては鎭守の森を幾條となく縫うて居る。

東雲の空が、白う紅う、彩られた頃には弟ははや、眞先になつて唱歌をうたうて行くので、妹も我もまけじとうたひながら堤の上をかけ歩いた。

と、突然、弟が頓狂聲で、「姉さん湖が見えて來たよッ」といつたので「おやつ最う來たの」といひながら見渡すと、目もはるばるの霞が浦、鏡の樣な波の上を、一むらの煙すべり行くは漁舟の、朝餉の煙りであらう、折々空に舞ひ上るのは鷗の群であらうかなどゝいひながら我等は小高い丘に走り登つた。

丁度太陽は、東の波間より輝きそめて、あたりの空、一面、さつと流す臙脂の色鮮かに波を染めた。弟は懸聲勇ましく「ワン、ツー、スリー、ドブーン」と金糸銀糸で、提げて來た七夕竹を一つにくゝつて、縁を取つた浪は大きくく、輪を描いて、七夕竹はゆらゆら。流れくて、遂には天の河へ行くのであらう。

我等三人が家路を急ぐ頃にはやうやう人も賑やかになつて、あちらからも、こちらからも波のまにまに、七夕竹が浮いて來る。

弟がお土産にと、折つた白蓮の葉を、被つていよいよ家に着いたのが八時半。

さすが出ぎらひの私もけふは、しみじみ、自然の風光の偉大なのに感心して、俄に旅行好になつて仕舞つた、で今晩開かるゝ、家庭講話會に於て、皆さんに遠足することを、大いに勸めようと思つた。

（評）かゝる詩趣ある地方の風習を寫すは大におもしろきとなり。
（又曰）藤村子の「破戒」のおもしろきも破戒そのものよりも、地方の風習を寫されたところにありと余は思ふ。

○河畔の夕

古河　榊原操

夕飯を終へて今日敎つた、漁業船の譜も漸く淸書したので久しぶりで安濃の川畔を散歩するべく家を出た。

すると後から「姉さん」と呼ばれたので振り返ると、妹の芳ちやんは手に麥の殼を握つて倒れる樣に走り來て「姉さん何處へ行くの？私もつれてつて頂戴!!!」と滿面に笑をたゝへて此く言ふので私は快く諾つて、安濃川の堤に沿うて足にまかせて下つた。

今しも日は、西山に沒せんとする眞際で焰の燃え立つ樣な雲は水面に映じて恰度、火の川の流るゝ樣、向ふ岸の葦はそよ吹く風に搖られて、其中から家鴨が四羽、ガヤガヤと鳴きつゝ餌を尋ねまわるを芳ちやんは、面

白さうに見惚れて居る。
少し隔つた、木の陰に藁灣帽を眞深にかむつて手に丈長き釣り竿を持つた一人の男が頻りに水面を眺めつゝ巻烟草を薫らして居たが、ふと其吸殻を水に投げると家鴨は驚いて喧しく鳴き立て乍から、淺瀬へと泳いで行く。
私等は、今土橋を渡る刹那!!!、妹は持つたる麥稈を一把手より川面に、アレッと言うて下を見ると小魚は其に、驚いて彼處に一群!此處に一群!見る間に麥稈は、波に漂うて、何れともなく流れ去つた。妹は今更惜しさうに見詰るのである。
日は全く沈んで血の樣な雲も今は、紫と變り、藍色となり、果ては灰色となり、刻一刻と暗くなつてくる、塒に歸る鳥はいと急しげに鎭守の森の彼方に飛び去つた、今迄餌を求めて居た、家鴨も今は水をはなれ自分の飼家の方に急ぐ面白さ、折しも後の正覺寺から打ち出す晩鐘が川面を響き渡つて、高く、低く聞ゆると、私等も歸路についた。
折から、何處からとなく聞ゆる讃美歌!!、川面は全く夜の幕に蔽はれたのである。
(評) 末段三宅氏の水彩畫を見るやうなり。

○朝の散歩

紀伊　田村かほる

朝の冷氣に、單衣寢衣の襟かき合せつゝ、楊枝片手に、井邊に出づれば炊事の婆やの驚くもげに理にて時計は今し五時を打ちたる計り。餘り氣のすがすがしさに隣り村なる觀世音に詣で來なんとて一人露結びし野の小徑をたどる麥刈農夫の姿も、毎朝早しと聞きつる乳屋の姿もいまだ見えず、足を運ぶ度毎に苗代蛙の鳴く音を止めて逃げ回る心苦しさ。
模糊たる霧もいつか薄らぎて行く手の翠微の上に多寶塔の頂見ゆるは郷に名だいの古刹なり靈驗今にあらたかなりとて詣づる人の絶えやらぬに今は人の子一人も居らねば莊厳なる森の中只寂として御前に點ぜし殘燈の光、葎のすきを洩れて幽暗の中にかゞやき跪きて拜せる身に床しき光を浴せかけぬ、默禱少時、踵を寺園にめぐらせ牡丹の花今を盛りと露を帶び池邊の菖蒲の花匂いて緋鯉の作せる小波の輪は浮べる水草をゆるがせぬ、梅林には青き葉二三落ち散り綠りの芝生に細き女竹の打ち捨てあるは村の子守の惡戯か、壁面の落書も増せし樣見ゆ。
曙光は空を色どりて數羽の鳥は松の宿を放れ雀は軒端を辭し去りぬ、やがて日の光繁れる梢をもれて百度石と刻まれし石標の影長く地にしきてその字の凹き所に雨蛙一つ息へり。

時は移りぬ、いざと元來し道に引き返せば學校通ひの子供の、黄色き麥畑の間に縺り行くが見ゆ、家路近く歸り來ぬれば門口に蹲りて待ちゐし白（犬の名）は尾をふり立てゝ馳せ來り裾にからまりぬ、ざれつく頭、洋傘の端に拂ひのくればいよ〳〵狂ひて一目散に己が陣屋に引き返し頭うち傾けて女の歩みの遲きがいぶかしげなり。新聞紙と牛乳瓶を手にして室に入れば朝餉の仕度調へりとて來りし婆の手にせるは待ちにし都の友よりの嬉しきたより。

（評）清涼の氣溢る。

○夏の朝の海

牛込　河村綾子

美しきは夏の朝の海にあらずや。神秘のみ國の實現にもひとしく、まだ夜の闇のこれる海原をとざせる朝霧の、そよ〳〵海面を撫づる風に消えゆけば、玉藻の匂ひ輕く袖に通ひ來て、惱ましげなる夕べの夢に痛めるわが胸は、さながら群を脱せし小羊の夕野のはてに新星の影を見出だしたらん折のやう、云ひしれぬ玄妙なる慰藉に滿ち心は春の潮と和ぎぬ。

あゝ快き朝の海よ、帆を高くかゝぐる轆轤の音や節面白き船歌のさやかに沖より響き來て、曙の神のおはすらん波路のはての横雲やゝ山吹色に匂へば、ゆら〳〵と磯邊によりくる波は美くしき紋を描きぬ。

あはれ如何なるくしき思想かよく、この美しき眺めの中に無限の詩趣と慰藉こもれる朝の海を歌ふらむ、心浮きやすき若き少女がはかなき詩に耽けるも、只意味なき美くしき思ひ出なるよ。

動くともなき黄雲はやがて數多度さけて、中より朝日の影は輝き出でぬ、汀に白き小波は美しうも煌めいて、見やる沖は眩しくたゞ黄金の花の散りみだれたらんごとく。

あはれ心優しき漁夫(いさりを)をのせし白帆は、今安らけき波路を夢の如くも辿るらん、うつろふ影は美き人の白衣まとひて聖歌の一曲を口吟みつゝ、花の香みてる國にさまよひ行く姿にも似て、海原のみどりは一入ましつ、美しき神のみ詩(うた)の玉と化して、水の上を今轉びくるや、白鳥の二つ三つ低く〳〵小波にふくよかなる胸を浸しつゝ、此方へと歩りよる。

美くしきは夏の海の朝よ。

（評）太陽の光の下にもなほ海は神祕なりこの文よくその點を寫す。

佐々木信綱先生選



天

陸前國本吉郡松岩村　尾形千代子

夕日淡く背にうけて芒野を
　信濃にかへる琵琶法師かな

〔評〕とぼ〱と行くらむうしろかげ見ゆる心地す。

地

名古屋市常盤町七十二番戸　原田こと子

いつまでかひとりの母をなげかする
　君もをさなき人ならなくに

〔評〕かくはいさめらるゝものから、此歌に答ふるあはれなる歌あるべし。

人

和泉堺市大濱通四丁目　竹叟文子

夏の夜のみ歌使ひはみたび來て
　月更けぬらし鳴く時鳥

〔評〕王朝時代やんごとなきわたりの夏の夜のさま、おもひうかべられて。

秀逸

◎　印旛　菫花女史

江を渡る列におくれしかりがねの
　消ゆくかたにふるさとのやま

◎　下毛　りき子女史

やれぎぬのうら恥かしく歸る身を
　錦着てとや君はまつらむ

◎　信濃　なみ子

春逝くと日記にかいつけ灯を消せば
　栗の花の雨細うふり來ぬ

◎　小石川　吉田斐子

あらひ髪風にまかせてそぞろ行く
　月の小道の紅薇の花

◎　大坂　櫻木美智子

姉君の眞白きみ手に抱かれて
　乳房さぐりし春の夜のゆめ

◎　上毛　和田與志子

ちかひてし人はきまさず今日もまた
　雨に暮れけり山吹の宿

◎　大坂　優子

大和路をたどる繪笠に雨はれて
　薫りよきかな靑麥の風

◎　和泉　百合子

咲くと見ればやがて散りゆく花あはれ

わが世の春もかくやはかなき　豊後　花井信子

○

やごとなき御遊たえたる下嵯峨や
葉櫻月夜なくほとゝぎす　奈良　祇園子

○

三年むかし少女沈みし山の井の
朽ちし井桁に苔の花さく　千葉　高山つね子

○

咲つゞく菜種小道はこゝに絶えて
ひろき湖あり村遙かなり　せゝらぎ

○

涙もてさとしゝ母のしのばるゝ
別れて三年この花のかげ　芝　石川花甫

○

君行きて獨り淋しき春のくれ
詩かく筆ももののうき思ひ　茨城　石塚靜江

○

君とわれ二人さまよふ濃綠の
眞夏あけぼの風そゞろ吹く　弘前　光子

○

鶯のなきがら埋めて花陰に
歌思ひ居れば小雨そぼふる　美濃　坪内清枝

○

家賣りて家こぼつ日はあすとなりぬ
燕の雛子まだ羽根よわき　佐世保　さわ子

○

潮干せる春よき磯に流れ來て
夫婦島人花藻ふみ行く　尾張　野咲すみれ

○

我むねに君がきざみし此いたで
あゝいつの日かいゆる日あらむ　下谷　太田樂子

○

たそがれて夕顏白き家にして
垣もる小琴ゆかしと聞ぬ　上野　登仙女

○

花の上のみ塔に春の日は落ちて
堤路寂し川添ひの村　近江　辰井ふみ子

○

獨りゐます母君に送る文かきて
戸による夕べほとゝぎすなく　茨城　岩田清子

○

釣人の家路を急ぐ江の畔
夕風淸くたでの花散る　本郷　朝井千とせ

○

咲き匂ふ花の山路に獨り立ちて
エデンの園を偲び見しかな　横濱　星戸菫子

○

何となく思ひに沈む夕暮を
とぼそによりて空の雲見る　横濱　あづさ

○

花の宴の朧月夜を笛の役に召されて出づる四位の少將

○宵の灯に髮とく姉と語りつゝ草紙くり見ぬ夕顏の宿　牛込　河村綾子

いとし子のおぼつかなきを手をとりて螢狩する母わかき哉　○　靜岡　中村かをる

書にうみておしやる窓を水無月の夕日冷く梨の花散る　○　小石川　さたむ女史

都の客舍にて　常陸　川並はな子

ひとりねのたらちね戀ふる夢さめて芭蕉に寒き雨の音聞く

滿洲の月を偲びて　澁谷　一少白衣女

大丈夫の恨みの念やひそむらんいと物凄き滿洲の月　○　上野　正木梅野

病みてうせし人の柩を送る夕小雨そぼふり子規鳴く　○　磐城　鈴木勝子

ふと見しは亡き父上と花かげにむつごと語るなつかしき夢　○　新潟　岩瀬波子

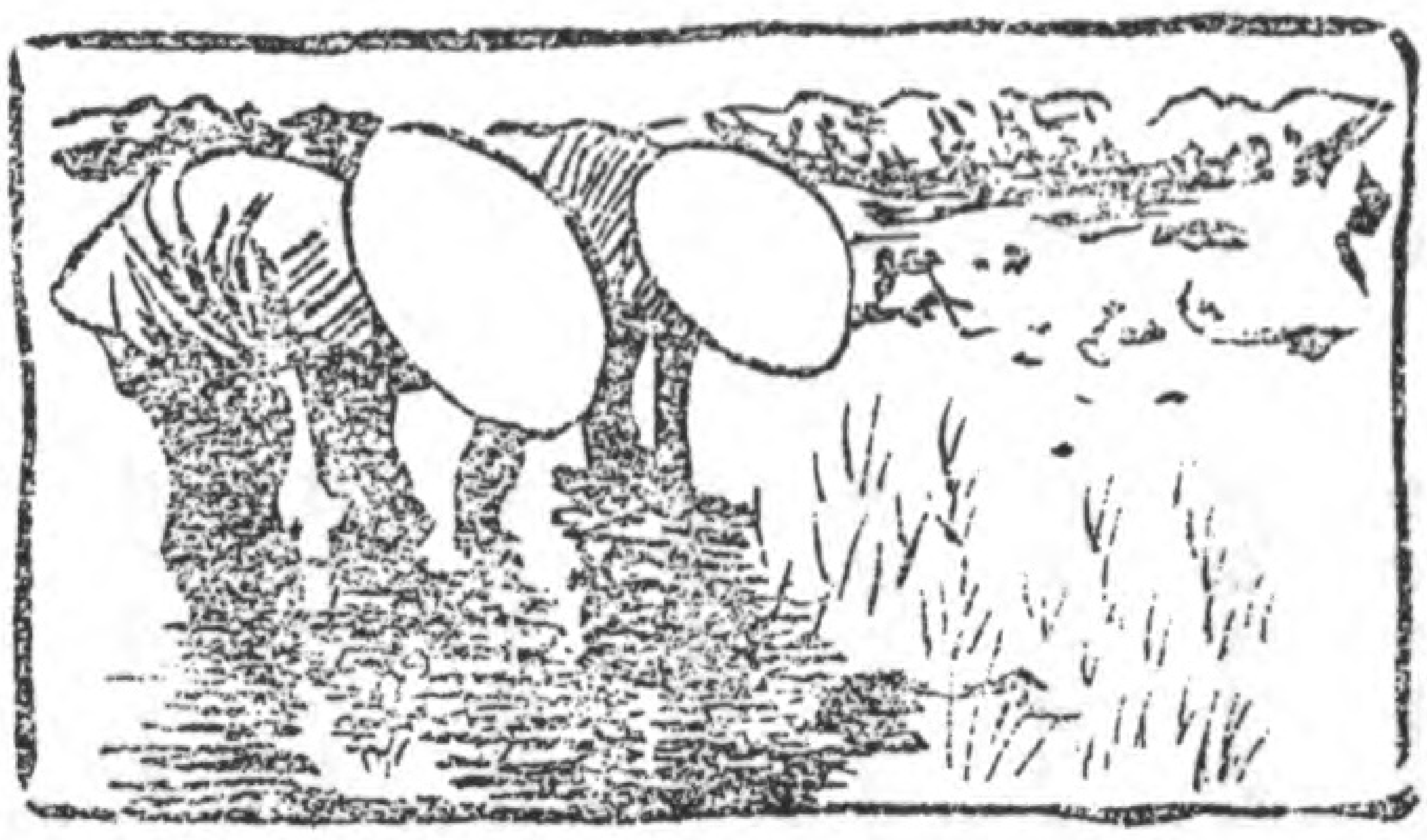
下京は花の雲湧き繪日傘に陽炎燃えて春嵐ふく　○　千葉　花寶賤の家

小夜更けて雲林院の法會より歸る松原なく時鳥　○　山梨　藤林あき子

蚊やり火の烟の故と紛らしぬ君と別れしよべの涙を　○　常陸　大和田清子

黄昏に朝顏鉢に水かけて明日咲く蕾かぞへ見にけり　○　芝　岡田清江

田植（賞外）陸前登米町　猪俣きつ子



螢こい山見てこいとうたいつゝ幼子集ふ川添の道　○　近江　杉原富枝

蚊やり火の烟のもとに武夫が過ぎしいくさのさまかたる哉　○　遠江　宮城椿子

鐘の音に雁の一つらみだれけり蘆原三里蘆の花散る　藤　小田原　奥津加爾子

白藤のこぼるゝ下にたゝずみて西行く雲を遠く眺むる　○　磐城　鈴木紫子

櫻貝拾ふてたどる繪日傘の人美くしき磯の春かな　○　南多摩　山村とき子

糸をくる音かしましきしづが家ののきば涼しく風鈴のなる　○　南多摩　中島ぬい子

古池の半ば芭蕉に蔽はれて青き水面に白蓮の咲く　○　長崎　林まさゑ

あやめ見に深山の中のおん寺を訪び寄れば鶯はとゝぎす　○　石見　星の子

岬路ゆく蓑笠すがた遠くなりてはるさめけぶる川添の村　○　大島　鵜澤蘆涙

寫さんと繪筆手にして眺むれば朝風すゞし白蓮の花　○　安藝　池之子さゞなみ

萩散りて夕日冷き秋のくれ一人淋しく琴をかなづる　○　福岡　古屋ちか子

螢めでゝ小簾捲きしまゝ京の女は繪蚊帳に入りぬ水樓の夕　○　長崎　つた子

君も又門邊に立ちて只一人ながめますらむ十五夜の月　○　薩摩　木之下直子

かくまでも辛き想ひをせんよりはせめて形見のなからましかば　○　深川　勝山千代子

屍やく煙斜めに立つ見えて夕月さびし野邊の一つ家　○　靜岡　梅原かづ江

雲にのりてみ空にのぼる心地かな夜のかすみに月ひくうして
○　美濃　加藤よれ子
髪白きおきなおうなの住む家をめぐりて咲ける白芥子の花
○　熊本　湖畔
都路に何とか見ます師よ友よわれにはつらき秋の夜の月
○　四肥　楠本わき子
はつか草窓にさびしき夕べかなこゝろ靜かに花のくづるゝ
○　三花女史
旅僧の背笠あかう夕日してまばら松原土佐繪に似たり
○　陸前　尾形千代子
人燒きし野邊の烟に時雨して芒にからむ夕風さむき
○　新潟　中林秀子
松が根に昔をしのぶ夏の夕紅の波紫の波
○　山城　岩本れい子
夕暮に三笠の山をながむれば身にしみ渡るさ男鹿の聲
○　千葉　八木美佐保
風吹けば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの聲
○　備中　淺野若葉子
病む君にとさゝ川べりを彷徨へば螢は見えて夕風寒き
○　埼玉　山口邦子
たらちねの母だにまさばかゝる事かゝる思ひはせざるものをば
○　尾張　野咲すみれ
とひなぜぞ君を思ふの煩悶に我胸今や千々にみだれぬ
○　松山　白露
戀ふ頃を誰が觸れけむ主もなき琴の弦きれて弱き空音よ
○　澁谷雅芳
うき草にみだれてこぼる露のごとかくれあらはれとぶほたるかな
○　越後　ひで子
姫君は蝶をうれひて夏の朝綠の國に花をたつれぬ
○　栃木　笑韻子
笑む聲のいと哀れげの尼が寺今宵燈下に經書繙かむ
○　千葉　それがし
詠みさして吾とつぎ得ぬ吾歌の若きにわびつさ夜更け渡る
○　群馬　飯塚千翠子
何となう涙ぐまれて亡き人の文くりかへすうす月夜かな
五月雨　出雲　寶豆記道子
五月雨に水のあふるゝ小川にて魚おひながら遊ぶさとの子
○　廣島　岡島壽子
悲しくて別るゝことの忍ばるゝ今ひとたびの花の面影
○　牛込　川端みき子
床の上に仰き臥して天井の節穴の數かぞへ見にけり
五月雨　岩代　由田きつ子
はら〳〵と桐の花落る音のして夕べ淋しく五月雨ぞ降る
○　尾張　梶田愛子
やせし手に眠る幼子ほゝゑみぬ夢にや見けんなきはゝの面
山家初夏　近江　松村波子
青葉かげ涼しからましみつ〳〵としげりに茂る片山の里
○　神奈川　鈴木みれ子
夕立の空さりげなく月のすむ池の面くる風の涼しき
○　千葉　石渡村女
ほとゝぎす夜はやゝ更けて病む我に死の影ひきぬ灯の色にびて
○　上毛　原田いさ子
底清く小川の岸の涼しさに月も夜な〳〵影宿すらん
○　埼玉　名なし草
夕ぐれをそゞろあるきの姫君にやさしう吹けよ萩の上風
○　下總　藤崎みな子
今宵又君住む家を訪れんはらからも無きつれ〳〵の身は
○　長門　あらた子
味氣なき浮世の波のあらければ我が身いづこの淵にしづまん
○　群馬　吉田きみ子
君ゐます方よりいでゝ清らけき月は母ますかたに入るかな
○　千葉　林米子

礒馴の松に夕日は消え失せて眞砂路三里月になり行く

○ 小倉 白石光枝

我れ知らず思ひがけなき別れ路に顔に袖あてたゞ泣きしのみ

○ 磐城 藤田つや子

月涼し松風涼しこの夕笛をやふかん琴をやひかん

○ 京都 竹葉女史

紀念にと受けにし紅葉色褪せて猶戀しさの思をぞ増す

閑居 神戸 泥谷しづ子

松と共に操守らん千世かけて春秋しらぬ此山里に

正直 秋田 高階すゑ子

いつはりは世の妨げとなるならんねがふは人のまことなりけり

螢 備後 高岡まさ子

橋の上の關守知らで來しもがな篠にうちわに痛む雌螢

○ 京橋 礒千鳥

立ちならぶ礒邊の松に吹く風の樂諸共に寄する小波

○ 信濃 丸山れん子

牧童の牛連れ歸る夕まぐれ門田に蛙の聲頻りなり

○ 信濃 山浦とく子

三年振り妹の奥都城今日問へば木立に暗らく時鳥なく

○ 熊本 醉天子

母子みたりきみがまどゐの夕ぐれを飾るが雲のあや美しき

○ 岩代 服部貞子

夕礒にそゞろあるきのそゞろ思ひ波のはてなる君をしぞ思ふ

夏夕暮 播磨 松下ふみ子

おばしまによる姫君の長襦くみぎはの柳に三ヶ月かゝる

○ 茨城 今泉夏子

去る年に君と訣れし猿ヶ岡胡蝶みだれて今日五月雨の降る

○ 本鄕 朝井松子

打水に垣根のうばらさゆらぎて驚き顔の蛙飛び出でぬ

○ 足利 小林つたう女

美しき友の玉章ながめては幸なき吾の行末やみぬ

○ 下野 櫻女史

野川邊に咲ける菖蒲をそときつてわれは流しぬいかだつくりて

○ 長崎 二葉

月に花に君はあらじな琴浦の波のひゞきはあが胸のさゝやき

○ 兵庫 平谷古月

日は西に月は東に峯ひくう蟬の音たえて稍涼しき

魂まつりの庭にて 岩手 早坂もとひ

討死せし益良武夫の弔ひに鶯の來て法華經をよむ

○ 陸中 遠野すみれ

我が庭の常磐の松は變らねどかはり易きは人心かな

○ 奈良 ふぢ苡

伊香保路に山百合かざす女づれ痩せし一人が道しるべ讀む

○ 信濃 川口ちか子

少女子が笹舟かけし水の上に螢とぶなり二ッ三ッ四ッ

○ 近江 小枝子

泥沼の淺水にはれて我れとわがすみかを溺すいろくづのとも

○ 丹後 杉本滋子

おほ君に捧げし玉緒ながらへてほまれ身につけ歸る心は

○ 愛知 小島品子

あふち散る川添行けば風淸く蘆瀬のかげに水鷄聲する

○ 静岡 梅原かづ江

月はるかまばら〳〵の雲分けてみ空に在ます我が母の許へ

○ 高尾 金子楓蔭

美しう虹のうつれる琵琶の湖矢橋をさして千船帆上げぬ

○ 德島 住友登喜子

乳母をとふ時雨わびしきちゝぶ山あゆみかねつゝ妹やゆくらむ

秋夕野邊 伊豆 渡邊仁輪子

山寺の鐘の音毎に月は落ちて風がもて來る百虫の聲

○ 伊勢 佐藤しずま

牛車ゆるうきしろふ京の春空は夕日にうろこ雲して

水邊螢 備中 勝子

夕暮に遠き河邊に來て見れば螢のひかりてり渡るなり　土佐　大原晨石女史

○

國威かな朝日さしそふ川面に黄金の龍のおどり出てしは　備後　三上滋子

○

去年までは螢狩よとよろこびし妹はいづこぞ母と共にか　磐城　佐久間ちよ子

○

夏の夜にしづ心なく少女出て琴の音先きに夕立ぞ降る　新潟　吉田たね子

○

丹躑躅の紅競ふ小里道夕日を受けて旅人行くも　弘前　福井晋子

○

雄孔雀の羽音に散りし緋牡丹の一ひらとりて君が名書くも　京都　永尾久子

○

神かけて祈りし病のいへければ三歳戀しき月を見るかな　岩代　三浦たい子

○

淡月夜人にも逢はで河添ひの卯の花白き道めぐりけり　鳥取　安倍きし子

○

欄干に今宵うらぶれの身をよせておぼろの月に琴の音をきく　小石川　明石光子

○

行く君に何げなきさまよそふ我小さき胸をあはれとおぼせ　神戸　水田しげ子

朝顔

面なしと寐ての朝顔そでがきに妹がふまひやこめて咲らむ　大曾野園子

○

昔得し君がみ歌に憧れて泣きては笑ふ春の暮かな　米澤　二山みどり

○

我故にやつれ給ひし彼の君の姿を見れば涙ぐまるゝ　備中　玉華

卯花

朝風に亂るゝ瀧の白糸と見えて匂へる岸の卯の花　仙臺　春曉

○

五月雨の空より出てし一こゑにいよゝ思ひはまさり行くなり　神戸　樋口小枝

○

誰が笛ぞ音色ゆかしうきこゆなり讀書に倦みし夏の夜の月　羽前　高橋なみ子

○

此夕君は都にわれはいま鄙の小川に足洗ふなり　小石川　海野都里子

○

夏の宵ほたるとびかふ森のはて池邊のそよぎ誰が戀ながす　横濱　紫野桔梗

○

琴の音に歌ふ一とふしおもしろき君がかんばせ月にほの見ゆ　秋田　俊子

○

夏草の茂るな空にたとふれば星とばかりにとぶ螢かな　青森　姫菫女史

○

野の花におもしろやかに蝶ぞ舞ふ戀のかなひし少女と相似る　芝　諏訪よし子

首夏藤

水あまるつゝゐのもとの松が枝に色もすゞしく藤咲きにけり　松山　佐伯紫舟女

○

谷かげの汀に咲ける白百合の影をうつして行く岩清水　磐城　村岡湍津子

○

掃頭の庭のうばらは花散りて蛙なく音のさびしき夜かな　越後　ふたば

○

鈴かげの花ほろ〳〵と水に入りて夕べしづかに舟のへり打つ　牛込　阿部彌生子

○

いひしらぬこき紅の深み草あかぬ色香のなつかしきかな　和泉　月子

月下納涼

夕ぐれのやり水多きにはの面のこかげをもるゝ月のすゞしさ　陸前　ふみ子

第二卷第六號朝の常念岳を讀みて

姿みると心も清き常念の岳に彩る金色の雲　安藝　石井千代子

水鷄

夜もすがら梢に高き月見んとさゝぬ板戸をなにたゝくらむ　相摸　ゆたか

○

むすぼるゝこけの清水のそれならで人の心の冷けくあるかな　奈良　田村吉野

○

虎か象かましらか犬かはた獅子か舞うてちぎれて走る雲かな　栃木　さなえ子

○

亡き人のかたみの窓簾取りいだしゝのぶ夕に芙蓉みだるゝ

窓螢　栃木　兒島得子

窓近くさして螢火誰ゆゑに夜な〳〵身をや焦すなるらん

ほとゝぎす　深川　伊藤芳子

ねざめして今ぞきゝつる一聲はそれかあらぬか有明の月

書物　栃木　ひさ子

教草たどるわらべもいかならん書てふ物の世になかりせば

讀書　下毛　靈紫女史

世の人の遊ぶいとまもありあけの月をよすがに書や讀まゝし

○　栃木　波多野まさ子

思はじの思にくるゝ夕雨やかじかの聲のたゆむ時なし

○　美作　性余紫史

山住や軒の下ゆく小流に恨がちなる黑髪ときぬ

龜齡　下野　登久子

一度は消えなん露と知りながらなほうらやまるかめの年かな

○　栃木　菅谷靈子

ひもどける書をまくらにまどろめば夢路をさそふもろかはずかな

○　上毛　飯塚幹子

旅に病むゆふべを醫る友もなう小窓に見れば時鳥なく

松　和歌山　宮井白萩

あの山にのぼるゝごとに思ふ哉父の植ゑたる松はいかにと

○　下總　山田よし子

朝戀するまらうど起す川添のあけぬとたゝく水鳥の聲

○　成田　長谷川しん子

しづ〳〵と流るゝ川に船浮ひて垂るゝ柳に月を見るかな

春宵　遠江　平子

おん方の胸につゝめるうたがひはとけぬと琴に歌たまふ宵

○　三河　稲田つる子

凉風は何處ともなく渡り來て床の人形武者ぶるひせり

行春　前橋　吉村華露女

春立ちてあまぎる雲の色淡く綱引く人はせみの羽衣

○　長野　海沼靜子

病む母に藥すゝめて外見れば春風ゆるう櫻散るなり

○　信濃　中島さつ子

あはれ斯くて何時を終りの吾憂ひ小鳥の籠に涙いつはえ

○　橫濱　敷島花子

聲淸く蛙なくなり山吹の花咲きおほふ庭の古井戸

○　駿河　古山秋子

思ひねの夢にぞ見つる故郷の花たちばなを昔ながらに

○　兵庫　古月女

村雨の夕淋しき埴生宿皐月にやどる露もしづけき

○　佐賀　樋口龍子

濡れし髮天神堂に眺る一人旅路の空も晴れきて

○　大和　塙坂霞江

おん姿になに見てゐますこのごろは糸のもつれをせんすべなきに

○　越後　岩本芳子

湖廣きやみの寂寞はせまりきて根なし浮藻のはなほのにろき

○　牛込　五月子

五月雨の晴間もわかぬ雲間よりあはれ一こゑほとゝぎすなく

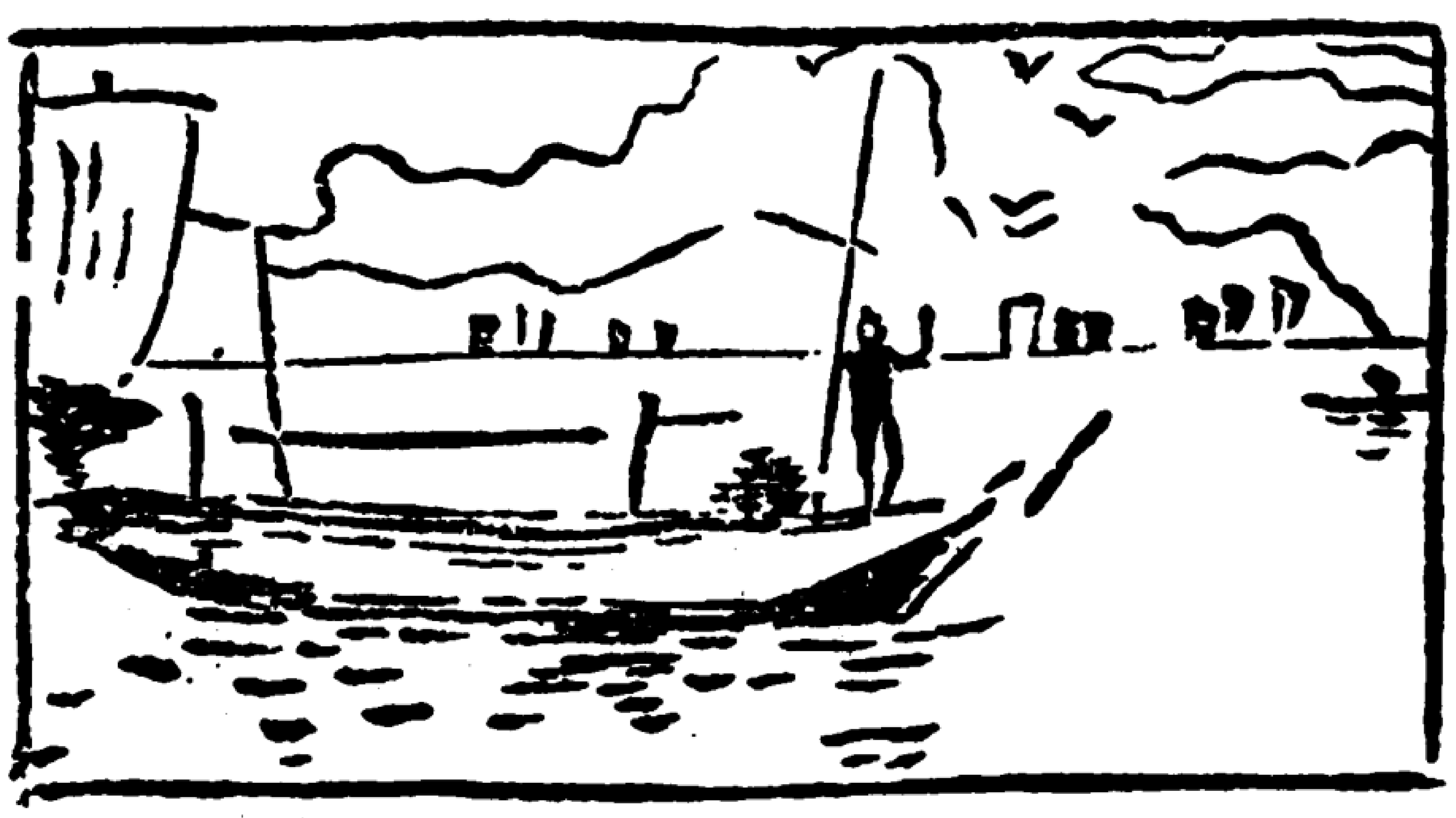
○　本郷　綠子

夕立の過ぎて彩色る夕雲に畫筆とる君眉美しき

○　船穗　白露

馬子行きて旅人行きて夕日さす松の下道秋風ぞふく

○　越後　ゆき女



舟　（賞外）　神奈川縣門海橋　神部とみ子

和歌

ゆく春やとる詩筆に興そはずなやみよすべき花もなき身の
○　京城　奥田榮子
思はじなこよひの月は亡き姉が在りしむかしにうたに愛でしも
○　佐世保　栗原寵子
百千花春をぞ待ちて笑むものをなどて我身に笑む時ぞなき
○　本所　林富士子
さらぬだに片山かげのさゆり花ふかき匂ひはかはらじものを
○　播磨　土井かつ子
松なみき若人のかげ見えがくれ夏の夕日はいとあかうして
○　新潟　田村さく子
春の山うす紫に靄はれて花に流るゝ暮の鐘
○　磐城　橋本滿津子
摘み取りて頬にあてゝ見ぬかざし見ぬあまりやさゝき花にてあれば
胡蝶　尾張　水野華子
天上よりとび來る胡蝶の一つがい菜種畑けをやさしくまひぬ
○　富山　とし子
はれ〳〵と長閑なる日の汐干狩こゝろも廣くなるかとぞ思ふ
○　茨城　板橋あい子
露やどる青葉のかげの涼しみに虫の音すめる夏の夜の月
○　靜岡　深谷岩子
草深き野邊の細道ふみ分て夕にぎやかき螢狩りかな
○　丹波　波多野女史
母逝きしふる里遠くはなれし身の父上戀し五月雨のまど
○　深川　伊藤みや子
いつまでかこゑ惜しむらんほのかにも初音きかせよ山ほとゝぎす
朝　群馬　胡蝶子
ひとしきり芝つか山の花ゆれて蝶の羽風にもや薄れ行く
○　小田原　清水兼子
少女らが蘆間の螢包むにもあまる袖しヶ浦の夕暮
○　川越　大木歌子
春なれど入相にひゞく鐘のみは秋にもまさる淋しさを添ふ
○　羽後　みや子
たらちねが手織手縫の古袷ふりぬとさても更へなむものか
○　四谷　しらぎく
いふにまさるいはぬ心のうちにこそ戀しとおもふかげもやどれり
○　新潟　桑野なか子
さちあれと別れゆく子を眺めやるかなたは遠くうすがすみして
○　和歌山　橋爪千代子
大君の御代ゆるぎなき響井の國の光ぞあらはれにけり
○　紀伊　翠園女史
梅茶屋の娘嫁ぎて花散りて小村淋しう春行かんとす
○　上野　夕泉子
音もせでま垣の牡丹こぼれけり村雨細き春の夕暮
○　茨城　青柳愛子
樂しかりし我が半世の夢路をば辿るよ今宵梨棚の下
○　日向　登美子
ぬば玉のやみをやぶりて窓近うきにしほたるにおどろかされぬ
○　美作　杉本駒子
あふ坂の人目の關にへだてれば深き心を語る間もなし
○　東京　箭内篠子
牛追ひつまばら木立にたち寄れば小徑へだてゝ初蟬のなく
○　麻布　加藤延子
捨てし君は歸らでその夕べ我と世を泣くひぐらしの聲
朝　埼玉　大木幸子
さやけさに小鳥のうたふ森の中さもたのしげに遊ぶはらから
○　鹿兒島　久永澄子
繪にせよと友の贈りし百合の花繪にせず母の墓に手向けむ
○　長崎　坂梨とみ江
花月夜磯に住めばかなにとなう波におそれて戸を鎖しけり
○　讃岐　國越茂子
あれはてし野寺の塔に日は暮て淋しきやみにふくろ鳴なり
○　千葉　酒井富美江

野の花のゆくへ慕ひて吾れそゞろ一里下りぬ夕すゝき川
○　大坂　文　子
まどろみの夢に見し亡母忍ばれてねられぬ夜半をなく時鳥
○　常陸　塚本こう子
つどみの上の花うち見つゝ衣手につもるもうれし花びらの雪
○　臼陽　三城米子
母病みて思ひにしづむ暮の窓み空に響く鐘の音細き
○　豐後　安藤貞子
いちご提げ少女一群かへりくる川添の道白薔薇の花
○　備後　松本董子
日毎見し京の花實り影見せて三井の鐘の音春暮れんとす
寀山子　上野　大沼奈美子
うすあかく頬紅さして宵の灯に殿姿つくる菰かゞしかな
○　群馬　山崎みき子
おとめ子の嚢の綵を見るにつけ古おもふおのがすぎにし
○　廣島　岡島蕗子
悲しくて別るゝことの忍ばるゝ今ひとたびの花の面影
○　千葉　鈴木園子
ほのかにも百合の香せまるくれの欄かゝる折こそ魂まどはるれ
○　安房　小山すゑ子
石槌を簑と笠とて身をしめて渡る農夫の姿一二
石槌詣　伊豫　伏見圭子
紅顔の美少白衣のいてたちや伊豫の高嶺は神なる姿
○　下總　紫扉女
春の夜を苦吟になやむ詩人が月朧なり手枕の夢
○　大坂　島田ひろ子
滊車は往きぬ君を乘せたる滊車は往きぬ一人佇む身を如何にせむ
○　下野　新井琴子
おぼつかな歌筆とれば興ならて眼にのみ浮ぶ人の俤
○　新潟　岩瀨政子
十月や紅葉ばたきて兒君の茶のたてぶりに興がる日哉
○　河内　陸山謙子
不如歸聞かまほしきとしのぶるをいかになかずもとびや行くらん
○　韓國　永尾末子
釣の浮木引くよと見ゑし其の折に後の梅に鶯のなく
○　磐城　鈴木たま子
卯の花のそぼふる雨に窓押せばつめたき夜風我頬をうちぬ
郭公　信濃　更級女
郭公初音きかむと今よひ又夏のみじか夜あけにけるかな
○　靜岡　二葉女史
岩にせく女波夫波の飛沫とびあなたの空に白たへの富士
○　岡山　永原多計子
岩角に立ちて大空見上ぐれば我をいましむ夏の夜の月
○　伏見　磯野みき子
ふる雨になほも昔の忍ばれて逝きにし人のあとぞ戀しき
○　青森　庄司とも子
戀に泣く狂女は辻を曲り行きて火宅を語る鐃一としきり
○　岡山　高岡花籠
山の端のさはらぬ沖に船浮きて心ゆく迄月のかげ見む
○　鹿兒島　柳子
たちばなに君なつかしう筆とりてまど押しあくればほとゝぎすなく
○　小倉　房江
藥買ふて家路にいそぐ夕まぐれ我が家の方にばらの花ちる
○　尾張　水野華子
春の丘櫻折り取る眞白き御手君によく似て胸のをどれる
○　麴町　原田花車
白あやめ池にむりたる鳥かとも手たゝきて見る朝小雨哉
○　米澤　鈴木紅葉
たれ人のすさびなるらむ小夜更けてことの音遠く月かをるなり
○　上毛　汀すみれ
わが袖に降りつゞきたる五月雨のくまなく晴れし今宵此月
夏　新潟　しづぐも

おばしまに夕風うけてうなばらの夏のあつさも白なみの花
○　上毛　金子埋れ木
訪ふ人もなき山里の伏が屋に破れ柴戸をたゝく五月雨
うたゝれ　靜岡　伊藤比呂子
ゆめ幾つ碎けてならず思はせの芭蕉のあめを聞くうたゝれや
蓮　秋田　大越幹子
風吹けば蓮の浮葉に波越えてにほひも消し不忍の池
○　米澤　棚橋夕霧女史
五月雨の空さへくもるまよなかに螢飛びかふ野べのほそ道
夢　伊勢　三遥女史
庭石にふとつまづきて夢さめぬ垣間見し君うたゝ戀しき
○　成田　孤星女史
うたゝれの枕の上に結びたる夢驚ろかす時鳥の聲
○　大坂　都留子
亡き母のかたみのをごとかいならす聲は細りて螢とび交ふ
○　安藝　高柳文子
昨夜もまた夢路たどりつ都なる君音づれぬ谷山の丘に
五月雨　遠江　鈴木尙子
ふるさとの方に一聲郭公鳥袖うちしめる五月雨の頃
○　名古屋　原田琴子
おぼろなる月影見えて日は赤く張物板に桃のはなちる
胡蝶　上毛　殘月女
舞ひ姫のあやのみけしに春ゆきて色あせましぬもゆる腰衣も
○　仙臺　高木いち子
白百合はなよび姿の君と見て銀瓶にさす夏今宵かな
○　玉露子
玉露のしげき木の下夕涼み盥のあつさを流す川風
○　鹿兒島　あい子
白き蝶黄なる蝶とぶ若葉かげ詩集ひもどく人美しき
○　三河　中島いそ子
大奥より琴の音もれて美しき御馬車とまりぬ紫陽花のかど
○　飾磨　小百合女
阿房殿のみ墻をもるゝ脂の色に小川流るゝ夕榮えの里
○　大分　松木露子
山の上に白帆走りて海の上に山浮ぶなり今日の夕なぎ
○　本所　伊藤紀美子
夢ならば傪なく覺めど故郷の月影淡き花の下蔭
○　大阪　伊達朝子
永しへにこゝろの緒琴奏でてましつきぬみ德を讃め稱ふべく
幽琴　長野　山田くに子
住むや誰嵯峨の草菴夕ざれて花のしづえに琴の音匂ふ
○　周防　小澤ちゑ子
願はくば母と姉とを呼び寄せて共に住みたき此新しき家
○　京都　文世女史
親もあり血をわけられしはらからもあれど戀しき君のいまさぬ
○　千葉　撫子
夕立す御嶽詣のちらし髪和讃誦すなる白衣の群に
○　越前　松原清子
夕暮を里の蚊遣火消えはてゝ破ぶれし軒に月影もるゝ
○　近江　花園糸枝子
いにしへの歌聖のあとを偲ぶ夕月をかすめて時鳥なく
月前琴　淺口　唐井富子
秋の夜の月見がてらにひくやたれ琴の音遠くすみて聞ゆる
蠶がひ　岐阜　稻葉やゑ子
綾錦かざる輩に見せばやな賤の少女の蠶がひするさま
水過螢　岩代　澪子
はら／＼ときしの草葉の露ちりて清たき川に螢とぶなり
○　近江　花園政枝子
きのふまで花にうかれし心もてけふは青葉のかげを訪はなん
○　宮崎　遠四女史
散しくもをしき櫻の花の香や吉野の山の櫻みだるゝ
○　上野　佐藤露子

おすとこそ云はで誥らんなき母がたびし晴着に雨けぶるとも
○　能登　千田星子

古城の後や石垣朽ちもせて繁れる松も昔偲ばる
○　岩代　岸野常子

うばら散る野川の蘆に駒入れて水かふ馬子にあたゝかき日や
夏月
栃木　岸よし子

笛のねの川端づたひ消えゆきぬ夕風すゞし夏の夜の月
○　横濱　早川かく子

鍋洗ふ裏の小川の暮際に小萩こぼれて水静かなり
○　廣島　恒子

劔を負ふてシベリヤ千里走り行く大和若駒春風に嘶く
○　茨城　秋山隆子

津の國の難波もいはずあしの根のみだれ心のやるかたぞなき
○　信濃　櫻井みさを

たびの宿に病ひの枕おもうしてねられぬ夜半にふくろふのなく
○　攝津　和久蘇子

戸をおせば朝月ゆらぐ山のまど小なき紙帳に花ちりかかる
○　上野　得子

をどろ／＼秋雨のふる眞夜中に逢ひしは夢かいたづきの母
○　石川　濱田芳子

舟出せしきみはかへらず夜な／＼に雁なき渡る天草のなだ
○　紀伊　太田佐代子

戀しき人に摘まれもやせん幸あらば薹となりて野べに咲かばや
○　備中　稲本千惠子

夕暮や廣き牧場の見えわかず我いかにせん主のみ駒を
○　能登　以計の以佐美

新緑（賞外）　京都紋屋町　濱部郭公女



ふたゝびは大き聲して笑はじと母にちかひて煝をそめしかな
墳墓
下關　塩谷あい子

逝ましゝ君が御墓にぬかづけば手向けし花に胡蝶舞ふなり
○　姫路　船戸幽規子

魔か神か流轉ひまなきにがき世の運命に泣かむ我ならなくに
○　名古屋　宮脇とし子

うら盆のうら悲しさの思ひ出は切子の房のもつると長し
○　下谷　宇都木蕉雨子

秋衣ぬぎて幾夜もたゝぬまにはやも時雨の袖ぬらすなり
○　福岡　浦志しげる

長き日に遊び勞れて眠る子の捨てし手毬に小猫戯むる
○　筑前　古川きよ子

浮き雲は風に晴れつゝいかづちの靜に照す夏の夜の月
○　鳥取　朴樹子

夕かけて小雨こぼるゝたかむらの蚊のほそ聲に夏を告げ來ぬ
○　天塩　なみ子

行きくれてやどり乞ふなる旅僧の衣のそでに春の花ちる
○　千葉　花寶女

おもひ出の川添堤夕ぐれの月ほの白うあふち花ちる
○　岐阜　十六夜女

姫君が花のみ袖のそとふれて園の緋牡丹音なく散りぬ
○　紀伊　上田清子

涙もてわかれし友は來りしになどて歸らぬわが亡き母は
○　美濃　紅詩園晶子

新酒にとく醉はされてうたゝねのねざめさびしき花蔭にして
○　姫路　三木君子

山に沿ふ小村青葉につゝまれて夕暮近く五月雨の降る
○　能登　北島久子

棚引し霞の中を一筋に立つは山家の烟なりけり
○　石見　歌の子

橋守の翁が灯火かすむまで岸の柳に雨けぶるなり
○　高松　工藤靜子
御光を昇る朝日に譲りおきて雲かくれにし有明の月
雨後月　薩摩　きく子
雨過ぎし山家の庭の夏草に螢亂れて夕月のさす
○　姫路　三木喜代子
雨暗きいと靜かなる初夏の夜をとぼそに寄れば螢縫ひ行く
○　高知　和田順子
霜をけみ慈母の今宵はそも如何に鐘の音ながく雨細う降る
友を懐ふ　安藝　秋村逸郎
共に見し淑の藤は亦さきぬされど逝きたる友かへりこず
○　廣島　靜秋會
君送る聲の音たえて月朧血の雨湧きて二三滴落つ
○　安藝　箕岡萩村
櫻花ちりて流るゝ谷川の土橋過ぎ行く馬の鈴の音
○　越後　親澤むすめ
川添の村は霞におくられて小雨そぼふる春の夕ぐれ
○　柳河　清子
憂きことの積る夕を野に立ちて君がみ歌を低う誦しみる
○　千葉　小川ふみ子
藥の香の迷ふ夕の雨の窓まくらもたげて君萩や見む
茶摘　武藏　友山三良江
少女らがこの芽摘手もうら若みもゆる綠にまづ匂ふらん
夏　新潟　しづくも
若葉して玉垣見えぬうぶすなのもりに晝なほ梟のなく
○　神戸　清水露水
風すさぶ浮き世の波をよそに見て波なき水に遊ぶ水鳥
○　大坂　水谷浪江
たらちねのあれたる御墓見るからにむれかき亂す秋の夕ぐれ
○　三河　紫清女
限りなきむれの思ひを一筆にかきて送らん君がみもとに

○　若狹　楯春江
櫻散る離れ小島の薄月夜其處に女神の笛ふきおはす
○　岩代　芳江
春暮れむ躑躅ひと枝手折り來て床にやさゝむ友にや見せむ
○　上總　小川みどり子
春すぎて夏は來にけりひとりねのまくらに近く時鳥聞く
弔戰死者　谷口文子
亡き人の數にこそ入れいさをしは我ますらをのかゞみなりけり
猿澤池　大坂　やく子
猿澤の池のほとりの柳の根我がかなれしみ名もありける
初螢　京都　島本久惠
天津星飛ぶぞと見れば只一つ闇を貫ぬく初螢かな
失望　堺　白桃子
はなさへも笑ふやよひのあるものを我身のはるはとはに來らじ
○　安藝　ちどり
ひさ〳〵に友のおくつき訪れば今更ながらむかしこひしき
○　大阪　ひろ子
辛薄き運命に泣ける窓近く桐の一葉の風なきに散る
○　淡路　伊東綾子
うすもやは利尻島にたちこめてなるやいまつ〳〵大船の笛
○　上毛　五十貝季子
鐘樓にたてど撞く手はたゆたひぬ君すむ里にひゞくと思へば
落葉　長崎　あい子
きのふまで高嶺に見えしもみぢ葉もけさの嵐に見えずなりけり
○　上毛　眞砂末子
夕日さす芭蕉葉がけにたゞずみて人目を避けて泣くは誰が子ぞ
○　金澤　山田はる子
小車のめぐりも早き世の中を我ひさぎ行く風車かな
○　淺草　藤波
うの花の垣ほのほとりけはひしてそと息かくる深見草哉
○　佐渡　谷川桂月

七重八重香さへ色さへなつかしき岸の山吹花さきてけり　能登　新保雪子

○

牧の子が草笛遠く春暮れて夕淋しく蛙なくなり　周防　佐保子

○

朝の江や爪美しき小蟹らが花藻めぐりて春を興がる　和泉　濵江子

○

夢聞きて昔戀しく泣きし夜の三日月落ちて時鳥鳴く　千葉　岩瀬信代

○

ほゝゑみに白きさ百合のそと落ちて五月雨ましぬいたづきの窓　南多摩　山村とき子

○

牛ねぶる小川の邊の木下かげとんぼとまれる繪美しき　赤坂　齋藤紫桂子

○

櫻花ゑみうつさんの君まさず初花折らむ思出の日や　仙臺　夏草女

○

夕まぐれねぐらに鳥のいそぐ時なき父君のしたはるゝかな　神奈川　鈴木りの子

螢

露ふかき畔の小道をさまよへば草葉の陰に螢いこへる　越中　春子

○

水と空かなたに君は居ますなり鷗のつばさ羨やしとこそ　周防　津田久子

○

面白く歌ふ童の駒ひきて歸る野道に五月雨ぞ降る　大阪　平尾とき子

花菖蒲

夢さめてふとうち見れば水ばんに獨咲き滿つ花菖蒲かな　神戸　足立あさ子

○

秋ならば雁のたよりのあるべきに訪ひ來し人も夏の草の戸　周防　津田久子

○

田植うたやれまど近く聞ゆなり節面白う風のまに〱　群馬　富田ふみ子

螢

蟲しげきいさゝ川邊のくさむらに夕涼しく螢とびこふ　牛込　ふみ子

○

鎌倉や聲よき漁歌のぬしはあらず松原小道春の月てる　越後　水野藤波

○

堪へかれて涙に袖を濡す哉昔を見する母のうつし繪　下野　眞月

○

たをやめの姿に似たりかきつばたなまめき匂ふ紫の色　長野　雪枝子

○

燈籠のみあかしもれて色淡く雨の今宵をなくほとゝぎす　牛込　宇井初子

梅雨

小やみなく降る梅雨のわびしさに友もなくしてものおもふ哉　東京　とき子

朝顔

朝起は今朝もまけたり朝顔の花のつとめの早くもある哉　失名

○

心にもかゝるうき雲はれてけふまつにうれしき月をみるかな　秋田　江間信枝

○

時なくに燃ゆる薔薇の花一つ得ずと覺えて夢さめにけり　岩代　よれ子

峯春月

よし野山はれくもりせる高ねより匂ひ出てたる春の夜の月　神戸　徳永みれ子

梅雨

ほし影にたのみのあだとなりてよりけふも降りけり今日もふりけり　安藝　すみれ

○

春の夢さめて若葉の夏初めつばめ訪ひ來るあばらやの軒　宮城　秋月女

憂ふる友に

飛鳥川ふちせつれなきこの世をばなどてや神のつくりましけん　茨城　長谷川霞子

○

雪をふみて訪へば千波の碑の邊り朝日かゞやき白梅薫る　筑前　沖水子

○

美しき胡蝶の彩羽に夢のせて翔けてもみたき春の若柴野　上野　今井月光

○

夕ぐれをひづめの音高き丸木橋かはゆき小馬あとしたひ行く　廣島　鉄岡ちと子

雨

逝春の名殘の笛の低ふなりて櫻葉となり妹逝きけり　栃木　濟子

夕ぐれにそぼふる雨はしめやかにほのかに見ゆる白杜鵑花かな
○　千葉　大村すみ子
あけやすきひと夜をわかき詩賦してなみだ溢れぬ亡き乳母が里
白百合　東京　靜香
ながもてる清き香をわかちてよ神のみむれをときし白百合
○　鹿兒島　秀子
なつかしき故郷遠く霞立ち今日は墨田に舟の音きく
○　三河　山田久枝
ゆりかごに搖られてねむる幼兒の夢路を安く神よ守らせ
多武峯にて　大和　中島美枝子
風すこし楓そよがせ朱の欄の几帳を吹きぬ夏の朝あけ
○　備中　溪吟子
桃の花織く小山に寺ありて白鳩あまた飛べるほの見ゆ
○　備中　佐藤郁子
摘草に興じの少女がよき歌に出ずる月姫朧なるかな
○　水戸　芳江
聖瀧の奇菜がかげに屑の根もうすら涼しう詩筆とる人
○　丹波　なみ子
君と二人眞夏の光背に浴びて鎭守の森に清水くみしが
○　備中　白百合
藥鼎の煙靜かに夜は更けてかたむく月にかりがねのなく
○　八王子　中村文子
ゆふ餉の牛乳あたゝむる人の子の胸に響きて淋う見えぬ
○　明石　みどり
音もなう小瓶のうばらくづれけり追懷に泣く逝く春の宵
○　兵庫　田淵藤子
雨やまだうすぐらき森蔭に紫ゆらぐあやめ花さく
五月雨にあきて　播磨　吉田翠子
友つどひ文よむひまのあまりてし思ひ出ずるは道長のわざ
○　岩代　根本松江
葉ざくらの小窓に寄りて聞きにける琴の音細し春雨の宿
○　上野　好月
都にと行きにし友をこふるかな書にあきたる五月雨のまど
○　小石川　小林てる子
人しれず稀に逢ふ夜を有明の月かたぶきて秋風ぞ吹く
歸雁　埼玉　船津千代子
書き流す文とも見えて墨染の夕べに歸る雁の一むれ
○　小石川　千里
昨日より鹿ぞ鳴なるこれよりや今歳も秋は悲しかるらん
○　徳島　岡田白梅
蚊遣火に擊も漸くしづまりてあちらこちらに落つる蚊の音
○　山口　才子
春雨に松の落葉のかさなりてしば〳〵ゆらぎ谷の小川て
春曙　茨城　岩田清子
櫻咲く高根の花にあけそめてかた山暗き春の曙
○　山形　良子
大海のあらなみ知らぬ舟なれど沖をたよりにこぎ出てゝみむ
○　常陸　大和田清子
鐵もとろけん程のこの暑さ蟬のなく音もあはれなりけり
○　名古屋　林田秀子
年毎につぼみまさらむこの花の名もうるはしの糸櫻かな
田園　武藏　青柳彌生子
雨にほふ里の小川の石橋の下をつばきの花ながれ行く
夏草　丹波　白薔薇女史
見る人もなくてしげれる夏草や我宿の葉のたぐひならまし
水邊螢　上總　北田靜子
行く水の音を聞くだに涼しきをそよ吹く風に螢とぶなり
○　紀伊　花月女
暑さをばさけんと思ひ叢近く住めばやぶ蚊にせめられにけり
落花　佐賀　わかば子
一陣の風にちりけりいさぎよく大和心の山櫻花
○　赤坂　井上ますゑ
春の宵大臣の召しに君と二人朱欄の階段昇ると夢みぬ

文學士 沼波瓊音先生選

抒情文

天

○あはれ牛の兒

薩摩きく子

降り續く五月雨の空、雲の行方を打守りつゝ妾は學び屋の玻璃窓より向ひの小高き翠の色鮮かなる小岡に目を注ぎぬ、細雨蕭々として草木の影淡し。

柳烟りて炊烟低うさまよへる茅屋の木の間より見ゆるあたり青草の中に黑う蓄けるは何やらんとしばし凝視しぬ。

あはれそは小牛の立てるなりき、雨はいかに彼が身に降りそゝぐらん、温き黑の毛衣をや濕すらん、されど小牛は動かず只尾のみ折々打ち振りて何を思ふやつくづくと草の雨を眺めぬ。

あはれ汝は何時何處の空よりたらちねの温き膝下、甘き乳房を離れて今の深き物思にや沈む、はた汝が母の賣られしを人の子情なしと己が伏戸にも歸らでかく雨にそぼつか、思へば果敢なき汝が運命かな。

されど暫くを止めよ汝は今自然の神の織りませし青草の中暖かき夢結ぶを得るにあらずや定めなきは此浮世の常なるを。

雨は止みぬ小牛はやうやく頭を上げて下なる細道を眺めぬ。

其處には老いし牝牛の作り男に索かれつゝ子や尋ぬらんもーと二聲三聲——

小牛は耳立てぬ、されど其影は村へと消え去りぬ。

假に蛙の叫び若葉に起り雨ははげしく降り出ぬ、向ひの岡も烟りて見へず、たゞ軒の點滴のみ音高し。

顧れば室内淡暗く暮れの幕はや下り初めぬらし。

窓閉めんとする折柄彼方に幽かに細う悲しげに鳴く小牛の聲。

（評）小牛の淋しげなる姿あり〱と見ゆ。

地

○落日に對して

津市西新町三九、松尾花子

明治三十九年五月卅一日の夕、妾は村端れの思出多い見返り橋の欄に倚つて靜かに夕日に對して瞑想に耽つたのであつた。

初夏の永い日も早や經ケ峰の頂きに舂つき初めて、其「日」のむら〱と燃え立つのに凝乎と見入ると目が眩ゆくてぼうつとする。あゝ春は既に逝つた。

「菜の花や月は東に日は西に」と歌うたのも夢？、菜の花は已に地に墮ちた。田面に落ちる夕雲雀の影も見えぬ、蝶の優しい羽衣も飜らぬ。見る限り田面は只黄色に、其涯の邊りには滴る計りの青葉の丘が若々しくつゞいて居る。橋の下には白い河原が連なつてさら／＼と小石を舐めて行く清い水に小魚の跳ねるのも瞰はれる。

日は其影を今や山巓に橫たへたのである。

妾はふと橋…君と手を分つた此橋の事から東の空にある親しい友美津子樣のことを思つた。懷しい友は今如何して居られるだらう。理想の音樂學校に入られたのであるから今頃は嘸嬉しさに微笑むで居られるであらう？あるは不甲斐ない妾…と思ひ至ると冷りと襟元を過ぎた夕風に思はず慄然として眸を上げた。

日は今已に其中を巓に、くら／＼と眩く燃えて居る。

妾はふと夕日を仰いで微笑まれた。妾は神聖な小學校に教鞭を取る身ではないか。邪氣のない兒女を友に樂く活くる教育者ではないか。妾は年老いませし義理ある慈母と平和な此村里に自然を友として樂しく暮さう。妾は正に安心立命の地に達したのであるまいか。と考へ至ると何となく嬉しく喜ばしい氣に身を振はして生々と再び夕日を仰いだ。

日は今や全く沈まうとして小さい寶石程に燿いたが、それも吸ひ込まれる樣に落ちたかと思ふと、ぱつと吐き出す金色の光焰!!　西の空一帶は希望の光に照り燿いた。

「まア先生……」

見恍れて居た妾の手に不意にすがつた女の子の聲に、はつと振回ると妾の常に愛しがる教へ子の美代ちやん妾は犇と抱き締めて心行く計り頰ずりした。

「さア美代ちやん、行きませう……」、手を取合つて二人が歩み出た時、後より送る樣に響く瑞眞寺の夕鐘！

妾は今夕ばかりは身に泌々と嬉しく聞いたのである。

（評）かく悟るが尊き悟なるとを余も近頃悟れり。

（人）

○夏の深林

横濱　花舟子

一

漣よする小川の畔にたゞずみ、草樹茂る野原の間をさまよひて、平靜なる纖細の美を感ずるものは、深林の間に入りて、如何のおもひをか抱くらむ。おぼろげにして、くしきおもひか、さわやかに、こゝろよきおもひか。そが緑濃かにして、陰闇の色彩を投射するところ、そもいかにわれ等の感想を形造るか。

二

われは海を愛せり。そが快活にして豪壮なる風趣は、雄々しき丈夫に接するが如き感想をおこさしむ。われはかく快濶なる海をめぐると共に陰闇にして幽奥なそ面影を現在せる深林の風致をしたふなり。あゝ夏の深林！、わが初めてたゞずみしは、七月十八日の午後なりき。われは、學校の泉聲綠蔭にあきて、それがしの社なる深林にたどり入りぬ。古雅なる社の風致は、深林に一歩を踏み分け入るゝわれに、くしき感想をあたへたりき。

三

一種の靈氣、そは何と名づくべきかを知らず。しめやかなる氣のかをり、まづわが嗅感を刺戟して、古殿堂のうちにたゞずむらむやうなる心地せしむると同時に、氷の如くひやゝけき空氣は、衣をとほして、水の如し。われは、おぼえず慄然として襟をあはせたりき。あゝこのしめやかなるにほひ、ひやゝけき空氣、こは他に求むべからざるところにあらずや、われは、おもふまゝにそが氣をあび、そがにほひをかぎ、かくて一わたり深林の光景を見わたしぬ。



まだ降つてゝ（賞外）下谷西黒門町　山田貞子

四

何ものゝ彫刻ぞ。この絶大なる畵圖を彫り出でたる。數丈にあまれるたかき杉の樹は、矗々として天のあたりを摩すべく衝き出でたり。その數は、幾百本にも餘りて、こまやかなる綠と、したゝるばかりなり翠の色は、寧ろ黑きやうに見えて、そが樹下の空間は、陰暗なる輪廓を引きわたせり。そが輪廓は、木の間をもるゝ一線の日光と共に、厚き苔の上に、いろ〳〵なる幻像をうつして、風ふくごとに、影と影と、光と光と、交參錯雜せるを見たりき。

五

わが脚下には、むせぶやうなる虫の聲、かすかに聞えて、芳草はゆらゆらと風になびけり。島崎藤村が『深林の逍遙』が優麗なる詩才を煥發したることを聯念しつゝ、われは一種の默想にふけりぬ。おもへらく、海濤の狂激なる戰闘と、深林の幽奥なる色彩とは、消極、積極の絶對なる兩極の區劃を示すものなるべし。そはいかにと云ふに、わが海濤を望みたるときの心は、退きて守り、潜みて養ふの狀にあらず

して、進んで世と戰ひ、社會と戰ひ、惡鬼と戰ひて、おのが刃に血ぬらではやまじとのみおもはれたりき、されど深林の間にさまよひては、さきの侵畧的思潮は跡方もなく消えゆきて、おのづから深き反省に沈むなり。かれとこれとの大なるけぢめにして、即ち、消極と積極の絕對なる二極の區劃を表せるものにあらずや。

六

われは今、消極の色相を帶べる深林にたゞずみて、さながらとほく世も隔離せるが如く思ひぬ。わが眼にうつるものは、人にあらず、家にあらず、畑にあらず、藁屋にあらずして、滿目悉く濃綠の樹木にあらずや。のみならず、車馬の喧雜、炎日の懊惱、この二個の苦悶は、また〳〵そが跡をたてるにあらずや。もし音と云ふ音、聲と云ふ聲ありとせば、そは廣き空間をわたりゆく微風のさゝやきなり。そは、芳草の間にむせぶ虫の聲なり。

微風と虫聲の二つは、太靜なる深林のうちに、一しほのさびしさを加へ、一しほの幽韻をそへぬ。若し人ありて、噫！と叫ぶものあらば、そは深林の樹々にとりては、おどろくべき千古の大絕叫なりとやせむ。

七

夏の炎熱は、人をも、石をも、木をも、草をも、一襲の下に燒きつくさむとするのとき、飄然として深林の中に徘徊ひ入れば、わが亂れたる思想、けがれたる幻華、それ等はかき消すやうに亡びて、一種のしづかなる精神に復歸すべし。

われ、今、そを自ら味へるなり。

夏よ、汝は罪惡の子を孕む惡母なり。汚濁の影を生ぜしむべき毒草なり。汝が人心を惑はして、利の奴たらしめ、名の僕たらしめ、詐りをよろこばしめ、不正につかしめんとするのとき、人の心は、さながら蜂の巢の如く、さま〴〵なる缺陷の穴を造り出でゝ、そが上に糞汁を塗りたらむやうなる醜惡の姿を現はすを常とす。このおそろしき誘惑の谷にさまよへるとき、醒覺の冷かなる風をもたらすものは、深林なり。

わが誌友よ、

深林をわたりゆく風の聲に耳をかたむけよ。

何ものかわれにさゝやき、われに告白するものあるに似たり。

八

利、何ものぞ、黃金、何ものぞ。

利は一時の影にして損敗のはじめにあらずや。名は泡沫の幻華にして、瞬間の虛榮にあらずや。

あはれなる人の子よ。

そも汝は一時の影を趁はんがために、何ものをも犧牲に供せむとするか、泡沫の幻華を捕へんがために全力

を賭せむとするか。汝はある方法のあやしき道をたどりて、一時に名と利とにいさめ得とも、やがて汝はそが犠牲として社會に忘れらるゝ時あるを知らざるか、あはれなるものよ。

風一陣、わが頭上にわたりて、そが囁は破れぬ。

九

われにかへりて、あたりを見まわせば、夕べの神は、既に此深林にも音づれ給ひつるにやありけむ、黄金の光線と、眞紅の色彩とは、あざやかに青苔を彩り、芳草を彩り、樹と云ふ樹、葉と云ふ葉、いづれも紅ゐに、黄金色に、絢彩せられて、燦たり、爛たり。風颯とすぎゆくのとき、樹そよぎ、葉ゆらぎ、虫聲和して涼氣は、わが肺腑にとほりぬ。

なつかしきは、夏の森林にあらずや。

（評）想高く意深し文に不熟の所あるを惜む。

秀逸

○ひとり言

福岡　古川春子

あなあやしみ山の寺の鐘の音は、諸行無常の響して、春野の朝の花の色は、生者必滅の理を示せり、あはれや妾は、おきふし國分寺の鐘を聞き錦ヶ原の花を眺むれど、さる思をおこしゝ事のなきに、世の中の人には何故にさばかり悲しく思はるゝにや。凡て世は生れず滅びず、垢つかず淨からず、増さず減らざるものと聞く世には無常はなきものを、もろきは人の心にて窓の戸打てる雨の夜半、もみぢ葉色どる霜の朝、あるにもあらぬ思ひして、さては此の世を歎きつゝ、ちる紅葉に無常を悟り軒端の淋しき雨の音に寂滅爲樂を覺ゆるなり、其悟とて其の元は迷ひより迷ひ出てたる迷ひなり。されば悟も悟かは春花秋月觀じ來ればうはべに生滅の色を粧へど內には不滅の春をこそ隱したれ、されば妾等の心身もいかで此理を逃るべき、たとひ無垢の初めより生きながらへし人なしとは云へ、天地に備はる靈魂は更に變動すべくもあらずかし、あな人間の生滅よ！大海原の水の泡！あな人生の消長よ！田毎にうつる月の影！影は元より影なめり、泡は元より泡なめり、されど眞如法性の水なくば、あはれ生滅無常の波も立つまじ、泡となり影となり茫然此世に出づる元より天命にこそ柳は綠花は紅にあなあやしの天命よ！されば人の命は火を取り刃を踏めとにもあらず、木によりて魚を求めよとにもあらずかし、唯老いたるものを安じ、若きものを育て、時を知り所を知りて、己を行ふ可し。

されど世は、月に浮雲の患あり、梢は靜まらんとして風やみ難く、人強くして天命に勝ち、邪強くして正に

勝つ、正邪相鬪つて何れとも分け難し。嗚呼。

(評) 悟らむとして悟り得ざる所ある却て味あり。

○神秘の扉

京都　花瑩女

あゝ我がなつかしき神秘のとびら!

そが裡には、赤き血潮の、湧くが如きもあるべく、すべてのもの?を、とかさんの情熱、もゆるが如きもあるべし、かくてなつかしき戀、そのものゝかげも必ずやひそめるならむ。

あゝ、我が胸の神秘のとびら、ひらかむ時は、すでに來たれるを!、神は、我れにのみつれなくてや、はた、我れに罪ありとや、ひらかむとせしとびらをおさへて、「…」何事をかさゝやき給ひしが、おそれにおそれし時は來りて、果然!、なつかしきとびらは、神の御手にて作られたりけむいみじき鍵もて、とこしなへに、とざゝれをはりぬ。

あゝ、血と、涙と、戀と、快樂と、希望と。——、青春の人のもてるすべてのもの、——、とぢこめられたるそれ!、我れは、身も世もあらず、なつかしとおもほゆるよ…。

年若き我れ!、寂寞と、うらみとを、友として、いづこと、はてもなき久遠の旅を、いかにすべき!!

(評) 新體詩の趣あり。

○盂蘭盆

麹町　柴崎富美子

七月十六日墓參の途次、日暮れて赤羽閻魔堂の邊りを過ぐ。天には無數の星のきらめき、地は燒く許り露店の燈火、中に凉しき辨天の池水は、蓮葉の間々に天地の光りを合せ浮べて左ながら人を救ふ浄土の如し。おでん、虫賣、今川燒、氷屋、菓子屋、見世物小屋、鐘太鼓、じやんじやら三味線、常には風韻淸き山内も今宵は流石閻魔の祭りとて一面の修羅場、火煙渦卷き立ち魔風吹きまはす凄まじき中を、辛く遁れて公園は二十五號、目指す寺院の前に着きぬ、石垣高く積み廻らしたる中を進みて樹立の繁みを本堂の方へ分くれば火影夢の如く洩れて仄かに讀經の聲す、夜なれば音なはず、忍びて直ちに墓地に向ふ、墓地は本堂裏椽の右方にあり、更けたるにあらねど墓場の夜るは、幾百の魂四方に立ち迷ふ心地して只ならぬ淋しさ、寺院を掩ふ後ろの山より、老杉か古檜か眞黑に繁りて物凄く天を包みて聳ゆ、見分け難き無數の石塊、斜にかゝるなやましげな卒塔婆、何處からともなく傳ふる線香の匂ひや、供花のかをりや死の氣も添ひて、重い冷たい空氣の中を押し分くる樣に探り曲りて垣も亂るゝ地界際なる戀しき墓前に我れは立ちぬ。此の墓の下にぞ懷しき父は在す。今前に在りと思へば心を衝いて出る生前

の面影、彼の溫容、斯も言はれし斯もありし、海嶽の恩は殘れ共、幽明を隔つ身の奈何にすべき、人靈誠に不滅ならば、今こゝに泣く幸無き姿と、何處よりか父は見守り給ふらむ。胸迫り唇はふるへて、はら／＼と淚は手向けの樒薬をすべりて薫ずる香のほとりに落ちたり。天地ひそめき夜氣身邊に迫れば只味氣ない淋しい思ひが總身に浸み渡り、去るに去られず無形の絆に迷うて怪しくも亂るゝ其時、冷やかな墓畔の寂寞を透して遙に聞ゆる斷續のひゞき。

「お迎ひ／＼、おむかあ――い。」

（評）初に喧騷を寫し終に幽寂を寫す。

○病

仙臺　高木いち子

盛り過ぎたる菜の花の、ほろ／＼と夕風に散るならば生ある人の子の死をもわれは恨みじを、世に生れしとばかりの肩上げの、此儘に逝かんには、餘りに幸なかるべきやなど、思ひつゞくれば、今朝の事ども又胸に浮かびつ。

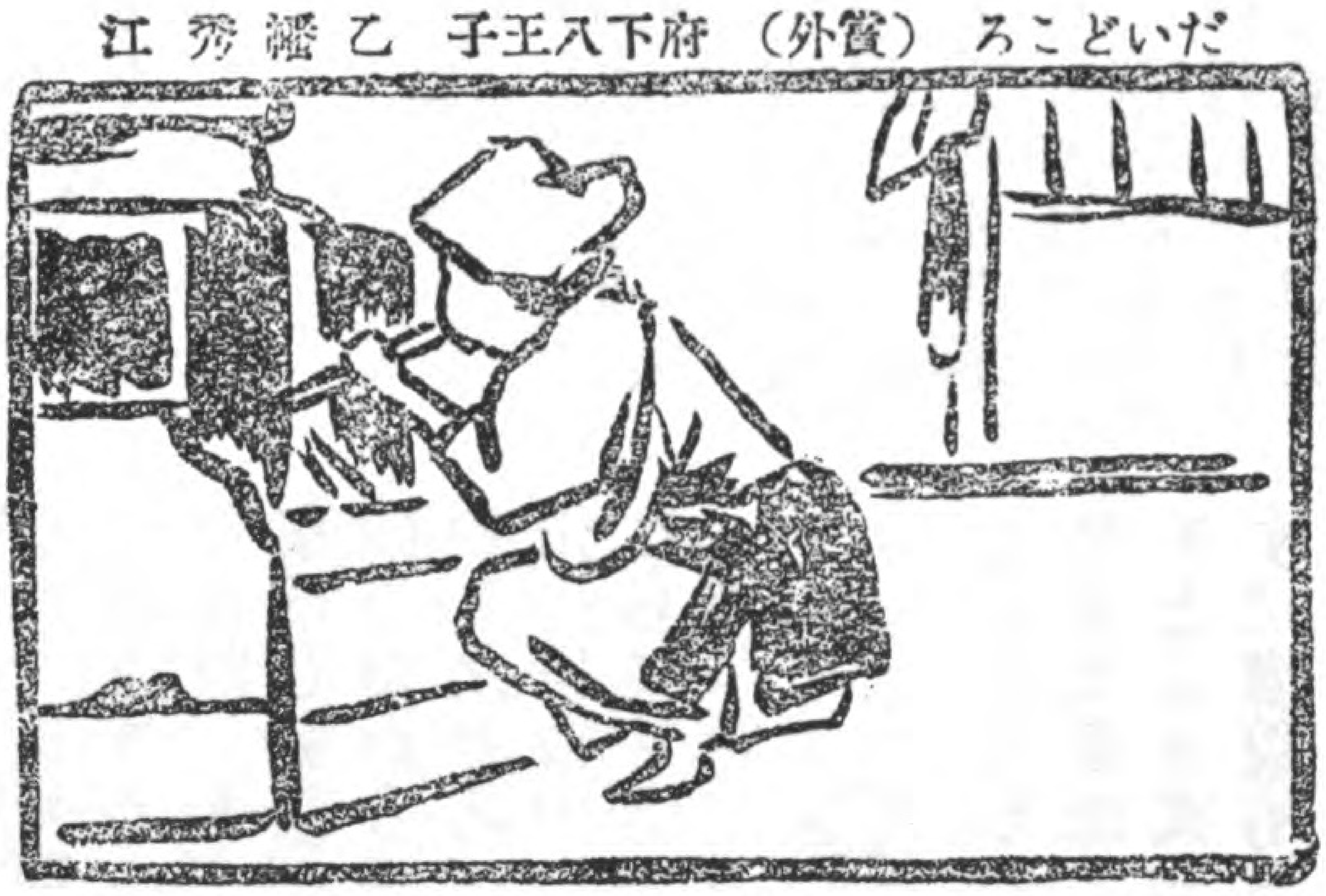
隣りの寢臺に腦膜炎とやらにて伏し給ひし初厄の眉麗はしき君、昨夜より病革りぬとて枕頭に父母の君見えつれど、花の都に物學びしたまふとかの許嫁の人、道遠ければ後れましぬ、藺髯の凛々しき秀れたる面に無限の愁を湛へて其處の扉を押し給ひし時は早や屛風を立てまはせる後なりき、いかに口惜しかりけむ、もの一つのたまはず、唇かみて淚ぐみたまへるおん俤、見るからに胸せまりてはら／＼と淚こぼれぬ。

腕組みて俯首れ給ふ父君、打ち伏してすゝり泣きし給ふ母上、夢の如く淡き病院の此の朝は、實に聖寂のきはみなりき。

得堪へずなりて、我れ、枕移さんにも等しく病の身なり、疾かれ、遲かれ、同じ道辿るべき身の、ならば八重山椿、苦もなうほろりとこぼれ落ちん願とは、神恨めしく、運命ねたしとのわがひがみよりや出でたりけむ。

何事とは知らず、電燈ほの暗ううすれゆきぬ。

ふと氣付けば、悄然と枕許に立ち連なれる幻ろしの人々、うなだれたれば其面よく見分くべくもあらず、男、女、老いたる、若き、皆此の寢臺にて世を去りし方々なるべきか、ひた／＼と四邊に蔽ひかさなりて、われいよ／＼暗き底に沈みゆくが如く、恐ろしき事云ふばかりなし、あはれ、此のまゝにて果つべき



だいどころ（賞外）府下八王子　乙　潘秀江

宿世持ちたりし身か。

忽ち物の響に灯火明るくなりて、冷汗の夢よりわれは覺めたるなり。

室廣ければ隅々に光屆かず、おぼろ／＼の藥の香低く漂うて、眠り安からぬ人のうめきの微かに聞えつ、戸外は若葉の雨なるべし、暑きほどに寢苦るしき一夜なるかな。

（評）凄絶。

○郵便脚夫

鳥取　上山千重子

郵便脚夫！如何にもそれは床しい名稱ではありませんか、また私は思ひます、其使命の如何に清きかを！。人として此の世に生れ出るや、それ／＼一つの使命を帶びてゐますが、此使命の、より大なるを思へば、そぞろ嬉しさに堪へませんので、あながちに私の郵便脚夫なるよりのひが眼ではありません。私はいつでもこんなふうに考へて、悲しい自分の野心を、清い心からのぞく事を勉めてゐます、否全く我身をいけにへとして、此床しい使命に終らん事を祈つてゐますよ。御覽なさい、此大なるトランクの中には、幾千の人の運命を左右すべき材料を貯へてゐるでせう、故に私は何處に行つても歡迎されます。露しげき朝であつた、私は新らしい空氣に昨日疲れた體を復活させて、勢よくとある柴の戸叩き、郵便と大呼すると、「ハイ」と可愛ゆい聲先立てゝ、アタフタと走り出た花のやうな人、私の差し出す封書を眞白の手でかゝへて、さも嬉しさうに微笑した其の頰、心持ちほど紅したと私はおもひました、其折何となく私までほゝゑまれました。さて暮の鐘うするゝ彩雲にわたりて、夕月淡う山の端からのぞく時、かぶき門をくゞつて、例の如く大呼すると見なれし書生「オー」と答へてひざまづいたがャ僕にか、國の母から書留だよ「君御苦勞！」と、妙な所で感謝のこゑをあびせられつ、此樣な愉快な時はない。が澤山の信書中には、あはれな訪れも少くはない。また道ならぬ音信もあるであらうしかもそれも使命だ!?

（評）恬淡。

○猜忌心

伊勢　きみ子

あゝ恐ろしの名に候はずや。吾れは人の猜みの犧牲となりて理想も遂に幽冥遠き彼の地に走り候ひぬ。吾れもとより文才人に勝れしに非ず、品性の氣高きにも非ず、容貌も又美にして衆に秀でたるには中々に候はねど、心身の高潔のみは獨り人に劣らざるにあな情なの人心や、何に恨みのあるとも分かず、只いたづらに罪なき處女の名譽を犯して何の與かある、富貴になるに非ず、幸福あるにあらず、あゝうたてしともうたてや高山ならずして人の目に映り高木ならずして暴き風に

當る、夢なれや世の中は、我れも女なる身の胸のせまさは世の乙女に異ならず、果敢なしと思し玉ふな、淺間しと笑ひ玉ふな、女の一念恐ろしくも七代迄、深く深く〳〵恨みてけるを知るや知らずや、嗚呼知りての夜半の寢醒め床に、凄き姿の笑み。思ひ浮べられ候ては、流石に胸苦しう候はん。かくて吾れは人の口のさがなさに、遂に書籍の虫となりぬ。配所の月も罪なければ淸く美し、さはいへど、永き月日の雲もかゝれば雨もそゝぐなるを、ましてうら若き艶人の、花見衣袖ふりはへ、櫻かざして行く樣を見れば、不覺の涙止め得ず、嗚呼と靑春の血は一時に燃えて、いよゝ其の人惡う恨めしう、流石に崩す憤怒の思ひ、なか〳〵に堪ふべうもあらず。今更に男の子の身羨ましう繰り返しぬ。あな恐ろしの人心よ、例ひ巖を貫く矢はなくとも、如何で悔しき恨み他に走すべき、吾れは永く心して汝等が行末をうち守んのみ。

（評）かゝる憤りも經驗の一なり然り冷やかなる經驗として回想の種となるのみ。

○老牧師

若狹　渡邊聖菫子

吾が聖堂の春長けて落花片々庭裡に堆し蕭々たる夕風に樹梢いよ〳〵疎なり燈火儼に聖壇のあたりを照して堂のみいとゞ幽玄の氣に充ちぬ溫乎たる風貌の中にも自づと敬虔の相を帶びたる老牧師は今し微笑を湛へつつ心置かぬ敎徒ら誰かれと圓居して今宵は過ぎにし己が昔語りし參らせむと暮れ行く夕にしづけき物語り、吾やもと葦が散る難波の片阪に生ひいでしが早う双親を失ひぬる身の便らむ者さへなしうたてき世辛き世この情なき世に生きて味氣なしか弱き吾が身の行く末はいかならむと幼心の千々に亂れては麻の如く樂しかるべき少年の頃をさはなくて日夜悲哀に泣き懊惱に悶え小さき胸は搔き挘らるべう覺え唯潛然として人なき木立の片かげに父慕しく母戀しく天を仰ぎてはよゝと泣き入るを常としき斯くて壯佼となり孤獨の情狷介の性はいよ〳〵つのりて世の人並べて怖ろしう不遍を喞たむ友もなし苦衷を洩すに處もなければ果ては一掬の酒醺に滿腔の憂憤を忘れむとはしぬいつしか習ひは性となりて終日たゞ酒にのみ沈湎しぬ時は朔風吹き荒ぶ嚴冬の夕なりき稜々膚を裂き骨を刺す酷寒に堪へで例の酒廛に暖を掬して苦痛を忘れむとせしが囊裡のもの空しかりければ着たるを剝ぎて料に代へ急ぎ酒店に走りける折しもはら〳〵と降りいでし白雪に今は早や手足凍えむと覺えて步みも能はずなりければ傍なる敎會の檐下に彳みて辛くも寒を避けつ天地寂々たる夜の空に玻璃窓を洩れ出る歌の音聞くともなし吾は耳を傾けぬ妙に嚴なる讃美の歌つゞきたるに汨然吾を忘れて聞き行く中不思議や寒むさならで渾身のわな〳〵と打ち震

ひ來し方の罪とがそら恐しく悔恨と感謝の涙双頰に滴りぬあゝかくて吾は長夜の夢より覺めぬ、その夜會堂の牧師を賴みて慈愛深き神の御子となり終生を神に捧げて聖壇恒に祟ら所倦まず撓まず神の敎を宣べ傳へばと志しぬ、由なき物語に夜も更長けつらむさらば人々倶に讃美の歌高く唱へて愛滋き家路に歸らむ哉。

（評）淸き物語。

◎今の身

名古屋　宮脇俊子

執心なりし白川染の帶上げ、辛と昨日買うて頂きぬ。さらばと、今なすともあらぬ身の、いで縫ひ置きてむと取出しが。と思へば、それよ开が心は古きにて事足ればと、敢て啓といふにはあられど、妾捨てむともみし今までの帶上、取出て糸解きやれば。おゝ忘れ居し、否忘るゝも道理や。今は人妻、そは、數多きざれ男〳〵が文殼にて。うき川竹のつとめの身夜毎に纏る枕の數のうさつらさの涙のうちに一年を經て、去年こそ樣がみなさけにひかされたりしが。そのかみ妾に送りし文々。あへてそれの戀しとにはあらず、妾おかしうもそを襟(?)ひげつ、ひとつ一つに讀みもて行けば…… 時、驚きぬ、さとうしろの襖開かれたるに、淺ましや、妾ひげし文を秘めんとしたる。あゝその心、われながら今解き得ざるを。嫣然、振返れば、それよ片頰に笑の刻まれたる、あゝ背の君の立ち姿。徒の、黑髮長きあゝ此うれひ、今の身よ。

◎溪流の畔に立ちて

相摸　野田さだ子

山は緑の葉もて包まれ、野には麥漸く黄ばみて之れより又炎暑に向はんとす、さらば一日を緑翠の陰、溪流の畔に浩然の氣を養はんとこゝ早川のほとりにさすらひいてぬ。

あはれ淸きさゝ川の調はとこしへに老いずして春は昨日の春ならず、澄みて流るゝ水の面に、己が姿をうつしてはひとり笑みけん花すみれ、そが美くしき紫はいつしか雨に色あせて、緣もふかき草の葉の今は岸べに生ひ茂り戀にはなれしあはれの蝶は、やつれし翅の力もなげに見果てぬ夢の後おひ行くか。

それよ、去年の今日睦まじき百合子の、君と、唆き若葉の野べをさすらひてやさしき神のみひざの下に天女の樂をきくがごと、たかき雲雀のうたごゑにうれひ忘れて遊びしを今は君逝きていまさず、思へば夢の如かるよ。

かつて我れ母の懷に抱かれて夜のお伽に聞きし桃太郎の古る事を思ひ出て、もしや我が戀ひ慕ふ百合子の君は夫れの桃になり給ひて流れ來ますかと只管谷川の上流にのみ目を注ぎぬ。されど〳〵何條さる桃の實の流れ來べき理由あらん、たゞ心なき水の流れは珊々たる欷を諳ひつゝ、流れ流れてわが前を過り去るのみ。

噫、谷川の流れよ。心なき水の流れよ。百千萬年の其の昔より此處の谷川を流れ流れて、終古變ぜざるは抑も何が故ぞや、桃太郎を流し來たりしも汝、片々たる落花を載せしも汝、さるに汝谷川は何とて百合子の君を流し來らざる、なきわぶる我れのあるを知らざるか、噫、谷川の流れよ。汝程奇しきものは世にあらじ。

花は再びさきかへりて香ばしく、水は流れ盡きずしていつも珊々たるを、人は逝きて又歸らず思へばはかなき人生よ。

「なげき給ふな、さだ子の君よ。我れ谷川の流れ、流れて君がみなげきを、ミユーズの下に遊び給ふ百合子の君に告げまゐらせん、さらば貞子の君よ。

珊々たる水の聲は遙かの蓮村に纏れ〳〵に沒し去りて更に聲なし。

オゝさらば汝、谷川の流れよ、わがなげきを百合子の君に告げ給ふか、さらばわれ又來ん日曜に百合子の君のかへりごともたらす汝れに、ことはん、さらば谷川よ。噫さらば。

巖谷小波先生選



特別第一賞

菊持ちて馬におくるゝ舍人かな　土佐國越知町　景石女史

〔評〕一幅土佐畫の名筆を見るが如し、眞個に淸艷。

特別第二賞

門口の糸瓜に留守と書きにけり　常陸　五月雨女史

〔評〕蓋し俳諧中の傑物、何等の洒脫。

特別第三賞

さゞ波や滋賀の旅籠の蜆汁　奈良市押上町　ふぢ波

〔評〕此はまた廣重の道中畫とや見ん、巧緻可誦。

天

青すだれ聊か貧を飾りけり　奈良市手貝通　一里塚女

〔評〕中七貧を飾り得て妙。

地

尼となる女美くし芥子の寺　牛込　河村綾子

〔評〕技巧又棄る可らず。

人

若葉して靜な雨のつゞきけり　近江　原野笹子

〔評〕幽玄の體を得たり。

秀逸

掛香や遊び女ながら歌も詠む　奈良　白藤女
馬つなぐ酒屋の門の緋桃かな　群馬　吉田きみ子
煩惱の蚊にくはれけり籠堂　越後　藤原黑子
春の雨美しき人通りけり　飛驒　竹原千鶴子
藥櫻や死にそこなひし人のすむ　越後　ゆき子
五戸の村青田の中に暮にけり　中頸城　藤原春子
山寺は木魚に暮れて螢かな　越後　菊子
むく起の面吹るゝ青田かな　寺野　石田喜子
桃散りて小村淋しくなりにけり　陸前　畠山稞石子
旅人になる日から着る浴衣かな　大坂　芳女
給日傘やうれしさうなる立ち話　下總　酒井ふみえ
晴着縫ふ人うら若し初幟　岡山　三村純子
濡れまじと筏に蝶の揚羽かな　肥前　黑岩きい子
高き家に秋晴の日を登りけり　麴町　原田はな車

覗かれて初鐵漿隱す日傘哉　豐後　金色麗子
道端に土瓶ころげて麥の秋　千葉　鈴木醇子
歸省して先づ瓜畑を見舞ひ兒　秋田　大越幹子
去し師の紀念を白き芙蓉かな　上毛　殘月女
世を捨てし庵とは見へぬ牡丹かな　千葉　渡辺のぶ子
桐さくや目付屋敷の壁つゞき　和泉　天堀奘子
夕立や小犬の吠える椽の下　神戸　小枝子
紅蹴踊女あるじの運句かな　豐後　艶子女史
日盛の靴のかたきを恨かな　上總　小川くに子
夕立や酒屋の門のつなぎ馬　久留米　峯子
葉櫻や役場の時計二時を打つ　廣島　かへる子
夕顔や垣根に干せし釣瓶繩　松山　岩崎きよ子
葉柳や雨の潮來の十二橋　豐後　花井のぶ子
ほろがやを覗けば小さき肝かな　群馬　五十貝すゑ子
春雨や山吹落す夜の音　安藝　兒玉靜川
矢の如く筏すぎたり夏の月　岩代　岸野常子
苗代や小川の水のさゝにごり　攝津　和久蓮子
病む妹の蚊帳に螢放ちけり　上毛　眞砂かつ子
蚤すてる律師もおはす旅宿かな　三重　山本ふじ子
池ありて薫風園の蟬時雨　名古屋　宮脇倹子
糸遊に曳き船おそき日和かな　常陸　川並はな子
笹の葉に鮎を生けたる淸水かな　長崎　坂梨初音
蚊柱や馬引き入れる暮の川　石見　屋の子
四行は蝿打つてより坊主哉　横濱　落花一片
宣長に花の標のかゝり鬼　下總　平川芳子
打水のあとは謡曲となりにけり　羽後　渡部宮子
馬放つ堤にあやめさかりなり　小石川　佐川貞子
撫子の一本長し朝の庭　堺　竹曳文子
長男の遺骨つきけり麥の秋　松山　白露子
夕顔の宿に城主の微行かな　陸前　尾形千代子
白藤や雨滑に紬が宿　備前　柴田菅子

五月雨や京の灯遠き山の寺　千葉　高山千鳥子
明月や淺黄に銀の一とつ紋　常陸　大川きく子
集りて解剖室の暑さかな　小樽　岩谷綠子
名物の看版古りぬ桃の花　群馬　飯塚美起子
茶筌賣卯の花垣に呼ばれけり　松山　仲山時子
娘のみ五人並びぬ凉み臺　信濃　山浦とく子
白百合に物云ひ顔の狂女かな　弘前　翠坡女
春の日や傘並べほす宿のうら　伊勢　佐藤しずま
春風や櫻が下の二頭馬車　美濃　坪内淸枝
夕立やはだかでぬるゝ磯の人　神戸　樋口小枝子
夕顔や故人の軒に草鞋とく　陸前　大槻香村
雨俄か總ぶれ亂るゝ舞かな　武藏　牧野八重子
箱庭の富士より高しほたる草　群馬　せゝらぎ
朧月よき人の顔てらしけり　淡路　伊藤綾子
金魚屋の聲なつかしき微風かな　茨城　秋山隆子
硯洗ふ脊戸の小川や水馬　大坂　瀧田きみ子
子寶の門賑しき凉みかな　大分　原田ます子
傘並ぶ二里の渡しや夏の雨　芝　村田基子
小局の蕪かほる蚊遣かな　岩代　佐瀬芳野
衣かへて脊を撫てまはす娘かな　牛込　岩瀬ゆき子
短夜を早やたゝき出す木魚哉　伊勢　岡本しげ子
水莚に渦まく香の煙かな　横濱　吉川霞峰子
春の波駒の跡を洗ひけり　紀伊　田中笹子
紫陽花や女同士の品定め　神戸　泣花
夕日さす野寺の裏や百日紅　岡山　高岡花籠
屋の名をよく知る人や門凉み　下總　霞川女史
瀧殿に午を寢るや百合の花　松山　首藤さと子
麥に霞み梅に餘寒の在所かな　横濱　花舟子
足袋脫いで夏川渉る娘かな　下總　錦花女史
栗の花や十戸の村の夕煙　和泉　小百會

文學士沼波瓊音先生選

消息文

天

○畫の友へ

陸奥　しらゆき

垣根添ひに、實生楓の新芽あいらしき朝にて候。脊戸にさす朝日暖かに候へば、われは洗濯すべく。柳青き下の井戸端にて盥に水汲み居り候。白き手拭姉さま被りに、赤きたすきの茶縞の衣にふさはしきや否やは知らねども、みづからはこの盥に水かゞみして、ほゝゑみ候ひぬ。ねがはくは、君がスケッチに入りたうこそ!?!。

○

衣すゝぎたる手の、いまだかはきはてねば、筆とるにはあまりに似合しからず候かな。笑ひ給へ、君。裏戸のあたり、物干竿におさなき人の衣あかきが、まづ目鮮かに、納屋のうしろ若葉の中に、りんごの花入りまじりにさくも、いとおもしろき脊景に候はずや、木立がくれに御好みの野羊も見え候に、日廻らぬうち寫生帖肩にしてとく來ませ。さらば其の折、子守歌と共に納屋より半身出す人の、たれなるかをも知りたまはむ!?!

○

今し、野羊のむれに草やり終へて候。右の頰に美しき夕ばえうけて、散らしがみかい撫でながら笛ふき踊れば、やさしや、ましろき鬚ふりつゝ、わが後追ふ姿、おもはずも立ちどまりて候。ふと仰ぎしみ空、きらり輝く星一つ……。君よ、牧場の夕げしきを想ひたまへ。

（評）この文は確に畫をかく人の文なり。

地

○都の兄上に

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

利鎌の如き月の冴え、庭の木立の繁みを洩れて、夕立雨の名殘り美しう候。なつかしき兄君には小草の香風にほのめく此の宵を、如何に渡らせ給ひてか、まろね物憂き旅枕の、たゞさへ夢の醒めがちなるを、さぞや日毎の御苦學に、身も心も痩せたまはずやなど、妹が身には之のみ心がゝりにて候へ。うらぶれては、素より問ひよる人も候はず、こなた母上樣と只二人、至つて物靜かに消光まかりあり候へば、憚ながら御休心下

され度、げに朝夕簪は取り候へど、塵一つ候はねば、ほんの所作事のみと、母上と大笑ひいたし候、さりながら心よわきは女の常とや、花やかなる御隣のさゞめき聞き候ては、いかにも口惜しく、ひきしめし心の駒の手綱のくるひて、思はじと誓ひし昔しの偲ばるゝあさましさ、あなうたてやと破窓に咽ぶ夜もおはし候。さ候へど沈み行く家運を挽回せんため笈を負ひて東し給ひし兄君を思へば、なか／＼に勿體なく存じ候。さはれ紙よりも薄き今の世の人心、黄金の塵は掃ふとも、苦境の子は救はざるべく、げに「此肉衰へ涙は涸れ果つるとも、生の意氣と猛進の氣象は衰へんや……」の御水莖を拜しては、如何に世の風波と奮闘し給ふ事かと、深く／＼推し上候、何事も神の御心に從ひて御成功の程祈り候、返す／＼も留守宅の事御心配下されまじく、妾至らねど及ぶかぎりは母上を慰め申す可く候。

（評）奮勵せしむるの力十分にあり。

人

○在京の兄上樣へ

日本橋區濱町三丁目　小林櫻花

一昨年の春迄、兄樣と一緒に遊びに來た、水の澄んだ石川の溪流の岩に妾は今、腰を掛けて、夕暮の空を眺めて居るのです、心は此の水の如く澄み渡つて、下行く水を追うて遠く――遠くなりました、河南の山々は紫色にぼかされて、畑に耕す農夫等も山寺の鐘を相圖に鋤鍬を肩にして、泥まみれの足を向ふて洗つてゐます丁度昨年兄樣が、暑中休暇に御歸りなすつて、書筆を御洗ひに成りましたね……あすこなんですよ、此頃は此川に澤山な小鰕が居りますよ、私今石を投げましたら、小鰕の一群、驚いたと見えて、或は岩の間に或は河杭を抱いて、這上るやら、中々面白かつたのです兄樣の御好な、金雀鳥は、兄樣を待ち顔に、書齋の椽側で啼いて居ますから、早く卒業なすつて御歸りください。

左樣なら。

（評）涼しき小川の夕暮見ゆるやうなり。

秀逸

○程近き友を螢狩に誘ふ

下谷　太田あきつ子

今宵しも冴え渡る月の影、其御あたりにては如何に眺めさせ給ふにか。端居にしろがねの流るゝ光浴びまして嵯峨野ならねど妙なる音をや響かせ給へる。さらず

ば涼臺の上の御團欒に御笑ひ聲賑やかの事にや候はむ今の程目の前をはく〳〵と過ぎし螢を私團扇にて落せしが糸口にて、之より田甫へ涼みがてら螢狩に行かんとの兄の發言、餘り突然の思立なれど御出ましは如何にや御ゆかたの裾輕う、畔に謳ふ蛙驚かさんも、中々の興と……あれ又妹の早く行かんと迫り居り候。御兩親樣御許しあらば此文持たせし梅やと共に早速御越しの程を、何卒武樣も御連れ遊ばすやう……。行きは此方より、歸りは御門邊通る事に定め候。

（評）心の浮立てる樣よく見えたり。

○親しき友に

仙臺　高木いち子

蘭燈の影淡くして五月雨蕭やかなる夜半の寐覺などにともすればわけもなう淚こぼるるを、若き女の常とし等閑に思ひ見たまふか。

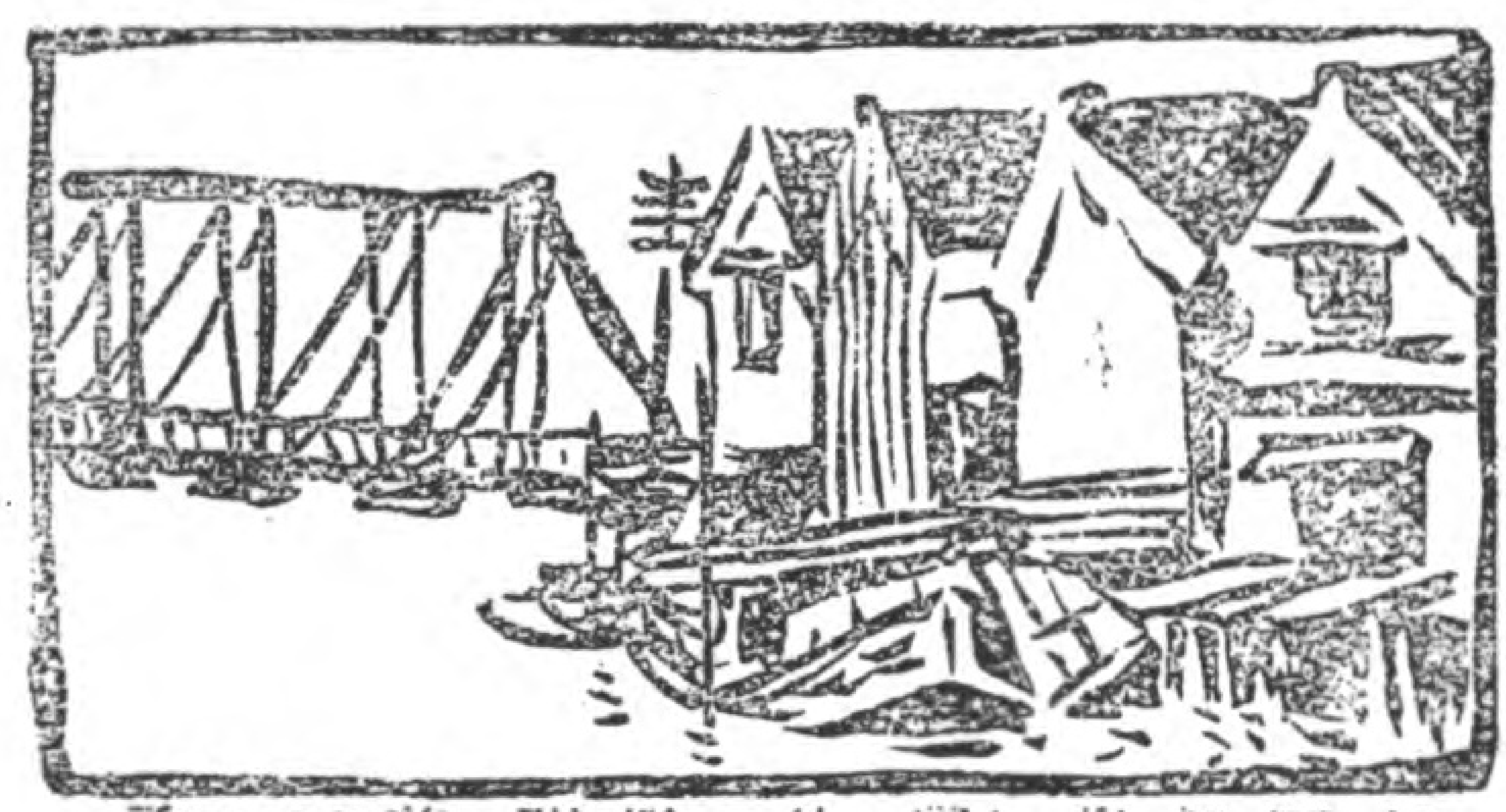
あはれ亂るゝまでに心苦しき此の頃の迷ひや、よき分別もおはさば御教を惜しみ給ふな。

眩ゆくも亦華やかなるは櫻に候かな、春の驕慢を身にしめて、晴に風に風情を凝らし、咲くに散るに又なく人に惜しまれぬ、さりながら花はこれのみに限るまじ野末の草にも名の知れぬ小さき白きものは咲きて候よ其の華美なるも謙遜なるも等しく春を送る者なれ、おのれ先きに櫻の勇しき迄に華やかなるを喜びて身を處し來りしがさても弱き者は、人の子の心にて候かな、進むに從ひて不安の念起り不足の思堪へがたくおぼえしはそも何故に候べきか、さらば之より野の花の溫和しう日を送り候はむ、されどされどそはあまりに情けなう心寂しう思はれて胸安からず候よ。

あゝわれは今追分に立てるなり、櫻か野の花か、行く道は二つなるを。

あはれ、君、よき分別もおはさば御教を惜しみたまふな、

（評）好疑問。



お厩河岸（賞外）淺草　前川せい子

○山吹の盛りの日近きあたりの友へ

上毛　五十貝すゑ子

今を盛りの山吹の花見捨てがたう覺え候まゝいそぎ此文さし上げ申候、此の實のらぬ花を題と致し書にせんも歌にせんも面白かる可く、殊によべの雨にて露をふくめる樣一入の風情に候間おん妹樣御同伴にて御いて

玉はずや時おくれては露やこぼれん花やみだれんと取りいそぎはしりがきして御返事同上候さらば。

（評）短かけれども趣多し。

○螢狩に誘ふ　大阪　刀禰春子

美代子さん、今日此頃の暑さはどうてせう、ほんとに酷いですね、私、今日などは、裁縫を致して居りましても手が汗てぬれてしまつて、折角縫かへの衣服も、かへつて手垢をつけるようなあんばいで、實に、困つて居ります、さて、美代子さん、あまり突然の事てすから、御都合如何とぞんじますが、今晩向が島へ、螢狩にまゐらうかと、思ひまして、あの、裁縫の、青山先生にも、御話し申しましたところ、幸ひ、御同意下さいましたから、貴女も、御連に、おなりくださいましては如何で御座いますか、御さんせい下さいますれば、誠に結構てす、艫頭さんには、宅の弟と、隣の一雄さんとがなるのですから、大丈夫です、そして、御存知の通り、先生もあの様な、快活な御方てすし、殊にあわて者の、下女お竹も、參る事てすから、今晩の螢狩は、隨分面白いだらうと思つて居ります、御差支がございませんてしたら、夕方より、御令妹久子様も御一緒に、御越し下さいませ、御歸りの程は、弟とお竹とに御送り致させまするで、御心おきなくいらしつて下さい、御待ち申て居ります、右御誘ひまで、左様なら。

（評）いかにも面白さうてす。

○朝顔の花を送られし返し　長門　増野國子

只今は御使をもて朝露まだ消えやらぬ美るはしの朝顔賜はりいと〳〵うれしく、たゞちに文机の上にある彼の懸け花いけへ未熟ながらも取り生け候處、殊更に大きなる一輪今しもほゝとばかりほゝ笑み出でゝ何をか語らむとする風情いとゞなつかしくしばしだに側離れ難くこそ候へ。

再び御使の手をわづらはさむも心なきわざには候へ共けさ程例の昔なじみなる野間田の堤下へさまよひいてし處、松本川のほとりさゞ波打ち寄する岸邊にあはれゆかしくも香り出てしは此白百合のひともと、御許様にはかねて風流を好ませ給ふ事なればと存じ、御目に懸けまゐらせ候まゝ何卒御受け下され度、またやさしき御歌の材料ともならば此花のさちは申すまでもなく妾の滿足如何ばかりに候はん。

先は取り敢ず眞の一筆御禮までに萬は御目にかゝりてと申殘し候、かしこ。

（評）かゝる折にふさはしき文。

○篠子の君へ妹様の病の快方を祝うて

小石川 佐川貞子

色をも増したる青柳の霞ふくめるこそえも言はれぬ風情に御座候、折柄、扨ても此頃は御便りのつく度毎に御妹りん子様の御わづらひも日に〳〵御快方の御事とはいと〳〵悦ばしう存ぜられ候、病みなされしりん子様の再びいとしき母上様や御許様の情ある言葉を聞き給ふ事の得られし御喜びは如何ばかりに候ぞ劫き方とて只御一人なれば御母様の御悦びなほ〳〵察し上げ候げに醫師も大病とまで指名したる程に候へば御全快には間もあることと陰ながら心なやまし居り候に斯くまで快くなり給ひしは偏へに御母上様と御許様の看護の御熱心なる結果と存ぜられ候、御承知の通り昨年私の病床にありし頃も身の弱りに誰人の差別なき様の事も折折に候ひしが醫師の技量と母の看護と御許様の御慰勞の御庇陰にて健全にまた君と語ふ事を得たる事とてりん子様も全くそれと存じ候、申迄も無之全快まではの御保養も亦一大肝要に御座候へば萬事御心づけの上御みとりなされ一日も早う御全癒の程呉れ〳〵も祈り上候何れ其内に御伺ひいたすべくかしこ。

（評）まことある書きぶりなり。

○五月雨の歌

熊本 湖畔

第一信

さら〳〵と窓の桐の葉におとづるゝ雨も秋風に落葉するかとうたがはれ山ほとゝぎすの聲さへ添ひて寂しさはなか〳〵に五月雨の頃こそと思はれ候此山里を君は我ゆゑに御慕ひ下され候とや嬉しといふもおろかにて一つすびつに手うちかはして浮世を笑ひし光明時代は噫束の間の夢にて、運命のまゝと何事も現世にまけてさすらひきたる此所を何かとかこたんは餘りのをこに候べし。

君よ只菖蒲は池に鳥は山に家は机の許とばかりかしこ

第二信

今小やみせし雨のなごりは若葉の末に宿り候たれこめられて物うさをはらさんとてか村童はそこの畑道こゝの堤上にどよめきいと〳〵しげく候今宵は月の候べし久々にて君が御影寫します御居間の様に似よと許我も妻戸に倚り候はんよ「月澄まば御身もながめ給ふと見て我は心をやらんかな」と仰給ひし御言の儘にかしこ

（評）景は明なり情はおぼろげなり。

○病床より（故郷にて）

松尾はな子

津市

美津子樣、度々のみ情あつき御水莖のあと拜しまつり候て思はず嬉しさ儚なき我身の悲しさに枕を濡ほし申し候。情ある友よ、癒えず永久にいたつきの冷かき床に涙も涸れし妾を憐れとも思召し下され度候。あゝ、語るに友なき孤獨の妾は朝に夕に常に寂しさの限りに候。只妾は地に墮つる己が影の瘦せたるも打忘れ嘗ては君と涙に別れし見返り橋をとぼ〳〵と今夕訪ひ申候妾が此儚かの心遣りの不愍さ幸に推し給はれや。

橋畔に杖に倚て立ち候ひしは入日の跡うるはしう金色に照りて雲紅々と華々しき時に候ひし。傍の柔かき草に踞して桃色オレンジ色と變りゆく御空の奇しき彩りに見惚れ居候折しも側なる叢にて虫が鈴振るらむ樣なる愛らしき音にて啼き出し候ひぬ。「優しき音」よと耳欹つれば其音は此身に泌み渡る樣覺えて何となく其儘瘦せし此身を地中に吸ひ入るゝとも思はれ、不覺にも涙の頰をつたはるを知らざる程にて免しませ此まゝ妾は「死」の手に奪ろ捕へられ度も覺え候ひしか。「不甲斐なし」とも咎め給ふな。病!! 永久に癒えざる此病の爲に氣弱りたる妾の胸の思ひよと御見免し下され度、將御憐れみ下され度其のみ願ひにて候。そは妾に此上なき「慰藉」にて候へば。早や夜も閑けて胸苦しく候まゝ此度はこれにて筆を擱き候、かしこ。

(評) あはれなり。

○都の友に

四谷　山中芳子

霞棚引く野邊に胡蝶を追ひて、閑けき夢の一日を、樂しく暮したりしも、いつしか夢の間に過ぎ去りて、青葉蔭夏の世界とはなり申候、共に學校を卒業してより君は東都に幸ある遊學の身とならせ給ひしに引かへて妾は淋しき此の山里に、語らう友とては君より他になかりし身の、獨農事を手傳ふ事の如何に佗しかりけむ。さわれ此頃にては、さのみ佗しとも思はれず、只管仕事に精を出し居り候。

去年の夏、君と共に裾からげて、小石拾ひに遊び暮しし山の根の清き小流は、今も猶水晶の如く、妙なる音樂を調べ、優しき百合の影を宿し居るなど、中々捨難き趣あり候。

百合は父上の好みて培養し給ふ事とて、鬼百合、車百合、姬百合、絞百合、白百合など、庭狹きまで、咲き亂れ居り候。白百合の大輪は、去年君より一株賜はりしもの其色の純白にして氣高さは、恰も君の御心の如くにて候。

麥刈すみし頃、麥藁燒く煙は低く棚引き、家々の夕餉の煙り之れに和し、裏の田圃には、早や螢呼ぶ子の騷ぐなど、殆終日の勞苦も忘られ申候。前の畑に、母上と妾と作りし枝豆、丹精の甲斐ありてか、粒も大きく

倒れん許りに實り居り候。これは君が御歸省の節、鹽うでにして、是非御馳走致さんものと、今より心待ちに致し居り候。暑中休暇も追々に近づきて御歸省の日も近きにある事なれば、時節柄御自愛專一に遊ばされ、御歸省の折には、面白き都の御物語土産となし給はん事、返す〲も御願申上候。

（評）試驗前に歸心を煽るのは罪です。

○梅雨便り

金澤　大地波子

能州の友へ

今日は終日雨降りて候。庭の胡頽子漸く色づき候、青葉の裏に赤き實のふさ〲と下れる中中捨てがたき風情に候よ。能州の五月雨、越山も霞みて見え候はん。

幸に御自愛あれ、かしこ。

友より

今日も亦雨降りとのみ書く日記

いづこもおなじ五月雨の頃。

都も鄙も今日此頃の欝陶敷には何人もぐちのみにて候御庭のぐみ色づき候とかや、定めて御歌に繪に幾多の新詩趣を添へ給ひし事に候はん。

霞かくれの越山の景、拙なき筆もて寫し候ひしも中々其の一端すら現はれぬが恨みにて候先は御返し迄に、かしこ。



子守（賞外）　安藤君子

友へ

今宵初めて杜鵑の音を聞き候。

今日は珍らしくも雨霽れて候、青葉もる月影を眺むるさへあるに何處の誰なるらん妙なる笛のすさびのいと心憎く〻覺え候。

雨霽れし海濱の松にかゝれる月など定めて詩趣多き事に候はん其の美しき景の一端洩らし給ひてよ、かしこ。

友より

情こもれる美しの玉章、幾度となく繰かへし候。

短かき夏の夜の月はうすく磯山の松が枝にかゝり候。曉の風冷やかに袖を拂うて、松に宿れる露落つる處、郭公聞かばやと辿り候ひしも、アヽ遂に聞くを得ず候ひき。今！朝日は彼方、山の端をはなれ候、アヽ壯大なる其景よ。

さらば友よ幸多き次の便りを待たん、かしこ。

（評）初めのが最味ありと存候。

○筆の命毛

四谷　しらぎく

ゆく春の落花

窓の障子細目に開きて、春雨けぶる裏町の樣、眺め居

り候處、つひ窓下を通る蛇の目傘二ッ、花の渡しをや越て來にけん、所々に櫻のゆき、いと美しう候ひき、例の數奇心はしきりに動きて押へ難く候、いかで之より隅田堤の櫻吹雪、傘に積らせ給ふ御心はなきや、後にてのうらみ言恐ろしうして、かくは伺ひ參らせつ、かしこ。

池の藤波

池の藤波花ひらき候、いかでひとひ、波紫、矢がすりの袷衣召給ひて、きませずや、四ッの袂と藤波の房、いづれが長きか、丈くらべんも興なからずや、かしこ。

山ほとゝぎす

世の外の花の袖垣に、人目をさけし庵の此頃、門にたち花のなづかしきは候はねど、やさしう鳴音をもらす山ほとゝぎす、偖ては打むれてなく田川の蛙、都に知れぬゆかしさと、認め參らするとも、あだし言には候はじと侍る、この玉章御手に結ばれし其あけの日、もすそかゝげて、露を一里の畔道を、こゝなる草家へ辿らせ給はずや、あかつき深きねざめの枕に、あはれ、血になくほとゝぎすのこゑ、きゝたらんは、いかにぞや、彼の一刻價千金と申す、春の宵にもおとらじと存じ候。

道筋は君も、御存じの、道分だひをひだりに、一町ばかり昔床しき筒井づゝを、溢るゝ水の流をしるべにたどらせ給はゞ、必ず、卯の花咲亂れたる、垣根は御目にとまる事と、おもひ候、それこそは、浮世をすねし妾が今の住居に候、かしこ。

（評）元祿ぶりの手紙ともいふべく。

○高利貸つて何？

神戸　まさ子

姉ちやん、僕不思議な事があるんだがねえ、敎へて下さいな、僕何時だつたか父つちやんに尋ねたのだけど「小供がそんな事聞くもんぢやない」つてね、しかられちやつたの、だつて姉ちやん僕聞きたいや、僕がなんかすると、みんなが高利貸の子だ〳〵つてね、仲間へ入れてくれないで、笑ふんだもの、何だか恥かしい樣な氣がして顏が赤くなるの、だけど僕、何の事だかちつとも分りやあしないんだよ、僕級長だのに、みんなの知つてる事を知らないんだもの、口惜しいや、だからばあやに尋ねたら、矢張「坊ちやんなんか、そんな事御知りなさらないでも宜しい」つてね失敬ぢやないか、いやに笑つて敎へてくれないの、何故だらう、よほど變だね、なあ姉ちやん、父ちやんや、ばあやの樣にかくさずに敎へてくれないか。僕敎へてもらつたら、みんながあんなにいぢめたつて、もうだまつて居るもんか、だけど皆があんなに笑ふ位だから惡い事だらうか心配だねえ、だけど父つちやんだつて、そんな惡い

事なんかしないだらうしね。
僕、だん〳〵不思儀になつてくるよ、高利貸つて事が、あゝ高利貸々々何の事だらうね、姉ちやん、早く、敎へてくれないか、え、御たのみだから。

（評）高利貸は决して惡むべき商賈てはありません高利貸を鬼のやうにいふのは約束といふ事を輕んずる借手の妄言です。

○繪葉書にて

福岡　古屋ちか子

山村の妹より

雨晴れて候。
露美しき、卯の花に夕日の影白う仄き出て申候。
如何致せしか、青桐の雨蛙、池の面に落ちて、金波、銀波を漂はせ申候。
ほとゝぎすは、今宵はじめて、きゝ申候。

水村の姉より（某女學校に通ふとて伯母の許にある）

此の繪は那珂の夕涼にて候。
此頃は、螢追ふ子も數殖えて、靜けかりし村の夜も、いと賑に候。
こたびの土曜には、とみ子樣達と螢狩を催し申候。

妹より

螢狩の御催し、浦山しく存候。
さき頃、東京の兄樣より『花繪葉書』二組送り來り候。
内一組は姉樣に御送り申候、御得意の和歌にても、御染下され度、かくは。

姉より

美しき繪端書の數々、御ゆづり下され有難く御受申候
拙なき歌染めんも惜しく、机上に飾りて日々にながめ居候。紫陽花、朝顏、の二葉はとみ子樣と八枝子樣に、分け申候。

妹より

此頃は絕て御伺ひ申さず候段、おこたり安き夏の日と殊更に、御赦下され度候。
此の繪はしぼまぬ間にとて朝の間に、鉢のまゝ寫せしものにて、鉢の少さに花の大いなる等、其まゝ、御笑の種とまでに。

姉より

待ち待ちし避暑休暇も早や明後日と相成申候。
あまりの嬉しさに、筆も心の儘ならず、何事も御目見えの上、さやうなら。

（評）細やかに美し。

新歌謠　編輯局選

天

今の滊笛はまだ十一時少しなりとも草を刈ろ

遠江國榛原郡川崎町川崎小學校高等科四學年生　岡村えがほ

地　清新

葦のなかから螢を乘せた笹の小舟が流れくる

小石川區小日向水道端二ノ六四　吉田妻子

人　爽涼

天の河原に草刈る童のわすれ置いたか月の鎌

秋田縣仙北郡金澤町金澤館　松盛松子

神韻

秀逸

◎春の景色をゑがいた葉書貼つた切手も菫色　金澤　大地波子

◎雨のふる日に櫻がちるよ籠の小鳥の物おもひ　群馬　飯塚美起子

◎花のたよりを月まで運ぶ蝶の路かや虹の橋　下野　新井琴子

◎玉の輿より藁屋の內で夫婦なかよく暮らしたい　福井　雅子

◎池で育つたあの蓮でさへ白と赤との姉妹　小林櫻花

◎庭に咲いたる薔薇の花は春の過ぎたも知らぬ顔　埼玉　紅子

◎蛙なき出す雨降り出す小川濁りて緋桃が咲いて內の嫁女が孫を產む　京都　月の町

◎おぼろ月夜に文よむ娘袖のぬれたは春雨か　栃木　菊香

◎暗い座敷の病む母君に折つて見せばや白百合を　上總　小河柳子

◎庭に咲いたる朝顏みれば小指染めたい紅の色　加賀　壽代澤彙子

◎膝をはなれて三年こゝに何を土產に歸ろやら　安藝　一子

○胸に千荷の秋を焚くとても煙出されば人知らず　鹿兒島　田上ちか子

○はいた袴もリボンの色も親の汗から出來たもの　武州　友山巨亘子

○柳そよ吹く風さへなきに月をみだすは都鳥　淺草　大沼さゆり

○簾まき上げ蔦莚を取れば粉の妹も畫にはなる　三河　稻田つる子

○男ならばよ飛ばれるやうな川の向ふに遊ぶ螢　陸前　尾形千代子

○誌友おもかげ見る度びごとにみんな姉かとしたはるゝ　長野　田中みき子

○靑いすゝきに風そよ／＼と秋かと思ふた夏の月　德島　住友時子

○友と別るゝ此渡場で船を待つまに星のちる　横濱　落花一片

○日本男子は茲にも一人藥の軒端に初のぼり　飛彈　萬ひふみ

○源太男々しや梅が枝そへて勝つた兜の緒を〆る　豐後　平山麗子

○鳴てくれるな春野の雲雀只さへ涙がさきに立つ　下總　鈴木たい子

○夏はすゞしい山家の寐ざめ溪てかじかゞ鈴をふる　秋田　大越靜子

○海に入る日の影たゞよふて西の七浦あかねさす　岩代　さわ子

○戀の櫻の二ひら三ひらちるよ袴のむらさきに　安藝　笹岡すゝき

○夏が來たとてなぜ春逝くか清き流れに花が浮く　豐前　花渓女史

○不二を横手に筑波を前に晴れた五月に茶摘唄　秋田　黑丸登美子

○今年姉さん十八歳で遠い所へ嫁にゆく　大坂　青野波子

○詩集片手にガーデン行けば袖にばら／＼夕ざくら　因幡　みどり子

○軒の雨だれ石をば穿つ勉强次第で花が咲く　筑後　田中壽子

○さしたお下のリボンを取つて雛にさゝせる兒の頓智　富山　木津よし子

○咲いたすみれはなぜ星戀ふる星の光は銀の色　茨城　小泉勝子

○すみれ咲くてふ廣野の中を君のみ靈か蝶がとぶ　上野　好月

○まゝになるなら彼の世へ遊び一目あひたや兩親に　新潟　岩瀬なみ子

○崖に咲ひたる躑躅の露が流れ合せて利根の川　上總　關よし子

○春の女神の姿を見れば襷がされに緋の袴　尾張　渡邊霞石子

○京の紅屋の嬢窓見れば金の小扇舞ひすがた　神戸　小枝子

○共に遊んだあの海岸を胸にゑがくや思ふ君　栃木　波多野まさ子

○色の紫檀の筆に染めてあやめの花だより　下總　平川銀水子

○蕭よくとも都の風に染むな吹かれな姫小松　常陸　野の女

○小さい池にも五月のあやめ水にうつゝた濃紫　下毛　山口美韻子

○蛙啼く夜を月すむ夜を君と私の四つの袖　上總　小川文子

廣津柳浪先生選

短篇小說

天

○糸ちゃん

麴町區飯田町五丁目四番地　高仲菊子

一

春も暮れて六月の空の綠、地の綠、鶯の聲は遠く山に隱れ、樹の花は空しく根に歸つて、新葉の露滴る許りの夏の初、

「叔母さん此？……」と愛らしい聲、其聲の主は私の姪の糸ちゃん。

「おゝ此處よ」と云つて其パッチリとした目を瞰下しました、驚きましたのは其美しい眸に時ならぬ露の、雨ともならん計り。

「おや糸ちゃん、如何したの」後は云はずしてふつくらと肉つきのよい軀をきゆつと抱きしめて暗涙にむせびました。糸ちゃんは堪へ兼ねてか私の乳房の邊に忍び音を漏らすのです、おゝ可愛の糸ちゃん、七つや八つの小供にこんな涙をおぼへさせたのは誰の罪でせう。

「糸ちゃん最早泣くのではありませんよ、ねえ糸ちゃんには御父さんがついて居るてはありませんか」

「だつてね祖母さんが……祖母さんが……」

後は涙に聲は消えてしまひました。

「祖母さんが如何したの」知りつゝもわざとたづねました。

「つねつたのよ、つねつたのよ」

二

私は只今兄嫁が亡くなつた爲め、一人取り殘されたいたいけな糸ちゃんを見るべく來て居るのですが、愈々明日歸らねばならなくなりました。

「叔母さん最早歸るのねえ」といぢらしく又私を泣かすのです、又糸ちゃんは私の膝に倚つて突然。

「叔母さん祖母さんは如何してあゝひどいのでせうねえ美ちゃんや春ちゃんは皆御祖母さんに可愛がられるのに……」噫いたいけな此少女！一人の慈母に別れて、唯々淋しく小供心にも悲しく思はれて、只祖母さんを力とたのむならんを、邪慳にあしらはれて、小さい身ながらそれが辛さに、祖母さんの氣嫌氣褄を取らなけ

ればならないとは、神は此罪ない子をして、其行末を如何御作りになつたのでせう。

「糸ちやんや、もうそんな事を御云ひじやありませんよ、よくねお祖母さんのおつしやる事を聞くと必ず可愛がつて下さつてよ」

「さう可愛がつて下さるか知らん……でもね、お祖母さんがお肩が痛いとおつしやつたのよ、だから私叩いてあげたの、けども何ともおつしやらなくつてよ」

「それはね、お祖母さんが例口でおつしやらなくつても、お心の中では乾度御禮をおつしやつてよ」

「さう」糸ちやんは何か考へて。

「私一生懸命にお祖母さんを大切にしたら可愛がつて下さるかしらん」

「あゝもう可愛がつて下さるのは定つてゝよ」



三

此樣に糸ちやんを虐待するお祖母さんと云ふのは、私と兄との繼母なんです、亡くなつた兄嫁も如何にか苦勞したか、思へば涙が流るるばかり、糸ちやんは此無情の人の爲めに、其小さい胸を勞するのです。噫母ない子と云へば他人でさへ情をかけるものをましてや、祖母さんと呼ばれて居る者が……あゝ最早云ひますまひ、私は愈々此可憐な姪と別れる時が來ました、顔を見て別れに泣くのは辛いから、此まゝ思ひ切つて別れて行きます。然し後で如何にか兄を困らすでせうと思へば、私足も出ません、糸ちやんよ、必ず神樣は貴女を守つて下さいますから、よく御利巧でね、と其寢顔を覗くと夢のみは樂しいのであろふ、蕾の口をうごかし、小さい靨を作つて、微

笑て居るのです。餘り罪のないのに私も涙を拭つて、而して其夢がいつ迄も續かん事を祈りました。

而して門を出づれば折柄音なく柳の糸を傳ふ雨のさらさらと傘を拂ふ、顧れば朝雨に糸ちやんの家は模糊として青葉のかげから白壁のちら〳〵と、糸ちやんのお夢は今頃私の跡を追ふて居るてせう。

終りが最も優しく、哀れに書かれてある、糸ちやんの罪の無い俤と、祖母さんの意地くれ悪い俤と、叔母さんの親切と、三個の人物がほどほどに出來上つて居る、別に許もなく、山もないが、上品な小說てあらうと思ふ(選者評)

(地)

○忘れ得ぬ人々

石川縣羽咋郡羽咋高等小學校　舟岡やま子

今日は、郡役所が少し早くひけたので、私は、散歩がてら、親友直村春雄の許を訪ねた。

いつも、行つて居るので『直村君』と、別に返辭も待たず、すぐ裏に廻つて、書齋の庭に出た。

友は、机に向つて、一心に書物を讀んでゐる。

『相變らず御勉强かね』と、硝子障子をあけて、机の横に座ると、

『イヤ……』と、頭をもたげて、苦笑したが、急に、座り直つて、

『君……今度、僕少し遠い所へ行かうと思ふ……』

『え、……』

少からず驚いた私は、暫くつゞく言葉もなかつたが、友は更に語をついて、

『實は、一應、君にも話して、同意を得べきてあつたが、……許してくれ、……僕が、この二三ケ月以來の煩悶は、いふにいはれぬものがあつた。快く眠つた晩は、一日もないといつてよい位、書物に向つても、唯々頭がボーッとして、今よんだ事が何であつたやら、昨日は、どれだけ讀んだやら、全然、覺えぬ樣な風で、マア、聞いて呉れ、動機はかうだ。僕の決心は、もう動かぬ。』

* * * * * *

彼は、その動機なるものについて詳しく話した。

嘗て、彼が藪田小學校に、職を奉じてゐた頃、互に親しくしてゐた異性の友があつた。一年餘りで兩人は、別れ〳〵に他に轉任じたが、其後信書の往復はいつも絕えず、互に、勵み勵まされつゝあつた。兄妹の樣にして、宛名は、なつかしの兄上さま、愛らしの妹へといふのであつた、が、ある機會！それは、ある友の結

婚らしかつた……から、兩人は遂に戀するにいたつた。間もなく、彼は、今の學校に來たのであるが、數ケ月來、フッツリ、彼地よりの音信がないといふ「どうしたのだらう？」と思つてゐた所が、突然、彼女が今度、ある人と婚したといふ。彼女、名は山町庵子！

＊　＊　＊　＊　＊

私は、三年の間、遠い所にさすらひの身となつて――職務の上からとはいへ――漸う今、郷に近い所に來て、三月に充たぬ彼が斷然、遠い樺太に、老いたる父母と幼き妹とをすてゝ行かうとする壯圖？に對して、何等いふべき語を持たなかつた。

こえて二日、私の宅で、小やかな祖道の宴を彼がために開いた時、半紙三十枚ばかりを綴ぢた備忘錄を遺物だといつて私にくれた。表紙の厚紙には、薄い墨で「忘れ得ぬ人々」とばかり。

私は、彼を思ひ出す毎に、「忘れ得ぬ人々」を操り擴げる。

しかし、その中には、山町庵子の名は何所にもない、あゝ、山町庵子の名は、何所にもないのである。

「忘れ得ぬ人々」何と言ふ意味の深い辭であらう、吾人は人生と謂ふ橋を渡つて行く中に、幾多の人に遇ふてゐらう、而かも其中で忘れ得ぬ人々は幾人かあらう、偶に其一人を深く想つた直村君は、一轉して彼女を忘れ得ろ一人とせなければならなくなつた、人生の悲劇（選者評）

（人）

○花の露

伊豫秀紅

「若樣、お御足が……」横町の暗黑を破つて斯う叫んだ時すらりとした後姿が瓦斯燈の光りに照し出された、純白の足が少し泥に汚れて居る。

「可いよ、」云つた儘後は一人の靜かさである。

夏の夕べの川沿は流石に賑であつた。

「葉山君、いやさ若樣、」呼ぶのは五人組の亂暴書生、意味ありげな各々の顏を振り返つて寛大に會釋した色の白い鼻筋の通つた、一見大家の若樣である。

「露、ちと代つて持たうかい、」恭々しく見上げた富士額のつゝましげなのは小間遣でもあらう。

「重いだらう？其花を代つて持たうよ、」

「いえ勿躰ない事で厶います、結搆で厶います、」

「さうかい」と計若樣は何所迄も寛大にあらせられる、

四五分の後華奢な姿が床屋の前に現れた時にどつと笑ふ聲が聞えた、振り仰いて二階を蛇と見たが返す眼に

につこり……、「露急がうよ、」若樣は早や墓門に待たせられてゐるのである。

「露、お母樣は矢張お若くつて被居だらうと俺は思ふよ、お亡りなすつた時が二十歲、今では俺が二つ大きいのだね、」お露は答へ兼ねたのであつた。

「逢いたいねえ、」花を捧げ水を奉て懷しさう。

「ご尤でムいます、」と、早やも淚に咽ぶのである。

今より二昔前葉山家には憐れなる戀の若草が萠たのである、當時二十四歲の大學生は葉山家の養子であつた、我儘に育つた奧樣は優しい彼を如何に苦しめたであらう、身は義理に束縛されて何事も扣へ目に、男の殘念とは思ひ乍ら、斯くて淋しい美少年は或者を懷しんだのである、其は淸香であつた、美しい姿よりも優しい眼光は怎麽に彼を慰めたであらう、遂に淸香は情の種を宿したのである、小間遣の身であり乍ら。

義理ある父母、妻の前に彼は手を合して身の罪を明し淸香が罪の赦しを乞ふた、生れた子は嫡子となつたが淸香の罪は赦されなかつた、無一物の淸香は冬の夜の雪を褥に凍へんとしたのである。身の罪とは云ひ乍ら世は餘り慘酷では無か、助けられて一年病に苦しんだが、美人は遂に薄命であつた。

思へば胸は張り裂けるやう、若樣は唯石の如く合掌瞑目して墓前に平れ伏して居つたが、「露ッ」と計膝に縋つて潸々たる紅淚は兩眼に溢れるのであつた。

此の優しいお露の姿を二昔前若かりし其人とも思はれて懷しさに堪へぬのであらう。

十時過ぐる頃葉山家の奧座敷に若樣は端座あらせられる、墓參りを止めよとの父の言葉を何で恨まう。母の慘酷は尙情である、我が病の治し難き曉は我れは覺悟の上乍ら廢嫡と定まりなば地下に母の悲みは如何計り、情深き父の無念は怎麽であらう。我爲めに受くる逆待を恨みとも思はぬ露に何の云譯があらうか、病は我身の一生の仇、惡魔ぞ、と切齒して俯向いて居るのである。

「若樣、」室外に聲して優しき足音の近づくを覺へしが入り兼ねてや襖の外に佇むを「露かい、」「は、」と答へて入り來るお露の眼には一杯の淚を湛へて。

「若樣、お暇……乞て、ムいますッ、」

「えッ、」と驚いて叫ぶのであつた。

「お、おひッ、まがッ、」得云はて泣き伏すお露の心をいじらしとも、可愛ゆしとも、懷しとも堪へ兼ねて「露！、」と計り抱き起してほろ〳〵と熱い淚に美しい

頰を洒せたが、「何も因緣だね、露、仕方が無いッ!!」お丶若樣、憐れなる若樣、露なき後は誰が暖き手に慰めを得るであらうか、出て丶行く後姿、月にすかし見て若樣は斷腸の思ひ。

若樣の寛大な氣風は、此作者の捉え處で、お露も戀をしさうな女として表はれて居る、親のしたやうな事た子もしさうな處、所謂趣味の遺傳てゝもあらうか、兎に角風變りの作て面白く讀まれた（選者評）

秀

○迷信

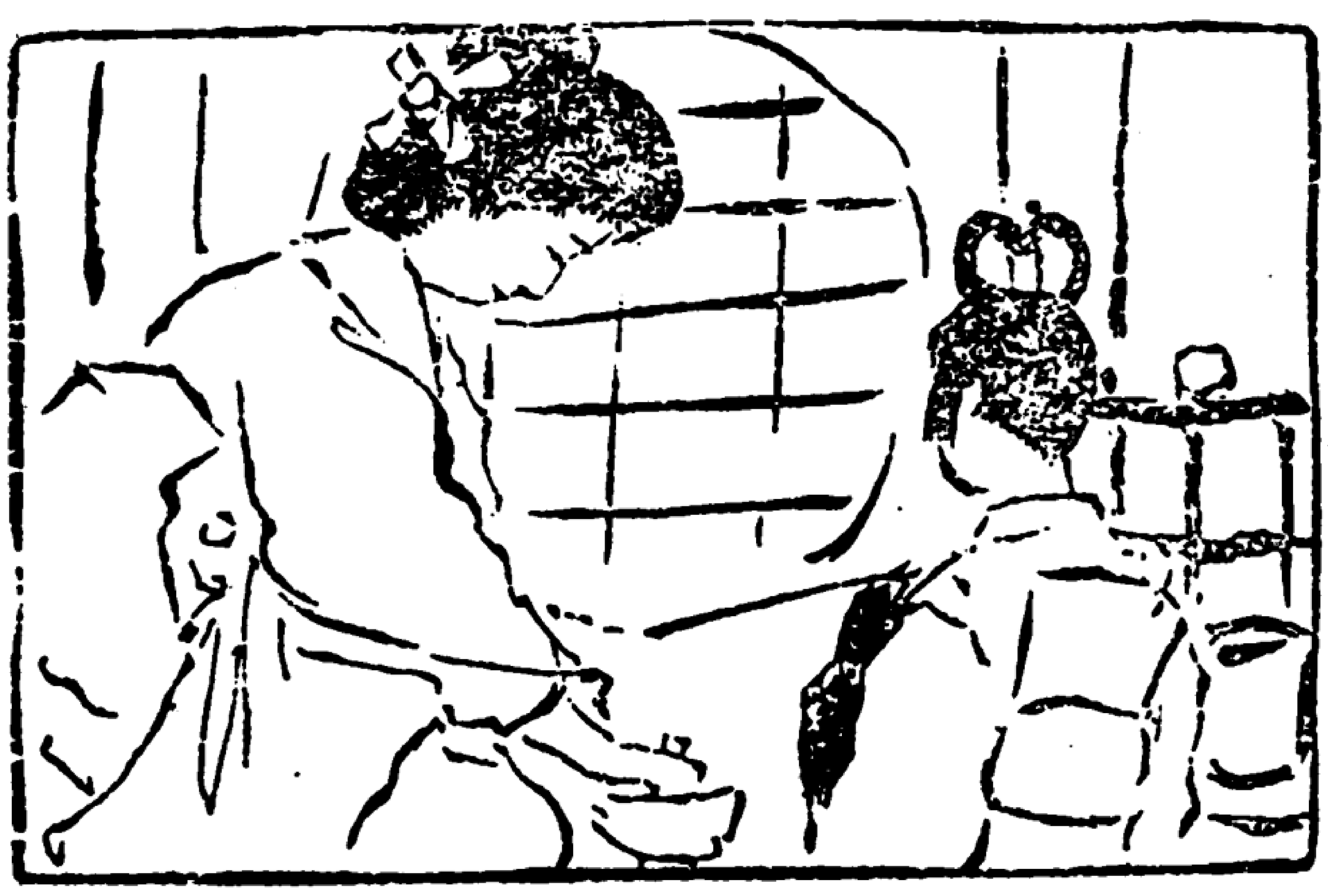
名古屋　あざみ女

《一》

『涼いわねえ』『然うねえ――。彼麽に高い上だもの、何うして儂ら登つたらう。ほゝゝ、豪かつたわねえ、まだ後停車場迄は半里もあるの？』『些と、』と二人の會話を遮つて、私は耳を聳てた。

靑葉靑田の風薰る、山麓二宮神社の門の前、街道に沿ふた一軒屋、「御仕度所」の看板に、駄菓子の箱の幾個か並んで、命の親の氷も潤く――姿こそ、店先の床臺からは見へぬけれど、と耳に入る、座敷てあらう、一層聲が高くなつて、『何うなと爲ろい！糞白痴!!』と微に泣聲が、續いて今度は少し優しく、聞取りがてに、『だがの、汝ェ餘り判明無え云ふものだ、喃、俺汝父だもの、何故惡いと勸めるだか、』

小聲、といふでもないが、後は何やら判明無ので、傍に何か煮物して居た赤前垂の姐さんに、聞くと『何有お前樣、』と朴訥な。語るを聞けば。



點茶（選外）　下谷　太田秋津子

《二》

極端なる天理教信者の、父の一人兒お初は當年十四てあるが、今春、お初は些とした事から熱病に罹つて、一時如何と危ぶまれたのが、村の天理教會の祈禱やお水で全癒したから堪らない、以來は益々信仰の念を强うして、それやれ獨り熱中して、厭應なしにお初も同じ敎會へ入れて了つた。所が今度――其の敎會の主人役、中山といふが一家共々、今度大和國に開會る同じ敎會の全國總會にお初も共に同伴て行かうと、聞いて父は一も二もなく、名譽などだとホクく者、所が中々、「孃樣承諾爲なさう無えだて…」

云ふ時、此邊には些と珍しい轍の響。振返る山路危く此方へと、駈け來る車上の紳士を一瞥、『旦那樣、早中山樣御座らしたゞ』と喚く如、どら聲奥へ註進爲る。

(三)

『僅五日や七日で無えか、泣くで無え、喃、神樣に會せて貰るだ、泣いて旦那ァ困らすで無えぞ。そんだらはァ中山樣、何分宜しく賴みますぞ。』

後の事かと聞いて居たら、なに出發は今日とみへる。此家の主人は、立つてペコ〳〵頭を下げる、早も二人は、同じ俥に乘つたので。

旋て、旋て——駈け出す轍の後を、見送る眼には淚を浮べて、と嬉しさう、老の片頰に笑の刻まれて、『はれやれ、眞個にお初も幸福だァな。』

* * * * * *

それや早や二年の昔、暑中休暇の同行三人、女だてらにと笑はゞ笑への意氣凄く、海老茶袴の塵を天風に拂はす可と、尾張お富士に登山した、時、耳に目にした其て有たが、噫何とした果敢無さぞ、淸く崇高く、山永への姿なるに、噫二年前、一杯の氷に息を繫ぎにし家、其さえ。不思議にも今、昔の快味不忘、今年も憑て登山して、其折——二年の昔、儂らに譚つた彼姐さんに——足を休めた變つた家て、同じ務めの赤襷赤前垂を見掛た物から、何がなし唯懷しう、彼方も顏を覺へて居たのか、偶と、舊の家は何成て？位の事を聞いてみると、

『お前樣』と沈んだ調、俛向て些と躊躇たが、再び擧た眼には雫の溢ること。

(四)

『十日が愚、百日經ても孃樣歸てみへまし無え、唯さえ平素狂氣染た旦那樣遂々狂者に成て終はれまァして、儂ら思つても慄毛立ち升だァ。遂々中山樣怨んで川へ抑飛込て……これはつひ、一月許前のとてえすが、此邊の若イ衆此間富田へ行かしやりましたが、其人達の話に何でも其地の何とかいふ娼妓て病ほうけた人に孃樣能く肖て御座らした云ひますだが……。』

地方にはありさうな事實を骨子とし、熟練した筆で描かれてある、地の文を少し氣取つて見たいのが此作者の弊で、必ずしも舌足らずな眞似る要はない。十四にして教會の先生に拉し去られた女の子はかわいさうてある、一切側寫法を用ひたから女は表面に出て居ないけれど、確かに悲劇の主人公(選者評)

○眞情

小石川　奈美木翠子

太陽もはや西に傾いて、蟬の聲が一頻り喧しく鳴いて

それも段々遠ざかると、涼しい風が取り圍んだ庭の繁みから起ッて、晝間の暑氣は忽ち拂ひ去られ、直ぐ窓際の櫻の梢に一際高く蜩が聲を殘して飛去ッた、後は内も室外も閑寂と病院の夕暮は殊に靜かである。

今、東向の窓に身を寄せて涼風に面を吹かせながら暮れ行く庭の面を物思はしげに眺めてゐるのは、漸々十才位の可愛らしい娘で、お下髮に結つて白いリボンは飜々と風に嬲られてゐる。

「花さん……花さん！」病室から微かに呼ぶ聲に、

「ハイ」と窓の硝子戸を半分下ろして、身を退くと室内には最う電燈が點ぜられて床に在る人の窶れた面貌は凄い程青く、呼吸遣ひも微かに、ソレデモ口元には例の優しい微笑を堪へて熟ッを見詰めた眼には無限の愛が籠ッてゐる。

「母さん何？」寢臺近く倚ッて花子は病める母の此頃は又痛く窶れて日毎に痩せ細るを見ては兒供心の一しほ悲しさを覺へるのである。

我兒の涙ぐめるを見た母は、可憐しさに堪へず細い腕を力なく差し延べ、ちいさい手を固く握り占めて、

「花さん、花さんは好く母さんの看病をして下さるので、眞個に嬉しいよ、母さんは竹やより誰より一番花さんの看病が嬉しいよ、母さんは死んでもお前の事は忘れません」

「アラ母さん、死ぬなんて妾イヤ」

「ホヽヽヽヽ」母は淋しく笑ッて、

「イヽエ、死にません母さんは死にません、什麽して可愛い花さんを置いて死ぬるものですか」

「眞個に母さん死んぢやアいやよ、」

漸く物心識り初めた稚さい花子の胸にも、それからそれと悲しい事計り浮んで、萬一母が死んだなら此先き自分の軀は如何なり行く事であらうかと眼には一杯涙を堪へて懷かしげに母の面を睜入るのである。

恰度此時戸が開いて用達にと外出した下婢の竹が戻て

「オヤ、まだお孃さんゐらしッたの、私は最う疾くにお歸邸遊ばしたでせうと思ひましたのに」

「オヽ花さん、今日はもうお歸り、餘り遲くなるから、復今度の日曜にね、今日は花さんが一日居てお呉れて母さんも大變に氣分が好かつたよ」

「ソう遊ばせ、ねお孃さん、今日は好く御看病なさいましたわね、サ竹やがお送り申しませう」

ならば明日學校は休んでも母の側は一時も離れたくないのであるが、何事も素朴な性格の花子は唯無言で點

頭いたのであるが、病にある優しき母と別れて淋しき家庭に歸るのは何となく足も重く、今日限り復還へないような氣もして、小さい胸は張り裂けるやうに涙は又更に肉豐かな頰に傳はるのである。

漸々下婢に促されて病室を出た花子は、木立深い庭園を抜けて運動場に出ると、もう月は登つて、その青い光りを庭一面に輝してゐる。花子は月の光りを浴びながら暫く佇むで何か口の中で唱へてゐたが、軈て今迄とは變つて、イソ〳〵と歩を運ぶのである。

送り出た下婢は、花子の急かに擧動が變つたので不審の眉をよせて

「お孃さん、只今何をしてゐらしつたの」

「妾？妾子母さんの御病氣が快くなるようにお月樣にお願ひしたの、妾毎日するのよ、家のお庭で」

「マアお孃さんハヽヽヽ此事をお母樣に申上げたら如何にお喜び遊ばすでせう、お孃さんのそのお心持だけでも御病氣は癒りますわ、イヽエ屹度お月樣はお癒し下さるでせう」

「癒るでせうか、癒ると妾眞個に嬉しいけれど」

折柄月は一片の雲に掩はれて、二人の影は闇に包まれて仕舞つた。

別に大した骨組も無く、言はゞスケッチ體のものであるが、病氣と言ふ事は小說の材料に多く用ゐられるやうで、殊に本誌の小說寄稿家に多い、人情も、戀愛も、恩義も、矢張健全な時より、心身に惱みある時に初めて能く表はれるものであるから、動機として病氣を捉えるのが多いらしい（選者評）

○鳩の墓

富山敏子

ある家に、鳩が一羽飼つてございました。いくら人に馴れてゐると謂つても鳩は鳩。口の利かれる筈はございません。けれども、このお家には、五歳になるお孃さんがあつて、鳩は、お孃さんのお友達て、大層仲よしでございました。

ですから、お孃さんは、朝、眼が覺ると直に鳩の小屋へ行ッて豆を遣ります。それから鳩を小屋から出して、鳩と一所に、お庭を散歩するのでございますが、鳩は決して逃げません。くッ、く、くッ、く、と優しい聲で啼きながら、お孃さんの後に從いて廻ッてゐるのでございます。それからまた、お孃さんがお出と謂ッて、手を出しますと、鳩は直ぐ手の上に乘ります。若し肩を叩くと、肩の上に乘ります。そして眼をパチりさせてゐるのでございました。偶時にお孃さんが、「今日はお前、自由に遊んでお出て」と謂ッて放して遣りますと、鳩は、遠くへ飛んで行つて、半日も遊んで來る

ことがございます。こんな風ですから、お嬢さんばかりではありません、お家の方は皆、この鳩を可愛がつて居りました。

この鳩が、ある晩、鼬といふ惡い奴に押込まれて、哀や、むざ〳〵殺されて了ひました。さて翌る朝、お嬢さんは、何時もの朝のやうに、鳩の小屋の前へ行ッて見ますと、其處らが羽根だらけになつて、小屋から五六間も離れて、鳩の死骸が靜に横はッて居りました、お嬢さんは、おどろいて、いきなり、わッと泣き出して了ひました。

その泣聲に、びつくりして、母樣や父樣が、その場へ駈付けてお出でになりますと、この始末。「ま、可愛想に：：何うして、こんなに：：」と有仰ッても仕方がない。遠く天に回つた鳩の魂は歸りません。

そこで、お嬢さんを慷して、それから、この鳩を、お庭の大きな櫻の樹の下に葬りました。そしてお墓の積りで、その上に、小いさな石を一ッ載せて置きました、この日を始として、お嬢さんは、毎朝々々、この鳩のお墓に、何か花を手向けて遣りました。


大澤村の溺龍（選外）能登 藤井德子

そこで、このお嬢さんは、何うして、お墓へ花を手向けることを知ッてゐたのでございませう。それは、このお嬢さんのお祖母樣といふ方が、半年ばかり前に、お亡くなりなすつたのでございます。で、お家の方等が、お祖樣のお墓へ參詣つては、お花を手向けられるのを見てゐて、その眞似をなすつたのでございます。この優しいお嬢さんにお花を手向けられて、優しい鳩の魂は、何處へ行つたでございませう。

ある時、母樣が、お嬢さんに向つて訊ねました。

「ね、鳩は何處へ行つたのでせう。」

すると、お嬢さんは、しよんぼりして、「お墓の下へ：：」と謂つて、ふと何か思出したやうに、少時考へて、「ね、母樣、私、然う思てよ、あの鳩、きつとお祖母樣の許へ行つて、お祖母樣と仲よしになつてゐてよ。だから、いつまでもいつまでも、鳩のお墓へは花を手向けて遣らなければならないのね。」

小說と言ふよりはお伽噺、一語一句もおろそかにせず、叮重に書かれてある、所謂夏の讀物とは斯う云ふあつさりしたものを稱ふのであらう（選者評）

○月の夜

名古屋　原田翠子

一

「なにつ姑が難しい、それで離りたい、うむ、見下げたやつぢやのう」

と怒氣を含んで語勢強く云ふのは千枝子が父の政義である。

「千枝ッ貴樣は姑と結婚したか、舅と結婚したか、己は姑とは結婚させなんだぞ。如何に姑が難しいとて、終生苦樂を共にする、夫が何事もなく務めて呉れるのに、妻たる者がそんな心で、夫に對してすまないとは思はないかッ」

益々語は強く益々聲は大きく、夜の寂寞を破つて近隣にもひゞくてあろう。

千枝子は今更何んと答へるすべもなくたゞさしうつむいて涙にむせぶのみ。

「今日たとへ夫の身持がよくないにしても、それを諫めて、一家を治めてゆくのが妻たる者の本分てはないか。まして夫が品行正しく信實に業務を執ッて呉れるのになんだ、姑が難しい、辛いそれで離る、これ千枝つそれで女の操が立つと思ふか」と政義ははつたと己が膝をたゝいて「忠臣二君に仕へず、貞女兩夫にまみえず、と云ふ事も知らぬ事は有るまい」と煙管持つ手はぶるぶるとふるへて顔面さながら朱をそゝいだ樣に、今迄父の傍に涙にくもる眼に千枝子を見守つて居た、母の須磨子は、

「千枝さんお父樣のお言ひに成つた事はよくわかつたでせう、そしたらよく考へて御覽なさい、ねえ」

「はい」千枝子は涙の内にいとかすかに。

「たとへ姑が少々無理を云ふにしろ、最早先きの短い人てある、その老人の意には出來るだけ從つて滿足させるのが、女のすなをなところてはないか」聲はやゝ低く。

「どうしても離りたいかッ」

「あの……………」と云ひさして又、わつと計り泣き伏した。

「どうあつても離りたいか、離りたければ、離るなとは云はぬ、勝手に離れッ、然しこの政義は引取らぬぞ」

又ももとにかへつて鋭どく嚴しく、針を含んだ樣なこの一言は千枝子の爲には、肺腑をえぐられる樣です、

千枝子は依然としてさしうつむいたまゝ、無限の悲しみに袖をしぼるのである。

二

「千枝さん、もうこゝから一人で行きなさいよ」

「はい」

千枝子はまだやつと十九の花嫁御、昨日迄蝦茶の袴に靴をはいて學校へ通つたもの、髮こそ丸髷に結へ、それも古風の姑君に强いられて進まぬながら結つた樣な事、心はどうしてテニスよブランコよと遊びたい計りのお孃樣、それ故とかく姑君と新舊の思想のあはぬところからいよ〳〵難しく辛いので、一晩どまりで實家迄と恐る〳〵姑君の許しを受けて歸つて來て、もう行くまいと心に誓つたのに、父の意外の立腹に、言葉一言返し得て、泣く〳〵母に送られてこゝまで來たのである。

「何事も辛棒が大切ですよ……」

「はい……それで……お母樣……しばらく歸へつて參りませぬから……ご機嫌よう……」

「あい……辛いでせうが辛棒するのですよ」と母は顏をそむけた。

「はい……お母樣……」

母は最早言葉なくたゞ空を仰いで居る。

「お母樣」千枝子はもう胸がせまつて顏を袖におしあてゝそこに屆んでしまつた。月はさえきつて、あたり人通りもない四つ辻に二人を照して居る。

父の一こくな氣象と、母の愛と能く描かれてあるが、更に學校出の新奥樣の無邪氣らしい心根があり〳〵と眼に浮ぶ。父の言葉が餘り一こくに過ぎて、如何に昔氣質な頑固な爺でも、斯う理窟一ぺんではなからうと思はれる（選者評）

○罪の子

小倉　山野流華子

「惠須子、克く歸つて吳れた。芳郞樣も明日お歸りとの事だ。然れど、私しは今夜の關が……。」

永久き病床に羸痩れた八十路に垂々たる老母は、三年以前遠き京都に積學の爲めに上つた實娘が、電報に依りて歸倉り來れる愛つかしき其の面影の眼に映りて、常に彼れが孝心の深厚かりし事等を胸裏に描きて嬉しくて、狂喜しくて、泣くまじと努むれども淚は禁じ得ない有樣である。

芳郞とは、惠須子と結納の其の人である。

「はい」と惠須子は答へたけれど、其聲は微かに顫へて居た、胸に立つ矢があるのであらう。

「私しは、お前と芳郞樣との立派な儀式が見て逝きたいけれど……」外見にも苦し相な溜息を吐き、波濤打

つ血脈は寢衣をまで搖動のてある。

「あらお母樣、ソヽ其麽……」

痛惱める母親に泣顏見せじと袖嚙み縛めて、堪へ、堪へし忍び緒の……哀れ斷れたる淚の關。

「仰天ッ……」布團を扼つて母親は起き直つた。

「お母樣何う遊ばして……」

「惠須子……お前のお肚は……嘸、何時そのお腹は……」

「呀ッ……コヽ是れ……」

兩手をついて俯向いた、其の兩眼は腫れて今迄の苦楚を想像れる。

惠須子はさる法科大學に通ふ花山甫と云ふ者と二世は愚か五世末世迄も夢現にて約され、扨ては又去る彌生、花の頃に不義に細まる因果の種を宿した。

「イヽ不義？猥淫者ッ！。」「アイヽ痛……」

二度喚叫びし母親は、血走つた現世の暇乞ひて、慇れ左腑を押へた儘、睡眠るかとも思ぼゆる程緩爾に歸らざる旅路に靈魂を遷した。

「お母樣……吁れお母樣……、勘忍して頂戴……。」

惠須子は薄弱き腕に母の死骸を抱き上げんと勢罩むれど、力及ばずして撞と其所に倶仆れし儘褥も浮けと許り滅入りし如くに泣き沈んだ。須臾して、

「神よ、此の薄命なる罪人の我を、矜恤玉へ。」

双手を翳し、天を拜し、地に平伏し、神のお前に、重疊れる罪を懺悔して熱き祈禱を捧げた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌年の如月上旬に九州の各新聞紙は惠須子の變死を讀者に齎したと、されど神の子の名を似稱れる彼の薄命を詳記するを喜ばない。明治は六十年頃○○○教會に長老—花山惠須信てう者顯はれ、罪惡に塗れたるサタンをだに說悟したと。噫彼は神の兒であらう。

削正の結果、其三分の一は地の文を除いた爲め或は意義の通じないやうな處もあらう、全體着想は鳥渡採るべき處のあるに拘はらず、文章は惡がたいので、卒讀に苦しむ、小說を書かうとするには、まだ大いに文章を柔かくする必要がある（選者評）

○如電　　加賀　草田八重子

『大事な自轉車も毀損した、今日は那麼しで學校へ行けばよかろう』とお母樣に尋ねたのは今年十二の少年、高等の二年生である。

『左樣ねー、致方ないから、今日は電車で御出て』

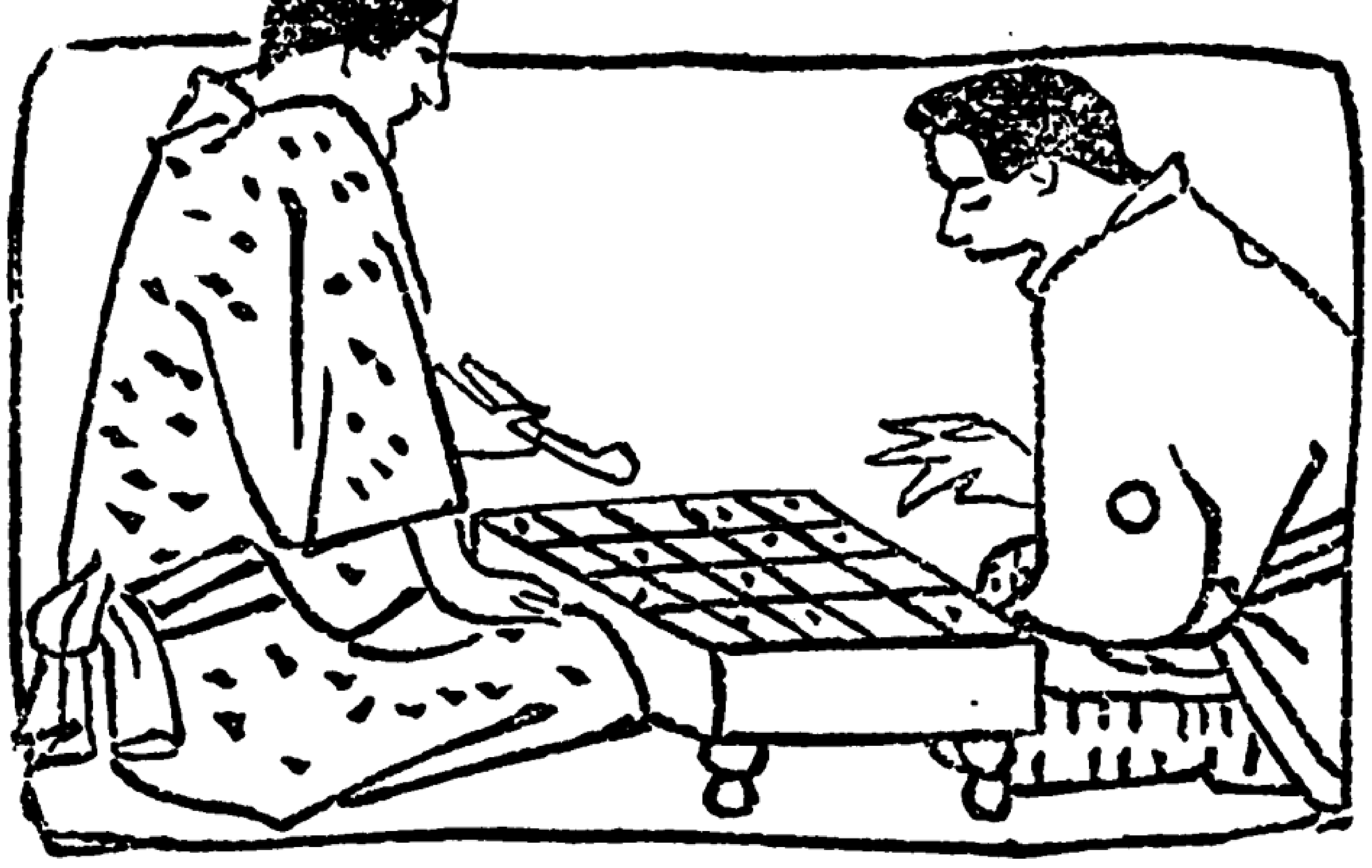
『左樣なら行つて參ります』と、丁寧にお辭儀をし、お母樣の顏を見上げた、その顏は、如何にも澄みきつ

て居る。
『先生のお言葉を熱心にお聞な』と、何時にない鞄まても取つて下さつた。
『はい』と、それを貰つて將に出やうとする彼の友ちやん、ア丶友ちやん、彼の美くしい愛らしい顔、おとなしい姿、何人か、あはれ今運命の神は、この花の様な可憐兒をば、死の淵へ投ぜうと想はれう。
友ちやんは、お母様の言葉を聞いて、今日は讀書、理科、體操、唱歌と獨言云ふて玄關へと急いだ。

＊　＊　＊　＊　＊

空はあわてた様に、雲は驅廻つて、忽ち明く忽ち闇く、傍らに流る丶小川にはその忙がしい影が頻に動搖て居る。
『兄さん、兄さん』と、張り切つた愛らしい聲は、すぐ友ちやんの後に起つた。はつと驚いた様に『麗さんか、今行くの』
『兄さん相伴にね』と無邪氣に手を取つた麗さんの紅葉の様な手には、あやめ二本。
『お花那麼するの』と友ちやんは花を眺める。

挿圖（外逕）長野　金井とき子



『イエ之は先生に上げるの、先生は非常花好きよ』
『左様ですか、ぢや早く行きましよ、今日は兄さんも電車で行くの』と洋服の紐釦を一つ止めた。
『妾電車好きよ』と麗さんは笑ひ顔。
時しも、ガーッと響いた物音に兩人は愕いて、
『電車來ましたよ、早く行つて、あれに乘ふね』と大急で漸と乘り掛ろうとした際、如何したはずみか、麗さんの手にした花を取り落した。てばやく、友ちやんは、拾はんとした一刹那、忽ち車は飛び出して、
アーッ!!!とさけぶ聲と共に無慘、轢られた花と花。
『何だ大變……』
乘客も電車から飛び下りたが、仕方がない鮮血淋漓、如何にも罪のない顔、蝶の様な眉を、ひそめたのが此の世の名殘とは……。大聲、『兄さん』と呼んだ、麗さんの聲も、中ば消え失せ、只かよわき手にて、友ちやんを、引き起さんとしては泣き、泣きては倒る丶その慘狀、たれか、泣かぬ

ものがあらう。
かき曇つた、天は急に雨を降らした、ア、天も泣くのである、草木も亦涙をこぼした!。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

思へば、友ちやんは、毎日學校へ出て、專心に勉强し遂に、一番となつたと、喜んて居たのに……
今日勇ましく、家を出たのである。
ア、血潮にまみれた此の鞄、昨日買つて貰つた、このゴム靴、友ちやんの魂は。
ホ、鞄の中には、唱歌帳もある、理科書もある、筆もある……。
ア、綠深き青葉かげ、永遠に眠むるべき可憐の友ちやんは、今頃那麼して居るだろう。
此の手向の花に、此の書物と靴、それて心を慰むるだらうか。

殘酷なる少年の死を、可憐な筆て、詩趣ある同情ある書きぶり、足らない處や、無理な處は無論あるにしても、それを發見せしめざる程、天眞流露して居る(選者評)

新刊紹介

▲我が散文詩(高須梅溪著)　論客として知られたる高須梅溪は美文に於ても一の技倆を有せり烏水の評言に曰く「天然の刻線と人の輪廓とが相觸れ相接し相交はり相同ぜしむ妙味饒かなるところ實にこゝに在り」と太田三郎の畫は本書の美を添ゆる事多く坪内博士初め諸家の序跋は本書の價値を定評せり製本も新形なり(定價五十五錢神田表神保町昭岡書店發兌)

▲歌集あけぼの(木佐々信綱選)　竹柏園社中の短歌と新躰詩を集めたるものにして川田順、石槫千亦、印東昌綱、片山廣子、梢系重子、大塚楠緒子、其他數氏の淸新なる作を網羅せりクロース本頗る美本にして机上の伴侶とすべく且竹柏園社中の近き作品を知るには本書の外あらざるべし(定價五十五錢神田錦町一丁目綠文館發兌)

▲新日本(第四號)　毎號新面目を以て現はるゝは本紙の特色、本號より四六二倍形の七十二頁となし寫眞版の增加表紙の改良、記事には米國男女學生の消夏法、體育上の一大疑問(板垣伯)、寸燐の製法(瀧川儀作君)、女子大學校と櫻楓會の活動(芙蓉子)、歐米上流夫人の面影(可年子)、實業界の成功名士譚、蠶絲業界の一聲鑑(立峰)、家庭の衛生、英語教授法(英文)、臺灣通信、流行案內、名士の氣焰、渡米顧問、家庭の改良(大村仁太郎君)、探凉の栞、女流の蓄音機、結婚の大秘密、世界第一の寶店、小說雨やどり、懸賞當選、其他社會の大勢、雜錄等材料極めて豐富、趣味又頗る深し(定價郵稅共十錢東京市銀座一ノ六新日本社)

新笑話　編輯局選

天

○矛盾　周防　麗子

醫師「お氣の毒だが、もう一日とはもてますまい」家内「でも先刻藥は一週間分下さつたではありませんか」

地

○知つたふり　埼玉縣熊谷在肥塚村　風水女史

ハイカラなる老奥さん、旦那に向ひ、「あなた家庭教育なんて、口やかましくおつしやいますけれど、やつぱり子供は、內の躾が何よりで御座いますよ。」

人

○井の中の蛙　阿波國阿波郡八幡町　內田しげり

甲「あなたは失禮ですが井の中の蛙だから廣く物事に通じて居らないね、乙「さうです然し井の中の蛙は事を深く研究して居るです。

秀逸

○勤儉　東濃　溝口喜子

娘「お父さん萬事節約して、勤儉貯蓄しなくてはいけませんよ、父「うむ、だからお前の着物買ふのも少しまたうね。娘「私昨日買ふて來たのよ。帶も一しよに。

○なぜ待ないの　磐城　原田清子

姉「美惠ちやん貴女は今年何年生に御成りなの」妹「妾三年生だわそして花ちやんと同級になつてよ」姉「アラ嫌な美惠ちやん、花ちやんはもう四年生になつたんですもの」妹「姉さん花ちやんはなぜ妾を待てないてせう」

○藥　羽後　ひさ子

診察し終りてお醫者樣、八の字髭を捻りつゝ「お前の腹には藥がはいつてゐるぞ」患者「そーですか、ては昨日私に呑ました藥は何てす」

○云はぬが　京都　穴田松江

幸子『福子さん妾の袂にあるもの何？あてゝごらん』福子『あかどんな形してゐるの』幸子『何も云いませんからあてゝ見なさいな』福子『エーとてはお花てしよ』幸子『あらよくあたつてよまあ何故なの』福子『でも云はぬが花と云ふじやありませんか』

○孝行者　紫かつら

甲「お嫁さんは實に孝行者よ」乙「いゝ加減なことを……」乙「デも親樣の背のお子樣が少し重くなつたと思つて居らつしやると、すぐお輕いお子樣をチヤン……と」

○急用　豐後　平山紫泉子

田舍者初めて滊車に乘り進行中行き過ぎし馬車を見て
甲『あの馬車は滊車より一倍早い』
乙『ホンニ急用は馬車に限るな』

○時計　尾張　敏子

太郎「お父さん其の時計僕に下さいな」父「こんなもの如何するの」太郎「僕食べるよ」父「こんな時計が食べれるものか」太郎「それでもアノ爺さんが天プラだと云つたもの。

○體育　伊勢　岸うたの子

孫「今の學校ては體育と云ふ事をつするから僕なども地球を差上る位のことはなんでもありませんよ」老人「馬鹿を言へどうして出來るものか」孫「それ御覧なさい」と逆立して見せる。

○乞食と旦那　德島　齋藤菊子

乞食「旦那樣あわれな乞食に一文御芳志を」旦那「あいにく小かひ物がないから五錢てつりくれ」

○子宮　牛込　長井恭子

梅子路にて花子に逢い　梅「オヤ花子樣何處へ」花「お醫者へ」梅「左樣何人が御病氣なの？」花「妾よ」梅「オヤまー貴女……じや其樣に急いて

わ惡かあ有りませんか」花「ても子宮(至急)なのよ。」

○流行　埼玉　和久井きん子

妾が何か書いて投書をしようと思つて原稿用紙を出して机に向つて居ると隣のおばさんが其所へ來て見て「何ても此の頃は流行てすネー、きんちやんの書いて居る罫紙も流行の元祿形てすネー……」

○蚊帳　陸中　阿部富子

小學校の先生、生徒に蚊帳の作文を綴らしめしに、貧家の生徒曰く『蚊帳は、夏蚊を防ぐに用ひ、冬は質に入れるものなり』と、先生啞然たり。

○一口ばなし　千葉　石渡久女

或理窟ぽい人一口噺を見ながら「一口噺つて二口も三口も書いてあるぢやないか。

○米は寶　安房　みどり

一人の女の子が母に向つて「母上さん米はたからだれえ」母「なぜ」女の子「だつても米は田からとるてはありませんか」

○お松の病氣　山梨　高野縫子

男「お松さん未だ病氣はよくないのかれ
松「ハイどうも未だなほつたかと思へば全快全快たかと思ふとなほつたりほんとにさつぱりしないてこまります
男「そーかれそれはこまつたもんだれ病名は一體何と云ふんだれ
松「ハイ醫者樣の仰しやるのには六萬圓だそーてす
男「ハアー成程それては何だれ牛の乳より牛乳ても飮むて養生するんだれ又拾萬圓にても成ると大變だから。

○遠近　和泉　辻林みどり子

「あなた、大そう近眼てすのれ」
「はい、眼が近いのですが、その代り耳が遠いのですわ」

○見世物　甲斐　松子

「甲」あの見せ物は一人五百だつて今見てきたけれどもえらくたけえもんだよ
「乙」おいらー百も出しやしれーだよ
「甲」あれ、それじやあおいらばかみたー
「乙」そのかわりにや見なかつただよ

○あきめくら　鹿兒島　田上ちか子

甲『おい、一寸此の手紙を讀んでお吳れ。』
乙『おれは鳥目だから字は見えない。』
甲『なに、鳥目てえのは晝は見えて夜丈け見えぬのぢやあないか。』
乙『いや、鳥にもいろ〳〵種類があるさ、おれのは梟目だよ。』

○但馬　周防　岡部佐保子

甲「先生但馬の物產は?。」
敎師「牛てす。」
乙「先生、ても但し馬とありますが。」

○れろ　安藝　高柳文子

姉「花ちやん今夜は涼し過ぎるから袷を着て御寢みなさいな、妹「姉さんいゝ事よあたいネルんだもの　姉「そりや私だつて寢るんだけどサ。

○事實　宮崎　日高春子

昨夜お客樣がいらつしやいましたので私の父はお座敷の方で何か話して居りましたが火鉢をと云ふお父樣のお聲に妹が立て火鉢を持て行くと恥しいものですから下ばかりむいて居たのてしようお客樣へはやらずお父樣の方へもつて行つて丁寧に禮をしますので御父樣は笑しくて〳〵たまらないけれどやつとしんぼうしてお客樣の方だよ〳〵と小聲に云へど耳へは入らず此度はお客樣へ向つてお父樣御酒をもつてと云つてひよつと顏を見ると之はしたりお父樣と思ひの外お客樣

○長短　佐世保　平野すみれ

坊「お母さん此度來たばアやは馬鹿だよ　母「なぜ
坊「でも坊が一時間と一尺とはどつちが長いつて聞いたら知らないつて

○醫者と病人　兵庫　柳田藤子

醫者「今度の分はかげんをして甘くしておきましたよ」
病人「そうてすかてはきゝますまひから今度の分はもらひますまひ」
醫者「なぜ〳〵」
病人「でも良藥口に苦しつて事がありますもの」

○御飯焚　京都　はるゑ

御飯がふき出して來たのに火をひく物がみつからないのでこれは大變と下女に「オツカケを知らなくつて」と「知て居ります鐵てこさへて火をすくふものです、」「めんどい、何所にあるかと聞くのだよ、」「オそうですか、有る所は知りません、」「どうせう?」

○かしや　小石川　野菊

下女「奧樣あすこに貸家が出來るので御座いますつてれ」、
子供傍より
「あらそう菓子屋が出來たら澤山買つて頂戴」

編輯局選

はがき文

特別第一賞

○各國人の氣性

神戸市楠町三丁目
二四ノ一石井方　石井愛子

英獨人は沈着にして米佛人は活潑なり清韓人は横着なれど伊奧人は柔和なり是等皆多少欠點あれど何處に一つ點の打處なきは獨り我が日本人のみ。

ハガキ文迄が世界的になりしこと、流石は戰後の文壇です、又曰く此作者は神戸の人だから是だけの觀察が出來たのでせう、又曰く、日本人でも點の打どころがあります、愛子孃だけは別としても。

特別第二賞

○虫の社會

京橋區元數寄
屋町太刀川方　今泉磯千鳥

蜘蛛は政治家の如く權謀を以て腹を肥し、玉虫を華族とせば靑虫は軍人なり、蟋蟀は雄辯家にて蜂は藥劑師なり、螢を以て電氣燈とせば蛛網は電線なり、松虫鈴虫の音は風琴ピアノの如し、頭振る孑孑はお粧飾のお孃樣。

蝶は舞姫。

天

○燕の御使ひ

靜岡縣志太郡
高洲村大新島　松浦くま子

參りましたよ、貴女と妾と昨年宅に巣を作つた燕に、彼八丈島に住居の花子樣に宜しくと御賴みして上げた其御返事が。何と云ふ事でしよーか、チユーキチヒーと、之は英語でしよーか、佛語でしようか、又獨逸語でしようか。

鳥語。

地

○嬉しくてにくき者

府下品川北宿
五五鈴木方　小林のぶ子

古里の荵の亂れいかならんと五月雨の窓細く開けつ歌など案じつる折柄、友の餘り物思ひに耽けり給ふなと肩をそとたゝき給ひたる。

心にくきもの。

人

○夏の夕

櫻の青葉、碧桐の若葉とり〴〵に涼しきに、蚯蚓は悠悠と鳴き芥子の花は風に戰ぎ、薔薇はいつ眠りけむ香のみ高し。池の汀の夏草には光るや螢の二三疋、晴れ渡りし大空には夕月さへ輝きそめぬ。

神田區西小川町　大澤隆子

軒の燕、岐阜提燈。

秀逸

○外國語

和歌山　林靜惠

私は英語が嫌だし幸隨意科でもありやめようか知と獨言したのを祖母上が御聞なさつたのか御前英語を習はないと不自由するよといろはも朧氣な祖母上でさへ英語の必要は御存じだのに、私は英語を習ふと決心した。

若い者ははづかしい。

○春の夕

越後　とし女

眩しい日の影が青い銀杏の葉を辷つて庭の大輪な白椿を輝す頃可愛い兒鳩が親に連られて歸つて來る、間もなく、與作の濁唄が前の離を通つて行く、と善行寺の鐘がゴーンと響き、茲に長い春の日が暮るのである。

敍事文の眞諦。

○夕暮

德島　秋月

蕨賣りて歸れば母は早や夕げの設けしつゝ町の樣子など問ふ、眉山に漸く出でし朧月、ひな人形屋の前は人山たてり、父の歸り常よりもおそきは、になふ薪に腰かけて月やながむる。

これ郷土藝術の一端。

○葡萄棚

高知　春野ゆき子

一滴二滴、一日の務に熱う干いた身にしみ入る樣な天の甘漿！始て蘇生つた樣になる、幾千房の紺瑠璃水晶浮彫の樣な葉の間から天女の眉のやうな三日月樣が私の奏でるヰオリンを笑つて聞いてゐらつしやる。

その辭へた。

○積りに御座候

豐前　服部秋子

妾が此度一學期の試驗には優等點を取る積りに御座候。そうすれば父上より褒美を戴く積りに御座候。褒美に女子文壇半ヶ年分と女學世界半年分を戴く積りに御座候。故先は一生懸命に勉强致す積りに御座候。

皆此積りに御座候。

○涙

京都　ゆたか子

保元物語の濱千鳥あとは都にかよへどもと讀んだ時、旅行の約ある日の雨、昨日まで樂しく眺めし花がたゞ一夜の風にちりたる跡、小學の時に御敎へ受けし先生が今なほをさなかりし時と同じ樣に御深切に御敎へ下

さる事。
感涙。

○茂平の家庭　安藤きよめ

茂平は此村での貧乏人であるが彼れの敎育心ある事は誠に驚くべきである、常に子供の成蹟如何によつて、五錢三錢の金を與へて子供を勵ませる、其の金は皆茂平が草鞋を作つて儲けた金なのである。

美談。

○かなはぬ望み　本郷　朝井松子

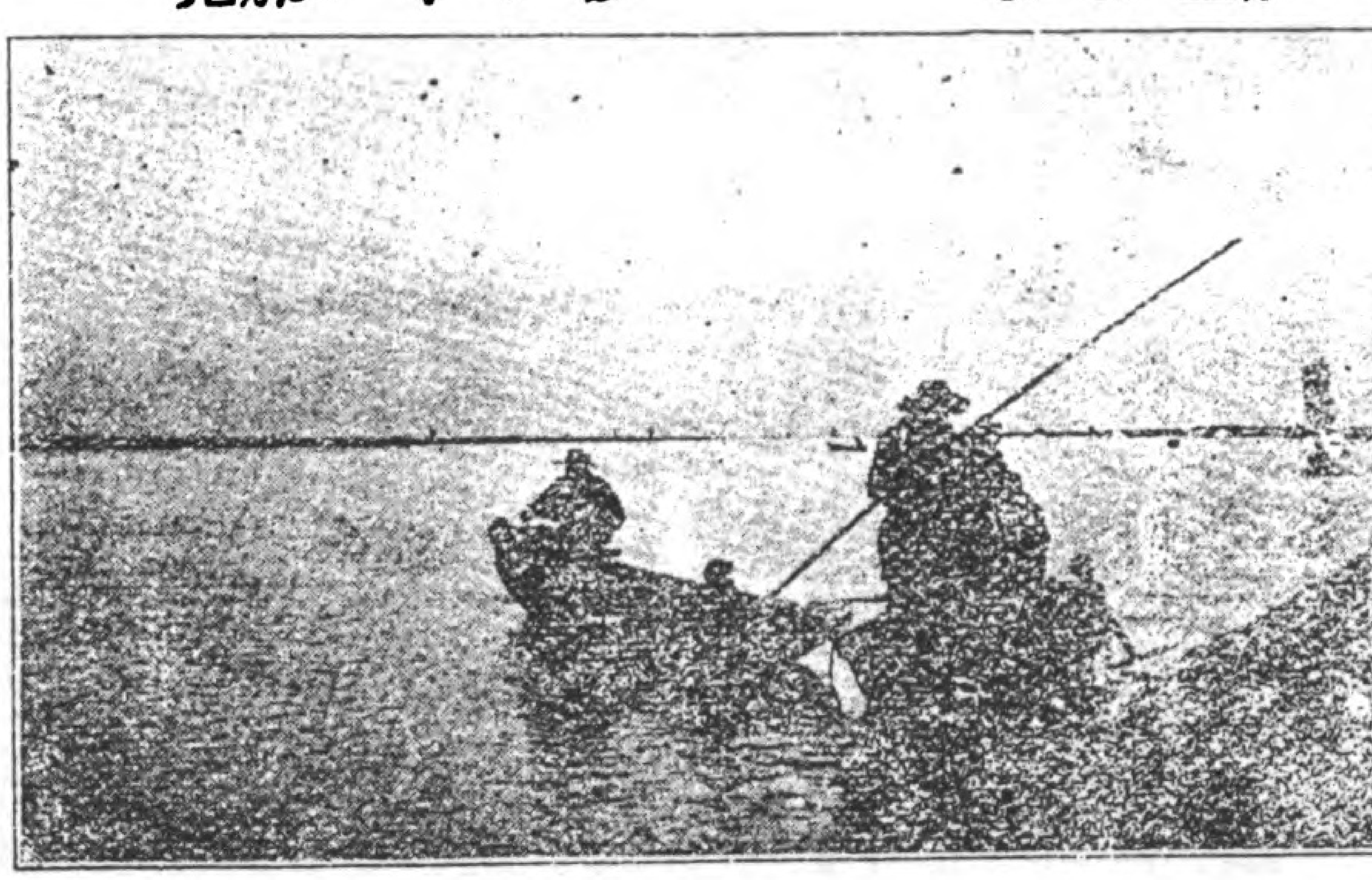
人我にほしき物とは問ひ給はゞ、先づ四疊半の美麗なお室、古銅の花瓶、キッドの靴、グリンウッドのラッケット、と夫れは〳〵一々枚擧する遑が無いが分けても我の望む物はかわいゝ妹と兒狀を大きな行李に一つぱい。

行李に一ぱいも何うします。

○雀追ひ　出雲　岸野あき子

昨夜今日の日曜を幸に苗代の芽干をするから雀を追へよと仰せられたが今日の日和は非常に好いので苗代田の畦間へ蓆をしいて雀を追ひつゝ諸々の草花を取つて妹と一所に雀の這入るのも知らずに飯事をして遊んだ

雀も御馳走。



羽前酒田港（其一）

○はづかしきもの　伊勢　菫星子

拙き歌の選に入りたるさへあるを、色紙染めてよと强ひられたる、饗應のむしろに侍りて客人に物問はれたる、まして結婚を許されつる人の其席に居給ふ時などは穴にも入りたき心地しぬる、婚禮の夜、初參の挨拶。

はづかしがる者よ、汝の名は女なり。

○寄宿舍の初宵　筑後　黑田瀟江

上級生から舍則や寢床の整理法などを敎はつて、まろび寢のまゝ隣の糸子さんと小聲で話して居ると、異樣の響を傳ふる消燈の鐘に滿室森として、薄絹で張つた樣な朧月影に、庭前の櫻花がちらほらと散つて居る。

此時、さと心湧く。

○少しのタイムも　鹿兒島　松永きく子

今日は、日曜で朝から日がポカ〳〵して、蝶の舞も常

より賑やかてある。向ふの堤に、紫の色も見える。讃美歌の聲もする。我は、せつせとなつて、仕上た編物!!!。代價十二錢五厘を、東北地方に、手續を頼んだ。

春光九十、夢の如し。

○勉强　豐後　森てつ子

朝夕は御母樣の手傳して御飯をたき、其他裁縫の餘暇を得まして、女子文壇ても讀みませうとすれば御父樣がそら酒屋、煙草屋に行つて來いつて、妾は勉强する時がないので、常に厠屋に長く行つてゆる〳〵勉强します。

場所もあらうに。

○飯事　本所　野百合

桐の木の下で美ちやんと敬坊とが呉座を敷いて飯事を始めました朝顔の花が御飯で莖が御菜なのです。やがて敬坊が手遊の手桶を持つて水を汲みに行くと後ては美ちやんが木片を集て小さな竈に焚火し始めました。

椎の葉に盛る。

○夏仕度　備後　秀子

父上は朝より朝顔棚の構造、母上は染かへしの蚊帳仕立にいそがし、妾はゆかたの裁縫、と云ふは名のみにて裁縫を前に擴げ女子文壇夏期増刊へ投書せんと一心に雜記帳と鉛筆を手にする。

又秋支度。

○妾のひげ　磐城　佐久間ちよ子

「お前それて賞取る心算、秀逸に入つたら首を遣るわ」と私の投書を見て云はれる、お父樣の首は取られませんから、お髭頂戴することに約束致しました。

如何にして髭を斂けん。

○髮のいろ〳〵　岐阜　姫百合

島田に結つてるのが花嫁樣、銀杏返しが藝者さん、丸髷姿は奥樣方、チョン髷は角刈取り、孃樣方はお下げ髮、機屋の工女連は花月卷、そうして廂しの二百三高地は私共女學生の髮。

亞米利加に涙刳形と云ふ流行あり。

○夕ぐれ　麻布　入重子

意地惡のお嫁さんの居る、お隣りのお婆さんが、夕方二階の障子を明けて、暮れ行く空の色を眺め乍らかすかに溜息をつくのを見ました。天を仰いて泣く者は、決して失戀とやらに煩悶する、若き人許りては有りません。

同情。

○氣になるもの　下谷　伊庭いそ子

遠く離れていらつしやるお母樣の事奥齒に何かはさまつた時夜おそく犬がはげしくほへる時本をしわくちや

にされるのとお隣のおばあさんのぴよこ〳〵おじぎお臺所でねずみのいたづらが一番氣になりますの。

十四五の時代。

○運命　茨城　青柳愛子

只一人の兄さんの、常陸丸へのつたのも、慕はしき母樣の逝かれたのも、こんな草深い山里の貧家に生れたのも、心を込めて投書した文の沒書となつたのも、あゝこれ皆運命。

可憐なる運命論者。

○お天氣　神戸　輝月女

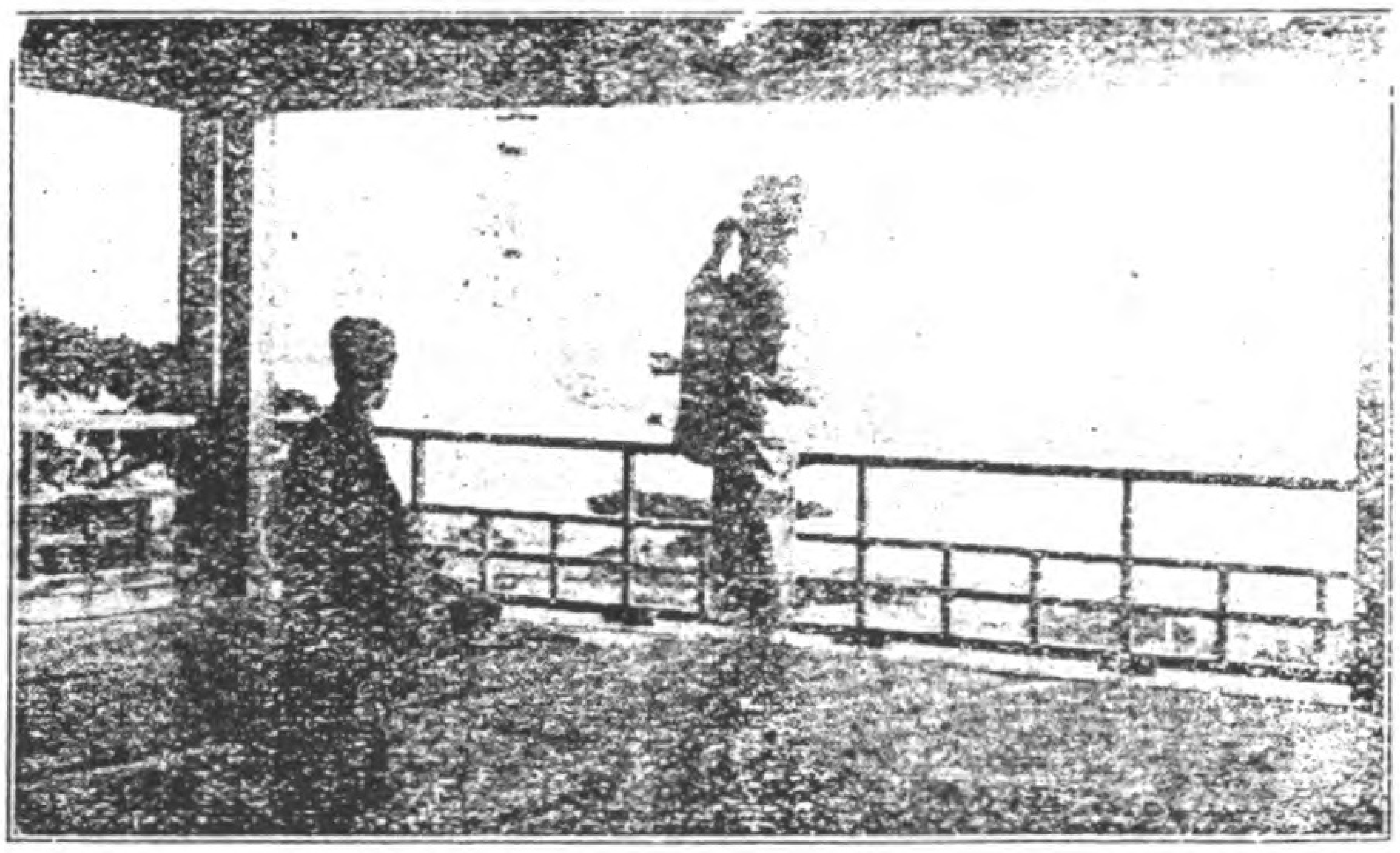
まあ今日のよいお天氣だこと昨日呉服店がもつてきたお父さんのお羽織を縫ふかしらん、また春雨が降りつゞくとつらいからおねまきをあらつて置かうかしらん、だつてあまり暖ひから美ちやんと遊ばうかしらん。

とつおいつ。

○多忙　愛知　三輪富江

私の宅は毎年五月になると茶を製るので忙がしい、家内三人て雇人ばつか、父は指圖をしられます、母は生茶を蒸されます、食事は皆私が用意します。

駿河路や花橘も茶のにほひ。



（奥深雪子君寄贈）

羽前酒田港（其二）

○衛生美人　埼玉　石田琴子

私は大變せい高で非常に健全て。生れてから未一度も御醫者樣に手をとられた事はありません、ですから、私は家庭て、文明的衛生美人。と名づけられて居ります。

生理的のあやまり。

○今年の收獲　備後　高子

兄さんが滿洲から歸て來て働らいて下さつたので今年は去年より麥の收穫が一割と五分ばかり多かつた此の勢では米は去年より三四割多くの收穫がきつとあるに違ひない。兄さんもそんなにせねばならぬと力んで居られる。

戰後の豐作。

○蝶　京都　永尾久子

椽側に近い病床から、庭を眺めると一羽の蝶が、弟の植て置た、大根の白い花に留つたが、妾の顔近くまで參りました、妾は病苦も忘れて、さながら小さき野邊に、居る樣です。

新空氣。

○夕ぐれ　　淺草　大沼さゆり

暮の色は翠より紫と變り行き、たなびきゆく汽船の烟も、うすれて、濱邊は左右の松の葉影より暮れそめて、そが中をぬひて、かすかに上るとまやの烟、末は鴉の塒に急ぐ方に消へ、こゝかしこに點火のつきたる。

○北海の富源　　北海道　くれなゐ子

肉躍り血湧ける里人に、限りなき滿足を與へんとてか、鰊は群れ來ぬ、期は至れり、夜半なほ絶えぬ櫓櫂の響勇めるかけ聲、嗚呼かくしてそ得る千金の富。

○留守居　　陸前　古河松江

母樣が私にお花見につれて行かうつて仰いますけれ共あまり好みもしませんし恰ど女子文壇の前金も切れましたのでお金七十錢だけ頂き花見には行かずに留守居する事となりました。

○往來　　西都　木村竹雨子

毎日表を見て居ると行き通ふ人の千差萬別或は洋服或は和服或は紋附女學生さんは海老茶袴噫妾し、もう一度あの樣になりて見たい。

○雲の間　　羽後　黑丸登美子

五月雨がポツ〳〵と降りたる日、何か作文の材料を得んとて裏口に出づれば、月は雲の間より出てつ隱れつさツと月は黑雲の間より出て。四方を阿彌岳に照した時の心好さ。

○如何しやう　　香川　松永茂子

妾が複習をして居る間、美ちやんと由ちやんとは、お庭で靜かに遊んで居ましたから、複習が濟むと直に、御褒美にとお菓子を持て行つて見ると、如何しやう、妾が丹精を凝した芍藥の蕾を皆むしつて居るのです。

○春の夕　　長野　島垣永子

堤へがたかりし寒さは、いつか過ぎ去り庭の雪も此頃の雨に、皆消え失せて名殘なく晴れ渡りし、ゆふべの空心地よう。門のやなぎも青々と芽を出し、たれたる枝を春風になぶらせて居る。

○田舍の友へ　　岡山　ます子

君子さん此月の文壇の繪葉書はこんなハイカラなのよそれ薔薇にキツスして、ゐます私はなつかしい故里の貧女にこれを送ります。

○夏の夜　　羽後　鈴木しゆん子

夏草の生ひ茂つて居る野をば空に譬へ、中を通ふて居る川は天の川、其天の川の邊を綺麗に緣とりて、ヒカ〳〵光つて居る螢は數知れぬ星とでも言ふべきか、然し彼の明皎々たる月にははて何を譬へたら宜でせう。

○新入會　　羽前　なみ子

勉强の餘暇に私一人で育てた養蠶は上繭斗りかけましたの、是が卅圓で賣れたので此活用の途に苦心して居ますと、門口に優しい女の聲で、御免下さい、出迎ひましたら嬉しかつたのよ、愛國婦人會東郡幹事部長。

○妾　　岩代　平賀のぶ子

妾は煙草なのよ！噫妾ほど世に因果なものはありません蝶々さんは訪ふてくれないしほんに泣きたいわ。妾だつてやつぱり胸には甘い〳〵汁があつてよ!!

○愛らしきもの　　麴町　山下わかば女

妹よりの手紙、子猫のじやれる樣、露しげき中のばら赤兒の寢顏を見ては只口つけるより外ありませぬ。

○唯一の希望　　羽前　芳子

妾は今より、天に居ます神に誓つて、天國へ行きたいと思ふが妾の唯一の希望であります。

○薊　　愛知　小島品子

里川堤に、太陽に向ひて咲きし、紅紫色の美しき玉の顏、憚りげもなく表せる薊の花、人は刺あるに恐れて花の美しきをも顧ざるが、其刺こそは、人のキツスを免さゞる乙女の胸に咲き出てし花と、そも似たらずや。

○うれしきもの　　京都　中島せい子

人に慈善を施したる、衣服を注文したるに思ふ樣に作り來れる、學課具の新き長閑なる日二三の友と打ちつれての野外の散步、異郷に學びつゝある時友達より書簡の來れる、繪葉書の交換。

○兄さん　　青森　姫葺女史

姉さんは平生妾に嘘を云ふものでないと教て居ました。或る日姉さんのお友達が來て、山川さんお目出度う何時お婿さん來るのと云ひますと、姉さんは何時も來ませんと云ひましたが、その日より二三日後に、妾に親切な兄さんが出來ました。

○きまりが惡るかつた事　則本しげの

昨日、理科の先生がお休みてしたから、一時間早く、學校をひけましたの、あまり嬉しかつたから手を打つて喜ろこびましたら、校長先生に見つかつて、笑はれましたら、何だか、きまりが惡るかつたわ。

○よろしく　信濃　山浦とく子

夫れよろしくの意味何ぞひろきや、言傳のよろしくは先方の健康を知ることを得、使のよろしくは先方の謝辭たることを知るに足る、女子文壇の通信のよろしくは交際を望むと知る、諸孃よろしく御勉强御壯康なれ。

○朝　顏　横濱　吉川英子

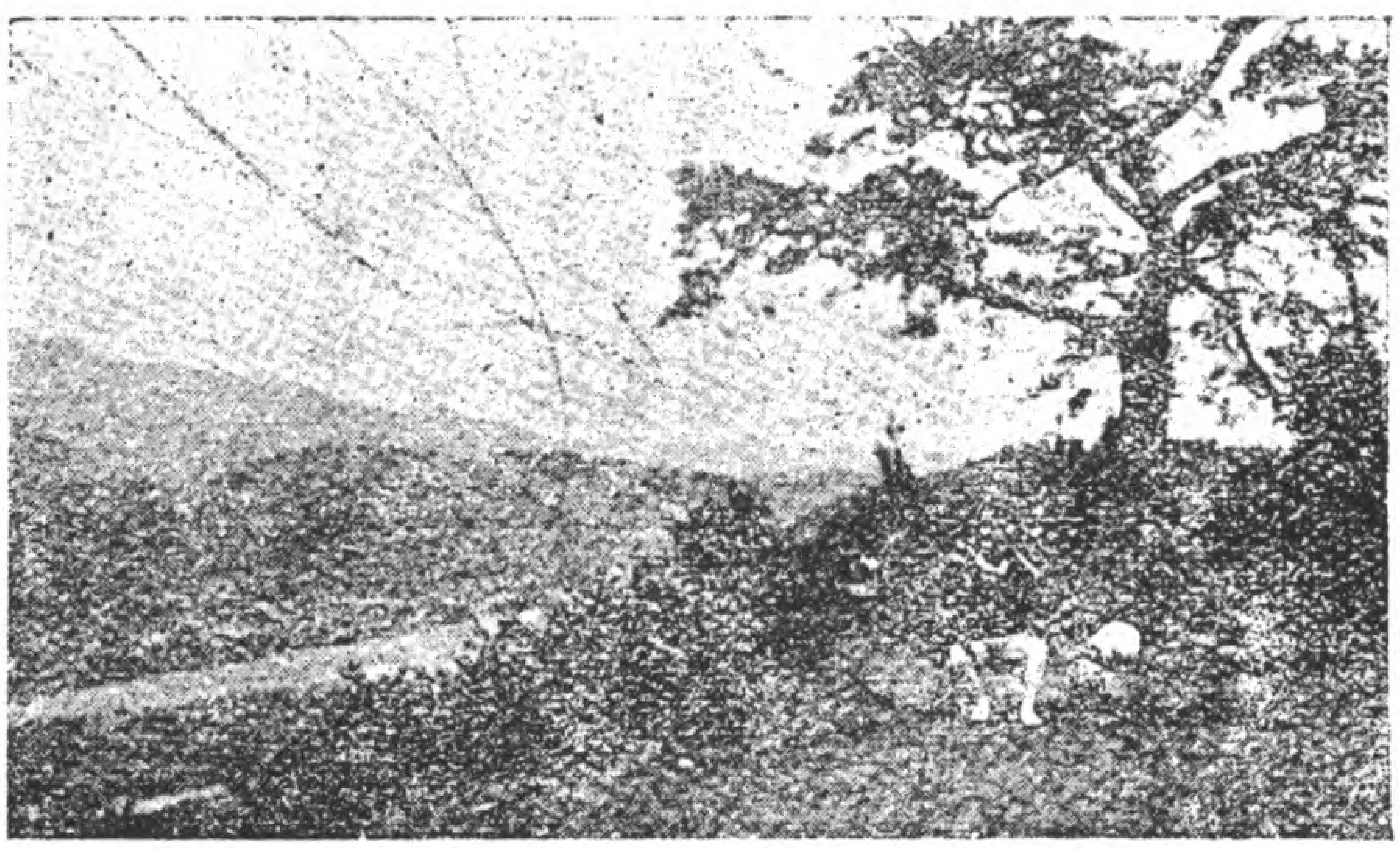
昨夕蕾を數へた朝顏は、今朝八つ咲くはづ、それを今朝見たら一つも咲いて居ない。變だと思ひながら後て露ちやんの玩具箱を見たら、これはまア美くしい！一杯に朝顏の紫紅。

○教育の効果　淺草　井上磯子

忠孝の訓を以て、人間を敎育すれば、忠孝の爲めには生命を棄てる、信義を以て人間を敎化すれば、信義の爲めには水火をも辭さない士女が出來る。斯くてこそ敎育の効果があるてはないか。

○硯の水　大坂溪子

御化粧をしてから、摘草に行つて面白かつた事を歌に仕樣と硯の水をとりに、庭におりたら、若草の露が月を浴びて銀の樣にあまり美くしいから硯を草の下に置いて、一草ふれば、あらむざん、銀の玉も星も硯の中にハラ〳〵と。



吉野山歌塚の松

○妾の境遇　越前かほる子

私は只今の境遇程樂しい事はありません。住家は神社の境内にあつて朝夕神樣の導きを受けて高く潔い心となる事を乞ひ、身は小學敎師あどけない可愛い兒童の敎育に從つてすこしても御國のためにと骨折つて居ります。

○廂髪のわけ　横濱　清水千秋子

近頃御孃樣方に廂髮續々流行致し世の中てはやれ式部だのハイカラだのと云ひ嘲けつて居りますが一概にわるくは申されません袴をつけ廂髮にするのは文明國のまれてつまり開化に趣く初期てありませう。

○菫　靜岡　かすみ子

其色その形誰だつて愛さずには居られません、牡丹の艷さはなくとも梅の凛たる氣風はなくともほんとにゆかしい花壇の菫、殊になき妹の形見かと思へば一入可懷くて今日もそれを大すきな本に挿んだのてあります。

○節句の半日　岩代　佐瀨ふぢ子

妾と夫とが心盡しの餅が今出來上がつて、神棚に供へると、俊坊はお母さんと、前の川端の菖蒲湯を沸かした柳風呂から上つて來て、椽側に笑つて居る。

○さとりの妾　常陸　川並はくゑ子

梅も匂ひ櫻も吹き紅葉も錦をかざりますが人は來ません、雪などがふれば時々獸の足跡を見る位、こんな淋しい深山に入つて樵を業と致して人知れず蟲、花、を友に勉強して居ります、こんな妾でも何時か幸運がありませうか。

○殘り惜きもの　相摸すみれ

見はてぬ夢、釣り落したる魚、草稿に墨のにじみて見えなくなれる、新聞の面白き續物の本日休揭、明日までと思ひし庭の花の起き出れば名殘なく嵐に散りはてたる、わけても戀人との遠き別れ。

芝區　川島芳蘭

○友と我

妾の親友は絶世の美人て、そして學校はいつも優等生て御座います。其に引かへ私は、姿は福助顔はトウナス着物は木綿にめりんすの袴まるてお姫樣と下女のやう、其て極々仲好なのは、少し可笑いてせう。

東京　好子

○好きな鳥

裏の杉林に春秋色々な鳥が面白う歌ふて居りますが短い問なの。だけど風の日雨の日と雖も朝早くからなくのは鴉ばかり、寢坊の妾は起されるのが常なの今頃は習慣になつて早起となりました。

下總　はな子

○出產の記

愛らしいかなりは三つの卵を安產しました餘り覗いては孵化さないと云はれ日に一回位十五回目の今日は赤子が二つ孵化り栄の背實を索しに臺畑殘らず步み漸々毒てないのを見付家に歸るとも一つ孵化りて居ました

備後　高杉みゆき

○雲

妾は朝な夕な二階の書齋の窓から雲を眺めては勉强致します、此山間に雲を友として日を送つて居ます。雲の變化は何時見ても飽きません。雲が姿を慰めて吳れます。

豐前　百留むら子

○御蠶

去年御蠶と云ふ鳴もしない美くない蟲を飼て眞白い繭を澤山採つて賣つて了ふと妾には蠶中金ちやんの御守をした賃つて面白い本を買つて下さり、御手傳した姉さんは赤い帶を頂た、嬉いな今年も亦御蠶が出來た。

京都　白菫女史

○一字

我ある長閑なる日、花見せずやと、友の許に云遣りしに、返書には只諾とのみ記しありぬげにかくても用向はすむ者ぞ。

土屋　初海棠女史

○わが庭

手桶に三つも水撒きし庭、石燈籠てもありたらむにはと、ランプ椽先に出すやにわに、颯と消えて軒の風鈴餘韻長く、松の梢の月は餘波滴る入ッ手の葉に輝き、六つの飛石さへ黒々と數へらるゝ三坪の庭、其美しさ。

下總　武田たき子

○世人の心

噫五年前に雪子樣が東京に逃て行つた時妾は老ませる母を助けて鍬を手にした時村の人が妾を親孝行と云いましたが雪子樣が何々學校長と稱號が付いて歸た時村の人が雪子樣を親孝行だと。

神奈川　淸水はな子

○墓參り

若い時には餘程の美人て引手數多の姫小松ともいつた人てあつたが髮には霜おいて額には漣立つ今花桶片手に珠數つまぐりつゝいと殊勝に見ゆるは其昔新婚の冠を戴いて多くの人に羨まれた人。

德島　齋藤菊子

○心地のよき時

淸潔な座敷に泉水の庭、湯あがりに凉み臺、旨い物を食べた時、好なものを得た時、遭たき友達に遭つた時、人に誉られた時、眠むい時に寐る、縫物の仕上がつた時、始めて誌上て記者先生の、お顔を拜すべき時。

松山　黒紅

○武雄

親類中のものが一所に集つてつめたくなられた母樣のそばて悲しんて居るのにあのかはいゝ武雄ちやんばかりいつもの樣に嬉しそうな顔してよろこんてゐる。

下總　霞浦女史

○親友

私數あるお友達の中て滋子樣程親しい方は無いのよ、理想があつてゝ、總ての境遇が同しだから。

北多摩　浦野秀子

○馬鹿

酒屋の角に人が大勢立つて時々大聲て笑う聲が聞えますので何事かと思つて行つて見ますと何處かの馬鹿が自分て自分の事を歌ふ樣に「四百餘洲を乞食碗持て角に立つ」と面白い顔をしながら呑氣そうに歌つてゐた。

大和　坂上ゆきえ

○蛙

「きぬえさん、チヨツとお待よ、そこの古井の邊にも、きれいな、菫がさいて居ますよ」

摘まうとすると、その井戸の底の方て、「チヤプン……ク……クー……」

滋賀　辰井寧子

○鄙の春

天津姫皇子が亂舞するのであらふか紫の帳を洩れた一陣の薫風に鎭守櫻は繚亂とこぼれた。折しも「そりややあとこせ！」夢の如く靜かなる森に一種平和の響を傳えるのである。軈て齋宮の河内道者は天國の如き鈴鹿峠の頂より花の下界を見下すのであらふ。

○夏は來れり　草野露

樂しい夏は來た、橘が薫ると螢が飛ぶ、卯の花が咲けば其蔭に時鳥が鳴く、五月雨が降る時分となれば、賤の乙女が鈴の樣な聲音で詩を唄ひながら泥濘して早苗を植ゑて居る、夏の樂しみ春どころではない。

○無情の春　陸奥　名久井さえ子

御隣の俊ちやんや向の千代ちやんは、樂しそうに長者山の櫻の下にて「テニス」の遊び、引換て妾はなぜこう不幸なのでしよう、先春は父樣は逝き、今春は母樣に病まれ!!、ほんとうに妾にとりては悲しく無情な春なのです。

○過ぎし試驗休み　神戸　初音子

思へば辛し過し試驗休、姉樣は歸らぬ旅へ逝かれました其後私はお寫眞を見る度に泣いて居ます、母樣だつて大層悲しんで居らつしやる御樣子すると又父樣がそれを御叱り遊ばすので私は其度に胸も張裂る樣な思ひ。

○お家の猫　佐賀　欣子

姉樣昨夜玉が安産致しましたわ、それはそれは可愛らしい白黑を一疋、私は今朝いつもより早く起きて赤い涎掛を縫つて呉れましたの、そして名は投票ですから早く御返事な、私が其撰者です。

○哀れ緋牡丹　神田　佐藤柳子

起き出づれば、曇りなく晴れ渡り、怪しき雲の流れもなかつた、狹き庭に下駄穿きて二三步足を進めました、ふと植木棚を見れば哀れや夕べの雨に、緋牡丹の花が一輪落ちて居ました。

○蛙　米澤　福島藤枝子

ランプの油も今少し、チーン、おや一時?、何樣ふものか、明日の理科の試驗は百點を取つてやろ! 開けては讀み讀みては開け、此所こそはと、讀み返す折柄、池の中で? 吾劣ずと可愛らしい聲で蛙がなき出した。

○樂しみ　入間　山田松子

皆樣は、世の中で何が一番樂しいとお思ひですか、春の花見、夏の螢狩りだと、思ひ升か、秋の月見、冬の雪見だと、お思ひですか、否々、妾は善事をなしたる時程、樂しい事はないと思ひます。

○我の樂　宮城　阿部國子

わたくしの一番樂しいのは運動より唱歌より遠足花見より學校で學科の優等點を取るといつも御父母樣から御褒美を戴きお喜びなさる御笑顏を拜し申しおいしいお飯を一所に食するは一番樂いです。

○當惑　岡山　三宅馨

買物に行つて御あしの足らなかつた時、金曜日に木曜日の御道具を持つて行つた時、御辨當を開いて御菜の入れてなかつた時、大じな大じな投書の原稿を頑是ない弟に穢された時。

○吾理想　安房　忍足靜子

吾れ成長の後は、健全なる人のところに嫁ぎ、健全なる子を生みて相當に敎育して、家や國の爲めに盡くさせ、家政豐かに、一家春の如く和し、美善なる家庭を作くるが吾が理想である。

○心配な事　淺草　葉津子

お父樣が田舍へかけ取りに入らしつて歸るつもりの日にお歸りがない時、お友達と他所へ行つてはぐれた時お父樣やお母樣のお病氣の時。銀行へお金を預けに行つた時と引出しに行つた時。

○端書文を讀みをはりて　群馬　横田君代子

自然界にあこがるゝ詩聖、音樂辛酸を說明する者、男學生を罵詈する女學生、心骨に浸徹していぢらしきは、悲境をならす賤女、富豪をなめかして虛榮心を賣らんとする令孃など。

○御注意　栃木　白藤子

今日は後には天氣は危いから行くのは止しな、と母樣の御注意も聞かず、春ちやんと山を上つたら母樣の御言の通り雨が降つて來て體はお釋迦樣の樣で益々急いで下るとすべつて傷をした。

○正反對　秋田　黑丸ＢＮ女

晴。北風ありとの天氣豫報。明日は幸ひ日曜と。枯野にテニスの約束、然るに明くると雨に南風！雑誌を買うなとお父樣に言われたが、不幸にも雑誌注文書を見られ、何程怒るかと思ひの外、女子文壇なら宜しい。

○毎朝待ち遠き人　筑後　香湖子

妾、毎朝誰が一番待ち遠いかつて、郵便配達者より待ち遠い人は無いよ!!今日は誰から、音便が有るのでしやう、最早來そうなものに……

○螢狩　岡山　中野波子

何故今日は螢が甘い美しい玉の樣な露のある下の方を飛ばないで上の方ばかり行くのだろう妾逹はとらないよ、云はせもあへず川下遙かに最う數群の小供が笹を以て追うて來た。うら若い妹も螢かごを投げてしまいました。

○行脚僧　愛知　紫雲女

赤い黄い霙が帶んで山から歸る時、畔路の曲角で一人の行脚僧と出會した、尼僧の問はるゝまゝに道を委く敎てやつた、すると三遍有難ふと頭をさげて何か口の中で唱へ事をしつゝ、夕靄の中へ消えてしまつた。

○我家　常陸　今泉貞子

私の家は清淨な町の一隔て左程廣くもない臺所に入疊に六疊敷、家内は五人で外に女中一人、お母さんがお掃除の時は兄は庭掃き、私は雑巾掛け、弟等はお使ひ、そして又お休息の時は、兄が運動、妾が音樂、弟等が唱歌、あゝ只惜しいのは父の亡き計り。

○古き甕　小樽　若谷綠子

歌種を拾はんと野を逍遥ひしに、足にふれたる古き甕、昔は琥珀の如き酒入れられて愛されしならめ。今は濁水溢れ草に埋れ何とも云はずして默せり。

○幸福　相摸　相樂なでしこ

世の中に幸福な御方も澤山ございませうが私ほど幸福な者もないでせう二十才の今日迄何の不幸もなく殊に今は看護婦と云ふ尊き職に立ち不束ながらも病む人の看護に從事する事が出來ますので。

○お湯上り　常陸　酒榮美雪子

湯から上つて、手拭をすゝぎに裏の川へ出て、ザヤブ〳〵やつて居ると、十六夜の月がほんのりと、稲田越にさした。

○淋しき月　美作　性全紫女史

偲ぶにえ堪で、しばし目を閉づればいとゞ優しかりし母、情深かゝりし父、右と左に我が名呼びます心地して、ふと目を開けば、泣けよとか、淋しき月は出でぬ。

○未來の校長　岩代　みどり子

今年十年になる妹、漸く二年生よ、先日一寸尋れましたら私は小學校を卒へて東京の女學校へ入り、後は先生の學校へ入つて末は立派な學校の校長になりたいと。

○曉　埼玉　伊草理以子

隣家の水くむつるべの音にやいそぎ雨戸くりあけて空をうち見れば殘月の影薄う山端に郭公の一こゑきこえけり。

○くれ行く春　越後　大塚雅子

櫻の花の白き夕べ朧月にそむきて一人すゞろあるきの影地にながくひきて消えんとするあたり里の童の笛か！あらぬか！只斷に韻くうた細し。

○大嫌ひ　靜岡　たか子

黑い蝶、二十すぎてのマガレツト、鮨の汁、はでな着物、だまつて居る人、長い襟卷、石炭の烟、老人の夫婦喧嘩、野蠻といふかもしれないが舶來の品物。

○煩悶　羽後　秋月泣蘋子

清い〳〵クリスチヤン信者よ妾は煩ある身です此の罪の子をすくつて下さる情のあるかたはたとひどんな方でもよろしい貴い道をさとらして下さい。

○田舍の親　秋田　東海林榮子

私が受持の尋常三年生に向つて「皆さんは何のため學校に來ますか」と問ふたら缺席勝の一女兒が答に「御前に學校を休まして內の手傳をさせたいが、さうすると村長樣に、また叱られるから先づ通へと」

讀友倶樂部

○詩文を作る時（課題）

○　　新田の里　得　子

私は人のざわ〳〵してゐる所では、どうしても考へられません、お机の前にちやんとおすわりして、考へるより、山か、何か、極くしんとした所がよう御座います。非常なる精神の刺戟を受けたとき悶えに悶えたあと深綠の中に一人さまよい思ひをやるときなど考ふるに尤もよし。

○　　遠江　增田ふじえ子

文章を作る時は、夜寢て考へるのよ、而して朝早く起きまして掃除をすまし、机に向ひ半紙へ書きます、時々後て訂正し、いよ〳〵正しくなつたと思ふと、帖面へ淸寫して置きますから帖面が厚くなれば樂みてす。

○　　京都　は　ろ　枝

私は行儀なしなんてすが、どうしても机にツと向つては何も出來ませんのよ、雨の日而も夕暮頃二階の緣にても立つて居ると、急に筆が欲しくなつて來るんてす、いつてしたかお友達が「あなたからおたよりのある日は妙に雨てすれ、切角の繪葉書が大方だいなしになるんてすよ」とおこゞと聞いた事もありました。

○　　芝區　小宮　きみ子

詩歌や文章を作る時には、先づ居室を淸潔にして書架を整頓し精神がさわやかにして鎭靜なる時が一番よろしいのです、て考へるには朝夕は勿論夜間にかぎります、頭部に材料を充分たくわへて其れから書きます用紙は半紙で鉛筆を好みます。

○　　京都　郭　公

妾の文章を作るのは大低夜、床に就いてからで凡て夜は晝と違つて靜かで善い文章が出る樣に思はれます、傍には只英和辭書と和英辭書とが有る許りて、是は字を忘れた時見るのです、而して雜記帳に鉛筆で思ひ浮んだ文章をかいて翌日なり、又は思つた時に淸書しながら訂正するので實に單調なものです。

○　　上毛　千　鳥　子

夜家内の者の寢靜んだ後一人孤燈の下にて、さて考へ置きたりし事ども、先づ纔めしるしおき、文意の前後を考へ云ひ表し方に時を費し、やうやく、拙きながらも一つ作り出すので御座います。

○　　岩代　石川みどり子

午前は母に手傳ふべき業多きが故か文を作るには午後はよく殊に夜間一室孤燈の下はよし常に腕を机上に置き左掌に左頰を托し執筆するは習慣にして又時には床に入り消燈の後ち千思萬考を重ねて點火枕邊に筆を執り記し了りて又消し又點じて執筆するは第二の習慣てあります唯母上にうるさい子だとしかられる事あるには閉口頓首。

○　　大阪　白　さ　ぎ

私は文を作る時は大へん心配なのです、よく出來ればいゝがどーであろうかと思つて心配するのがくせですよ。

○　　濱田　三明　糸子

記者さん妾思切つて云ひますが、あたしは夜遲く机にすがりて、片手左の手を懷へ入れて筆の軸を少しくはへて考へるのよ。

○　　越後　北村やよひ子

お夕飯後三十分程二人の妹を連れて宵田の上を渡り來る涼しい風に鬢の縺れを飜らせながら散歩します、塵腸を洗らひ去つて九時迄三人で机に向ひます　お母さんは側てお縫物、九時を打てば妾を殘して皆ベットに、室內靜寂、只時計の憂々と小さき艸の聞ゆるのみ、窓の下の小川のせゝらぎは松の響に和して遠く近く小田の蛙の聲、妾は此時筆をとつて必ずインスピレーションを得ます。

○　　あ　や　め

詩文を作るなんて、私等の樣な無敎育な者には何も作れませんわ、でも折角のお尋ねてすから申ますが、私考へるにはいつもお針をしながらよ、そして夜になつてから汚れた文机に向て直したりしますの、用紙は半紙てす筆は弘法筆を撰ばずじやなくつて、どうせかけないんですからどんなのでもかまいません。

○　　小石川　佐川　定子

妾は頭の淸淨とした朝てす、又何か仕事をして居る時にもいろ〳〵と出るのです、朝なれば先づ八時頃から机上に倚り机上には何も置かず皆取除いて只雜記帖一册と鉛筆一本、少しても八釜しい事があると出來ませんから靜かにそして頭に浮んだのを、私語ながら訂正してゆくのです。

○越後　上野　志摩子

兄様が撃劍に出懸けた留守か、又は就寢後に、コツソリ書齋に這入り、兄様の机に向つて、丸い窓を明け而して美濃紙の薄いのと、ジクの長い筆を取り出して、自分の思つた事を、スラスラと書くのです、兄様が居る時は、何だか恥かしくつて、書けないのです。

○大阪　三原　やく子

思ふたまゝてすよ私しのは何れも皆寢てしまつて世間も靜かな夜にはよく考へられます机の上て書きます洋紙が好きてず詩文を作る時は只其事ばかり考へて居ります。

○孤　蝶

机に向ひ右手は筆、左手は頰に、接綴のよき文字もがなと、頤を白衿の間に埋め、或は障子の破れ目や、壁の穴など覗詰め想に耽ることあり。その文章を作るには、極く靜かなるときを撰みます。

○羽後　前田　ひさ子

私は寢て居てゆつくり考へてそして朝起てから、食事後一時間程へてから西向の椽側に文机を置き、紙は和紙に筆は國産旭大天狗にて此の無學なる頭をなやまして三時間も文机に座して居ると目がくらんて書く事ができませんから、一時間も庭を散歩して、又文机に座しお晝迄後は明朝作りますのよ。

○中山　翠美

妾文章を作るには座して縫つたりなんかしている時に過去の實際あつた事情を心の中に文をつづつてゐてそして一夜机に向つて書き初めます私はおもに眞蛩に筆て書きますけれ共私は考へる折に激しく云つたなら直ぐめちやめちやになつてしまひますけれど一度それを考へたなら忘れはしませんのよ。

○廣島　鹿　子

私は至て文章の拙ない者て御座いますが筆とる時の有様を一寸申上ませう、皆様とは少し異てるかも存じませんが、念入る文はいつも夜、物靜かな頃、机に向ひ考えます、其して皆様や先生の善い句など思ひ浮べ、常に其場へ臨んてる考えて書き、成就の上は急を要しない場合タイムの許す限り熟讀して、添削致します、そして常に新聞雜誌等て善い句と見れば切取り閑暇の際に暗記致します。

○伊勢　三　遷　子

一の文を作りかけましては就寢る時も起きる時もさては道を歩く時も洗濯する時もそれは御飯を食べる時も心に繰り返さぬ時はありませぬので、夢にさへまゝ見る事があります、併して織して申しますれば物事を悲哀に感じた時がまづよい句が浮ぶ樣てす。

○明石白蓮子

詩歌や文章を作る時には詩人に歌はれつゝある明石のよーな浦に出て浮いたりと見ゆる淡路島から舟人が歸る樣、又東方から紅なる光を照らし遙向ふの青島を照らし、誠に景色のよい眞砂の上に座をしめて、つくづく砂の上に指先て書き試めし、又悲しい文は夜、月が海上をてらし遠のチヨロチヨロと光る時、紙はつるつるした半紙、筆は鶯堂先生選筆。

○茨城　川浪たいら子

姿が詩文を作る時はお仕事をする時とか道を歩いて居る時かて文を作ろうと机にかゝるとよい想がてません書く時もあまり丁寧にはかきません却つておかしくてきますもの。

○岡山　永原　多計子

妾は詩歌や文章を作るつて未だ大それた心はありません、ほんのお稽古に筆を下して見る位てすよ、そして妾は考れば考へる程宜い文は出ませんの、朝早く起きて庭の面を散歩して居る時亦夜月下に遊ぶ時なぞに、比較的宜いのが出ます、綴る時は斜面臺に向つて洋紙へすみれ色のインキて書きますの。

○遠江　伊の藤比頁子

妾の詩文を作ろうと思ひますときは、すぐ深い深い山奥の方へと散歩に行きます、そして其の折は必ず鉛筆と紙とを用意して歩みながら考へ付いたことをすぐと書き取りまして、然るのちに、訂正を加へて、記者さんに御目に懸けるのです、てどうしても机に向つてゐては考へが一つも出ません、みなさんいゝ御考へがありますならどうぞお敎へ下さい。

○巣鴨　胡蝶女史

妾は文章を作ることがすきてすけれども何時筆をとつてもよい想が浮んて、うまい文章ができるかと申しますと、さうてはありません、妾の一番よいと思ふのは夜、寢床についてからてあります、床の中て想を練つてそして自分てよいと思ふ想のてきたときは十二時ても一時てもすぐに起きて書くのてあります。

○伊豫　清風女

私は時間の嫌ひは有ません又忙否の差も御座いません唯或る物にひどく感じた場合てす、たと

へ机に向て筆紙を取ても精神が他へ散て居升場合はどーしてもいけません、半紙木鉛筆に限りませんが、淸書の時だけは半紙にシンカキを用ひ升。

○　美濃　竹雨　女史

私はホントに考へる樣な才がありませんかられ出たらめてす、それても朝の氣分晴れた時とか、景色の宜しい處て作れば、自然それに感化されます樣てす、亦寢た時或は逍歩きながら考へると不出來ながら突然宜しい句と思ふ事が偶々あります、紙は雁皮紙、筆は大綸用なのてす。

○　秋田　黑丸　登美子

妾は詩文を作る時の好時間は夕方の散步なのてす、だから其時は雜記帳を持つて居ます又今なら夜、河邊に立ちて螢を星と見、星を螢と見ては實に好く出來ます、然し考へて作る事は嫌なのてす、だから妾の作文は思ふまゝに作るのてすから諸嬢樣方宜しく御承知を願升。

○　德島　齋藤　菊子

机に凭れ眼を閉ぢ筆を持ちながら、考ふるが私しの常てす、机の周圍には參考本が二三册と、原稿の書きそこれ、私し詩文を作るのは、いつも夜分此頃てすれば蚊帳の中へ机を引ばり込んて、紙は半紙を使つて居ます、筆は大阪の山口製の、玉兎毫を愛します。

○　濱田　小松原　德子

私は詩文を作る時には何時も題を考へ、さて起筆が分らないのだから女子文壇の秀才なる詩文を、應用しようと思つて、出して見るけれども何んだか人の力て作る樣なのてそれよりか自分獨りて出たらめに、作つて、お友達の團子さんに、賞められるのが私一番功よ。

○　上總　黑河　きよ子

通學の往復に考へて夜家内の寐てから机の上にて書き紙は日本紙て筆は鉛筆か水筆てす妾が詩文を作つて書く時家内のものは誰れも知らんのてす。

○　安房　翠紅　女

詩文を作るには、朝ても晩ても靜かな時に限ります、考へるにはちやんと机に向つて考へるより、却て步みながらや寢た時の方がよい考へが出ます、私は何時ても寢た時や步きながらあらましを考へておいて、夫から始めて机に向て作ります、下書は、洋紙へ鉛筆て書くのが一番便利です。

○　大阪　桂　花子

氣の靜まつた何となく心うれしい時……机上の筆をとりて庭を前にひかへつゝ考へますのよだけど淺學な者故いつもまづいものばかりよ。

○　津市　松尾　はな子

私は文作る時は必ず氣を凝乎と沈めて靜齋に灯影の下に必ず雨の點滴の音か、凉しい虫の音を沈んみり味はひつゝ行ふのてす。勿論盤は皆無でして、夜とても氣が向かなくては作りませぬ。室は六疊の閑室、壁間には繪額、繪はがき挾、油畵、淨机の先の丸窓を開くと露したゝらむ若葉の庭!!

○　橫濱　星戶　菫子

詩歌や文章を作る時にはなにか御手本にするの考へを別段に凝らさないて口からむやみにかくの作る時は夜の最中か又は日中ても靜かな時、何にかの景をみたらスケッチにかいてをく、かく時はかならず机の前、紙は原稿用紙筆は懲法用筆、作る時の心地はいとよし。

○　磐城　原田　淸子

詩文を作るには秋の夜は一番宜しいれ、風は冷しく月は淸く心身共に爽快を覺ゆるてすもの、其次は夏の日なのよ、燒くが如き炎熱な綠陰に避け風のまに〳〵りん〳〵と空蟬の聲に交りて鳴る風鈴の下に想を練つたなら如何に立派な文章詩歌が出來るてせう、それから妾は文字が下手なので筆丈は上等の眞書を使て居るのよ。

○　明石　植木　初江

心に浮んだ見聞の感情等は直に記して置いて詩文に作り直すのには深更四面寂寥として唯遠吠への犬の聲と柱時計の音のみてふ時分に古今大家が筆になる名詩文を操り返し〳〵作例を意に副つたのにならつて據想の詩文を下手ながらも書き幷べて二三度自分て添削するそして出來上らないと筆を止めぬが例てす。

新課題

○眠る時　（八月五日締切）

▲皆さんの就眠前後の挨様を伺ひたいので

す、ありのまゝに書いて下さい、猶ほ詳細は前號に書いてあります。

○衣服に就いて（九月五日締切）

▲女子と衣服とは甚だ密接の關係がありまして諸孃は美くしい衣服を着たい好い衣服を持ちたいとお思ひでせう、それだけでも男子以外の嗜好であります▲課題として諸孃から承はりたいのは夏冬に限らず好きな衣服の縞柄、又は模樣色合など▲同じ好い衣服と云つても甲の人と乙の人とは好みが違いませうし、色合なども其人に依つて違ひます▲理想の衣服なども面白い▲現在諸孃が着ていらつしやる衣服をこれ〳〵だとお聞かし下されても、地方と都會の相違など趣味ある事が發見せられるでせう▲課題は大抵沒書にせず載せますから荷くも着物を着て入らつしやる方は何か書いて下さい▲半紙に限る、七行以内、國名又は縣名だけにても宜し。

○諸孃と記者

○記者樣私は高等女學校の生徒で誠にふつゝかな者でありますが之迄地方の賣捌店で買つて愛讀して居りましたが御社の方へ投書したいと思ひますがかまひませんか次の誌上で御知らせ下さい記者樣暑のみぎり御身大切にさようなら（德島公園のほとり愛讀女）（記者曰、勿論かまひません）○記者樣に御たづね申しますが「不如歸」いづこで發行し定價はどの位ですか次號誌上で御敎へ下さい（西多摩小作みと子）（記者曰、東京民友社發行、定價三十錢と思ひました）○梅雨の時節柄記者叔父樣には御障りは御坐いませんか御伺ひ致します、原稿を作ります時題の外何々文と記されば沒書に成りますのでせうか御手數ながら委しく御知らせ下さいませ伏して願ひます（白ゆり）（記者曰、題の外何々文は忘れないやうに書いて頂きたう存じます又曰く叔父樣は恐縮）○記者さま新派歌集の內で何と言ふのが一番好いでせうれ發行所を知らせて下さい（X女）（記者曰、新派歌集では「戀衣」「舞草」「みだれ髮」以上金尾文淵堂發行、「まひろ野」もよろしいが目下品切）○御伺ひ致したいのは新歌諧及び新俳諧をはがきで書いてはいけませんか（しろつばき）（記者曰、凡て半紙で願ひます）○一寸御尋ね申候新歌諧は一人三句までは宜しいのですか又懸賞文集の第二編はいつ發行せられるのですか右御伺申上候（せい子）（記者曰、新歌諧は一人三句まではよろしい、懸賞文集の第二は來年一月には出來上ります）○一枚よりない寫眞を御送り申しますが頂きたい時は二錢切手封入して送るのですか（堺市白桃子）（記者曰、二錢切手は御封入にならずともお入用の寫眞は用濟次第御返送申し上る事になつて居ります）○記者さん投書するには本名を書かなければいけなくつて本名を出さない樣にするにはどうしたらいゝの（中山翠美子）（記者曰、本名は別の紙に書いて下されても、原稿の端の方へ別に書いて、變名を題の下へ書いて下されば宜しい）○記者樣わたくしは今年十八才で高等女學校三年生であります私の家庭は父母と一人の弟と妹とがあります わたくしは、田舍育ちでありますから何もおはづかしい事ばかりですが、今から天下の諸孃と文章の競走を試みたいと存じます何卒御仲間へ入れて下さい、（香川縣琴平榎井中三町六八四伊賀上幸子）（記者曰、高等女學校に御在校の由、學校以外の修養として、又樂みとして、文藝の事に心を寄せらるゝのは、おとなしくて何より結構です）○記者さま愛讀者でさへあれば誰の寫眞でもお出し下さいますか或は當撰者でなければいけないのですか（記者曰、愛讀者でさへあれば、どなたのでも出します）○妾は每日こんなんばかり見て只友と致すのは女子文壇だけですよ（仁川風月堂與田あい子）（記者曰、此文言をお書きになつた御地の風俗繪ヘガキ珍しく頂戴しました）

○諸孃の交際

○妾は攝津境の片田舍に住む不束者ですどーか御見捨なく以後よろしく御交際を願ひ御文や繪はがきの交換なすつて下さいな（攝津川邊郡六瀨小北香枝子）○私は今回初めて投書致します諸孃方宜しく御賴申します（肥前西松浦郡有田町武末八重上瀧みつ子）○本紙とお友達の羽前こま子樣には今月可愛いおむこ樣がいらつしやるのよ、家は郡ての金滿家容貌は美しくそれにカイゼル式のお髭のある當世風の御紳士で人には大そう御親切なお方なの、皆樣こま子樣をお祝申して下さいな（西置賜郡小國町MK子）○諸姉樣只今迄では繪はがき或はお寫眞頂きまして有がとうたいていは御返事さし上げましたつもりですが尙もれていました方がありましたら早速しらして下さい必ず違約はしませんから尙今後は色紙短册に御自詠の歌をかいて送つて下さい裏に「住所氏名」御記入下さいませ（美濃國相生

町加藤裁縫舍内傍島美遊喜）○何卒御交際を願ひます 又手紙はがき下さいれ屹度御返事します（京都市中長者町油小路東入高田あい子）○皆樣どうぞ、御交際を、願ひます、妾はいま懐しい故郷を離れて、この國に來ていますの 先日も初めの交際にはがきを、差上ましたら 御返事がありません、皆樣そんな 不人情でなく、御交際を願ます（長崎縣佐世保市矢岳八九八石原房子）○岩代丹治はろみ樣 私も貴女と同境遇で御座いますの、何卒之れを御縁に末長く御交り 下さいましな、私は小學校に奉職した日は極く淺く從て經驗も淺いのですから 宜ろしくお教しへの程を、どうぞお玉章下さいましな 其他小學校に御奉職遊ばしてらつしやる方はどうぞ お便り下さいましな、すぐお返ししてよ、何年の受持ちていらつしやるかも知らして頂だいな （北海道龜田郡七重尋常高等小學校内松井長子） ○妾いろ〳〵の雑誌を讀みましたが 女子文壇が一ばんおもしろふございまして 去る三月から愛讀しておりますどうぞ諸孃よ、ふつゝか者ですが御交際なすつて下さい、又繪はがき 交換も盛んにねがひます住所は（信濃岩村田町吉川ますみ子）○おなつかしき誌友諸姉樣以後よろしく御願申上ます 御寫眞玉章繪葉書新聞等の御交換もして下さい 御送りの御方には色々なる 物を差上ます （讃岐大川郡三本松本町堤しず江） ○まあ〳〵誌友の姉樣妾しほんとに〳〵嬉しいわてもたーくさん御手紙や美しい 繪はがきを下すつたのですものどーぞ以後も又變らず下さいな 妾しに參りました内御住所不明の方がお二人 香川縣の川崎ふさ子樣と陸前國本吉郡氣〇〇町〇町小學校上の 神山さ〇

子樣よ。どーぞ最う一度下さいな御願よ （埼玉縣大里郡久下村島村露子） ○諸孃樣爾後不相變御交際なれがひます （羽前鶴岡町天神町佐藤芳子） ○記者樣始め皆樣私は立山下のすゞがめてすが 女子文壇の愛讀者となりましたから以後御交際をよろしく願ひます （富山縣中新川郡上市町安田崎子） ○筑前嘉穗郡飯塚町相山圭枝樣御なつかしうございます 私も隣村の大谷村のものですから 一そう交際をれがひます又他の諸孃よかよわき妾をお導き被下れてあみものを 送り下さい繪葉書て御禮致ます （福岡縣嘉穗郡大谷村大字鹽頭西部古 河鑛業所内 塚本 ふく子 内田靜子） ○東京の諸姉樣何卒御交際をれ妾の兄さんは鐵道學校の生徒て 毎日日暮里の宿からお通ひなさるのそれて 妾東京の姉樣戀いわ妾一人て淋ひわ何卒御文通をれ亦繪葉書の文換も お願ひ申します （紀伊日高郡藤田村吉田阪本春松方佐代子） ○小生はいせ子の兄にて事務多忙の身、愛らしの諸孃よりいせ子に立派なもの 御送付あらせられしもの 多々に接しホト〳〵困じ果て候へ共只今より 本人は四ヶ月間は不在にて御答も不致により小生より 一寸おわび申したる手紙も差上げ候いせ子歸り 次第しかとお話し致すべく其節は本人と樂しくお話しなさるべく候 （群馬縣伊勢崎町字相の町六四五大山毅太郎） ○千葉縣印旛郡富里村中澤相川みよ子 （私は小學に通ふて居る淺學な者ですが、 御情ある 御方!!希くは永久の御交際を）○皆さん毎朝お茶の代りに白砂糖に梅汁少量を加へて そうしてお湯を澤山入れますと紅梅色になり まして味ひ能く衞生上に至て善ひと申しますから 御ためし下さい客のある

朝御茶の前に出しても宜しいてす （越後上野志摩子） ○誌友の皆さん誠に不束者てすが以後御交際願います（石見那賀郡濱田石本鶴子）○誌友の御内て今東京市の縣立 女學校の三年か四年位て品行方正同情心に富て居て そして東京に家があつて 高等師範の文科を望て居る御方がありますならば何卒御交際の程願ひます （弘前市茂森新町三十五豊田方町田つれ子） ○福井市のうらぶれ女樣先日は 新小說一册お惠み下され有難う御座いました、 それに付あの 貴女が本の中へお手紙替いて下すつたので、第一種變更となり不足税一圓三十六錢取られました之からは 決して遺憾事のない樣 ひろく皆樣にもくれ〳〵御注意申し上升（陸前古河まつえ）○何卒繪端書、寫眞の御交換を願ひますよ、 又孝女白菊の歌御存じの方は御知らせ下さい 拙いのですが 乘て御返禮いたします （日向國南那珂郡細田村兆武方吉原富子） ○妾は田舍て誠に淋しいてすよ誌友皆皆樣にして 文通して下さる方は女子風の繪葉書にて御申込み下さい 一々返信しますから （信濃下伊那郡龍江村四〇島岡新子） ○諸姉樣よ、妾も愛讀者の 一人てすよ、 妾は京都の學校に居りましたけれど、 二人の兄が、 召集されましたから、 家庭の 都合に依り、 昨年の暑休に、 歸りましたぎりてす、 田舍は淋しくて なりませむ、 繪はがき、玉章、和歌の、 交換を 御願ひ、 申します（山口縣萩町七十番川涙顯子） ○妾は先頃某女學校を卒えました其と同時に數ある 友は皆遊學の爲帝都へ上りになりましたから 急に淋しくてなりません繪ハガキ 交換及び御文通末ながく願ひます（佐賀縣佐賀市柳町副島まつ子）○諸姉樣よ

り御惠みに預りましたの實に二十五册の多きて御座いました 其內御住所を知らせて下さいません方が五名有升借情深き諸姉樣に申上ます只今までは他人の家に店借りを致て居りましたがやうやう明日はほんの私等一個人にて借ります家へまゐりますが 若し何事もなく暮らして居りましたら皆樣の處へ當地の新聞を一度なり共差上ます 若し差上ましたら蝶は無事に暮らして居ると思召し下さいまし 其內又皆樣にお目見えする事も御座りましようそれのみ樂しみに暮らします先づそれまでは 皆樣御免下さいまし六月廿四日（森部蝶子）○誌友の皆樣愛讀者て御座いますから以後よろしく 御交際をねがひます（福岡縣三池郡大牟田町正木彥衛門方白（ゆり））○私も本誌の愛讀者となりましたから 諸姉君樣方よ以後交際を厚く願ひます （鹿兒島市小川町六四藥丸のぶ子） ○諸姉樣私は陸中產の者てありますが都合上當島に參りました 所誰を友とする人もなく誠に淋しふ御座いますから 何卒繪はがきなり御手紙下されて 私を慰めて下さい先着の御方には當港の寫眞を差上ます。（樺太島コルサコフ港初音町四號藤山娥子） ○諸姉樣妾は淋しく暮して居る者てすどーか あはれと思し召して永く交際して頂戴れえ （久留米市通町十丁目中島きよの）○親愛な諸孃樣御交際を乞ふ（京都市中長者町油小路東入る高田あい子） ○草深き習志野原の片邊りに住する 淺學の妾に御文通下された御方は三十餘名の多きに妾しの嬉しさゆめてはないかと思ひました 以後益々御交際をねがひます （千葉縣千葉郡津田沼町 大久保石川善太郎方大村藤美子） ○皆樣、仁川 と釜山、京城とはどこの所が宜しいてしよう又日本の敎育などをするには何れの地が盛てしようか 私も少し許り思ふことがありまして 彼地に渡り度思ひますからどなたても御存じのかたは 誌上て御答え下さい序に御金も如何程ありましたなら 宜しうございますか之もどうぞ（山梨縣俄渓女史）○願く愛讀者の皆樣さびしき山里に埋れつゝある 身をあはれみ給ひ何卒御交際を （群馬縣山田郡廣澤村金子尙子）○手紙の往復は勿論皆樣の御望の物を交換致ますよ（埼玉縣大里郡玉井村西田須惠子）○皆樣私も今日から 女子文壇の投稿させて頂きますから何卒御交際願上ます（品川新宿五五鈴木千枝子） ○諸孃樣よ妾は今度邑樂郡小泉尋常小學校へ修職する事と成ましたから 何卒變らせ無く御交際あらん事を （上野邑樂郡小泉尋常小學校內伏島雛子） ○卒業以來獨身にて誠に寂しき故諸孃方と末永く御交際相願ひたく 寫眞御玉章或は繪葉書等御送りて 頂戴な直に悅びて御返事いたし升から 尙御寫眞御送り下さつた方尾道へ御出の時は必ず御寄り下さい 所々を御案內いたし升よ （廣島縣尾道市土堂町本町通一一七九番地藤野美爾子） ○在米のりつ子樣先日は美くしき御地の繪葉書と貴孃の尊影とを 御送付被下ましてありがとう御座いました 其御禮として金色夜叉（英譯の）と妾の小影を差上ましたから御受け下さい諸孃方心よく交換を御願ひ致し升 （埼玉縣熊谷櫻町和久井きん子） ○妾は昨年の春不幸にして戀しき父をなくしましてより 今日まで母の心をなぐさめる 爲め何日も此の女子文壇を讀み聞かすのを妾のこよなう 樂みとして淋しき片山里のほとりに日を暮して居るもので 御座いまするが 此後は何卒親く御交際下さいまする樣誌友の方々へ御願ひ致しまする。（山口縣長門國豐浦郡清末村兒玉俊子） ○皆樣妾の先生は直接文通やエハガキ 交換はおよしなさいとおつしやいましたから 以後おことわり申しますそれから妾の如きものに色々のもの お惠み下すつた方々よ誌上て厚くお禮申ます（富山市小林芳枝子）○本誌愛讀の皆樣よ妾は此頃なつかしい 故鄕に歸りて居ましたが又下の處に歸りましたから 相かはらず御交際下さい （羽後國橫手町七軒丁岩根政吉方前田久子）○（上總國長生郡新治村桂小川幸子） 妾は九月上旬中上京するつもりてすから都の誌友諸孃樣住所姓名を繪葉書て 御一報を乞ふ○姉樣方私しも 女子文壇の讀者てす御交際を願ひます夫れから 地方新聞の交換、繪はがきの交換あみ物の交換、 宜しく願ゐます （德島富田紙藏町笹川方齋藤きく子）○（遠江榛原郡白羽村高塚濱子） 宜敷御交際願ます宅は商業なのよ失禮てすが お國の物產と確實な御店を知らして頂戴繪葉書なり何なり 共御望みの品て乾度御禮します○誌友おもかげに御出なされたお姉孃樣以後御交際を（羽前南村山郡柏倉門傳村安達久子）○愛讀諸孃樣の中に 房洲漆山の御方はございませんか又うろ 山近方の方てもよろしうございますとうぞ御交際下さいまし （橫濱市長者町八丁目岩井方その枝子） ○記者樣私は極く田舍ものてすが誌友の 諸姉上樣方へ 何卒御せうかい下さい （福岡縣遠賀郡八幡町尾倉第三海岸三丁目幸嘉代）○御文通を願ひます（兵庫羽坂通二丁目一ノ一高田信枝） ○私しは片田舍の生れて極つまらぬ淺學のものてすから 以後愛讀者の 一人と

して末永く御交際を御願ひ申上ます（麑島縣麑島市生産町四十七番戸加治木ちか子）○直接お手紙おうつしゑなど送り下さらば嬉しう存じますよ妾は片田舍の小學校に奉職してゐる未だ淺學な樂みの少ない物ですどうぞよろしく願ひます誰樣か「寫眞ブック」安價にお讓り下さる方は御坐いませんかお持ちの方は伏してお願ひいたします（備後三次町三上しげ子）○皆樣どうぞ御交際下されませ（大阪市西區江戸堀北通三丁目一九三福原千代子）○私は今年大阪の女學校を卒業致しまして只今は大津に居りますが御友だちがなくて淋くて仕方がありませんから諸姉よろしく御交際をおねがひます又繪はがきの交換もおねがひますよ（近江國大津市神出町三井寺下高橋ゆき子）○私は高等女學校二年生まことに不束者ですが愛讀者の一人となりましたから御交際を願ひます諸孃よ御手紙を下さいましな私も御返事致し又繪葉書の御交換を願ひます（神戸市山本通五丁目一〇五今井品子）○先月發行の當欄に松浦文子てふ假名の元に皆樣を欺ひて交際を求めた者があります妾方には何等の關係もないものです、依て四日以後十二日迄九通參りました内三通だけ其旨の御返事を差上げ後のは皆符箋して御戻しする樣に店員に命じて置きました、之れは何者かの惡戯ですから何か惡しからず思召して下さい、先は一寸御忠告迄に、猶々妾へは何うか長く御交際を御願ひ申し升（岐阜今小町津國屋内渡邊露子）○書道研究のため書狀の交換をのぞみます、編物交換も願ます（茨城縣那珂湊町加藤春子）○皆さま私は本年三月迄女學校に在學して居りましたが不幸にも父さまに死に分かれ今は賴り少なき身にて毎月女子文壇にて皆樣と御交際するのを樂しみにばかりしてをります、どうか皆樣御手紙を下されませ私も必ず御返事を差上ます（岐阜市七軒町渡邊光太郎樣方新井やえ子）○若しも諸孃の中で十四才の方で極く親切で永久御交際して下さる方はありませんか（播磨龍野局區内長谷川美智子）○皆さん繪葉書や御手紙にて永らくの間御交際下さい屹度私も御返事差上ます（姬路市景福寺前二六田中かずゑ）○妾は都合により此度横濱より東京へ轉居致しましたから一寸誌上に申上げますいづれかたづき次第住所御通知致します神田の片岡初音樣御近くなりました其中御伺ひ致します（東京永井そのえ子）○皆さん私は女學校を卒業してから宅に歸つてますが淋しくたゞ女子文壇を友として樂しく暮すのみですどうか御交際をして下さい又寫繪、シオリ編ものを御惠み下さい早速御禮は致します（東京市本所區中郷竹町二十番地三ツ森方志保子）○麑島の山田舍の生れなのでありますがどうぞ御見捨なく愛讀者の一人として宜しく御交際をおねがひ申上ます（鹿兒島縣鹿兒島市大黑町五七番戸福田さき子）○記者樣私は第八號から愛讀者の一人となりて居りますどうぞ諸姉樣へ末長く御交際下さる樣交際欄で紹介して下さい（兵庫縣姬路市景福寺町保城宇三郎内にて保城いくえ）○私は淺學な者ですが女子文壇の愛讀者の一人となりましたから皆さん御交際を願ひます（神戸山本通五丁目澤谷喜美子）

○寫眞編物造花交換

○寫眞編物造花栞等お送り下さい極上等の繪はがきに醜いてすが妾の寫眞をお返しいたします先着お三名には機關車の大阪寫眞、五千哩祝賀スタンプ付一葉を添ます（名古屋笹島町鈴木方刑部たけ子）○諸姉樣の御中に編物か造花か三つ以上御惠送下された御方先着十五名へ左の品を差上ます第一着萬國繪はがき帖（少しも古び居らず）第二、三着繪はがき一組づゝ第四着より第十五着迄繪はがき一枚と一寸巾の夏リボンとを、おあげ申ます（京都市寺ノ内通大宮西入、永尾久子）○姉樣よ御寫眞を頂戴よ先着者には貳拾錢以上の舶來繪葉書を送つて上げます但し拾人に限る（大分縣豐前中津字弓丁溝部内太田ちせ子）○愛讀諸孃方私にもどうか地方の寫眞やお寫眞栞編物など御送り下さいませ相等の御禮は致します先着六名さん丈には私の寫眞を送ります（佐世保市木場田町一一五二副島方平野すみれ）○皆さんお寫眞の交換いたしませうキツト妾のもお送りもうします、（茨城縣高濱町東大橋川並はな子）○本誌愛讀投稿者樣の方々お寫眞の交換を願ます（豐後臼杵河畔唐人町平山眞子）○（上總國長生郡新治村桂小川くに子）編物の交換を願ます、返信は見惡いものですが寫眞と繪葉書をそへて○姉樣たち御寫眞を一枚お送下さいませんか。すると私の見苦しい寫眞と鸞風戀風（上下）や紅葉の『むき卵』『おぼろ月』それに、外國の繪はがき増補食道樂など先着の順に差上ます。（伊勢國鈴鹿郡國府村入野、岸うたの）○妾は田舍者の口惜しさ編物、造花などは出來ませんのよ、皆樣田舍育ちの妾を哀と思召してお惠み下さいれ相當の御禮は屹度致しますよ（磐城國相馬郡上眞野村横手原田清子）○皆さ

ん御寫眞を送りて下さいな、御返禮はすぐ致します(岐阜縣大垣郵便局區内牧村木村竹雨)○愛讀諸孃へ御願ひ致します 私は拙な栞を所持致して居ますから雜誌等と交換をねがひます(福岡縣糟手郡勝野村字勝野竹森菊子)○諸姊様よ皆様の寫眞や編物を送つて頂戴ね二十名限り不如歸浪子伯爵夫人や種々の小說を添へて御禮致しますよ(常陸國[illegible]郡五所村大字下江連水越はな子)○諸孃様何卒繪葉書や御寫眞の御交換を望みます先着の諸孃三十名には栞寫眞ばさみをそへて必ず御禮申上ます 三十名外の諸孃にも御返しは致します(長崎縣對島國嚴原今屋敷町飯束幸子)○(上總國本納局内桂小川國子)自分の寫眞を五組だけ寫し揃へて有升から、諸孃の身姿と交換を○皆様何卒編物や栞御手紙の交換を願ひます(茨城縣多賀郡松原町石なみ子)○壇友諸姉様何卒栞を御送り下さい 御禮として戀十種花暦女神水彩葉書一組乙女心日光愛 千紫萬紅水彩十景世界のパノラマ風俗十二ケ月上同下水彩繪葉書、花と蟲、女學校、子供葉書、女子大學、海、涼風、水彩寫生、青春、山光水色を一部宛差上げます結果は本欄で御報知申します(大和國郡山町柳四丁目淺田多喜子)○皆様どうか御寫眞を送り下さい。いくら多數でも必らず私の粗末の寫眞で返葉は夢忘れませんから、もし返葉をおこたりましたら誌上にてドシ〳〵發表なすつても差つかへありませむ(岩代郡山本町德田初子)○なるべくなれば大阪市内の御方に寫眞交換を願ひます又繪葉書の交換も願ます諸孃様の中で絹のシオりを下された方には舶來の繪葉書上げます(大阪市東區釣鐘町一、一七三中西金治郎方駒井)○皆様御寫眞御めぐみ下さい先着十名に面白きゑはがきて御返しいたします 最先着の方二名に記念日捺印のゑはがきて御返しいたします(紀伊東牟婁郡三里村字萩原本支店内福本かなる子)○諸姉様の御寫眞や地方の景色の寫眞を御送り下さい 私も之等の物で御返禮致します(千葉縣千葉郡白井村中野高山ちれ子女史)○何卒皆様同様寫眞の交換及び文通を願ひます(大阪西區薩摩堀裏町四番邸石上秋子)○みなさん妾しとも繪葉書の交換をして下さいましなそして お寫眞は如何でせう送つて下さる方も萬一ありますなら見にくいながら 妾しのもお送り致します(京都上京區丸太町川端東入芝田方郡築登志子)○あゝ親愛なる諸孃たちよ妾は非常なる寫眞好にて是れを見るのを 最上の樂みとしてをるので御座いますどうぞ姉君たちや 愛らしい子供のうつくしゑおもちの方はお惠み下さい 雜誌しをり其他何なりと お好みの物にて御禮いたします 又女子手藝要訣(下田歌子著)、裁縫と編物、和洋禮式不用ですから繪葉書で申込んで下されば先着者三名だけに進呈いたします (備後三次町三上しげ子)○皆様御寫眞お送り下さいましな先着者五名へ 我子の悪德。及び美德。伯爵夫人。乳姉妹。の中御望の本を差上ます また六から十五まで 私の寫眞十六から後に着したのは何も差上る様の物がありませんから お氣の毒ですが御返し申ます それから玉章や、押花、編物、の御交換なども御願ひ申ます 私はまだ小學校の生徒てすから お玉章の交換はなる丈小學校の方にお願したいのよ(北海道松前郡福山端立町石塚方茂登子)○諸孃様方よ御寫眞御惠み下さいまし著次第二十錢位の新刊雜誌一部宛差上げます(信濃下伊那郡龍江村鳥岡しん子)

○圖書換讀

○詩集や歌集や又は美文を送つて下すつたら其本の御禮として狩野了信先生筆の短册龍十種を一枚宛差上ます(但し本金入決して印刷物ぢやありません) 遲く着ひて短册がなくなりましたら妾が一生懸命に描いた繪をお禮致します(神戸二之宮町四丁目六六德永美爾子)○皆さん圖書交換を願ひます、交換目錄を送つて下さい、妾も送りますから(安藝用立局區內箕岡靜子)○左の書籍不用に就き繪葉書の極上等なので申込みなさいくじで當選者に送ります、女子文藝中學文林、秀才文壇、文庫、明星、小品文集、若菜籠、初子集、女學生訓、塔影、山鳩、小扇、羅子夫人、無花果等です(下總佐原町篠原大畸發碧花子)○小說、詩集、文集、等の文學的書籍及、文學雜誌を御送り下さい必らず其と同じ定價のものを送ります(備前御津郡島田、松本もと子)○私家庭の友、兒童教育、などいろ〳〵の雜誌あります お望みの方は下名まで(美濃今尾町三田村芳美)○愛讀の黄菊白菊こたび不用となりぬれば栞をよこされし人へ進らすべし(豊後臼杵二王座、松良かをり)○謹んで諸姉に御願ひ申ます 諧俳書は勿論すこしく研究致し度いと思ひますから御秘藏の書籍中春陽堂發行小說類一さいの 御讀み古しを借覽致したいので御送り下さいましたなら 直様御受取を差出し必ず一週間内に御返送申上ます 公德を重じ汚損等の責任を帶びます (奈良市押上町二十三番地藤田藤子內藤田せい子)○皆様の内に秀才文壇一號より近

御送の內 何册にても 御送り下さい 先着五名に(家庭料理法)(家庭の心得)(西洋料理法)(育兒と衞生)(女學生訓)を送呈し其他の人へも相當の書籍雜誌に美麗な繪葉書をそへて 御返禮申ますから!(古くても宜し)(尾張中島郡起町林福太郎方はろ子)○皆様の內に藤村詩集、己が罪の歌、金色夜叉の歌、萬朝小說傑作集、花がたみ、七ツ星、無弦弓、はつ潮、春駒、ユーゴー詩、シルレル詩集、不如歸、ゲーテの詩、不如歸の歌、塔影、の內一部御送り下さいましたら私の食道樂、戀衣、花の詩、春鳥集、金帆、海潮音、草紅葉、俳諧新潮、乙女の操、神秘論、白すみれ、潮待草、元祿世相志、運命怨、新婚旅行、七寸鞋、卅八年度の新小說、文藝倶樂部等の內皆様の御指定により必ず〳〵 御送り致しますから何卒々々御聞き下さいませ(尾州中島郡起町林福太郎方はろ子)○愛讀者の皆さん私の手許に日本の少女十五册と源氏物語と裁縫手藝と作法等の本が有ますから御かしゝますよ(兵庫縣丹波國多紀郡佐山村藤原かね子)○陸前松島、古河松江(河北新報と各地新聞交換を願ひます)○風葉著桁の花、春雨著黑塗馬車、秋聲著驕慢兒、春葉著酒中花、掬汀著別れ路、花袋著重右衞門の最後、(以上小說)新婚旅行、三美人、アラビヤ姬、大火山探險、ガリバー旅行記(以上英文但註釋及譯あり) 右不用に付草枕、心のあと、塔影、晴小袖、濱子、其他詩歌集と交換して下さいませ(芝區二本榎一丁目四五小野綠子)○「秀才文壇」六卷第十號十一號と私の「中學文壇」「ハガキ文學」などゝ御交換下さる御方及び「金色夜叉」「不如歸」の小說を御貸與下さる方はどうか下名へ身に叶ふ御禮は必ず致します(大阪府三島郡島飼村大字中刀禰君子)○皆様の內て天うつ浪乳姉妹前、後、其子後、魔風戀風の內いづれにても 有罪無罪か女學世界定期增刊女玉手箱か不如歸の歌か蜀山人かと御交換を願ます(北海道龜田郡七飯本字鳴川伊東きん子)○女學世界少女界などがありますから乘や編物送て下さつた方へ先着二十名に差上ます又白スミレの押たのがありますから望方は繪葉書で申込下さい男子の方はお斷はり(韓國京城本町三丁目林しま子)○ 皆様長崎市の新聞御送り下さい長崎市の人にかぎります 御禮には雜誌を毎月御のぞみのを御送り致します 御手紙の御交換もそうして皆様も御交際下さい 繪葉書てゝも御返しします(韓國京城美洞原野美貴枝)○妾は只今女子文壇、秀才文壇、女學世界、ムラサキ、女子の友、合せて九十六册ばかりあります、何かこれ以外の雜誌一部御送り下されたお方には三册づゝ差上げます、大至急御申込下さい(茨城縣高濱町東大橋、小泉はま子)○大槻先生の廣日本文典及同別記あり入用の方に讓る(伊勢三重郡坂部山の平山本子)○二卷八號に書物贈呈の事を載せて戴きましたがハガキ着順に送りましたが遲着六名へ殘念ながら送る事出來ませんてしたどうか惡しからず(太田佐代子)

○佐久良子に就いて

長野縣下伊那郡大島尋常高等小學校より下の如く申込ありたり「拜啓日本各地より當校に佐久良子なるものある由にて繪葉書交換書籍交換等申込まれ候も佐久良子なるもの無之其都度手數を要し甚だ迷惑に付き」云々とあり、依つて諸孃は以後右小學校內佐久良子と云ふ人へ宛てゝ通信せられざるやう心得られたし。

○誌友會の報知

○横濱には、たくさん誌友もあるでせうから來月頃誌友會を開き皆さんと一日面白く遊ばうと思ひますが御贊成の方は下名へ。色々御相談申しますから(豊多摩郡戸塚村六五五、田中方みつ子)

○皆さま芝にても愛讀會を開かふではありませんか御贊成の御方は早速下名まで申込下さい(芝區濱松町一ノ十五竹貫榮子)

○痛はしき遺言

山城國乙訓郡乙訓村大字井の內林はろ子孃は本誌愛讀者の一人であり且誌友として諸孃と樂しき交際を結ばれたのですが不幸にも病痾の爲に永眠されまして其遺言は令兄に依りて本社に寄送されました即ち左に掲げる文章てす、記者は諸孃と共に深く同情の意を表します。

何と申しましても死なれた方ほど氣の毒なものはありません、如何に諸孃のおかげて女子文壇が發達しても歸らぬ君は何うする事も出來ません、其名だけても紀念として永く覺えて置きませう(記者)

女子文壇愛讀ノ皆様ニ御禮申上マス、私ハ是迄諸孃様ト常々御交情ヲ願ツテ居リマシタ山城國乙訓郡乙訓村大字井ノ內林はろナルモノノ兄デゴザイマス、はろモ其後ハ皆様ニ意外ノ御無沙汰ヲシテ居リマシタが、實ハ去月十八日ヨリ重症ニ罹リ養生不相叶遂ニ六月一日午前十時死亡致シマシタ、就テハ皆様へ御禮

貺ヲ出シテ與レトノ遺言デ、出サウト思ヒ升ガ皆樣ヲ一向存ジマセンデ本欄ヲ汚シマシテ平素ノ御懇情ヲ厚ク御禮申上升、追々夏ニ向ヒマスルデ皆樣モ御身大切ニ願ヒマス。

山城　林　は　る
兄　林　縫　一　敬白

○剽窃詩文の注意

本月の發表は稍少きやうですが夫でも左の五六名は剽窃家たる事を認定せねばなりません。

○第九號の分

▲千葉、高梨須美子。抒情文秀逸千葉縣高梨須美子の「わが心」は本年二月一日發刊「女子文壇」六十五頁三重縣平松隆子女の「わが心」を剽窃せしもの。

▲紫蘿女史。消息文秀逸紫蘿女史の「若菜を贈る」と云ふ一文は三十四年の女學世界一卷四號「壺すみれ」秀逸當選伊勢四日市今井久米君の「若菜を贈る文」と一字一句の相違なし全く剽窃なり。

▲豊前、服部秋子。和歌秀逸豊前服部秋子の「秋の露――」の一首は中學世界增刊第三年十二號秀才詞林秋の卷天賞當選秋山深雄君の作の剽窃なり。

▲伊勢、世古靜子。和歌秀逸伊勢世古靜子の「葉櫻の――」の一首は三十五年六月中學世界增刊山光海色百五十五頁人賞久保田豊村君の作の剽窃なり。

▲豊前、はつよ。和歌秀逸豊前はつよの「何となく――」の一首は本誌二卷五號特別二頁佐野みどり子君の作の剽窃なり。

▲千葉、平賀むら子。和歌欄四十九頁下段千葉縣平賀むら子の「稀に來る――」の一首は「新古今」にある俊成卿の歌にて「稀に來る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ」の剽窃に相違なきが選者が拔萃の際心附かれざる筈なし、是は除かれたるものを編輯の際誤つて本文に加はり其まゝ活字となりて發表されたるならむ一に編輯者の疎漏より出でたる罪にして選者の不注意にあらざる由なお茲に辨明す且是を寫して投稿したる千葉の平賀むら子の惡は言ふ迄もなし。

▲福井、野坂まさを。和歌秀逸福井野坂まさをの「耕して――」の一首は三十六年九月中學文壇五ノ十八和歌秀逸信濃後藤翠柳君の作を全く剽窃せしもの。

▲大和、豊田晴登。新笑話大和豊田晴登の投ぜし「測量家」は二三年以前の「大阪朝日」及び昨年末の「萬朝報」に在りし事確かなり全く剽窃せしものとす。

○第八號の分

▲福井、野坂雅子。論文二三頁福井野坂雅子の「名譽は求むべからず」の一文は三十五年元旦女子之友第五才媛詞藻の甲府名取正代子の作を剽窃せしもの。

▲讃岐、松永茂子。圖畫六十五頁賞外讃岐三本松松永茂子の「縫もの」は三十七年五月「女學世界」四卷六號三七頁出征の留守宅（二）の縫物の圖のみを剽窃せしものなり。

以上注意ありし諸氏の姓名をたゞに録して例の通り厚意を謝します。

○德島、齋藤瑞子○京都、安田初子○上野、正木うめ○讃岐、あやめ子○岳南一女史○松山、華仙○越後、山本芳子○芝公園、長谷川みち子○淺野撫子○東京、すみれ子○神奈川縣、三浦ふみ子○丹波、糸子。

▲編輯だより

○十二號の豫告。本誌は九月一日發刊の分より名流の講話又は創作中、最も秀れたるものを請ひ受け精彩を添ゆると共に、又新進青年文士の寄稿を請ひ、紙面の空氣を一新すべし其二三を擧ぐれば羽仁もと子様の「若き女子の爲に」窪田うつぼ君の「短歌評釋」河井醉茗君の「想像力を養へ」など。

○『をみなへし月』。本誌十一號は來る十五日發行の增刊にして『をみなへし月』と題す、例の如く諸嬢の投稿滿載、沒書の疑ひを抱ける方は必ず增刊を見たまふべし。附録として「文藝雜感」秋の卷を添ゆ。

○本社の出版物。『懸賞文集』は假の廉なる點に於て、『朝暉』は青春文士の情熱の籠れる點に於て『玉盃』は作詩作文の素質を養ふに最新の模範書として『美文作法』は『女子文學全書』の一篇なるが文章を作るに完全なる參考書として孰れも好評嘖々たり近く出版されたる『實地精査女子遊學便覽』は此種類似の書中最も親切に、明瞭に、細密に案内せる事は發行者の審かに信ずる處なり。

A. Yes A friend of mine has just returned from abroad and so we are expecting to go to Shiobara together.

甲. ハイ. 私の友人中近頃外國から歸朝致しました者が御座いますから, 其者と一所に鹽原に行かうかと存じて居ります。

B. How delightful it will be!

乙. 嗎マー御愉快でしよう。

A. But where are you going?

甲. 貴女は何處へ入來しやいますか。

B. My sister likes the mountain, and I like the sea-shore, and that is why we have not decided yet.

乙. 姉は山が好き, 私は海と云ふ次第で未だ定まりません。

A. Do quickly, or else the summer will be gone before you know it.

甲. 早く遊ばせ。知らぬ中に夏が立つて仕舞いますから。

B. Won't you please decide it for us?

乙. 私共の爲に貴女が御定め下さいませんか。

A. That is a hard thing to do. Well, why not come with us to Shiobara? It is not far from Tokyo and if you are tired of it, you can go somewhere else in no time.

甲. 其は六ケ敷事で御座いますが, マー如何でしよう若し御一所に鹽原に御出で下さいましたら。東京からは遠くは御座いませんから, 彼處が御倦(イヤ)になりましたら早く他所へ入來しせいます事も易う御座いますが。

B. That is perfect. May we come? I must go at once to my sister. And how glad she will be! We have been longing to go there for years and somehow we did not. Now I shall have to go. Thank you for your kindness.

乙. 結構です。參りましても宜しう御座いますか? それなら直に姉の許に參りまして咄しましよう。何麼に喜びましよう。鹽原へは多年行き度いとは思ひ乍ら, 參りませんでしたが, 今度こそ行く可き好時機で御座います。

Summer Vacation.

A. I am sorry to have kept you so long.

B. Not at all. I have not been here long.

A. How long have you been waiting for me?

B. Not more than a quarter of an hour. I have been enjoying your magazines.

A. Some illustrations in them are very pretty.

B. Especially this mountain scene is beautiful. It is worth framing.

A. And read the verse at the bottom.

B. "And this our life,
exempt from public haunt,
Finds tongues in trees,
books in the running brooks,
Sermons in stones,
and good in everything."

A. That is exactly what I wish to do in the summer,—away from the noise of the city—.

B. So do I. Have you decided where to spend your summer vacation?

夏休暇

甲. 大相御待たせ致しまして濟みません.

乙. どー致しまして. 今し方參りました斗で御座います。

甲. 餘程御待ち下さいましたでしよう？

乙. 唯十五分間位で御座いまして，澤山の御雜誌を拜見致して居りました。

甲. 中には隨分綺麗な挿畫が御座います。

乙. 格別に此山水畫は美事で御座います事. 額にしても宜しう御座いますね。

甲. 其下部に記載してある句を一寸御覽遊ばせ。

乙. 「これぞ世離れし
我くらし，
樹には口舌，
川に書見，
石に教訓，よからものは
たえてなし」。

甲. 丁度，私が此夏したいと思ふ通りで御座います騷々しい市中を遠く離れまして——。

乙. 私も御同樣. 夏休暇何處で御暮し遊ばすか御定めに成りまして？

But the tender grace
of a day that is dead
Will never come back to
me.

Tennyson.

さはあれ去にし　幸の日は

歸り來ること　あるべしや。

The Lotus Maiden.

Part III.

"Flower maiden," questioned he, "doest thou fear even the heart of the poet?"

"Lord," answered the maiden, "where does thou command me to dwell? Behold in this one heart I see the snowy mountain-tops, the watery depths full of wondrous creatures, the plains with the storms and tempests, and the dark caves; so I fear again, oh, Lord." But good and wise Krishna said:

"Peace be unto thee; if in the poet's heart lie the desolate snows, be thou a warm breath of the spring which will melt them; if there be watery depths, be thou a pearl in those depths; if there be the desert plants, plant thou in them the flowers of happiness; if there be the dark caves, be thou a sunny ray in those darkness."

(end)

蓮花處女

其三

「花娘よ，其方は詩人の心でさへも怖いのか」と神は御尋ねに成つた。

「神樣」，と處女は口を開き「何處へ私に行けと仰せらるゝので御座いましよう．御覽下さいまし彼の心中を雪積りたる山嶺や，恐しい奇妙な生物の住んで居ります深淵や，雨風暴れ狂ふ原野もあれば，暗黑な洞穴もありますので，私は又恐怖の念が起りましたので御座います」。

是に於て善且つ智あるクリシナは，

「安心するがよい．若し詩人の心中に嚴冬猛雪があれば，其方は暖和春風となりて其を融かすがよい．若し深淵があれば，御前は眞珠となりては如何．若し荒野があれは其處に喜樂の花を植ゑ，よし又陰暗の洞窟があるも御前は赫灼たる光線となりて闇を照がよからう」と云はれた。

（終）

女子文壇第二卷

英文

津田梅子閲　河井道子述

Break, Break, Break.

(1) Break, break, break,
On thy cold gray stones, O Sea!
And I would that my tongue could utter
The thought that arise in me.

(2) O well for the fisherman's boy,
That he shouts with his sister at play!
O well for the sailor lad,
That he sings in his boot on the bay!

(3) And the stately ships go on
To their haven under the hill;
But O for the touch of a vanish'd hand,
And the sound of a voice that is still!

(4) Break, break, break,
At the foot of thz crags, O Sea!

碎けよ碎け

(1) 碎けよ碎け　オー海よ,
荒冷古色の　巖上に！
談ると得なば　默せんや
胸に湧き來る　思ひをば

(2) 濱の童子　妹つれて
聲立笑ふも　愛(イト)ほしく,
浮べる小舟に　打乘れる
舟子の歌も　面白や。

(3) 堂々船舶　進むなり
山の際なる　港へと.
さはあれ逝(イ)にし　友の聲
親しき睦ぞ　忍ばるゝ.

(4) 碎けよ碎け　絕間なく
汝崖邊に,　オー海よ！



營業目錄御入用なれば此切取を添へ御申越被下度候

縣　郡　町村

(女子文壇)

女子文學獨習の最良手引書

東宮侍講本居豊頴先生題詠
學習院女子部長下田歌子先生題歌
文學博士小杉榲邨先生序
國學院學士小森松風先生著

獨習良師 女子文學全書

全部拾二卷

《總ふりがな付》
紙數二千七百頁餘
（毎卷讀切洋裝）

毎月壹册つゞ出版して一ヶ年間に全部完結の豫定 ◎一册菊判二百卅頁

正價 壹册金參拾錢◎三册前金八拾五錢◎六册前金壹圓六拾錢外郵税一册四錢◎全部拾二册前金 全部に限り特別 金參圓 郵税不要（郵券代用壹割増）

全部目次

編輯の都合により以下二編順序を變更す

女子文學全書第壹編 **美文作法** 附錄 古今名家美文範

製本既成發賣

▲全一册讀切洋裝 大判二百三十頁 郵税四錢
▲正價金參拾錢

本書は小森先生が現今の女子の文學趣味を鼓吹せんの考にて女子師範、高等女學校其他各種の女學校に於て最も困難を感ずる文章の作法を懇切に説明指導せられたるものなれば明治の女學生に取りては、實に坐右の寶典なり

發行所 東京市京橋區大鋸町 電話本局六百七番 女子文壇社

◎東京市内特約賣捌 東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、前川文榮閣、良明堂、勉強堂

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）
○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）
○短篇小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙十句以内）
○和歌（半紙一首）　○新歌謠（上仝）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）
○新俳句（端書又は半紙一句）
○新笑話（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）

▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事

但着色無用日本紙の薄きもの

賞與品

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）
一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）
一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書の郵税未足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿（同封）取纏郵送するは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

◎四十年一月發行第三卷分より賞與法改正いたします………詳細は來る十月發行の分に於て發表すべし

定價

女子文壇（毎號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一冊（大判百頁）	前金拾錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢
十二冊（一年分増刊除ク）	前金壹圓八錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢

郵税無料

定期増刊

二月十五日、五月十五日、八月十五日、十一月十五日發行

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番であり

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法此法により前金拂込には「拂込用紙」が入ります是は何處の郵便局でも申出あれば無代で呉れます

廣告料金

改正

特等	一頁三十圓	半頁…………	一行…………
一等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行…………
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切毎月十五日也

【備考】特等場所は表紙四の面なり○壹等場所は色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込む紙面なり▲廣告面一行は五號活字廿四字詰、半頁は（一段）廿二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年七月廿九日印刷
明治三十九年八月一日發行

定價金拾錢

不許複載

（二卷第十號）

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話【本局六〇七番】　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市日本橋區呉服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

（宮本製本）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 最廉無比 定價金拾錢 郵稅壹錢申受けず



(東京秀英舍印刷)